

當時の發音や語法を知るべき資料となるものがある。又外國人の作つた日本語學書の中には、朝鮮の康遇聖の「捷解新語」、同じく洪舜明の「倭語類解」、西洋人では、コリアード(D. Collado)、キェルチウス(D. Curtius)、ホフマン(J. Hoffmann)、アストン(W. G. Aston)の

有してゐた事は確かであるが、或は宗教的傳説的であり、或は常識的興味的であつて、思想としては甚だ幼稚なものである。國語の科學的知識の萌芽は、一は外國の文字言語に接し、一は古典を考究するにつれて自ら萌したものである。「漢字漢文の渡來」應神天皇の時、

なのは五十音圖であるが、その出來たについては悉曇學と關係があるやうである。「悉曇學と五十音圖」平安朝の初、密教の傳來に伴つて、悉曇(別項)の學が興り、爾後悉曇學者が輩出して多くの著書も續々現はれた。當時の悉曇學は、支那から傳へたものである故、

する思想さへ起つたのである(了尊の「悉曇輪略圖抄」(私安十年感)などに見ゆ)。「字書の製作」漢文漢字を學ぶために必要な辭書は、初めは支那の用ひ、日本で作つたものも漢文で音義を註したが、平安朝に於ては、處々和訓を加へたものも出來(昌住の新撰字鏡など)、又物名

集をめて和訓を註したのも出來た(源順の和名類聚抄)。後には、一層日本化して漢文の註を略し、和訓のみをつけたものが出來(類聚名義抄)。遂に平安朝末には、訓から漢字をひくものがあらはれた(色葉字類抄)。この最後のものは、伊呂波順に國語の語彙を排列したものと見られるが、固よりこれは漢字漢文のためのものである。「古典研究」日本の古典研究は、朝廷に於ける「日本紀」の講究に始まり、その中の日本語の釋義などもあつたが、平安朝に於ては、まだ語義解釋に或る原則を見出すに至らなかつたやうである。然るに平安朝に於ける歌合の流行から和歌の學が講ぜられ、歌に用ひる古語の解釋に關する研究が起つて、院政時代以後、歌集や古歌の語の註釋書が作られるに至つたが、(仲實の「綺語抄」、範兼の「和歌童蒙抄」、教長の「古今集註」、顯昭の「古今集註」拾遺抄註、「後拾遺註」、「詞華集註」散木集註「日本紀和歌註」中抄抄、上覺の「和歌色葉集」等)、その釋義の場合に、悉曇などではれた音の相通・轉化・省略などの原則により、また漢文の助辭の類を呼んだと思はれる「詞助」「助詞」や「すめ字」などの名を用ひて説明したものがあつた。仙覺の「萬葉集註釋(別項)」には、一層多く悉曇の原則を以て語義乃至語源を説明して居り、また語を假名に分解して一つづつの假名に意味を説いてゐるものも亦、悉曇の字義說(悉曇參照)の影響らしく考へられる。さうして鎌倉時代には、「日本紀」の註釋に於ても、歌の註釋書に於けると同様な原則を用ひて説明した(釋日本紀など)。さうして、日本紀や歌書の註釋類に(漢文の訓にも)、語に朱で聲點を附して日本語のアクセントを示してゐるもの(アクセント參照)、また

漢文の法式を日本語に適用したもので、平安朝末には、同語でも場合によつてアクセントの變化する事まで觀察してゐる(袖中抄卷三)。又この時代には歌を詠むために、國語の語彙をあつめたものも出來た(能因の「歌枕」、清輔の「和歌初學抄」、上覺の「和歌色葉集」、順徳院の「八雲御抄」など)。「定家假名遣」鎌倉時代に入つて始めて假名遣の問題が起つた。その最初は藤原定家らしいが、定家は假名文の古寫本を多く見て、近來假名遣の頗に亂れたのを知り、これを統一させようとして、私家を立てたものらしい。それが歌又は冊子を書く時の問題であつたことは、歌や冊子の書式を示す「下官集」(別項)中の一項として説かれてゐるによつても知られる。源親行が作つたと云はれる假名遣の書も、定家と同様の主義方針であつたと思はれる。これが定家の名によつて次第に世に行はれたが、吉野時代に親行の孫行阿がこれに大増補を加へて語數も多くなり甚だ便利なものとなつた(假名文字遺參照)。「てにをはと作歌」國語の助詞・助動詞・活用語尾などの類が、夙に注意をひいた事は宣言書などによつても知られるが、平安朝に入つて、漢文の訓讀を示すに乎古止點を用ひるやうになつては、かやうな語は、いつも乎古止點によつて示されたので、遂に乎古止點の四隅にある「て」「に」「は」の四つで代表せしめて、これを「てにをは」と總稱するやうになつたらしい(てにをは參照)。鎌倉時代になると、てにをはが歌を作るには大切であると考へられるやうになつたが(八雲御抄・阿佛尼和歌口傳)、これに對する研究は、また起らなかつたやうに思はれる。

「吉野室町時代」「語釋及び語源說」語釋語源については、國文學書の註釋に於ては、釋義を主として語源にまでは及ばないのが當であつたが、「日本紀」を中心とする神道家に於ては、神名などの釋義に語源說に入り、五十音圖に基く諸原則を適用し、或は濫用し、附會に陥ることさへあつた(聖因の神代紀註、忌部正通の「神代口訣」、一條兼良の「日本紀纂疏」、清原宣賢の「日本紀神代抄」など)。「假名遣研究」假名遣は、吉野時代に、長慶院の定家假名遣の根據に對する根本的な疑ひが提出され(仙源抄跋)、成俊の定家假名遣と萬葉集の假名の用法との相違などの指摘があつたが、定家假名遣は益々行はれた。そしてこの時代には「規則を見出すに至つた假名遣參照」。「てにをは研究」てにをは研究は、この期にかなり進歩したのであつて、定家の作といはれる「手耳葉口傳」(永和二年の奥書あり)も亦同様である。これ等の諸書に於ては、てにをはが和歌に大切な事を説き、和歌のきれ所と、てにをはの切れつづきとの關係や、おもなてにをはの種々の用法や、詞のとまるについての條件(中)、係結に關する事實もある)などが説かれて、はじめて實際に研究されたのである。これは恐らく、この時代になつて、口語と文語との差異が甚だしくなつたためであらう。これ等の研究は、後に多少整理せられ増補せられて「春樹顯秘抄(別項)の如きものが出來た。「連歌とてにをは等」この時代には連歌が盛んに行はれたのであつて、連歌に於ててにをはは大切とせられたが、宗祇の時代以後は、てにをはの用法や、切字のてにをはの

事がかかり委しく論ぜらるゝにいたつた。さうして、連歌の附合の上から、單語に名詞・てにをはといふやうな種類があるものと考へてゐたらしい事も注意すべきである。「江戸初期」江戸時代に入つて元祿の頃までは、大體前代を承けて、やゝこれを委しくしたのである。假名遣に於ては、この時代に於ける音聲の變化と共に新に開合ジヂズツの如き條項が加はつた外に、「類字假名遣」の如きイロハ引の假名遣辭典が出來た。さうしてこの時代には定家假名遣に誤や不審の少くない事を説くものも出て來た。「一步」は、假名遣の中に例を以て押す事が出來るものと出來ないものとありとし、前者の種々の場合を論じてゐる。「一步」は、又、てにをはの誤を、過去・現在・未來、自他、治定(確定)・疑ひ(不定)を誤るものが多いとして、それらに用ひるてにをはを擧げてゐるが、これは意味によつててにをはを分類したものと見得るものである。又古代語及び歌語を主とした國語の一般辭書として、荒木田盛員の「鸚鵡抄」百卷が出來た事も注目すべきである。「俳諧と國語研究」この時代に特に注意すべきは、當時盛んであつた俳諧の影響であつて、俳諧には俗語が用ひられたために、俗語が語學研究の對象となつた。即ち「一步」に於て、俗語の假名遣やてにをはについて述べてゐるのはこのためである。又俳諧を學問的に確立した松永貞徳は、俗語の中に俳諧に用ひるべき所謂俳言と、然らざるものとを區別したが、弟子安原貞室は、京言葉の俗語・詛語をあつめて、「かたこと」を著した。詛言匡正のためのもので、この種のものとしては空前の書である。貞徳はまた語源の書「和句解」を作つた。

〔第一期の特徴〕この期の國語研究は、まづ外國語學によつて、國語の現象に關する自覺が徐々になり、外國語學の中に生れた五十音圖や種々の言語の觀察法が、主として歌學のために起つた古語の釋義や語源の説明に適用され、次第に發達した。鎌倉時代には歌文を假名遣の成立を見、一方、作歌の上にて、假名遣の大切な事が稱へられたが、吉野・室町時代に於て、假名遣が或る原則を求めて概括的に説明せられると共に、一方歌に用ひるてにはの意義用法の研究が起り、連歌の方面から江戶時代に入ると、國語音聲の變化と俳諧の流行により、新たな方面が加はつて來た。かくて假名遣とてにはが國語研究の主流となり、音聲文字の方面に於ては、五十音圖を中心とした諸説が行はれて、他の方面の研究の背景となり、これに法則を與へるために用ひられたのである。當時の國語研究は、主として歌や連歌を作るための實用的のものであつたから、これに關係のない言語は顧みられなかつた。結局當時の國語研究は和歌連歌の學問の一部をなしたものである。又音聲に關するものも、漢語學や梵語學と完全に切りはなしては考へられなかつた。研究の態度については、初の中はかなり自由な態度をとつたが、鎌倉末期以後は傳授思想にとらはれて、容易に他人に傳へず、因襲的であり、また規範的であつて批判的でなかつたために、新しい説や研究が起つても、これを傳へ祖述するを専らとし、ために進歩は遅々たるものがあり、或は却つて誤を添へるやうな事もあつた。

〔第二期の國語研究〕元祿の頃、僧契沖が、從來の説に拘束せず、専ら古書に於ける實例から歸納した新しい假名遣を主唱してから、國語研究に新時代が開けた。契沖の學問の自由討究の精神と科學的方法とは、間もなく起つた國學者の古典研究に繼承されて、國學の興隆流布に伴ひ、有益な國語研究が續々あらはれ、この期の主流をなすにいたつた。「契沖より宣長まで」〔假名遣の研究〕契沖は、古書に於ける假名遣の實例を調査して、平安朝中期以前の古書には後世同音に發音する假名がすべて區別して用ひられてゐる事を見出し、假名遣はこの時代の用例によるべきものとして定家假名遣の誤を指摘し〔倭字正監鈔・同通抄・同要略〕、自らこの假名遣を實行した。當時これに反對するものもあり〔編成員の倭字古今通例全書〕、後にも田安宗武は假名遣は發音によるべしとし〔玉函叢説〕、上田秋成は、假名遣は人爲的のもので何れの法にも拘はるべきでないとして反對したが〔靈語通〕、併し契沖の主張は國學者に認められて遵奉せられたのみならず、棋取魚彦は、後に發見せられた材料をも加へてこれを増訂し〔古言梯〕、村田春海も假字拾要を作つてこれを補つたが、春海はまた「假字大意抄」に於て、契沖以來の假名遣、所謂古假名の主張を明かにし、假名遣を定むる方法を論じた。本居宣長は、漢字音について、萬葉假名に用ひた漢字の音を韻鏡と對照させて、その假名遣を定めることに成功した〔字音假字用格〕。「萬葉假名の用法の研究」宣長は「古事記」の萬葉假名の用法を觀察して、同音の假名でも語によつて或る定まつたものしか用ひないものがあることに気がついたが〔古事記傳總論〕、その弟子石塚龍膺は、弘く古代文獻に於ける萬葉假名の用法を研究して、

あげてゐる。又、裝についても、その活用を研究して、これを分類し、活用圖(裝圖)を作つて、活用の種類と一々の語形變化にそれと名を與へてゐる。これが脚結との接續を示す所に利用されてゐる。かやうに、成章の研究は、言語をその構成單位に分解し、單位が相依つて言語を構成するさまを明かにしたもので、組織的であつて、觀察の行きとどいた點に於て宣長を凌駕してゐる。この兩者の研究は互に關係なく出來たもので、その方法は實

消息について論じたものである。〔宣長以後〕〔活用の研究〕この時期の初に新に盛んになつたのは活用の研究である。本居宣長の「御國詞活用抄」は、二十七種に活用を分つたが、各種類の語の變化した形(活用形)相互の關係については注意しなかつたのを、鈴木胤は、各々の形の用法の異同からして、これを八つ(後には七つにした)に分ち、用法の同じ形を同じ段にならべて、違つた種類の活用形式に於ても、一つの語はすべて同じ數

し、五十音圖を神代以來のものとし、我が國の音聲が簡單であり、一般にアクセントを區別せず、文字が無かつた事を他國に優れた點として讚歎してゐる。又假名遣はアクセントの別に基つくと考へた。さうして五十の音の性質や用法について考へ、五十音の横の段に定まる意味があるとして、動詞の活用語尾をこれによつて説明しようとした(語意考)。又、延音・約音・略音・通音等によつて言語の形が變化するものとし、これを語義を釋く鍵と考へ、盛んにこれを應用した(語意考・冠註考その他)。本居宣長はこれを承けて、日本語の音が五十音に限られて他の音を交へぬ事や音轉じて一定の意味をあらはす事(動詞の活用)を、てにはを以て微細な意味を言ひあらはす事と共考へ、日本語の特徴として擧げてゐる(漢字三音考)。又五十音以外の音は、後世生じたもので、

集のてにをばを集めて、その意義用法を研究した雀部信類の「氏通乎波義憤鈔」や、舊來の傳授書の類を批判して、祕事・口傳の價値なき事を説き、てにをばを活用あるものと無きものと區別して、自己の所見によつて説明を加へた榊井道敏の「てには綱引綱」など出て、漸く新機運の動くのを感じしめるが、安永年間に至ると、本居宣長と富士谷成章との二つの劃期的な研究があらはれた。宣長は、係結の研究を中心としたのであつて、多くの實例の

かになつて行つた。なほ林圀雄の「詞緒環」、黒澤翁滿の「言靈指南」、梅園春男の「形狀言五種活用圖」なども、「八衢」の説に補訂を加へたものである。大國隆正の「活語活法活理抄」に於ける活用の取扱法は、「八衢」とはかなり違つた所がある。鹿持雅澄の「用言變格例」は、四段活用を以て原始的のものとする動詞活用起原論である。「てにをばの研究」てにをばの研究は「詞玉緒」が中心となつた。義門の「玉緒緒分」、長野義言の「玉の緒末分節」、中島

なほ林圀雄の「詞緒環」、黒澤翁滿の「言靈指南」、梅園春男の「形狀言五種活用圖」なども、「八衢」の説に補訂を加へたものである。大國隆正の「活語活法活理抄」に於ける活用の取扱法は、「八衢」とはかなり違つた所がある。鹿持雅澄の「用言變格例」は、四段活用を以て原始的のものとする動詞活用起原論である。「てにをばの研究」てにをばの研究は「詞玉緒」が中心となつた。義門の「玉緒緒分」、長野義言の「玉の緒末分節」、中島

なほ林圀雄の「詞緒環」、黒澤翁滿の「言靈指南」、梅園春男の「形狀言五種活用圖」なども、「八衢」の説に補訂を加へたものである。大國隆正の「活語活法活理抄」に於ける活用の取扱法は、「八衢」とはかなり違つた所がある。鹿持雅澄の「用言變格例」は、四段活用を以て原始的のものとする動詞活用起原論である。「てにをばの研究」てにをばの研究は「詞玉緒」が中心となつた。義門の「玉緒緒分」、長野義言の「玉の緒末分節」、中島

なほ林圀雄の「詞緒環」、黒澤翁滿の「言靈指南」、梅園春男の「形狀言五種活用圖」なども、「八衢」の説に補訂を加へたものである。大國隆正の「活語活法活理抄」に於ける活用の取扱法は、「八衢」とはかなり違つた所がある。鹿持雅澄の「用言變格例」は、四段活用を以て原始的のものとする動詞活用起原論である。「てにをばの研究」てにをばの研究は「詞玉緒」が中心となつた。義門の「玉緒緒分」、長野義言の「玉の緒末分節」、中島

鎌倉末期以後に傳授思想にとらはれて、容易に他人に傳へず、因襲的であり、また規範的であつて批判的でなかつたために、新しい説や研究が起つても、これを傳へ祖述するを専らとし、ために進歩は遅々たるものがあり、或は却つて誤を添へるやうな事もあつた。

〔第二期の國語研究〕元祿の頃、僧契沖が、從

さして、その假名遣を定めることに成功した(字音假字用格)。「萬葉假名の用法の研究」宣長は「古事記」の萬葉假名の用法を觀察して、同音の假名でも語によつて或る定まつたものしか用ひないものがあることに気がついたが(古事記傳總論)、その弟子石塚龍齋は、弘く古代文獻に於ける萬葉假名の用法を研究して、

「五十音及び音聲の研究」契沖は「和字正濫鈔」に於て、五十音を悉曇の學說によつて説明した外、多少日本語の音聲上の特徴をも擧げたが、賀茂眞淵は、五十音を以て天地の正音と

集めてはをを集めて、その意義用法を研究した雀部信類の「氏通乎波義憤鈔」や、舊來の傳授書の類を批判して、祕事・口傳の價值なき事を説き、てにをは活用あるものと無きものと區別して、自己の所見によつて説明を加へた榊井道敏の「てにをは綱引綱」など出て、漸く新機運の動くのを感じしめるが、安永年間に至ると、本居宣長と富士谷成章との二つの劃期的な研究があらはれた。宣長は、係結の研究を中心としたのであつて、多くの實例の調査から三種の係結に對して、これを結ぶ語が三つの形に變化する事を見出し、まづこれを表にして刊行し(てにをは紐鏡)、ついで、「詞玉緒」に、一々實例をあげてこれを證し、また係結、結辭の種々の用法意義を説き、更に奈良朝及び假名文に於ける例を擧げてゐる。かやうにして、從來てにをはと言はれてゐたものの中から、係結となるものと、結辭として活用を有するものとが區別され、その主なる用法も明かになつた。宣長は係結の正しい事を以て古代日本語の一大特徴と考へた。富士谷成章は、一切の語を名・裝・挿頭・脚結の四つに分類した。名は體言、裝は用言にあたり、挿頭は今の副詞・代名詞・接續詞など他の語の上に用ひるもの、脚結は他の語の下につく今の助詞・助動詞・接尾辭の類である。これを分つて研究した「挿頭抄」と「脚結抄」(各別項)が傳はつてゐるが、よく各語の意義用法を分類し、俗語をあて、例をあげて秩序正しい叙述をしてゐる。殊に「脚結抄」は、活用の有無、名にもつくものつかぬものなどの性質によつて、脚結を五種にわちち、更にその中で細分し、一々の語について、意義、用法は勿論、他語への接續、活用あるものはその活用形までも

あげてゐる。又、裝についても、その活用を研究して、これを分類し、活用圖(裝圖)を作つて、活用の種類と一々の語形變化にそれと名を與へてゐる。これが脚結との接續を示す所に利用されてゐる。かやうに、成章の研究は、言語をその構成單位に分解し、單位が相依つて言語を構成するさまを明かにしたもので、組織的であつて、觀察の行きとどいた點に於て宣長を凌駕してゐる。この兩者の研究は互に關係なく出來たもので、その方法は實例から歸納したものであるが、全體としては歌の學問としててにをはの研究の系統に屬するものと思はれる。又成章の研究には、語の分類など、漢語學の影響を思はせるものがある。「活用の研究」用言の活用に關しては、賀茂眞淵の「語意考」(別項)に五十音圖にあててこれを説明してゐるが、これと甚だ類似したものは谷川士清の「日本書紀通證」や「和訓栞」にも見えるが、あまりに形式的速断的で半は失敗してゐる。成章の活用研究(脚結抄見ゆ)は、いろ／＼の活用形式の種類をあげて、さすが勝れてゐるが、なほ漏れたものもあり、多少の混雜もある。本居宣長は、「御國詞活用抄」に於て、活用の種類を二十七に分ち、各々これに屬する語をあげた。これが後の活用研究の基礎になつた。「雅文用語の研究」眞淵以後、雅文が行はれて、古代の言語文章を模範として歌文を作るやうになつたが、後世の語や語法や詞づかひが混じ易いために、宣長は「玉霞」を著して、これ等の點を指摘した。これに對して加藤千陰(玉霞論)や村田春海(玉霞附論)の非難があり、後に三井高隆の「辨玉霞二論」があつた(玉霞論辨)。又、藤井高尚の「消息文例」も、古代の消息文を規準として雅文の

消息について論じたものである。「宣長以後」「活用の研究」この時期の初に新に盛んになつたのは活用の研究である。本居宣長の「御國詞活用抄」は、二十七種に活用を分つたが、各種の語の變化した形(活用形)相互の關係については注意しなかつたのを、鈴木胤は、各々の形の用法の異同からして、これを八つ(後には七つにした)に分ち、用法の同じ形を同じ段にならべて、違つた種類の活用形式に於ても、一つの語はすべて同じ數に變化するものとした(活語斷續譜)。本居春庭はこれまで活用する行のちがひを主にして、段活用形式の種類を多くに分つてゐたのを、段による變化を規準として纏めて、これを四種とし、多少これに異なるものは變格とした(詞八衢)。かくて活用の種類が概括せられて簡約になつた。しかし、まだ不備もあり、形容詞の活用も逸した。僧義門は、「友鏡」を作つて宣長の「てにをは紐鏡」の結辭の三段を改めて五段とし、これを活用圖に改めたので、助動詞に至るまで、各種の語の語尾變化が明かになつたが、更に「八衢」の説に従つて、活用の種類を簡約にして、和語説略圖を作つた。この圖に於て、はじめて活用の段(活用形)に名を與へた。この圖に例證と説明を加へて「活語雜話」を作り、又「八衢」に委しい研究を加へて「山口栞」を作つた。この書に於て、はじめて形容詞の活用が委しく研究された。その他義門は活用の研究に於て力を盡す事が多かつた。中島廣足も亦「八衢補遺」を作つた。春庭は「詞通路」で、自他の事、延言の事、言ひかけその他の事で、活用に關した事項について説いたが、中にも自他は長野義言の「活語初の栞」や、黒河春村の「活語四等辨」等で、追々明

かになつて行つた。なほ林園雄の「詞緒環」、黒澤翁滿の「言靈指南」、梅園春男の「形狀言五種活用圖」なども、「八衢」の説に補訂を加へたものである。大國隆正の「活語活法活理抄」に於ける活用の取扱法は、「八衢」とはかなり違つた所がある。鹿持雅澄の「用言變格例」は、四段活用を以て原始的のものとする動詞活用起原論である。「てにをはの研究」てにをはの研究は「詞玉緒」が中心となつた。義門の「玉の緒線分」、長野義言の「玉の緒末分櫛」、中島廣足の「詞の玉緒補遺」等は、「玉緒」の研究を補ひ訂し、或は新に開けた活用などの知識を加へて説明し整理した主なものである。鹿持雅澄は「鏡囊」及び「結詞例」に於て、係結の規則、結に用ひる語及びその他の助詞の類について、奈良朝の用法を一々平安朝以後のものに對照して示した。又萩原廣道は「玉緒」に係詞として擧げた「はも徒」を「徒」と改め、「ぞのや何」を「ぞやか」と改め、係なくして連體で結ぶのを餘情あるものと解して、「詞玉緒」に於ける係結の例外なる變格の問題を解決した(てにをは係辭辨)。又てにをはを、いかなる種類の語又は活用形に接するかによつて分類し、これに基づいて、てにをはとてにをはとの接續の説明を試みた物集高世の「辭格考」(及び抄本)も出た。富士谷成章の學統では、その子御杖が「俳諧には抄」を著して「脚結抄」と同じ組織で俳諧のてにをはを説明し、保田光則が「挿頭抄」を増補した外、著しい研究はない。「假名遣の研究」假名遣に於ては、太田全齋が、支那・日本・朝鮮に於ける字音をしらべ、萬葉假名の用法等を考へて韻鏡に漢吳音の假名をつけ、これで日本の一切の字音を説明し得べしとしたが、この説が信ぜられ、これに基づ

いて白井寛隆が新に字音假名遣を定めた(音韻假字用例)。又、奥村榮實は五十音圖とあめつちの歌に暗示を得て、古代の假名の用例をしらべて、平安朝初期以前にア行の衣とヤ行の延との間に區別があつた事を見出した。又、敷田年治は、古代の假名遣が、定家假名遣のやうに變化した年代の考證を試みた(假名沿革)。「語源の研究」鈴木服が「雅語音聲考」を著して、言語に萬物の聲音を摸したるもの、及び音によつて象つたものがある事を論じ、また言語四種論に、名を表はす音と心をあらはす音とが根源であつて、名をあらはすものに心をあらはすものが附いて用言の活用が生じたと言つたのは注目すべきものである。かやうなる方面から、言語の音と意義との間の關係をもとめ、五十音圖に基づいて、その一々の音又は一々の行に一つ或は數箇の意義がありとして、語の本義を説くものが出て來た。橋守部(五十音小説・平田篤胤(古史本辭經)・林圀雄(皇國之言靈)をはじめ、井面守訓(群の音の貌)・富樫廣隆(五十音圖説)・堀秀成(音義本末考その他)・高橋殘夢(靈の宿その他)など各家の説を立ててゐる(これを音義説といふ。中に言靈を重んじて説くを言靈派といふ。殘夢などこれである)。さうして、てにをばや假名遣までもこれによつて説明しようとするものもあつた(守部の「助辭本義一覽」、堀秀成の「助辭本義考」(假字本義考)など)。「音聲の研究」音聲については、五十音圖に基づく説が多かつたが、しかし、中には實際の發音について考へるものも少しはあつた。宮本準龍の「六聲發揮」の如き、五十音に新しい母音を加へて六十音ありとし、齋藤彦磨の「音聲論」の如きはオランダの發音を參考したらしい。古代の音聲

については、前掲「古言衣延辨」の外に、義門は「乎於輕重義」で、オとヲの區別を論じ、「男信」で、ン音が古へマ行音とナ行音とに分れてゐた事を説いた。音の延約通略に就いては、鹿持雅澄は上代の延音のハ行サ行及びクに延びたものは、各々意義上に區別がある事を考へ、別に「雅言成法」を著して、語構成の場合に於ける種々の音轉化を類別した。大國隆正は「通略延約辨」を著して、通略延約の行はるゝ場合に條件がある事を論じて、濫用の弊をふせがんとした。「文字の研究」假名の字源や作者に關する研究は早く契沖の「和字正濫鈔」や、白石の「同文通考」に見え、その他種々の書があつたが、この期に入つて伴信友の研究によつて大に進展した。信友は豊富な資料によつて假名の起原、沿革を論じ、平假名は自然に生じたものとし、伊呂波の作者については、弘法大師である事を論じ、片假名及び五十音圖の作者については、吉備眞備説を肯定し、音圖は支那になつたものであらうとした。又當時見出された古筆や古點本から、いろいろの異體の假名をあつめた。日本固有の文字の有無については、「同文通考」に論があり、その後、跡部光海(和字傳來考)や、諸忍(以呂波問辨)など神代文字の存在を主張したが、この期に入り、平田篤胤は日文を以て眞の神代文字であると論じた(神字日文傳)。信友は「假字本末附録」に於てこれに反對した。その後、鶴峯戊申の「神代文字考」(鏗木文字考)、大國隆正の「神字源」など神代文字の存在を主張してゐる。「品詞分類の研究」鈴木服は、あらゆる單語を名・形・動・用言・てにをばの四種とし、その中を更に意義及び語形の相違によつて各々部類してゐるが、これは徂徠の漢字の

區分法に基づくものやうである。義門は活用の有無によつて、あらゆる語を體言・用言の二種とした。富樫廣隆は「詞玉橋」に於て、語を言・詞・辭の三種とし、更にこれを細分して、その意味・用法等を説いた。この「玉橋」は、從來開拓せられた各方面の研究を綜合して一の體系を立てた文典と見得べきものである。鈴木重胤の「詞捷徑」や、堀秀成の「蘿蔓」の如きも亦似た性質のものである。處が、こゝに和蘭文典の組織にならつて品詞及び格を立てて説明したものが出た。鶴峯戊申の「語學新書」である。しかし、あまり外面的の摸倣に過ぎた、成功したとはいへない。「雅文用語の研究」雅文を作るために萩原廣道の「小夜時雨」や、中島廣足の「玉霞窓の小篠」や、石川雅望の「雅言集覽」も出た。「第二期の特徵」(一)第一期の國語研究、ことに室町時代に於ける學問が因襲的獨斷的であつたのに對して、自由を重んじ、師説でも誤であるものは改訂するを憚らず、古書に存する事實から歸納し實證する科學的方法を取つたから、確實にして而も新奇なる結果を得て、學問が異常なる進歩を來した。(二)第一期の國語研究は、主として歌や連歌を作るためのものであつたから、古代の言語も當代に適しない部分は必ずしも探らず、後世のものでも適當と考へたものはこれを探つた。然るに第二期の國語研究は、主として古典學及び國學のためのものであつて、古代文獻を如實に理解するのを目的としたから、専ら古代の文獻に於ける言語を對象とし、後世のものは顧みなかつた。尤も伊勢貞丈の近古語の研究(安齋隨筆等)や、柳亭種彦の江戸初期の古俳書の言語の研究(反魂紙料その他)や、越谷吾山の

方言研究(物類稱呼)や、著者未詳の「俚言集覽」などもあるが、これは全く圈外に屬し、且つ系統を成さないものである。(三)國學者は尙古的である。古代のものを正しいとして、後世のこれに違ふものは誤とした。それ故古典に於ける言語や假名の用法を直に當代に行はうとした。契沖の假名遣改定や雅文の流行がこれである。かやうにして古典の國語研究の結果が、同時に當代の歌文の語の規範となつたのである。(四)國學者は、外國に對して日本といふ意識が強かつた。それ故言語の上に於て、日本語、殊に古代國語の特徵と思はれる點を力説し賞讃した。しかし、そのために見解が偏狹に陥り、獨斷の譏を免れ難い弊も生じた。「第三期の國語研究」(明治三十年まで)明治維新後、早くも國字國語改良の聲あり、政府でも學者を集めて「語彙」の編輯に従事せしめたが、やがて教育制度が定まつて、各地に小學校を設け、その學科の一として文法を課する事となつたので、種々の文法教科書が編せられるやうになつた。それには「玉緒」「八箇」などの説を、そのまゝ用ひたものもあつたが、西洋文典の影響を受けたものが多かつた。その古いものは、中金正衡の「大後語學手引草」で、上巻は古來の語學説を述べたが、下巻は八品詞を立て、各品詞の類別、動詞の時、文の構成・要素など、西洋文典に準據して説明した。田中義廉の「小學日本文典」(同日本小文典)、中根淑の「日本文典」は、共に西洋文典により、幾分日本語の性質を考へて取捨したもので、共に大に世に行はれた。しかし、これ等は、從來の國語研究に精通せぬ人々の手に成り、日本語に適應せぬところが少くなかつ

たので、明治十年頃に至ると、里見義の「雅俗文法」や、堀秀成の「語學階梯」、佐藤誠實の「語學指南」の如き、舊來の説を取捨して自己の組織を立てた文典があらはれたが、また兩者を折衷した物集高見の「初學日本文典」などあらはるゝに至つた。明治十二年帝國學士會院では、同院で日本文法書を編む議を可決して完全な文典を作らんとしたが、遂に實行せられなかつた。明治二十年、文部省は英國人チャムパレン(別項)に、「日本小文典」を編せしめて出版したが、この事は世の耳目を驚動せしめ、國

づく言語學が講ぜられ、これによつて、言語研究の目的と範圍と方法を學び、國語學が獨立した學問として成立すべきものである事を知り、從來の國語研究の如何なる點に缺陷や不備があるかを明かにした。その結果は早くも岡倉由三郎氏の「日本語學一斑」(明治二十三年刊)となつて、國語研究の新方向を示したが、この新しい知識は、漸次國語研究を指導するやうになつて、明治三十年代に至つては、種々の新方面の研究があらはれるやうになつた。

由三郎氏の「文及び文の解剖」など。殊に日本語に獨特なるものとして所謂總主の論が盛んであつた(重野清日本文法その他)。又一方、支那人その他に日本語を教へるために口語文法の研究が出来(金井保三日本俗語文典、入江祝衛日本俗語文法論)、その後、國定教科書に口語文法を多く用ひてから、口語文の文法として口語文法が出来(吉岡柳甫氏日本語法)、又標準語制定の一の試みとして文部省國語調査會で審議した口語法も出來た。又方言については、小

大矢透氏の假名及び假名遣の沿革の研究、本居清造氏の疑問假名遣の研究及び大槻文彦氏の口語法の史的的研究がある(山田氏の「平家物語」の研究も同會の事業の一つである)。近くは湯澤幸吉郎氏の抄物による室町時代語法の研究や、吉澤義則氏の「國語史概説」も出た(なほ國語史参照)。音聲の研究については、はじめは西洋の音聲學の說によつて日本語を説明したが(平野秀吉氏「國語音聲學」、岡倉由三郎氏「音聲學講話」、明治の末期より大正にかけて、實驗

が、しかし、中には實際の發音について考へるものも少しはあつた。宮本準龍の「六聲發揮」の如き、五十音に新しい母音を加へて六十音ありとし、齋藤彦磨の「音聲論」の如きはオランダの發音を參考したらしい。古代の音聲

正の「神字源」など神代文字の存在を主張してゐる。「品詞分類の研究」鈴木胤は、あらゆる單語を名・形・動・用言・てにをはの四種とし、その中を更に意義及び語形の相違によつて各々部類してゐるが、これは徂徠の漢字の

國學のためのものであつて、古代文獻を如實に理解するのを目的としたから、専ら古代の文獻に於ける言語を對象とし、後世のものは顧みなかつた。尤も伊勢貞丈の近古語の研究(安齋隨筆等)や、柳亭種彦の江戸初期の古俳書の言語の研究(反魂紙料その他)や、越谷吾山の

した。田中義廉の「小學日本文典」同日本小文典、中根淑の「日本文典」は、共に西洋文典により、幾分日本語の性質を考へて取捨したもので、共に大に世に行はれた。しかし、これ等は、從來の國語研究に精通せぬ人々の手に成り、日本語に適せぬところが少くなかつ

たので、明治十年頃に至ると、里見義の「雅俗文法」や、堀秀成の「語學階梯」、佐藤誠實の「語學指南」の如き、舊來の説を取捨して自己の組織を立てた文典があらはれたが、また兩者を折衷した物集高見の「初學日本文典」などあらはるゝに至つた。明治十二年帝國學士會院では、同院で日本文法書を編む議を可決して完全な文典を作らんとしたが、遂に實行せられなかつた。明治二十年、文部省は英國人チャムバレン(別項)に、「日本小文典」を編せしめて出版したが、この事は世の耳目を聳動せしめ、國學者の側からこれに對する批評が發表せられた。以上の外、從來の國語研究の系統を繼いで、これを開展せしめた研究としては、「玉の緒變格辨」(三田葆光)、「形狀言八箇」(權田直助)、「語學自在」(谷千生)などがある。明治二十三年の頃、日本の古文學の研究が盛んになると共に、種々の文典が作られたが、落合直文、小中村義象合著の「中等日本文典」、關根正直の「國語學」など最も行はれた。これ等は西洋系統の名目や體裁をも用ひたが、その内容は多くは從來の國學者の研究に據つたものである。さうして明治三十年に至つては遂に大槻文彦の名著「廣日本文典」及び「別記」があらはれた。西洋文典の組織に適當な取捨を施し、巧に舊來の學者の研究を取つて組織を立てたもので、後三條天皇以前の中古語に據つたものであるから、中古文典といふべきものであるが、一方規範的意味をもち、現代の文語を律しようとしたものである。

づく言語學が講ぜられ、これによつて、言語研究の目的と範圍と方法を學び、國語學が獨立した學問として成立すべきものである事を知り、從來の國語研究の如何なる點に缺陷や不備があるかを明かにした。その結果は早くも岡倉由三郎氏の「日本語學一斑」(明治二十三年刊)となつて、國語研究の新方向を示したが、この新しい知識は、漸次國語研究を指導するやうになつて、明治三十年代に至つては、種々の新方面の研究があらはれるやうになつた。又明治以後、國語國字を改良し、その混雜不統一を整理して實際に便しようとする運動は絶えなかつたが、そのために國語の現状及び過去を調査しようとする企が生じ、明治二十一年私立の言語取調所が設けられたが間もなく廢された。併し三十年代になると、世間の要望によつて文部省内に臨時國語調査委員會を設けてその調査を實行する事となつた。この會に於て行つた調査事業は、國語の研究に寄與する所が多であつた。文法については、明治三十年に「廣日本文典」が出てから、次第に世に行はれ、教科書もこれに基づくものが多く出たが、しかし中古語の語法を以て現今の文語を律するのは不合理であるとし、文部省では、現行普通文法許容に關する事項を發布して、中古の語法でも今の普通文にあまり行はれない箇所は、必ずしも中古文法によるを要せざる事としたが、芳賀博士は明治二十七年「明治文典」をあらはして現代普通文の文法を示した。博士が同年「國語活用聯語一覽」を著して助動詞の相連に一定の順序ある事を示したのは、語法上の一發見といふべきである。又三十年代に於ては、文章法の研究が盛んに起つた(岡田正美の「文章法大意」、岡倉

由三郎氏の「文及び文の解剖」など)。殊に日本語に獨特なるものとして所謂總主の論が盛んであつた(重野清日本文法その他)。又一方、支那人その他に日本語を教へるために口語文法の研究が出来(金井保三日本俗語文典、入江祝衛日本俗語文法論)、その後、國定教科書に口語文法を多く用ひてから、口語文の文法として口語文法が出来(吉岡柳甫氏日本語法)、又標準語制定の一の試みとして文部省國語調査會で審議した口語法も出来た。又方言については、小學校の國語教授の必要上各地に小方言集の類が出来たが、國語調査委員會では標準語又は口語文制定のために各府縣に囑して各地の方言を調査し、はじめて音韻及び語法の主な點についての全國に於ける分布の大體を知り得た(音韻調査報告書、音韻分布圖、口語法調査報告書、口語法分布圖参照)。又、從來の文法は西洋文法の組織にならつたものであるが、日本語の説明には不適當であり、不備な點があるのを見明には適當な新體系を立てる試みが起つた。著しいものは、山田孝雄氏の「日本文法論」、岡澤鉦次郎氏の「新式日本文典原理」日本文典要義、近くは松下大三郎氏の「標準日本文法」などこれである。三矢重松氏の「高等日本文法」は、部分的に日本文法の特徴を發揮した所が少くない。その他、新しい方面としては國語の比較研究が起つた事であつて、金澤庄三郎博士は、日本語と朝鮮語及び琉球語との比較研究の結果、その同系論を發表した(日韓兩國語同系論)。その他支那語、ギリシヤ語、ペルシヤ語などの比較を試みるものも出来た。なほ國語の史的研究所としては、山田孝雄氏の奈良朝・平安朝及び「平家物語」の研究があり、又國語調査會の事業として行はれた

大矢透氏の假名及び假名遣の沿革の研究、本居清造氏の疑問假名遣の研究及び大槻文彦氏の口語法の史的研究所がある(山田氏の「平家物語」の研究も同會の事業の一つである)。近くは湯澤幸吉郎氏の抄物による室町時代語法の研究や、吉澤義則氏の「國語史概説」も出た(なほ國語史参照)。音聲の研究については、はじめは西洋の音聲學の説によつて日本語を説明したが(平野秀吉氏「國語音聲學」、岡倉由三郎氏「國語音聲學」)、明治の末期より大正にかけて、實驗その他の方法により國語音聲及びアクセントの研究が甚だ進歩した(佐久間鼎「國語のアクセント」「國語の發音とアクセント」「國語アクセント講話」「日本語音聲學」、神保格氏「國語音聲學」)。(第三期の特徴)(一)初めは西洋語の文法に接し、後には西洋の言語學を輸入して、從來の國語研究に大なる變革を來した。(二)國語の研究が獨立した學問であることを理論的に知ることが出来、その研究法を學んだ。(三)國語研究の範圍がひろくなつた。前時代には古代語のみを正しとして研究したが、今期からは、歴史的研究を重んじて、後世の語をも研究するやうになつた。(四)從來は、文字に書かれた言語のみを研究したが、音聲による活きた言語の研究が大切であることを知り、口語を重んじ諸方言や俗語をも研究するに至つた。(五)徒に自國語を尊しとせず、他國語と比較して自國語の特徴を知り、また國語の系統をも考へるやうになつた。(六)從來、非科學的に陥り易かつた音聲についても、音聲學の輸入によつて科學的觀察をするやうになつた。

【外國人の日本語研究史】「朝鮮」太古から日本と密接な關係があつたから、通譯など日本

語に通じたものもあつたであらうが、日本語を學ぶ特別の施設はなかつたやうである。李朝に至つて、太宗の十四年(永樂十二年)、司譯院にはじめて倭學の科を設け、倭學訓導を置いて日本語を教授せしめた。その譯科の試験に用ひられた書物は、初めは消息、書格、伊呂波・本草、童子教、老乞大・議論、通信、庭訓往來、鳩養物語、雜語の十一種であり、後に應永記、雜筆「雜筆往來」(であらう)・富士「富士野往來」(であらう)の三種が加はつたが、康熙十七年以後は、康熙聖の編した「捷解新語」(十卷、康熙十五年刊)を以てこれに代へた。この書は、日本語の會話及び書簡文に、諺文で發音と譯をつけたもので、著者は文祿の役に捕はれて日本に十年もゐたものである。これが乾隆十三年及び同四十六年に改修重刊せられ、言語も時代に適するやうに改められて、永く用ひられた。これと同種のものに、「捷解新語文釋」(金健瑞編)や「長語」(洪舜明著)なども作られた。又語彙としては、「倭語類解」(洪舜明著)、「三學譯語」(李善鳳著)などがある。その他種々の隨筆や、日本へ來た使節の記録などに、日本の言語文字に關する記事があるが、さほど注目すべきものはない。

〔支那〕日本との間には太古から交通があつて、「魏志」や「後漢書」以下の史籍に日本の事が見えてゐるが、明代にいたるまでは日本語に關する研究は殆どなかつたらしい。ただ宋の羅大經の「鶴林玉露」や、元末明初の陶宗儀の「書史會要」に、日本の言語文字に關する僅かな記事があるのを奇とするのみである。明代になつては、まづ日支の國交が回復して、日本の使節に接するために日本語を學ぶ必要が起り、後には倭寇が支那の沿海を荒して、その防備策を講ずるために、日本の事情を詳かにする必要にせまられたので、「華夷譯語」中の「日本語譯語」や、「日本寄語」(薛俊著)のやうな日本語學書も出來、また「武備志」(茅元儀著)や「全浙兵制附錄」の「日本風土記」(侯繼高著)などにも、日本の言語文字について、かなり委しい記事を載せてゐる。中には、歌謠に音と譯と註を施したものを載せてゐるが、大概は單語をあつめただけのもので、學問的研究ではない(室町時代の言語資料としては有益なものではあるが)。清代になつては、日本は鎖國の時代に入つて、支那との國交も絶え、國民の海外に雄飛する事もなくなつたので、支那でも日本語研究の興る由がなかつた。然るに、清朝の末期に起つた日清戰爭の結果、支那から日本に留學するものも多く、その後も日本の書によつて新知識を求めものが益々多くなつて行つたので、日本語に關する著作も可なり現はれたが、しかし、學問上價值ある研究はまだ無いやうである。

〔歐米諸國〕十六世紀の中葉(天文年間)、葡萄牙人がはじめて日本に來てから西洋との交通が開けて、貿易及び布教のために日本へ來るものが多くなつたが、耶穌會(ゼズイト派)に關する宣教師等は、布教の目的を達するために熱心に日本語を學んで、布教用の書を作ると共に、辭書や文典や語學教科書を作つた。さうして、日本語を羅馬字で綴る方式も、漸次確定するに至つた。最初の日本文典は Duarte da Silva (西紀一五六四年日本にて歿)の作つた Arte da lingua Japoneza であつて、彼はまた甚だ語數多き語彙をも作つて、共に日本宣教師の寶典となつたと傳へられてゐる。ついで日本語に精通した Joso Fernandes (一五六七年又は八年平戸で歿)は Grammatica da lingua Japoneza を作り、ラテン語の順序に従つて動詞變化、前置詞、文章法等を述べて西洋人の學習に便したといふ(以上の諸書は何れも今傳はらない)。その後、數種の文典や辭書が作られたが、西紀一五九〇年、洋式活版機械が日本の教會に舶齎されてから、この種のものも次第に出版された。即ち一五九四年には、アルバレス (Alvares) の拉丁文典に、動詞變化の部に日本語の實例と説明とを附したものが、翌年には拉丁・葡萄牙・日本語の對譯辭書がそれ、刊行せられて、日本語を學ぶ西洋人及び外國語を學ぶ日本人に便を與へ、一五九八年には、漢字を音及び訓から引く假名引の辭書と字形から引く玉篇式辭書とを巧に合せた「落葉集」が出版せられ、一六〇三年には、耶穌會士共編の浩瀚なる「日葡辭書」(Vocabulario da lingua de Japan 長崎版)一六〇四—八年には、ロドリゲス (João Rodrigues) の名著「日本語典」(Arte da Lingua de Japan 長崎版)が出版された(當時の刊行書については、別項「吉利支丹版」參照)。最後の二つは、周到な注意の下に、多年の苦心で編著されたもので、辭書は語彙の豊富な事、ことに口語が多く收められてゐる事、活用や實例が丁寧に掲げられてゐる事、特殊の場合に用ひられるものや、方言によつて相違あるものも示した事など、甚だ進歩した組織内容をもつてゐる。ロ氏の語典は主として拉丁文典の體裁になつたが、日本語の特質を考へて、品詞も Participio, Postpositivo, Artigo, Particula を立ててすべて十品詞とし、動詞の活用は三種とし、別に、で終止するもの(今の形容詞)と「候」との二種を立て、口語文語にわたつ

て、あらゆる文法上の形式を説く事詳細であり、發音に關する説明も的確で、各地の方言の相違やその特徴をも擧げ、當時行はれた各種の文語や文學についても、説明を加へてゐる。以上の二種は實に當時の日本語研究の双壁であつて、今日に於ても價值多いものである。その他「口譯平家物語」や「伊曾保物語」の如き口語の教科用書も編まれ、刊行された。又 Manuel Barreto の「葡日辭書」(三卷)も出來たが刊行せられなかつた。一六二〇年には、初學者のためにロ氏の語典を要約した小語典が刊行され (Arte breve da lingua Iapoa マカオ學林刊)。一六三〇年には、耶穌會諸士編の長崎版「日葡辭書」の西班牙譯がマニラで刊行された (Vocabulario del Japão)。一六三二年にはドミニカン派の教父、西班牙人 Diego Collado の「日本語典」(Ars Grammaticae Iaponicae Linguae)と「日本語典」(Dictionarium sive Thesauri linguae iaponicae)とがマニラで出版せられた。ロ氏の語典と長崎版の「日葡辭書」とに基つき、これを簡約にしたものやうであるが、なほ多少これを補ふべき所もあり、又あらゆる日本語にアクセントを示したのも有益である。これから十九世紀の初に至るまで、凡そ二百年近くの間は、日本語に關する研究は殆ど全くなかつた。唯一の例外は、一七三八年メキシコ版のオヤングレン (Fray Melchior Oyanguren) の「日本語典」(Arte de la lengua Japona) であるが、主として従来の諸書に據つたものらしく、誤も少なく、實際用ひない言ひ方もある。日本語が支那語から由來したやうに説き、支那語やフィリッピン語のタカラ語などと對比した所もある。以上の日本語研究は、すべて葡・西

の宣教師の手に成り、布教上の必要に出たものである點に特色がある。

十八世紀の後半、露國のカタリナ二世の命によつて、「世界言語比較辭典」が編せられ、中に漂流民から採集した日本語を載せた。獨逸の學者クラプロート H. J. Klapproth が一八〇五年イルクーツクに出張して、日本の漂流民から日本語を學び、その際「早引節用集」を得て、日獨辭書の稿を起した。實にク氏は、日本語がウラルアルタイ語族と根本的關係ある事を始めて唱へた學者であつた (Asia Poly-

論が盛んであつて、前述クラプロートによつて、シーボルト、ボレル (A. Boller) など、やゝ委しくウラルアルタイ説を論證してをり、ローニーやホフマンも亦、この説を支持してゐるが、ホフマンは、根源的關係はあるが、獨立に發達したものと考へた。その後、ダレンツェル (J. Grunzel) やウインクル (H. Winkler) なども、日本語とウラルアルタイ語族との類似を見出し、その同系である事を證明するに力を盡した。

Shanghai, 1888, 2nd ed. 1889.) の如きは代表的の名著である。アストン、チャムバレン (Newsky) などの日本の音聲や方言に關する研究がある。近刊の英人サムソン (G. B. Sanson) の「歴史的日本文典」(An Historical Grammar of Japanese, Oxford, 1928) も注意すべきものである。(國語・國語史・國語學史・言語學・辭書參照)

【參考】「國語」の條の參考を見よ。外に「國語研究史に關するもの」國語學研究史 花岡安

に關する研究は殊となつたらしい。たまたま
の羅大經の「鶴林玉露」や、元末明初の陶宗儀
の「書史會要」に、日本の言語文字に關する僅
かな記事があるのを奇とするのみである。明
代になつては、まづ日支の國交が回復して、
日本の使節に接するために日本語を學ぶ必要
が起り、後には倭寇が支那の沿海を荒して、そ

定するに至つた。最初の日本文典は Duarte
da Silva (西紀一五六四年日本にて歿) の作つた
Arte da lingua Japoneza であつて、彼はま
た甚だ語數多き語彙をも作つて、共に日本宣
教者の寶典となつたと傳へられてゐる。つい
で日本語に精通した Joso Fernandes (一

てゐる。ロ氏の語典は主として拉丁文典の體
裁になつたが、日本語の特質を考へて、品詞
も Participio, Postpositivo, Artigo, Particula
を立ててすべて十品詞とし、動詞の活用は三
種とし、別に、iで終止するもの(今の形容
詞)と「候」との二種を立て、口語文語にわたつ

典)(Arte de la lengua Japona) であるが、
主として従来の諸書に據つたものらしく、誤
も少くなく、實際用ひない言ひ方もある。日
本語が支那語から由來したやうに説き、支那
語やフィリッピン語のタカラ語などと對比した
所もある。以上の日本語研究は、すべて葡・西

の宣教師の手に成り、布教上の必要に出たも
のである點に特色がある。

十八世紀の後半、露國のカタリナ二世の命に
よつて、「世界言語比較辭典が編せられ、中
に漂流民から採集した日本語を載せた。獨逸
の學者クラプロート H. J. Klapproth が一八
〇五年イルクーツクに出張して、日本の漂流
民から日本語を學び、その際「早引節用集」を
得て、日獨辭書の稿を起した。實にク氏は、
日本語がウラルアルタイ語族と根本的關係あ
る事を始めて唱へた學者であつた(Asia Poly-
glotta, Paris, 1831)。この時代から歐洲の學
者の間に日本語に對する關心が起り、一八二
五年ロドリゲスの「日本語小語典」がランゼ
ン(C. Landresse)によつて佛譯をよめ(Élé-
ments de la grammaire japonaise, Paris, 1827)

論が盛んであつて、前述クラプロートにつ
で、シーボルト、ボレル(A. Boller)な
や、委しくウラルアルタイ説を論證してを
り、ローニーやホフマンも亦、この説を支持
してゐるが、ホフマンは、根源的關係はある
が、獨立に發達したものと考へた。その後、
ルンネル(J. Grunzel)やウインクル(H.
Winkler)なども、日本語とウラルアルタイ語
族との類似を見出し、その同系である事を證
明するに力を盡した。

明治維新前後から明治時代にかけて、日本語
研究に英米人の盡した功績は偉大である。一
八三〇年、バダヴィヤ版のメーノースト(W.
H. Medhurst)の「英和和英辭書」や、アルコ
ック(R. Alcock)の「日本文典要略」(Elements
of Japanese Grammar, Shanghai, 1861)な
どを先驅として、S. R. Brown, J. Summers
などの會話文典なども出來たが、辭書に於て
は、米國人ハボン(J. C. Hepburn)が非常の
苦心を以て集積し、版を重ねると共に増訂し
た「和英語林集成」(A Japanese and English
Dictionary, 初版一八六七年上海版)文典に於て
は、ハムマン(G. W. Aston)の「日本語小文
典」(Short Grammar of the Japanese spoken
language, (初版) Belfast, 1871)と、その改訂
版なる「日本語文典」(A Grammar of the
Japanese spoken language, Tokyo, 1888)と、
わけつて「日本文語文典」(A Grammar of the
Japanese written language, 1st ed. 1872,
2nd ed. 1877)の如き、又チャムバレン(B. H.
Chamberlain)の「簡略日本俗語文典」(Simp-
lified Grammar of the Japanese language,
London, 1886)と、殊に「日本語便覽」(A
Handbook of Colloquial Japanese, 1st ed.

Shanghai, 1888, 2nd ed. 1889.) の如きは代
表的の名著である。アストン、チャムバレン
兩氏は、日本の古語にも通じ、從來の日本の
學者の語學説をも學んだ上に、これ等の書を
編したのであつて、その組織は整然としてを
り、その説明は概して正確であつて、よく日
本語の特質を明かにし、又間々新説をも出
してゐる。ことに、現代の口語については、日
本人の研究は殆ど無かつたのに、これを組織的
に敘述し、時に歴史的説明をも加へてゐるの
は、大なる功績といはなければならぬ。こ
の兩氏の外に、サトウ(E. M. Satow)、ヘド
キンス(J. Edkins)、ライマン(B. S. Lyman)、
ロウエル(P. Lowel)、ペーカー(E. H. Par-
ker)などあつて、日本の方言、字音、キツの
假名の古代の發音、古代語の語彙、枕詞、狂
言の言葉、他國語との關係などについて、有益
にして斬新な説を發表した(これ等は多く日
本亞細亞協會報告に載せられた)。日本語の系
統に關しては、アストンはアリアン族との關
係の可能性を論じたが、また日本語と朝鮮語
との類似點を指摘して、兩國語が同系統に屬
する事を論じ(A comparative Study of the
Japanese and Korean languages, 大英王立
亞細亞協會會報所載)、チャムバレンは、琉球語
を研究し、その文法と語彙の比較によつて、
日本語と同系なる事を論證し、動詞活用形式
の古形はナ行變格の如きものであらうと説き
た(Essay in aid of a Grammar and Dictio-
nary of the Luchuan language, 1895, 日本
亞細亞協會會報第二十三卷附録)。以上の外、獨逸
人ヒゼンマン(P. Noack)、サイトル(A.
Seidel)、ランゲ(R. Lange)などの著者も、
フロマンツ(R. Florenz)の語彙文法を、露

西亞人では、ポリヴァノフ(Poliwanov)、
レットネル(O. Plemer)、ネフスキイ(N.
Nevsky)などの日本の音聲や方言に關する研
究がある。近刊の英人サムソン(G. B. Sam-
son)の「歴史的日本文典」(An Historical Gra-
mmar of Japanese, Oxford, 1928)も注意す
べきものである。(國語國語史、國語學史、言語
言語學、辭書參照)

獨逸の言語學の大家フムボルト(A. von Hum-
bold)の日本語に關する論文を添へて刊行せ
られたのを初めとして、以後、ローニー(Lé-
on de Rosny)、ランゼン、レズン(Léon
Pages)、ランゲザ(Albert Régnault)と
うな佛國の學者や、シーボルト(Siebold)、
キルチニウス(Donker Curtius)、ホフマン
(J. Hoffmann)、フンパーナ(A. Pfitz-
maier)の如き獨逸の學者が、辭書や文典や種
種の論文を發表してゐる。中にもホフマンの
「日本文典」(A Japanese Grammar, Leiden,
1868, 英・蘭兩版あり)は、獨自の研究に成つ
た可なり大部なものであつて、説明は詳細に
組織立してをり、又波行字音の古音を考へて
あるとし、未來の助動詞「む」を見「ら」から出た
ものと推定し、受身の形は動詞に「得」といふ
動詞の附着したものとするなど、獨創のみに富
んでゐる。一方、この時代には日本語の系統

論が盛んであつて、前述クラプロートにつ
で、シーボルト、ボレル(A. Boller)な
や、委しくウラルアルタイ説を論證してを
り、ローニーやホフマンも亦、この説を支持
してゐるが、ホフマンは、根源的關係はある
が、獨立に發達したものと考へた。その後、
ルンネル(J. Grunzel)やウインクル(H.
Winkler)なども、日本語とウラルアルタイ語
族との類似を見出し、その同系である事を證
明するに力を盡した。

明治維新前後から明治時代にかけて、日本語
研究に英米人の盡した功績は偉大である。一
八三〇年、バダヴィヤ版のメーノースト(W.
H. Medhurst)の「英和和英辭書」や、アルコ
ック(R. Alcock)の「日本文典要略」(Elements
of Japanese Grammar, Shanghai, 1861)な
どを先驅として、S. R. Brown, J. Summers
などの會話文典なども出來たが、辭書に於て
は、米國人ハボン(J. C. Hepburn)が非常の
苦心を以て集積し、版を重ねると共に増訂し
た「和英語林集成」(A Japanese and English
Dictionary, 初版一八六七年上海版)文典に於て
は、ハムマン(G. W. Aston)の「日本語小文
典」(Short Grammar of the Japanese spoken
language, (初版) Belfast, 1871)と、その改訂
版なる「日本語文典」(A Grammar of the
Japanese spoken language, Tokyo, 1888)と、
わけつて「日本文語文典」(A Grammar of the
Japanese written language, 1st ed. 1872,
2nd ed. 1877)の如き、又チャムバレン(B. H.
Chamberlain)の「簡略日本俗語文典」(Simp-
lified Grammar of the Japanese language,
London, 1886)と、殊に「日本語便覽」(A
Handbook of Colloquial Japanese, 1st ed.

【參考】「國語」の條の參考を見よ。外に「國語
研究史に關するもの」國語學研究史 花岡安
見 ○國語學小史 保科孝一 ○國語學史 同上 ○
日本文法史 福井久藏 ○近世國語學史 伊藤慎吾
○國語學史 吉澤義則 ○國語學通考 安藤正次 ○
過去四十年間における國語學界の概観 高橋
龍輝(國學院雜誌一三〇一—二) ○國語關係刊
書目(明治元年より大正十五年に至る) 時枝誠記
(國語と國文學四ノ五) ○國語學并言語學參考
論文目録 田村榮太郎(國語と國文學五ノ五) (外
國人の日本語研究に關するもの) 朝鮮語學
史 小倉進平 = M. Coumert : Bibliographie
Coréenne, 1896. ○異稱日本傳 松下見林 ○
國語學上に於ける歐米人の貢獻 安藤正次(國
學院雜誌一三〇六—七九—一〇—一一—一四—一七) ○
日本文法史(附載、外國人の日本語研究年
表) 福井久藏 ○初期耶穌教徒編述日本語學書
研究 フレイタス(岡本良知譯) ○南蠻廣記 新村出
○續南蠻廣記 同上
T. Benfey : Geschichte der Sprachwis-
senschaft. München, 1869. = Fr. von
Wenckstern : Bibliography of the Japa-
nese Empire, I vol., Tokyo, 1895, 2nd
ed. 1910. II vol Tokyo, 1907. = O.
Nachod : Bibliography of the Japonaise
Empire, 2 vols. London, 1928. = Léon

Pages: Bibliographie Japanese. Paris, 1859. W. Schmidt: Die Sprachfamilien und Sprachkreise der Erde. Heidelberg, 1926. E. Denekamp: Was wissen wir über die Herkunft der japanischen Sprachen? (Die Wahrheit, 7 Jahrgang No. 2, Tokyo, 1906.)

國語學史

研究の發達史、又はこれを叙述したもの。古代から現代に至る間に、國語に關して如何なる研究が起り如何なる説が行はれたか、さやうな研究は如何にして起り、如何にして傳へられたか、前の研究と後の研究との間に如何なる關係があり、その間にどれだけ發達し進歩し或は退歩したか、國語のいかなる事象、いかなる方面が問題となり、その研究がどこまで開拓せられたかを明かにすべきである。

それには、國語學に關する著書や論文等を搜り求めて、その研究の内容と研究者の思想と目的とを明かにすると共に、研究者の傳記をしらべて、その師友や境遇を明かにして、學問の系統を知ると共に、又その時代の精神や状態や、當時行はれた思想や學說など、苟もこれに影響を與へたと思はれるものを調べなければならぬ。かやうにして國語學史は、國文學史、日本思想史、歌學史、連歌史、俳諧史、國學史、文獻學史、日本に於ける韻學史、梵語學史、蘭學史、英語學史その他と交渉をもつ。【研究資料】直接の資料、即ちどんな研究があつたかを知るべき資料のみを擧げる。國語學書の類はいふまでもないが、その外に、隨筆や論文集の類、韻學、悉曇、蘭學、その他外國語學關係のもの、註釋書の類、和歌、連歌、俳諧等の學書、諸ひもの、語りも

の等の書などの中には、時として國語研究として優れたものを見出す事がある。

【國語學史の時代區分】落合直澄の「語學の系統」には(一)記紀の撰述より延喜頃まで、(二)延喜より元祿頃まで、(三)元祿より慶應まで、(四)明治時代の四期とした。保科氏の「國語學小史」には上田萬年氏の説によつて、五期にわかつた。第一期は契沖以前、第二期は國語學勃興の時代で、契沖より宣長まで、第三期は國語學隆盛の時代で、宣長以後守部まで、第四期は國語學衰微の時代で、守部から明治十九年まで、第五期は明治十九年以後、即ち帝國大學に博言學科(後に言語學科と改名)を置かれて以後である。この第二期乃至第四期は「國學三遷史」(別項)に國語の時代をわかつて、(一)國學勃興の時期、(二)國學完成の時期、(三)國學衰微の時期の三期に分つたのに正に相當するもので、これ等の三期と、第一期及び第五期との間の相違は甚だ多大なるものがあるから、これを同等に置く事は適當であるか否か甚だ疑はしい。吉澤義則氏の「國語學史」に、國語學史を大別すれば、第一期江戸時代の初めまで、第二期明治の半まで、第三期、明治の半以後の三期に分つべきであるとの説を修正したのである。安藤正次氏は「國語學概論」に第一期、平安朝末頃から江戸時代の初期、國學勃興時代まで、第二期、國學勃興から明治維新まで、第三期、明治維新後の三期とした。要するに、三期に分つ説が有力であつて、契沖の時代を以て一期を劃する事は皆一致するが、なほ一つの區別は、明治維新を以てするものと、明治十九年を以てするものとある。何れが正しいかは容易に定め難いが、西洋の語學が日本語に影響したの、維新前にも一二ないではないが、主として維新以後で、さうして必ずしも明治十九年を俟たないから、明治維新を以てするの、寧ろ妥當であらう。

【國語學史研究の略史】國語研究の始まつたのは古い事であるけれども、その研究の進んだ跡を回顧するやうになつたのは、各方面の國語研究が發達した江戸時代の末期であつて多分、平田篤胤の「古史本辭經」(別項)卷四の古言學由來などが古いものであらう。明治に入つて、落合直澄の「語學の系統」(皇典講究所講演第六號、明治二十二年五月發行)の外、同誌第三十四號に「語學系統追加」がある。共に、後に「國文論纂」に收められた「國語研究史を四期に區分し、學派としては、(一)古代の用例により、通略延約等を以て解釋し、假名遣までも訂正した。契沖・貞淵・宣長等の一派。(二)語格、即ち活語體言の連續から係結等に至るまで言語の規則を立てるもの。長伯・成章・春庭等の一派。(三)五十音の微妙なる理を説明し、一音毎の言語の本義を解釋するもの。服・守訓(井面)・守部・廣隆(富盛)等の一派。以上の三派と、時代別にその發達の大略を説き、大體組織的な叙述をなしてゐる。その後、言語取調所から引續き帝國大學で國語學の書目解題を編し、後に増訂を加へて刊行した(明治三十五年刊)國語學書目解題。帝國大學では上田萬年氏が始めて國語學史を講ぜられ、それが基礎となつて保科孝一氏の「國語學小史」が出来(明治三十二年刊)、後、これに改訂を加へ組織を改めて「國語學史」(別項)と題して刊行された(明治四十年刊)。明治四十年には福井久藏氏の「日本文法史」が出たが、これは國語學全般でなく主として文法に關するものに限られてゐる。併

し保科氏の著に粗略であつた明治以後が委しいので、互に相補つて益する所が多い。近年伊藤慎吾氏の「近世國語學史」や、吉澤義則氏の「國語學史」(國文學講座)も出た。從來の著は主として國語學書にあらはれた研究のみを探り、國語學書以外に存するものについては搜索が不十分である嫌があり、又内容を紹介するものが主であつて、學說の展開を明かにし、一々の研究の特質を究めて、その研究史上の價値を定むるに至つては、なほ遺憾とすべき點があつたが、その後これ等の缺點を補ふべき有力なる諸研究も現はれるに至つた。(國語研究の歴史については「國語學」參照)

【參考】「國語」の參考を見よ。【橋本】

國語學史

保科孝一「刊行」初め早稻田大學の文學科講義録に掲載したものを明治四十年十二月刊行した。【内容】本書は時代を五期に分ち、時代内では分類體に古來の國語研究の歴史を記したものである。先づ總論に於て、國語研究の目的と方法、國語學史の目的、從來の國語研究に對する概觀を述べ、本論に入つて、國語研究の起つた初めから明治時代までを五期に分つてゐる。第一期は平安朝から契沖以前まで、第二期は契沖から本居宣長まで、第三期は春庭・義門等を中心とする時代、第四期は幕末明治維新の時代、第五期は明治十九年帝國大學に博言學(言語學)の講義が始められた後、と分けてゐる。このうち明治以後は概觀に止まつて頗る簡單であるが、第一期から第四期までは、各々緒論・假名遣・手爾乎波・音韻・文字・辭書・活用等と項を分つて、國語研究の變遷發達を記してゐる。最後に結論として國語學の今後進むべき方向を述べてゐる。

【價值・影響】

著者は、その前著「國語學小史」(明治三十二年刊)の列傳體を用ひてゐるに反し本書には「小史」に於ける研究を基礎とし、その傳記に關する部分を除き、學說に關する部分进行分类體に組み直して書いたもので、研究としては前著「小史」からも、多く出てゐないやうである。二十餘年前の著述であつて、今日から見れば多少の不備誤謬はあるが、本書以後に出た十種に近い國語學史に關する著書は、大概本書及び「國語學小史」から大なる影響を受けてゐる。

以後、田舎武士が都に來て、言語が俗化し、假名遣も亂れた。

(六)鎌倉室町以後は、定家假名遣が行はれ、口語も亂れて行き、文語と相違が生ずるにいたつた(風土志林第七十二册所載「言語變遷正訛辨」)。かくの如く六變を認め、古代は委しく、中世以後は疎であつて權衡がとれない。アストン(別項)は、(一)發達の時期。奈良朝終まで。(二)成熟の時期。平安朝終まで。(三)衰替の時期。鎌倉時代以後。以上三期とし、チャムバレン(別項)は、(一)上代

時代を劃すべきことは異論はあるまい。

平安朝から室町時代の終に至る間に於ては、以前は保元平治の頃を以て時代を劃するものが多く、近來は平安朝の終を以て劃するものが多いが、山田孝雄氏も論ぜる如く(奈良朝文法史序論)、鎌倉時代の言語の特徴は、既に院政時代より現はれてゐるものが少くないから、院政時代以後を鎌倉時代と共に取扱ふのが妥當と認められる。院政時代以後室町時代の終までの間は、或は吉野朝時代を以て一期を劃

史、梵語學史、蘭語學史、英語學史その他と交
渉をもつ。【研究資料】直接の資料、即ちど
んな研究があつたかを知るべき資料のみを擧げ
る。國語學書の類はいふまでもないが、その
外、隨筆や論文集の類、韻學、悉曇、蘭學、
その他外國語學關係のもの、註釋書の類、和
歌、連歌、俳諧等の學書、諸ひもの、語りも

第二期、國學勃興から明治維新まで、第三期、
明治維新後の三期とした。要するに、三期に
分つ説が有力であつて、契沖の時代を以て一
期を劃する事は皆一致するが、なほ一つの區
劃は、明治維新を以てするものと、明治十九
年を以てするものとある。何れが正しいかは
容易に定め難いが、西洋の語學が日本語に影

が始めて國語學史を講せられ、それが基礎と
なつて保科孝一氏の「國語學小史」が出来(明治
三十二年刊)、後、これに改訂を加へ組織を改め
て「國語學史(別項)」と題して刊行された(明治
四十年刊)。明治四十年には福井久藏氏の「日本
文法史」が出たが、これは國語學全般でなく主
として文法に關するものに限られてゐる。併

分けてゐる。このうち明治以後は概観に止ま
つて頗る簡單であるが、第一期から第四期ま
では、各々緒論、假名遣、手爾乎波・音韻・文字・
辭書・活用等と項を分けて、國語研究の變遷發
達を記してゐる。最後に結論として國語學の
今後進むべき方向を述べてゐる。

【價值・影響】著者は、その前著「國語學小史」
(明治三十二年刊)の列傳體を用ひてゐるに反し
本書には「小史」に於ける研究を基礎とし、そ
の傳記に關する部分を除き、學說に關する部
分を分類體に組み直して書いたもので、研究
としては前著「小史」からも、多く出てゐない
やうである。二十餘年前の著述であつて、今
日から見れば多少の不備誤謬はあるが、本書
以後に出た十種に近い國語學史に關する著書
は、大概本書及び「國語學小史」から大なる影
響を受けてゐる。【龜田】

國語假名遣

【假名遣】を見よ。

國語史

【國語史】國語學【解説】國語即ち日
本語の發達變遷の歴史。その研究は國語學中
の史的に屬するもので、その研究問題・研
究法及び研究資料は、別項「國語學」を見よ。
又國語沿革の大事は、別項「國語」を見よ。

【國語史の時代區分】古く富士谷成章は、和歌
變遷の時期を六つに分ち、これを六運と名づ
けた(脚結抄)。即ち(一)上つ世。光仁天皇まで。
(二)中昔。花山天皇まで。(三)中頃。後白河
天皇まで。(四)近昔。四條天皇まで。(五)を
とつ世。後花園天皇まで。(六)今の世。後花
園天皇以後。これは言語の變遷をも考慮した
ものと思はれるが、必ずしも言語變遷の時
代分ではない。物集高見博士は、(一)應神天
皇の時。漢字渡來して漢語が國語中に入り、
上世の風一變し、(二)欽明天皇の時。佛教渡
來して梵語などが入り、推古帝以後。漢字が
盛んに用ひられて上世の風二變し、(三)延暦
(相武)以後片假名が出来、音便が起り、(四)天
長(淳和)の頃。空海が伊呂波歌を作り(この頃
古の五十音が四十七音となつた)、和文が起つ
て漢語を和語化した。(五)後白河天皇の保元

以後、田舎武士が都に來て、言語が俗化し、
假名遣も亂れた。(六)鎌倉室町以後は、定家
假名遣が行はれ、口語も亂れて行き、文語と
相違が生ずるにいたつた(風藝志林第七十二冊所
載「言語變遷正訛辨」)。かくの如く六變を認め
たが、古代は委しく、中世以後は疎であつて權
衡がとれない。アストン(別項)は、(一)發達の
時期。奈良朝終まで。(二)成熟の時期。平安
朝終まで。(三)衰替の時期。鎌倉時代以後。
以上三期とし、チャムバレン(別項)は、(一)上代
(Archaic)奈良朝終まで。(二)古代(Classic)
保元平治まで。(三)近世(Modern)保元平治
以後。以上三期とし、ノック(Philip Noack)
は、(一)應神天皇まで。文字のなかつた時代。
(二)推古天皇まで。漢文が公用語となつた時
代。(三)醍醐天皇まで。漢語が跋扈した時代。
(四)後深草天皇まで。漢語の漸次日本化した
時代。(五)元祿以後。定家假名遣を用ひた時
代。(六)元祿以後。日本語改革時代。以上六
つにした。大槻文彦博士は、口語の變遷を、平
安朝、鎌倉、南北朝、室町、江戸と分ち(口語法
別記)、安藤正次氏は(一)國語形成の時代(古
代、奈良朝)(二)國語發達の時代(平安朝)。(三)
國語混亂の時代(鎌倉、南北朝、室町)。(四)國語
分化の時代(江戸時代)。(五)國語統一の時代
(明治以後)の五期とし、(一)を崇神朝と大化改
新によつて、三期(暗黒時代・混成時代・成熟
時代)に、(二)を天曆以前と天曆以後とに、
(四)を享保以前と以後とに分ち(國語學概
説・古代國語の研究)。吉澤義則氏も、安藤氏と同
じく五期に分ち、上古・中古・近古・近世・現代
とした(國語史概説)。京畿地方の口語の變遷を
主として考へれば、奈良朝と平安朝との間、
及び室町時代と江戸時代との間に、それとく

時代を劃すべきことは異論はあるまい。平安
朝から室町時代の終に至る間に於ては、以前
は保元平治の頃を以て時代を劃するものが多
く、近來は平安朝の終を以て劃するものが多
いが、山田孝雄氏も論ぜる如く(奈良朝文法史
序論)、鎌倉時代の言語の特徴は、既に院政時
代より現はれてゐるものが少なくないから、院
政時代以後を鎌倉時代と共に取扱ふのが妥當
と認められる。院政時代以後室町時代の終ま
での間では、或は吉野朝時代を以て一期を劃
すべきかと思ふが、その前後の時期に於ける
言語の状態がまだ明かでない故、つづけてお
く方が穩當であらう。しかし今後研究が進む
に隨つて、或はこの間に重要な界線が見出さ
れるかも知れない。別項「國語」の中「國語の沿革」
參照)

はれない。明治以後、西洋の新しい言語學が
輸入せらるゝに及び、はじめに國語學の全範
圍が明かになり、各時代に互る歴史的研究の
必要が認めらるゝに至り、各時代の根本資料
の探査、これによる各時代の言語狀態の調査
研究が漸く行はるゝに至り、假名字體、假名
遣等に關する大矢透氏の研究、奈良朝・平安朝
の語法及び延慶本「平家物語」の語法に關する
山田孝雄氏の調査、室町時代の抄物の言語の
語法に關する湯澤幸吉郎氏の調査、吉澤義則
氏の漢文の古訓點に關する諸研究、新村出氏
の國語音聲の沿革や東國方言の歴史、種々の
單語の語源に關する諸研究などが發表せられ
たが、まだまだ各時代の資料を精査して、補
はなければならぬものが甚だ多く、眞の國
語史の出現は、なほ多くの部分的基礎的研究
の出來た後に俟たなければならぬ。

國語整理

【標準語】を見よ。【橋本】

國語調査事業

【解説】國
語を調査し研究するのは、明治以前は學問研
究のために個人が行ふばかりであつたが、明
治以來、國語國字問題が論ぜられるに及び、
同問題解決のため、公私の團體又は國家の事
業として、國語の調査研究が行はるゝに至つ
た。その主なるものは次の通りである。

【國語調査の端緒】明治二年五月前島密は「國
文施行之儀ニ付建議」を集議院に提出し、廣く
國內に選んで和漢洋の各學者を召し、國文の
體を定め、國語國文法を撰し、國語字引を編
纂するの必要を唱へた。その頃文部省の編輯
寮に於て、横山由清・那珂通高等は「語彙」と
いふ國語辭典を編纂し、一時中絶したのを、
八年二月から大槻文彦その専任となり、十五

十二月に、ローマ字説の人々は「羅馬字會」を創立した（羅馬字説）参照。この會がローマ字の發達のため研究調査した重要事項は、ローマ字綴の整理統一即ち爾來國內國外を通じて廣まつた標準ローマ字綴方を定めた事、

二、小川尙義、猪狩幸之助、新村出、八杉貞利等の人が言語學會を起し、三十三年二月から「言語學雜誌」を發行した。
【國字改良部言文一致會】明治三十二年十月帝國教育會の内に國字改良部が設けられ、前

菊池文相の時に國語調査委員會設置の豫算が帝國議會を通過し、三月二十四日勅令を以て同會の官制が發布され、その中に、同會は文部大臣の監督に屬し國語に關する事項を調査する事、同會は委員長一人と委員十五人以上

右の調査方針によつて研究調査を進め、大正二年六月、同會の廢止までに同會に於て編纂したものは左の如くである。
○國語國字改良論說年表（一冊）○片假名平假名讀ミ書キノ難易ニ關スル實驗報告（一冊）○方言採集

簿（一冊）○送假名法（一冊）○現行普通文法改定案調査報告之一（一冊）○音韻調査報告書（二冊）音韻分布圖（二十九枚）○口語法調査報告書（二冊）口語法分布圖（三十七枚）○漢字要覽（一冊）○假名遣考（一冊）○疑問假名遣（二冊）○假名遣及假名字體沿革史料（一冊）○假名源流考、假名源流考讀本寫真（二冊）○周代古音考、周代古音考韻徵（二冊）○國語資料平家物語につきての研究（三冊）○口語法簡文に關する調査報告（一冊）○口語法（一冊）○口語法別記（一冊）○實用東京語法（一冊）

【臨時假名遣調査委員會】明治三十三年八月、樺山文相の時に文部省令を以て小學校令施行規則が新たに定められ、その中に字音假名遣改定を規定して小學校に實施されたが、これに對して世論が起り、三十八年三月久保田文相の時に、文部省は國語假名遣改定案と字音假名遣改修案とを作製して、高等教育會議や國語調査委員會などに諮問すると、世論は更にやかましくなり、四十一年五月二十五日牧野文部大臣の時、勅令を以て臨時假名遣調査委員會官制が發布され、その中に、同會は文部大臣の監督に屬し、國語と字音との假名遣に關する事項を調査する事、同會は委員長一人と委員二十五人以上とを以て組織する事等を定められた。そして委員長を男爵菊池大麓に、委員を左の人々に任じた。

會我祐準、松平正直、淺田德則、小牧昌業、山川健次郎、岡部長職、矢野文雄、森林太郎、岡野敬次郎、小松謙次郎、井上哲次郎、上田萬年、伊知地彦次郎、伊澤修二、肥塚龍、徳富猪一郎、横井時雄、芳賀矢一、松村茂助、島田三郎、藤岡好古、大槻文彦、江原素六、鎌田榮吉、三宅雄二郎

なほ同會主事を渡部重之介に命じた。同會は數回會議したが、同年九月小松原文相の時に、小學校令施行規則の字音假名遣等の規定削除

の文部省令が發せられ、同省の態度が變つたので、同會は目的の調査を遂げるに至らないで、同年十二月廢止された。

【臨時國語調査會】大正二年行政整理の際に、國語調査委員會は廢止されたが、翌年教育調査會で教育年限問題が議された時に、年限短縮だけでは不徹底であるから内容の改善を考へねばならぬ。就いては國字國語を平易に學ばれるやうに改める事を調査して、國字國語の諸問題を解決するため、有力な國家的調査機關を設置するを要する旨を同會總裁加藤弘之から文部大臣に建議した。又東京、大阪の新聞十七社の代表者は、十年三月、新聞事業經營のため、國民教育並びに國民文化普及のため、漢字制限の必要を全國の新聞社に協議した。さて右の建議の如き大組織ではないが、その精神によつて、同年中樞文相の時に五月二十五日勅令を以て臨時國語調査會官制が發布され、同會は文部大臣の監督に屬し、普通

に使用する國語に關する事項を調査する事、同會は會長一人と委員三十五人以上を以て組織する事等を定められた。而して會長を森林太郎に、委員を左の人々に任じた。
上田萬年、芳賀矢一、服部宇之吉、赤司隆一郎、幣原坦、湯原元一、藤岡勝二、池田敬八、徳富猪一郎、本山彦一、保科孝一、山本厚藏、厨川辰夫、秋田清、大島正徳、有島武郎、松下專吉、前田捨松、巖谷季雄、石川幹明、伊原敏郎、長谷川誠也、千葉龜雄、高田知一郎、筒井喜平、野村宗十郎、倉辻明義、柴田欽次郎、増田義一、松下勇三郎、阿部次郎、木村政次郎、島崎春樹、新渡真吉、杉村廣太郎

森會長は十一年六月逝去し、翌月上田萬年會長に任せられ、その後委員にも異動があつた。同會は第一に常用漢字の整理、第二に假

名遣の整理、第三に文體の整理を以て當面の調査事業とした。十二年五月に至つて常用漢字一千九百六十二字と、そのうちの略字百五十四字とを決定して公表した。それから國語假名遣と字音假名遣との調査を進め、標準語の發音によつて改定する方針を取り、十三年十二月に至つて、假名遣改定案を決定して發表した。なほ常用漢字の略字百五十四字を含めて字體を調査し、十四年十一月に至つて、一千二十字ほどの字體整理案を決定して發表した。その後、常用漢字を使用するについて、漢字、又は假名で書く熟語などが調査されてゐる。

【國語のため】語學書 二冊【著者】上田萬年【刊行】第一は明治二十八年六月、第二は同三十六年六月刊。【内容】國語學に關する論文集である。第一には、國語と國家と、國語研究に就きて、標準語に就きて、教育上國語教育者の拋棄し居る大要點、言語學者としての新井白石、普通人名詞に就きて、歐洲諸國に於ける綴字改良論、清濁音、新國字論、今後の國語學、本居春庭傳、初等教育に於ける國語教授に就きて、國語會議に就きて、の十三篇及び附録として、日本大辭書編纂に就きて、を收めてゐる。第二は、内地雜居後に於ける語學問題、促音考、假字名稱考、形容詞考、P音考、本居宣長翁の百年祭にあたりて、國民教育と國語教育、實業と文學、國語に就きて日本國民の執るべき三大方針、洒落本及び山東京傳に關する二三の考、言語上の變化を論じて國語教授の事に及ぶ、日本語研究法、歐米人の日本語學に對する事跡の一二、日本語中の人代名詞に就きて等を收めてゐる。

【價值】本書は論文集であるから、その價值は一言にしては盡し難いが、内地雜居後に於ける語學問題、歐洲諸國に於ける綴字改良論、新國字論、及び國語教育に關する論文は、當時の學界の動きを見る上に興味あるものである。又、言語學者としての新井白石、本居宣長の百年祭にあたりて、或は促音考、形容詞考、P音考等は學術的に勝れたものである。就中、P音考は、波行の古音及びその變化の跡を明かにしたもので、國語聲音史の研究に益すること大なるものである。

【國語問題】「解説」一國內の言語文字を如何にすべきかの問題。そのうち、言語に關するものを國語問題とし、文字に關するものを國字問題と名づけて相對せしめる事がある。一の國家内に二つ以上の國語が行はれ、又は、一の國語中に種々の言語・文字・寫音法等が行はれて歸一する所なく、社會生活上の不便、不統一を來した時に起る問題であつて、これに處すべき種々の方策の考案及び實行を喚び起すものである。この問題には二種ある。一は、政治的國語問題であつて、何を以てその國公認の言語、又は文字とし、これを裁判・軍隊・教育等に用ひるべきものとするかといふやうな、國家の政治的方面に關するもので、これは主として一國內に二種以上の國語が行はれてゐる場合に起るものである。一は、人文的國語問題であつて、標準語の制定、文字の改良、綴字法又は假名遣の改定などの如く、國民文化の消長には影響を及ぼすが、政治問題には關係のないものである。これは主として同一の國語を用ひる人々の間での問題である。
【政治的國語問題】主として一國內の異民族

の間に起るもので、民族間に争闘を生じ往々重大なる政治問題を惹起する。戦前のオーストリア・ハンガリー、スウェーデンなどに於て、その例を見る。又他國に領有せられた場合には、原則として治者は自己の國語を被治者に用ひさせようとする結果、種々の問題が起る。ポーランド・英領印度など、その例である。その問題の主なるものは、

〔國家語〕異民族の割據する國では、國家語をいかにすべきかが問題となる。世界戦前のオーストリア・ハンガリーでは、皇帝はドイツ語を以て國家語としようとしたが、いつも他民族が反對して重大なる政治問題を惹起し、遂に一八六七年十二月、憲法上にオーストリア・ハンガリー國內の各民族は、各自の國語を自由に使用し得る事を規定するに至つたが、その後種々のむづかしい問題が生じて解決の困難を極めた。スウェーデンでは獨・佛・伊の三國語を、ベルギーではフラマン語とワロン語とを用ひる自由が憲法上に規定されてゐる。戦前の獨逸では、ドイツ語を國家語とし、ポーランド人もフランス人も、固有の言語を用ひる事を許されなかつた。

〔公用語〕國家語がきまれば、自ら公用語も定まる。戦前のドイツではポーランド人やフランス人も、公生活では一切ドイツ語を用ひるべきで、自己の國語で届出をしても受理されない。手紙も政府の手でドイツ語に譯して配達するといふのであつた。ベルギーは、政府から出す文書は一切フラマン語とワロン語を以て並記する。獨・佛・伊三國語を認むるスウェーデンでは、政府の文書は獨・佛兩國語を以て記し、議會の演説は佛語は獨語に、獨語は佛語に譯する。但し伊語の場合には譯をつけな

い。〔標準語の制定〕これは我が國に於て最も重大な問題である。現在の如く、全國に無數の方言が分布し、各地に固有の言語が存在するやうでは、國民教育の健全なる進展を促すことが困難であるから、これを速かに統一することが刻下の一大急務である。然らば、いかにしてこれを統一するかといふと、現在感化力(Culting power)の最も強大な東京語を基礎として、發音・用語及び文法を整理し、標準語と標準語文法とを編成すればよいのである。標準語制定の方法には種々あるが、一國

同國內でドイツ語の行はれる州は十七、佛語は四州、伊語は一州で、各々その地方語を公生活に用ひるが、しかし、その他の兩國語で書いた肩書なども無論有効である。戦前のオーストリア・ハンガリーでは、異民族の割據してゐる地方は、多數者の言語を標準とすることになつてゐたが、その多數の割合が、半數に近い數であることがあり、又人口が絶えず動いてゐるために比率が一定せず、ためにその地方の公用語を定めるに、政治上むづかしい問題を生ずる事が少くなかつた。

〔裁判語〕裁判に用ひる言語について、争ひ多かつたのは、戦前のオーストリア・ハンガリーである。ポヘミアでは獨人とチェコ民族とが混在し、何れが多數であるかは部落によつて違つてゐるが、裁判には、多數を占める言語によつて審問される慣例となつてゐるが、少數者は違つた言語で審問を受けるのが不利益であるので、種々の方便を廻らし、ために、事件の審問に入らぬ前に、審問の用語の問題で争ふ場合が多かつた。

〔軍隊語〕この中に、軍隊命令語、軍隊公用語、軍隊教育語の三種を含む。これが政治上重大な問題になつてゐたのは、戦前のオーストリア・ハンガリーであつた。同國では異民族多く、ために、民族が違ひ、隨つて言語の違つた大隊や中隊が、同じ聯隊や大隊中に混在することが多かつたが、その場合、聯隊長や大隊長が命令に用ひる言語が問題となり、憲法が各民族の言語の自由を認めてゐるから、軍隊でも、各々その民族の言語を用ひるべしと主張し、軍隊語の問題が政治化することが多かつた。皇帝は、軍隊で各民族の言語を用ひる事は、已むを得ないけれども、命令語だけは、

ドイツ語に統一したいといふので、これだけは辛うじて一致してゐた。又同國の海軍の水兵には、イタリー語を話すものと、ユーゴスラウ語を話すものとあつて、これを教育するにはそれぞれの言語により、號令はすべてドイツ語を用ひた。陸軍も亦同様であつた。

〔教育語〕政治的國語問題として、最も重大で解決に困難なものである。何となれば、治者は自己の言語で被治者を教育してこれを同化せしめんとし、被治者は、祖先傳來の言語を以て自己の子弟を教育せんとするが、新附の民に固有の言語を自由に用ひる事を許せば、いつまでも民族固有の性情と精神を支持して治者に同化せず、統治上不便であるから、これを許さざらんとし、この問題について、兩者死力をつくして争ふ事が少くない。たとへば、戦前の獨逸ポーランドに於て、ドイツ政府は滿六歳に達したポーランド人の子弟を、ドイツ公立小學校に收容して、一切ドイツ語による教育を施し、絶対にポーランド語の使用を禁止したの對して、ポーランド人は生命財産をも投げ出して反抗し續けた。ベルギーでは、二重國語の政策をとつてゐるにかゝらず、大學に於ける講義はこれまでフランス語を用ひたのであるが、ゲント大學に於てフラマン文學の講座だけは、せめてフラマン語で講義したいといふことが、政治上重大な問題となつてゐる。英國の支配に屬する南阿聯邦は、その移住民の大部分がオランダの百姓(ポリア)であるが、聯邦政府は、公用語も教育語もすべて英語とされたので、移住民はこれに反對して、その子弟をオランダ語によつて教育しようとし、遂にポリア戦争まで惹起したのである。戦後、政府は幾分譲歩し

たが、移住民と政府の間には、教育語問題の争が絶えない。戦前のオーストリア・ハンガリーでは、教育語問題も政治的に重大化してゐた。町村が二民族から成立つ場合に、その地方の教育語は多數者の言語による慣例で、少數者が、獨立に一學校を組織し得る場合には、この固有の言語で教育する事を許した。そのため、少數者の子弟の數がただ一二學級に止まる場合には、多數者の言語によつて教育される事となるので、少數者はこれを苦痛とし、あらゆる手段により自己の言語を以て教育せんとして争つた。

右の外、國字問題で政治的色彩を帯びたものは、トルコ領アルバニアに存在した。こゝではトルコ文字、即ちアラビア文字を用ひなければならなかつたのであるが、ラテン民族なるアルバニア人は、アラビア文字を嫌つて、ギリシヤ文字・ラテン文字、或は新に創製したアルバニア文字を用ひようとして屢々叛亂を起し、トルコ政府の威力の衰へるに従つて、漸次彼等の希望を達しつゝあつたのである。尤も政治的國字問題はアルバニアの外にはないやうである。

〔人文的國語問題〕本問題はわが國における標準語の制定、標準文體の統一、國字の改良、假名遣の改定、文法の整理等の如きもので、その解決如何は國民の文化に至大の影響を及ぼすのは言ふまでもないが、政治的には何等の關係もないのである。即ちその解決の結果は、民族の權利義務、又は生命財産に少しも影響を及ぼすことがない。この點が政治的國語問題と異なるところである。現今我が國に於けるこの種の問題中、最も主要なるものを擧げる。

あるから、先年文部省では中古文法を以て絶對のものとして、これに現代文の慣習を差加へることを許すこととし、文法の許容に關する事項十六ヶ條を發表してゐる。要するに文法は時と共に變化發達するものであるから、時々これを整理しなければならぬ。もし變化發達の自然の勢に任せて置けば、現在我が國に於けるが如く、文語には文語法があり、口語には口語法があるといふやうになり、しかも文語法にしろ、口語法にしろ、又時代による變化發達は免れなないのである。故に、文法

から出す文書は一切フラーマン語とワロン語を以て並記する。獨・佛・伊三國語を認むるスウィスでは、政府の文書は獨・佛兩國語を以て記し、議會の演説は佛語に、獨語は佛語に譯する。但し伊語の場合には譯をつけない。

民族の言語の自由を認めてゐるから、軍隊でも、各々その民族の言語を用ひるべしと主張し、軍隊語の問題が政治化することが多かつた。皇帝は、軍隊で各民族の言語を用ひる事は、已むを得ないけれども、命令語だけは、

の百姓(ボリア)であるが、聯邦政府は、公用語も教育語もすべて英語とされたので、移住民はこれに反對して、その子弟をオランダ語によつて教育しようとし、遂にボリア戦争まで惹起したのである。戦後、政府は幾分譲歩し

の關係もないのである。自らの解決の結果は、民族の權利義務、又は生命財産に少しも影響を及ぼすことがない。この點が政治的國語問題と異なるところである。現今我が國に於けるこの種の問題中、最も主要なるものを擧げる。

〔標準語の制定〕 これは我が國に於て最も重大な問題である。現在の如く、全國に無數の方言が分布し、各地に固有の言語が存在するやうでは、國民教育の健全なる進展を促すことが困難であるから、これを速かに統一することが刻下の一大急務である。然らば、いかにしてこれを統一するかといふと、現在感化力(Culting power)の最も強大な東京語を基礎として、發音・用語及び文法を整理し、標準語辭書と標準語文法とを編成すればよいのである。標準語制定の方法には種々あるが、一國文化の中心であり、國民文學の基礎になつてゐる東京の言語を基礎として、これに整理を加へるのが最上の方策である。イギリスではロンドン語、フランスではセイヌ縣を中心としたパリ語がその國の標準になつてゐる。ドイツでは劇場語を標準としてゐるが、それにしてベルリン語が他に比して優勢な感化力を有してゐる。(標準語参照)

ば、いかにこれを統一すべきかが問題になるのである。しかし國語自然の發達から見ても、口語文體に統一すべきは理の當然であらう。ただ口語文體に統一するとしても、話す言葉と書く言葉とが自然に相分れることは、いづれの國語について見ても同様である。英・佛・獨等の國語は、言文相一致してゐるが、併しやはり、話す言葉と書く言葉とは相分れてゐる。ただ我が國に於ける口語と文語の如く甚だしい文法上の相違が存在しないところが違ふのである。故に、我が國に於ても、將來口語を以て文體を統一したところで、やはり話す言葉と書く言葉とが、自然に相分れることは認めなければならぬ。

の上古に於けるものは皆表音的のもので、歴史的假名遣は後世に至り、發音と文字とがその一致を失つたために生じたものである。故に、正字法の原理から見れば、歴史的假名遣は確かに變態である。併し變態であるにしても、久しい間、國民文學がこの假名遣によつて來てゐるために、文學と歴史的假名遣とがかた結びつゝやうになつたので、この假名遣を捨て、表音的にこれを改定するの力強く反對する人がある。しかも、ひとり我が國に於てばかりでなく、歐米に於ても同様である。けれども歐米に於ては、昔から綴字改良の運動が起つて、すでに發音通りにこれを改めた國々は、イタリー、スペイン、ドイツ、ノールウェー等であり、フランスやロシアは徐ろにこれを改定してゐる。英米兩國では早くから、綴字改良の運動を起してゐるに拘らず、未だその目的を達するに至らない。尤も英米に於ても、幾分づつ發音的に改まつて來てゐることは事實である。以上の如く、歐米に於ては綴字改良運動が發音主義に向つて進んで來てゐるが、かくあるべきは理の當然で、我が國に於ても、假名遣は早晚必ずや發音主義によつて整理せられるべき時代が來ると信ずる。(假名遣参照)

あるから、先年文部省では中古文法を以て絶對のものとして、これに現代文の慣習を差加へることを許すこととし、文法の許容に關する事項十六ヶ條を發表してゐる。要するに文法は時と共に變化發達するものであるから、時々これを整理しなければならぬ。もし變化發達の自然の勢に任せて置けば、現在我が國に於けるが如く、文語には文語法があり、口語には口語法があるといふやうになり、しかも文語法にしろ、口語法にしろ、又時代による變化發達は免れないのである。故に、文法は假名遣と同じやうに、絶えず整理して行かなければならないが、フランスでは學士院が常に文法の變化發達を監視し、その然るべき時期に於て、これを整理してゐる。イギリスやドイツに於ける國文法も、やはり時代による變遷は免れないのであるから、文法の標準は時代によつて異なるのは言ふまでもない。然るに我が國では、これまで文法を特に整理するやうなことがなかつたが、國語の健全なる發達を促す上から見て、これに整理を加へることは最も緊要な事業である。(文法参照)

〔標準文體の統一〕 現在我が國に各種の文體が並び行はれてゐるから、これを統一しようといふのがその目的である。即ち現在我が國に行はれてゐる文體を見るに、口語文體と文語文體が相對立し、その文語文體に、擬古文體・漢文體・漢文直譯體・洋文直譯體・普通文體・候文體及び韻文體が存在して統一がないために、國民教育と國民文學の健全なる發達を妨げてゐることが少くないのみならず、延いて社會生活上甚だしい不便を見つゝあるのである。ことに國語自然の變遷に委して、古來未だ一たびもこれに整理を加へなかつたので、口語と文語とは文法上大の相違を存するやうになつた。故に、これを整理してその統一を圖ることが今日の急務であるが、然ら

〔國字の改良〕 我が國に於ける文字の組織及び用法は、世界にその例を見ないほど複雑を極めたものであるから、これを簡易なものに改めようといふのがその目的で、いはゆる國字改良運動なるものは、明治維新前後からあらはれて來た。これを簡易化するに就いては種々の意見があらはれてゐるが、その主なものは、漢字全廢論・漢字節減論・ローマ字專用論・假字專用論及び新國字論等である。漢字と假名を併用して以來、千有餘年の久しきに亙つてゐる今日、俄かにその組織を根本的に變改することは決して容易な業でない。すでに漢字を基礎として作られた漢語や學術上の術語も少くないのであるから、いづれの方案によつて、この問題を解決すべきか、深く考究しなければならぬ。(國字問題参照)

〔文法の整理〕 文法は言語の變遷に伴ふもので、奈良朝には奈良朝の文法があり、平安朝には平安朝の文法があり、鎌倉時代には鎌倉時代の文法がある。然らば現代には現代の文法があつて然るべきはずであるのに、これまで我が國では平安朝の文法を以て日本の文語の標準とし、これに背くものを以て一切誤りと見做して、これを正しつゝあつたのである。かくの如きは、言語發達の理法に背くもので

極彩色娘扇 浄瑠璃 十段
世話物【作者】二歩堂・三好松洛・近松半二・竹本三郎兵衛・北窓後一【名稱】十段目所作場の名題「娘扇節事」により、お夏・お品の舞姿をば、扇面の彩色に通じさせて、極彩色と

こくろ じくろ

綴つた。角書は中に現はれる二頭目の名をその儘「朝比奈藤兵衛」と記す。【興行】寶曆十年七月二十一日初日、竹本座上演。人形遣は桐竹門三郎、同助三郎、竹田貫藏、吉田三郎兵衛等出勤。後、屢々興行されたが、八段目が天王寺の段と増井の段とに分けられ、新靱の段を加へた形式が多く用ひられた。【題材】延享三年、大阪新靱で死んだ刺客朝比奈宗兵衛の逸事と新清水増井の邊で盲人が殺されてゐたといふ巷説等を、並木正三作「大坂神事揃」(別項)によつて組立て、これに「お夏清十郎」(別項)を配したものである。

【梗概】【初段】(高砂館の段) 高砂の領主別所殿の妹尾上姫は、執權三木勝之進の弟と密通して、加古川家への嫁入を變へた事から、加古川家からは姫の首を求めて来た。姫の腰元朝菊が姫の身替りに立つ所を使者志村隼人の情で事なきを得、朝菊は名をお夏と改めて里に下げられる。【二段】(姫路の段) 但馬屋では朝菊の父親九左衛門初め一家は娘の最期を信じて悲歎に暮れてゐる所へ、豫て朝菊に横戀慕の別所の家來節磨大九郎が、朝菊が無事な場合は嫁に貰ふと申込んで来た。併し無事に戻つたお夏は、手代清十郎と戀仲であつた。九左衛門は怒りの面に情の心を籠めて清十郎を放逐する。大九郎の弟九之丞がお夏を迎へに来たが、勝之進が才覚で往なす。清十郎はお夏と間違へて、他の駕籠を襲つたために捕はれる。【三段】(加古川の段) 閉居中の志村隼人は、昨夜妻の駕籠を襲つた者が、若殿に傷をつけた件で、幼い頃勤當した伴清十郎と知れたので、更に逐ひ立てようとしたが、後添の計らひで勘當を許す事となる。隼人は清十郎を奴八助に託して、切腹を決意した。

【四段】(心齋橋の段) お夏は、偶然に呉服屋の大松屋に勤める清十郎に會へたが、清十郎を戀するお品といふ浪人の娘があつた。大九郎は悪手代と謀つて清十郎に盗人の汚名をさせたが、刺客喧嘩屋五郎右衛門が出てその裏をかいた。五郎右衛門とは、以前の八助である。お品も清十郎を救はうとして、危く悪手代等に捕はれる所を、朝比奈藤兵衛に助けられた。お夏は、終に清十郎を連れ出した。【道行戀の四つ街】大松屋を逐はれた悪手代二人のおどけた道行と、お夏清十郎の道行。【五段】(片町の段) お夏清十郎は、悪手代共に発見されたが、お品の父林三太夫に救はれる。お品は清十郎のために五十兩で身を賣つた。

【六段】(新靱の段) 朝比奈藤兵衛は、主人の娘お品を身請けせねばならず、又お夏を清十郎に添はさうとする五郎右衛門との達引もあり、金の才覚に腐心する。藤兵衛の繼母妙林は久し振りに訪ねて来た。實子の盲兵助に金の工面を頼む。兵助の歸つた跡に戻つた藤兵衛は、お夏と清十郎が今宵祝言と聞き、慌てゝ驅け出した。【七段】(難波橋の段) 藤兵衛と五郎右衛門が達引から喧嘩が起きたが、藤兵衛の女房が仲裁して事なきを得た。お夏と清十郎とは、お品への義理を立てて身を投げようとする時、丸之丞等に抑へられたのを、藤兵衛の伴が来て護つてくれた。【八段】(天王寺の段) 兵助の女房は良人の難儀を見兼ね、金を得るために、豫て言ひ寄る大松屋の悪手代に身を委せんと覺悟し、無筆の悲しさに幼い伴筆松に書置を覚え込ませ、故意に良人に愛想づかしを言つて家を去つた。後で、筆松の口から、女房の眞意を諷つた兵助は、女房の兄眼兵衛が悪心を醸して差出した五十兩を懐に、伴を杖に驅けて行く。(増井の段) 雨中を急いだため癩に苦しむ兵助は、伴を薬取りに返した後で、通りかゝつた藤兵衛に介抱されたが、その時面識のない藤兵衛は、兵助に懐中の金を強請する。兵助も事情を打明けて断つたが、聾の藤兵衛は、無慙にも兵助を殺してこれを奪つた。が、同時に妙林の手紙を見て吃驚した。その時、落雷で藤兵衛の聾が癒つた。來掛つた悪手代は、藤兵衛の手に殺される。眼兵衛や筆松が駆けつける。だんまり模様。【九段】(老松町の段) 藤兵衛から預つたその伴が、丸之丞を殺したために死罪に行はれると聞き、五郎右衛門はわが子を身替りに立てようとしたが、藤兵衛はこれを知つて、假代官となつて急場を救ふ。そこで、五郎右衛門は藤兵衛に代つて兵助殺しを自訴しようとして、勝之進の情で許される。【十段】(室の津の段) 室の明神の祭禮で賑はふ。藤兵衛の伴が、大九郎等のために今や斬られようとする時、勝之進が生きてゐた丸之丞を連れて現はれ、悪人等を懲らした。又勝之進の執りなして加古川家に歸參の叶つた清十郎も現れた。【娘婿ふし事】 お夏もお品も、共に清十郎の女房と決まつた悦びに、別所・加古川兩家を祝して、白拍子姿で道成寺を舞ふ。

【解説】所謂男達狂言に屬するので、義理の葛藤と意地の抗争とが、脚色の主題になつてゐる。そのため、達引の頓滯が免れず、老松町の段の如きは、この種の弊も發見せられる。但し達引が常に戀愛や人情に關係してゐる所は、全曲に對して十分の潤ひを注いだと見られる。天王寺の段を最後とした盲兵助と聾藤兵衛との交渉は、徒らな滑稽に墮させないで成功した名脚色である。數人の俠客を働かす

懷に、伴を杖に驅けて行く。(増井の段) 雨中を急いだため癩に苦しむ兵助は、伴を薬取りに返した後で、通りかゝつた藤兵衛に介抱されたが、その時面識のない藤兵衛は、兵助に懐中の金を強請する。兵助も事情を打明けて断つたが、聾の藤兵衛は、無慙にも兵助を殺してこれを奪つた。が、同時に妙林の手紙を見て吃驚した。その時、落雷で藤兵衛の聾が癒つた。來掛つた悪手代は、藤兵衛の手に殺される。眼兵衛や筆松が駆けつける。だんまり模様。【九段】(老松町の段) 藤兵衛から預つたその伴が、丸之丞を殺したために死罪に行はれると聞き、五郎右衛門はわが子を身替りに立てようとしたが、藤兵衛はこれを知つて、假代官となつて急場を救ふ。そこで、五郎右衛門は藤兵衛に代つて兵助殺しを自訴しようとして、勝之進の情で許される。【十段】(室の津の段) 室の明神の祭禮で賑はふ。藤兵衛の伴が、大九郎等のために今や斬られようとする時、勝之進が生きてゐた丸之丞を連れて現はれ、悪人等を懲らした。又勝之進の執りなして加古川家に歸參の叶つた清十郎も現れた。【娘婿ふし事】 お夏もお品も、共に清十郎の女房と決まつた悦びに、別所・加古川兩家を祝して、白拍子姿で道成寺を舞ふ。

事や、無筆の女房の點出や、殺し場の背景に祭禮を用ひた手法等は、當時の流行であつた。お夏清十郎の脚色は直接的でない。道成寺の舞は歌舞伎芝居の影響と見ていい。盲兵助の件と道行の部分とは、歌舞伎にも直接觀案されて、現在までも上演されてゐる。

【参考】歌舞伎細見 飯塚友一郎 ○上方狂言の「盲兵助」石川松太郎(歌舞伎昭和三ノ七(守隨))
【英】 an international auxiliary language
【獨】 eine internationale Hilssprache
【佛】 une langue auxiliaire internationale
【解説】 最も一般的にいへば、二つの別々の國語に屬する人が、相互に談話せんとする場合に、相手の國語によつてするのでなく、第三の別な言語を用ふる時は、その第三の言語が國際補助語である。多くの國語に屬する人が、同一の補助語を使へば、その國際性は廣くなる。かゝる國際補助語は三種に分つ事が出来る。(一)全く新しく作つた言語。これは言ふべくして行ひ難いものである。(二)既に存在する國語の一つを採るもの。今日英語がこの國際補助性を可なりの程度まで有してゐる。日本人とドイツ人と支那人とが英語で話し合ふ如きは、その一つの場合である。又西洋の世の中には、ラテン語が歐羅巴に於て國際補助語の用をなした。この方法はラテン語の如き學習に多大の困難を伴ふ事、又は英語・佛語等或る一國語を採る時、その國人のみ有利の位置を占めるといふ不公平を伴ふこと等の缺點がある。(三)既に存在する國語に材料を採り、これに或る程度まで人工を加へたもの。この類に屬するものは昔から非常に澤山工夫されてゐる。實際若し巧妙な工夫を具へた人ならば、

三上參次博士の説は、目的論としては假名專用、方法論としては漢字制限の手段をも採る説である。又太陽(六ノ六)に載せた三宅雄二郎博士の説は、目的論としてはローマ字を探り、方法論として漢字節減の手段を探る説である。又讀賣新聞(明治三三、三ノ一九)に載せた後藤牧太氏の説は、目的論としてはローマ字を探り、方法論としては先づ漢字節減から假名に移り、終りにローマ字に達するといふ説である。さて國字改良の目的論は、漢字節減説と漢字廢止説とに分けられる。前者は漢

何人でもかゝる言語を造つて見る自由を有するが故に、今日でも新工夫を發表する人が絶えない。そのうち比較的有名なのは(一)ヴォラジューク(Volapük)。獨逸人シュライエール(Johann Martin Schleyer)が一八八〇年(明治十三年)に發表したものである。一時盛んに人々が學んだが、間もなく衰へて今日では全く使ふ人が無き。(二)エスペラント(Espéranto)。露西亞のヴァルジャール・ヴァーの人ザイメンホフ(Louis Lazarus Zamenhof)が同一八八七年(明治二十年)に發表したものである。これはインドヨーロッパ

田口卯吉編修。經濟雜誌社發行。正篇十七冊、續篇十五冊より成り、正篇は明治三十年より三十四年の間、續篇は同三十五年より三十七年の間に出版された。新訂版は舊版に於て校合の任に當つた黒板勝美博士編修。吉川弘文館發行。全六十冊より成り昭和四年八月その第一冊を刊行した。收載するところの書物は舊版にあつては四十部、新訂版に於ては新に十七部を加へて全五十七部、何れも國史の大綱を明かにすべき最も確實なる史書、法令物語等である。その書目の精選は、校訂の嚴密

何人でもかゝる言語を造つて見る自由を有するが故に、今日でも新工夫を發表する人が絶えない。そのうち比較的有名なのは(一)ヴォラジューク(Volapük)。獨逸人シュライエール(Johann Martin Schleyer)が一八八〇年(明治十三年)に發表したものである。一時盛んに人々が學んだが、間もなく衰へて今日では全く使ふ人が無き。(二)エスペラント(Espéranto)。露西亞のヴァルジャール・ヴァーの人ザイメンホフ(Louis Lazarus Zamenhof)が同一八八七年(明治二十年)に發表したものである。これはインドヨーロッパ

○國字問題(現代の國語後編)日下部重太郎○國字問題十講加茂正一○國字問題の研究菊澤孝生○國字國語問題文獻目錄平岡伴一○現代國語精説(日下部重太郎) [目下部]
【著者】佐村八郎【成立・刊行】本書は初め明治三十年十一月に分冊第一巻を出版、以後五十音順に従つて毎月逐次に刊行、三十三年一月に至つて完結、翌二月にはこれを合せて一冊として市場に出たが、解題書数は上古以

に捕はれる(三) (加古川の段) 閉居中の志村軍人は、昨夜妻の駕籠を襲つた者が、若殿に傷をつけた件で、幼い頃勤奮した伴清十郎と知れたので、更に逐ひ立てようとしたが、後添の計らひで勘當を許す事となる。軍人は清十郎を奴八助に託して、切腹を決意した。

金を得るために、豫て言ひ寄る大松屋の悪手代に身を委せんと覺悟し、無筆の悲しさに幼い伴筆松に書置を覚え込ませ、故意に良人の愛想つかしを言つて家を去つた。後で、筆松の口から、女房の眞意を諷つた兵助は、女房の兇眼兵衛が悪心を醸して差出した五十兩を

の段の如きは、この種の弊も發見せられる。但し達引が常に戀愛や人情に關係してゐる所は、全曲に對して十分の潤ひを注いだと見られる。天王寺の段を最後とした盲兵助と筆松兵衛との交渉は、徒らな滑稽に墮させないで成功した名脚色である。數人の俠客を働かす

一國語を探る時、その國人のみ有利の位置を占めるといふ不公平を伴ふこと等の缺點がある。(三)既に存在する國語に材料を探り、これに或る程度まで人工を加へたもの。この類に屬するものは昔から非常に澤山工夫されてゐる。實際若し巧妙な工夫を具へた人ならば、

何人でもかゝる言語を造つて見る自由を有するが故に、今日でも新工夫を發表する人が絶えない。そのうち比較的有名なのは(一)ヴォラドニク(Volapük)。獨逸人シュライエール(Johann Martin Schleyer)が一八八〇年(明治十三年)に發表したものである。一時盛んに人々が學んだが、間もなく衰へて今日では全く使ふ人が無さ。(二)エスペラント(Espéranto)。露西亞のヴァルジャーヴァの人ザイメンホフ(Louis Lazarus Zamenhof)が同一八八七年(明治二十年)に發表したものである。これはインドヨーロッパ語族(別項)の文法範疇を基礎とし、該語族になるべく多く共通なる語根を材料とし、これに人工的の語形變化を新造して附加したものである。例へば名詞は皆oに終り、形容語はaに終り、副詞はeに終る。複数はjに終り、動詞の不定法はiに終り、現在形はas、過去形はis、未來形はosの語尾を附ける等。今日諸種の國際補助語の中、比較的成功的なものである。我が國にも種々のエスペラント學會又は研究團體がある。エスペラントより出でて、これに多少の改良を試みたものに、イド(Ido)、ノヴィアル(Novial)等があるが、まだエスペラントを凌駕することは出来な。

【参考】A. L. Guérard: A Short History of the International Language Movement, = L. Couturat et L. Leau: Histoire de la langue Universelle. 1907. = W. J. Clark: International Languages, past, present and future. 1907. = O. Jespersen: An International Language. 1928. 【神保】

【國史大系】(たそよ) 叢書 【解説】本叢書には舊版と新訂版との二種がある。舊版は

田口卯吉編修。經濟雜誌社發行。正篇十七冊、續篇十五冊より成り、正篇は明治三十年より三十四年の間、續篇は同三十五年より三十七年の間に出版された。新訂版は舊版に於て校合の任に當つた黒板勝美博士編修。吉川弘文館發行。全六十冊より成り昭和四年八月その第一冊を刊行した。收載するところの書物は舊版にあつては四十部、新訂版に於ては新に十七部を加へて全五十七部、何れも國史の大綱を明かにすべき最も確實なる史書・法令物語等である。その書目の精選は、校訂の嚴密と相俟つて、國史研究者必備の書物とせられ

【國字問題】(こくじ) 【解説】一般には一國內の文字を如何にすべきかの問題、我が國では、世間で普通用ひる文字に漢字と假名の二種があり、その用法も複雑で、學習に多くの時を要し、教育の効果を殺ぎ、社會生活上の不便少くないため、如何なる文字を以て社會一般に用ひるべきものと定めようかといふ問題であつて、國家の繁榮、國民の福利の増進を圖り、國語の發達、教育の完成、學問の進歩、文明の融合、民力の經濟、社會の救済、乃至は交通の便利等のためを思ふ大精神から流れ出た明治初年以來の、我が國民の一大思潮である。

【改良論】國字問題に種々の議論と主張がある。先づ國字論を改良論とその反對論とに二大別し、その改良論を目的論と方法論とに分けて見る。目的論とは、論者の目的とする將來の國字はかくあるべしといふ論であり、方法論とは、論者の目的とする將來の國字に到達する方法はかくあるべしといふ論である。例へば、讀賣新聞(明治三三、二二)に載せた

三上參次博士の説は、目的論としては假名専用、方法論としては漢字制限の手段をも採る説である。又太陽(六ノ六)に載せた三宅雄二郎博士の説は、目的論としてはローマ字を探り、方法論として漢字節減の手段を採る説である。又讀賣新聞(明治三三、三ノ一九)に載せた後藤牧太氏の説は、目的論としてはローマ字を探り、方法論としては先づ漢字節減から假名に移り、終りにローマ字に達するといふ説である。さて國字改良の目的論は、漢字節減説と漢字廢止説とに分けられる。前者は漢字を節減して消極的の國字改良を行はうとする説であり、後者は漢字を用ひない事に於ては同じであるが、改良の目的とする文字には假名説があり、ローマ字説があり、又新字説がある。

【反對論】次に國字改良論に對する反對論は、現状維持説と自然淘汰説とに分けられる。現状維持説は現在の如く漢字と假名とを併用して行けばよいといふ説である。自然淘汰説は現在の國字に満足するのではないが、わざと國字改良を行はなくても、放任して置けば自然に淘汰が行はれて、國民に都合のよい國字が定まるだらうといふ説で、「國字改良異見」の中に見える子爵金子堅太郎及び杉浦重剛の説の如きがそれである。國字問題の諸論説は以上の如く分類されるが、特に改良論の四大説、即ち「漢字節減説」と「假名説」と「ローマ字説」と「新字説」とについては、各別項にこれを述べる。

【参考】國語國語改良論說年表 國語調査委員會編 國語改良異見自治館編 國語改良論纂 堀江秀雄 國語問題論集(ローマ字ひろめ會編) 國語のため上田萬年 國語學精義保科孝一

○國字問題(現代の國語後編) 日下部重太郎 國字問題十講加後正一 國字問題の研究菊澤孝生 國語國語問題文獻目錄平岡伴一 現代國語精説 日下部重太郎 【日下部】

【著者】佐村八郎【成立・刊行】本書は初め明治三十年十一月に分冊第一巻を出版、以後五十音順に従つて毎月逐次に刊行、三十三年一月に至つて完結、翌二月にはこれを合せて一冊として市場に出でたが、解題書数は上古以來慶應三年に至る刊寫本一萬五千餘であつたのを、三十七年更に一萬餘巻を追加し、増訂國語解題として著者索引を附けて出版した。四十二年第三版を發行したが、關東大震災を機に、大正十五年縮刷版を刊行。上下二冊に分冊の上、巻尾に著者索引、圖書分類索引、字書索引の圖書目錄、及び濱野知三郎氏の編纂に成る叢書目錄を加へて出版した。【解説】第一版の凡例中に國語の外題に依つて玉石を判たんこと最も困難であり、國語を一讀してその内容を把握することも亦困難で、浩瀚なる國語に就いて、一々その内容の如何を熟知する事は、文運日進して爲すべき事業益々多い青年學徒に、徒に時間と努力を費さしめる所以で、これ等の不便を除くために解題書の止む能はざるは當然であると云つて、本書の存在理由を明かにしてゐる。簡明な筆で書籍の性質を盡くし、併せてその著者の傳記、著作書目を記してあるのは便利である。ただ小説・戯曲の類を殆ど顧みなかつたのは遺憾である。局部的に多少の難は免れぬが、現代の有する唯一最大の綜合的解題書としての地位は揺かすべくもない。

【土井】

國宣

【解説】御教書(別項)

式に據る國守の文書。主として鎌倉時代から南北朝にかけて行はれた。但し建武中興南北朝頃のもの、國守の身分高き時は御判御教書式となり、身分低き時は目下御判御教書式となつてゐるものが多い。

被 國宣備、來何日字佐勅使出京云々、任例明石驛雜事、無對押可令勤仕、毎年訴訟不絶之條、不穩便、今年者相勵、可致丁寧之由所候也、仍執達如件、

月 日 姓 奉

明石郷司殿

(花押)の北畠國家

伊達五郎入道善惠申、辨郡南門内横溝六郎三郎入道淨瑠璃事、任御下文之旨、茲彼所、可沙汰付善惠代、縱稱本主、捧關東下知以下證狀、雖支申、不帶 翰旨國宣者、不可許容、使節遲引者、可有並咎者、依 國宣執達如件、

建武元年七月二日

大藏權少輔清高奉

南部又次郎殿

【伊木】

國姓爺合戦

【作者】近松門左衛門 【名稱】父は唐土と角書がある。國姓爺とは本曲の主役鄭成功の稱で、國王明帝の姓を賜つた老丈の義である。正本に姓、性何れをも書いてあるのは文字の通用である。支那音からいへば姓が正しいが、性を支那音めかして用ひたとも考へられる。なほ「難波土産」「玉勝間」(各別項)、近松傑作全集卷三解説等にその説がある。【興行】正徳五年十一月一日(又は十五日)初日、竹本座上演。三年越十七ヶ月續いた。次いで享保五年正月、同十六年五月、寛延三年七月等に同竹本座に上演されてゐる。初演の時の主な

役割は、

初段、大序、竹本頼母、二段目貝盡し、竹本頼母、豊竹萬太夫、三段目内匠理太夫、竹本政太夫、四段目道行、竹本文太夫、竹本浪花、九仙山景事、竹本頼母、内匠理太夫、五段目竹本政太夫、おやま、人形、辰松八郎兵衛、立役人形津山助十郎等。

【諸本】七行九十丁本、七行九十一丁本、七行百三丁本、十行五十四丁本、十行六十三丁本等の版本。近松時代浄瑠璃(帝國文庫)・近松門左衛門全集第七・近松戲曲集(國民文庫)下巻・近松傑作全集卷三・近松浄瑠璃集(有朋堂文庫)下・近松全集第十・近松名作集(名著全集)下等に所収。【題材】鄭成功の史實に據るところが多いが、元祿末年頃の信濃塚、岡本文彌の正本「國姓野手柄日記」を借りた部分もある。

【梗概】(初段)(南京城内)大明思宗烈皇帝の寵妃、懷妊中の華清夫人を與へよと、韃靼王からの強請に、大司馬將軍吳三桂はその無禮を憤つたが、右將軍李天は自ら左眼を刳つて使者の前を繕ひ、使者は彼が韃靼に通ずる底意を覺つて退いた。皇帝は李天を徳として、豫てその想を寄せてゐる皇妹梅檀女を彼に與へんと考へ、花軍に事寄せて梅檀女を決定を強ひるのであつた。吳三桂が驚き馳せつて帝を諫める折から、李天の手引によつて韃靼の大軍が攻め寄せた。帝は李天のために弑せられ、吳三桂は辛くも印綬を帯び后を扶けて重圍を脱したが、途中、后が敵軍で落命したので、その腹を裂いて皇子を取り上げた。(蕭邊)梅檀女に侍して落ちて來た吳三桂の妻柳歌君は深手を負ひながらも、姫を小舟に乗せて、引汐に任せて沖へ押しやつた。(二段)(肥前平戸の浦)「はまづたひ」巖に帝

の逆鱗に身を退いて日本に渡つた鄭芝龍は、この地に名も老一官と改めて、浦人と契つて儲けた子を和藤内と名づけた。和藤内は女房小陸と濱に出て、鴨と蛤の争を見て軍法の奥儀を悟つた。「もろこしぶね」折から梅檀女を乗せた小舟が漂ひ着いた。昨夜吉夢を見た老一官夫婦も來合はせ、大明國を現状から救ふため、老一官夫婦と和藤内は明に渡ることとなり、和藤内はまづ姫を小陸に預けて舟を乗り出した。「千里が竹」唐土に着いた老一官は、昔唐土に残して來た娘が今は時めく甘輝將軍の妻錦祥女と呼ばれてゐるので、この聲に味方を頼まうと居城獅子が城へと急ぐ。和藤内は父と別れ母を伴つて赤壁に向ふ途中、千里が竹の藪に迷ひ込んだが、丁度虎狩に出遇つて、和國の神威で猛虎をなづけ、軍兵等を配下にした。(三段)(獅子が城樓門)

樓門下に着いた親子三人は、甘輝が不在のため、錦祥女に對面を求めた。錦祥女は繪姿によつて老一官を實の父と知つたが、軍半ば故、女人の母親一人を繩付きにして城内に請入れ、頼みの叶つた時は泉水に白粉を、叶はぬ時は紅を流す事を約した。(城内)歸城した甘輝は大明國の舊恩を思ひ味方しようとはしたが、世の非難を察して錦祥女を刺さうとする。繼母は繩付きの儘に義理から飽くまで留める。甘輝は遂に味方にならぬ。錦



(山 仙 九) 畫 挿 本 瑠 璃 淨

祥女は紅を流す。(岩頭)流れに紅を見出した和藤内は、母を案じて城内に踏み入つた。(城内)紅と見たのは實は錦祥女が自害した生血であつた。それと知つた甘輝は改めて和藤内に援助を誓ひ、彼を延平王國姓爺鄭成功とあ

軍法(九仙山とも)吳三桂は幼帝を護つて山間に隠れ居るうち二年を過ぎた。一日、九仙山に基を圍む二老翁に出會つたが、四季四年間に互る國姓爺の戦況を盤面に歴々と眺めるうち、思はず五年も経つてゐて幼帝は七歳になつてゐた。老翁の姿は消えて、高皇帝と劉伯温とであつた。勇む折から鄭芝龍と小陸とが梅檀女を護つて登つて來た。この時、敵の大軍が寄せたが神變の懸橋が現れ、敵軍がこれを渡らうとすると、橋は崩れて塵になる。敵將は吳三桂のために基盤で碎かれた。「五段」

和藤内と甘輝の武士氣質、錦祥女對母親の義理の秋敷等の戲曲的錯綜が、舞臺裝置の立案に應じて成功を収めたのである。別に人形劇として觀察する時は、寧ろ九仙山の場の成功を挙げねばならぬ。四季の戦況は恐らく遠景に見せたであらうが、靈橋を渡る大軍全滅の仕掛に至るまで、思ふに機巧術、操り法の當代發明の最高峯を示したものであらう。その手法は、容易に他の作品に移植せられなかつたが、それ程複雑な進歩したものであつたと思はれる。かくて花軍や基盤の利用は、當代

の影響は歌舞伎に於て最も多くあつた。小説には、享保元年近松自作の「國姓爺御前軍談」を初め、同二年、自笑の「傾性野群談(別項)、其續の「國姓爺民朝太平記」、閑樂子の「今和藤内唐土船」等の浮世草子から、讀本・草雙紙に至る迄廣く綴られた。原作が舞臺技巧の外に小説的構想に似た要素にも優れたものがあつたためと思ふ。

主要なる著述の目録で、大外記業忠の作と傳ふる「本朝書籍目録(別項)同別録」所収の書を基本として、その後新加の書を増添してある。上巻に正史以下官位に至る十二類、中巻に氏族以下雜書に至る二十九類、下巻に文集以下物語に至る三十八類を立て、各書の下に

國朝書目卷之上
九京 藤原貞幹 纂
正史 注子帝紀

傑作全集卷三解説等にその説がある。【興行】正徳五年十一月一日(又は十五日)初日、竹本座上演。三年越十七ヶ月續いた。次いで享保五年正月、同十六年五月、寛延三年七月等に同竹本座に上演されてゐる。初演の時の主な

后を扶けて重圍を脱したが、途中、后が敵軍で致命したので、その腹を裂いて皇子を取り上げた。(鷹邊)梅檀女に侍して落ちて来た吳三桂の妻柳歌君は深手を負ひながらも、姫を小舟に乗せて、引汐に任せて沖へ押しやつた。【二段(肥前平戸の浦)】「はまづたひ」巖に帝

みの叶つた時は泉水に白粉を、叶はぬ時は紅を流す事を約した。(城内)歸城した甘輝は大明國の舊恩を思ひ味方しようとはしたが、世の非難を察して錦祥女を刺さうとする。繼母は繩付きの儘に義理から飽くまで留める。甘輝は遂に味方にはならぬ。錦

がめる。母も悦んで義理のために死んで行つた。(四段)(住吉明神社前)小陸は夜な夜な神前に武術を鍛錬して靈験を得た。「梅檀女道行」彼女は良人の迎へを待たず姫を奉じて千賀の浦から明國指して漕ぎ出した。「基立

軍法」(九仙山とも)吳三桂は幼帝を護つて山間に隠れ居るうち二年を過ぎた。一日、九仙山に基を圍む二老翁に出會つたが、四季四年間に互る國姓爺の戦況を盤面に歴々と眺めるうち、思はず五年も経つてゐて幼帝は七歳になつてゐた。老翁の姿は消えて、高皇帝と劉伯温とであつた。勇む折から鄭芝龍と小陸とが梅檀女を護つて登つて来た。この時、敵の大軍が寄せたが神變の懸橋が現れ、敵軍がこれを渡らうとすると、橋は崩れて鑿になる。敵將は吳三桂のために基盤で碎かれた。「五段」(龍馬ヶ原)新帝を擁して、吳三桂等は軍略を運らす。(南京城外)單身敵に向つた老一官が虜となつたため、國姓爺等の寄手も困り果てたが、吳三桂と甘輝は、降ると見せて李蹈天を捕へて殺した。こゝにめでたく新帝の御代が到来した。

和藤内と甘輝の武士氣質、錦祥女對母親の義理の秋歎等の戯曲的錯綜が、舞臺装置の名家に應じて成功を収めたのである。別に人形劇として觀察する時は、寧ろ九仙山の場の成功を挙げねばならぬ。四季の戦況は恐らく遠景に見せたであらうが、靈橋を渡る大軍全滅の仕掛に至るまで、思ふに機巧術、操り法の當代發明の最高峯を示したものであらう。その手法は、容易に他の作品に移植せられなかつたが、それ程複雑な進歩したものであつたと思はれる。かくて花軍や基盤の利用は、當代演劇に流行の脚色であり、錦祥女と母の自害も作者の先行作に見える等、部分的には特に價值づける手法は尠いが、人形劇の脚本と見ると、全曲の構想は淨瑠璃史上特筆すべきものがある。前年の九月竹本座後援後、數度の興行も成績擧らず、繼續も危まれたが、座元竹田出雲は近松と相談して肝膽を碎き、本曲を作つたところ、空前の大當りを得て、歌舞伎芝居をも壓倒し、竹本座を蘇生せしめた。操り芝居に於ける三年越の當り作は本作の外に後の「祇園祭禮信仰記」(別項)があるのみであつた。

【影響】淨瑠璃に近松自身、後日狂言として享保二年二月「國姓爺後日合戦」、同七年正月「唐船噺今國姓爺等」を書いたがこれ等は悉く失敗であつた。紀海音も書き替へて「傾城國姓爺(別項)を發表した。歌舞伎の方面には享保元年秋に京の都萬大夫座で、翌年三月大阪嵐大三郎座と萩野八重桐座とで、又江戸では同年五月中村・市村兩座で、全國的競演の態であつた。後には主に三段目のみ上演されて今日に及んだが、その他、和藤内が新作の脚色の中に應用された事も限りなくある。後世へ

の影響は歌舞伎に於て最も多くあつた。小説には、享保元年近松自作の「國姓爺御前軍談」を初め、同二年、自笑の「傾城野群談(別項)、其續の「國姓爺民朝太平記」、閑樂子の「今和藤内唐土船」等の浮世草子から、讀本・草雙紙に至る迄廣く綴られた。原作が舞臺技巧の外に小説的構想に似た要素にも優れたものがあつたためと思ふ。

【参考】國姓爺合戦を讀みて近松の夢幻劇を論ず 坪内逍遙(近松之研究) ○國姓爺合戦近松研究會員(近松之研究) ○國姓爺樓門の場樂譜 拔萃 東儀季治(近松之研究) ○巢林子劇曲詞源 關根正直(近松之研究) ○種彦の「國姓爺」 櫻庭 翠村(近松之研究) ○近松傑作全集卷三解説水谷不倒 ○近松全集第十解説藤井乙男 ○近松名作集下解説 黒木勲藏 (守隨)

國姓爺御前軍談 (守隨) 浮世草子 五册 【作者】安齋とあれど不明 【刊行】享保元年【解説】淨瑠璃の「國姓爺合戦」(別項)の盛行した餘波として見るべき出版もので、安齋といふ茶坊主が若殿の御前で素讀したといふ體にして、淨瑠璃の「國姓爺合戦」をそのまま綴り直したものである。大明國の思宗烈皇帝と韃靼國との確執より、華清夫人の懷妊、吳三桂將軍のこと、李蹈天のこと、帝妹梅檀皇女のこと等に及び、更に鄭芝龍のこと、和藤内・錦祥女のこと、甘輝將軍が味方につく仔細より和藤内が國姓爺鄭成功となる始末、韃靼城にして、思宗烈皇帝の太子大明國の帝位につくといふ。筋はすべて淨瑠璃の通りである。文章も淨瑠璃の詞章を處々改めて、浮世草子風にしたまでである。 (小泉)

國朝書目 (刊行) 寛政三年【解説】本朝人の

【構想・價值】大序は、明國城内の場であつたが、直に二段目に肥前の事件となつて展開された。獅子が城門の上に現れた錦祥女は唐土風俗であるが、門外の二親は日本人であり、千里が竹の韃靼勢は和藤内のために日本語に結はされる。これ等は單に場面の變化照應といふに止まらずして、外國種の事件を排し、觀察をして徒らに外國の世界に逍遙せしめる事の感興の破綻から救つたものである。又平戸の浦から千里が竹、更に獅子が城へと漸層的に緊張を求めた脚色は、言はば戯曲的進行としては通則である。こゝで一段落をつけたと見せて、實は連接してその後の形勢の流動を基盤の上に現出するといふ意外な解釋をなし遂げたに至つては驚歎の外ない。本曲成功の第一因はこれ等に存する。淨瑠璃として最も傑出した場面は三段目であらう。金平張りの

【影響】淨瑠璃に近松自身、後日狂言として享保二年二月「國姓爺後日合戦」、同七年正月「唐船噺今國姓爺等」を書いたがこれ等は悉く失敗であつた。紀海音も書き替へて「傾城國姓爺(別項)を發表した。歌舞伎の方面には享保元年秋に京の都萬大夫座で、翌年三月大阪嵐大三郎座と萩野八重桐座とで、又江戸では同年五月中村・市村兩座で、全國的競演の態であつた。後には主に三段目のみ上演されて今日に及んだが、その他、和藤内が新作の脚色の中に應用された事も限りなくある。後世へ

の影響は歌舞伎に於て最も多くあつた。小説には、享保元年近松自作の「國姓爺御前軍談」を初め、同二年、自笑の「傾城野群談(別項)、其續の「國姓爺民朝太平記」、閑樂子の「今和藤内唐土船」等の浮世草子から、讀本・草雙紙に至る迄廣く綴られた。原作が舞臺技巧の外に小説的構想に似た要素にも優れたものがあつたためと思ふ。

【参考】國姓爺合戦を讀みて近松の夢幻劇を論ず 坪内逍遙(近松之研究) ○國姓爺合戦近松研究會員(近松之研究) ○國姓爺樓門の場樂譜 拔萃 東儀季治(近松之研究) ○巢林子劇曲詞源 關根正直(近松之研究) ○種彦の「國姓爺」 櫻庭 翠村(近松之研究) ○近松傑作全集卷三解説水谷不倒 ○近松全集第十解説藤井乙男 ○近松名作集下解説 黒木勲藏 (守隨)

國姓爺御前軍談 (守隨) 浮世草子 五册 【作者】安齋とあれど不明 【刊行】享保元年【解説】淨瑠璃の「國姓爺合戦」(別項)の盛行した餘波として見るべき出版もので、安齋といふ茶坊主が若殿の御前で素讀したといふ體にして、淨瑠璃の「國姓爺合戦」をそのまま綴り直したものである。大明國の思宗烈皇帝と韃靼國との確執より、華清夫人の懷妊、吳三桂將軍のこと、李蹈天のこと、帝妹梅檀皇女のこと等に及び、更に鄭芝龍のこと、和藤内・錦祥女のこと、甘輝將軍が味方につく仔細より和藤内が國姓爺鄭成功となる始末、韃靼城にして、思宗烈皇帝の太子大明國の帝位につくといふ。筋はすべて淨瑠璃の通りである。文章も淨瑠璃の詞章を處々改めて、浮世草子風にしたまでである。 (小泉)

國朝書目 (刊行) 寛政三年【解説】本朝人の

主要なる著述の目録で、大外記業忠の作と傳ふる「本朝書籍目録(別項)同別録」所收の書を基本として、その後新加の書を增添してある。上卷に正史以下官位に至る十二類、中卷に氏族以下雜書に至る二十九類、下卷に文集以下物語に至る三十八類を立て、各書の下に

國朝書目卷之上
九京 藤原貞幹 纂

○正史 注并帝紀	十卷
○先代昔事本紀	十卷
○日本世紀	十卷
○古事記	三卷
○日本書紀	三卷
○養老五年私記	一卷
○弘仁四年私記 多入長	三卷
○養和六年私記 菅野高早	三卷
○元慶二年私記 善洲愛貞	三卷
○延喜四年私記 藤原春海	三卷

目 書 朝 國

卷數及び著者を註し、未詳なるはこれを註しな。書籍の排列は書名のイロハ順に従ふ。但し上卷は著作の年代順によつてゐる。「本朝書籍目録」及び「同別録」に據つて載せた古書類には一々それらの符標を施してある。卷首に凡例があり、卷末に天明七年辻孔敷の跋がある。

黑白水鏡 (和巴) 合一册袋入【作者】石部葵好【畫工】北尾政演【角書】世道大明神【名稱】正邪善惡を水鏡に倒影する意味【刊行】寛政元

年【題材】田沼意次・意知父子の専横。佐野善左衛門政言の双傷。

【梗概】頼朝公十代の將軍當世公は、世の中を通にし、軍用金まで出して使ふ。梶原の末孫梶原鹿沼の思ひつきで、「ふんてう」運上のもぢりとして、諸商人に金を與へる。町家は金の處置に困る。岩永勝元は、この「ふんてう」が行き届くやうにと、家割に賦課する。人々は金の過多に苦しみ、金使ふ息子を持つた親を羨む。豊年に困り、商賈警昌に困り、目黒不動へ番頭を裸参りにやると、途中で盗賊が捕へて衣類を着せ、懷中に金を入れて逃げる。主人は負けようとした勝負事に勝つて泣く。人々は、大名の知行相應に金を預り、又お救はれ米と稱して米を買つてお上へ差上げる。油断すると煙草入へは金を入れられ、引窓からは小判を投げ込まれる。當世公、鹿沼と吉原で遊び、佐野の介の外は悉く振られる。佐野の介は、遊女の文から山二郎と御殿で喧嘩する。山二郎が打たれ、岩永がとめる。山二郎の弟平介は、喧嘩と聞いて馬で出かけ、途中で落馬して歸る。人々は梶原親子の事ゆゑ、よい氣味と思ふ。訴狀によつて、諸大名は始めて鹿沼・勝元の悪事を知り、「ふんてう」は取止となり、鹿沼・勝元は君側を遠ざけられる。難儀の原因であつた大金を吉野山に埋め、金塚を築き、その上に世直大明神の幟を立てる。作者はこの幟に突當つて夢がさめる。

【構想】「時代世話二挺鼓」(後世)の極めて巧妙に、田沼・佐野事件をほかしてゐるのに比べる



(藏館書國學大田沼早) 鏡水白黒

と、これは事實に近い描寫である。即ち一々の事實を背景にして、一讀、直ちに元の事件が推察される。即ち頼朝十代の當世公は、家康から十代目の將軍家治をまともに指し、三つ紋より七つ紋がきつい流行は、徳川の葵と田沼の七曜星を示し、梶原鹿沼は田沼意次、

岩永勝元は稲葉正明、山二郎は田沼山城守のもぢり、「ふんてう」に關する事は運上政策、冥加金の強要を指し、茶紙類大高賣高崎屋の圖は、天明元年八月九日の運上免除を願ふ上州・武州の民衆運動である。豊年は大饑饉の逆、勝負事に勝つて泣くは、不景氣による博奕の大流行を指し、裸参りへの着せ逃げは、追剥の横行を逆にしてゐる。鎌倉の諸大名へ

知行相應に金を預ける件は、天明五年の大阪に於ける幕府の利鞘政策を指摘し、又貸附會所による金融方法とそれに伴ふ人民の迷惑をも暗示してゐる。併し出版當時の政局と、その中心人物の白河侯には敬意を表して抜け口を作り、なほ夢で結んで素知らぬ顔をしてゐる。有職録倉山(別項)は同じく田沼騒動に題材を得た淨瑠璃で、本書と同年の作である。【史的地位】本書は享保七年十一月の町觸第五條の「御當家之御事」に抵觸したものであるから、作品は絶版、作者は手錠の後、江戸を拂はれ、晝工は過料に處せられた。政演(京傳)はこの事件によつて、他人の作品には萬止むを得ざる場合の外は描かなくなつた。寛政二年五月には更に町觸が出で、九月には三奉行に向つて御達があつた。式亭三馬は「俠太平記向鉢巻」(別項)で、十通舎一九は「化物太平記」によつて、各々手錠の厄を被つてゐる。【價值】諷刺の辛辣さに於ては、黄表紙中稀に見る作品である。繪組も面白く、人物の容貌には、多少の寫實味が加はつてゐる。遊里の圖は晝工得意のもので、二つ折屏風に掛けた羽織の裏に、遊女濃紫の肉筆を見せてある。【備考】「時代世話二挺鼓」(天明八年版・山東京傳作) 俵藤太は勅をうけて將門征伐に赴き、早業八人前・八人藝・八角眼鏡等で業くらべをして勝つ。將門の首を刎ねると七つの魂が出て、七曜の星の光を放つ。將門の靈を祭つて、神田明神といふ。

【國文學】「符」を見よ。【國文學】「名義」國文學は國の文學の意と、國文の學の意とがある。國の文學の意にとると、日本文學と殆ど同意義になり、國文の學の意味にとると、國文學の學、又は國文學の重要なる區別とする本居宣長等の説もあるが、うたふ歌とうたはない歌とが存するのであつて、この「うたふ」といふ事は詩歌の發生的意味から言つて重大なる點である事は勿論であるが、これによつて韻文と散文との區別とする事は困難である。かういふ意味で文學形態の分類は容易でないが、抒情文學・叙事文學・劇文學(文學の分類参照)の三形態に分つことは比較的穩當である。この形態論も國文學の形態にその儘適用することは出来ないが、

學研究の義になる。國文學の學を日本文藝學と稱する見解もある。かくて國文學の義は必ずしも明瞭でなく、また一定してゐないが、國の文學といふ意が普通であらう。さうして日本文學と國文學とを比較すると、日本文學といふのは、英文學・獨文學等と並立する語であるが、國文學といふと外國文學と並立する語であつて、それだけ國の意識が明かであるとも言へる。しかし國文學といふと、常識的に古典文學、或は古代文學・中世文學等の範圍を指して、近代文學を國文學以外に置くといふ傾向があるが、本來これは尙古思想の現れであつて、時代を通じた國文學の領域を指すものであらう。こゝでは國の文學としての國文學の特質を述べる。

【概説】國文學の作品を縦に展開的に見れば國文學史(別項)となるが、横にこれを整理して、國文學の特質を見る時、國文學概論もしくは國文學概説となる。これを扱ふには種々の點が擧げられるが、要素の上から精神・形態・素材・背景の四方面に分けて見たい。【國文學の精神】日本文學の精神、もしくは日本文學を生み出すものを見ると、結局、人間精神と民族精神との結びついた日本民族生活の精神である。この民族生活の精神をその特質の上から見ると、心の構へ方の上から直觀的といふことが言はれ、眞實性「まこと」(別項)が擧げられる。次に、形式的方面として「ものあはれ」(幽玄)「さび」(各別項)等が考へられ、内容的方面として、神と國家の精神、武士道の精神、義理の精神の如きが擧げられる。心の構へ方としての「まこと」は誠であり、眞實性である。眞實といふことはありのまゝといふ點もあるが、その中に道徳的理想的性質

も加はつてゐる。そこに「まこと」の中に文學精神としては、素樸なる點、寫實的なる點、理想的なる點を含んでゐる。素樸といふ性質は、内容形式の關係から言へば、形式よりも内容を重んずることであり、また表現から言へば、洗練されない點を有してゐる。文學の發生が形式的なるものよりも内容的なるものから出發し、そのために、表現に於ても原始的なるものは洗練されない點がある。かくの如き率直なものから、洗練されてくる形式的

精神、義理の精神が擧げられるが、神・國家の精神は「古事記」「祝詞」をはじめ、上代文學に主として見られるのであり、中世の「神皇正統記」を経て近世の國學に至り、明治以後に至るまで流れてゐる。國家は神の創造、統一せられたといふ歴史的事實が、この精神の根柢となつてゐるのであり、それが現在にまで流れてゐるのである。而して武士道の精神は武士が肉體を輕んじて精神を尊重する態度、主のために身を棄て、盡す主従關係、並に個人よ

の重要な區別とする本居宣長等の説もあるが、うたふ歌とうたはない歌とが存するのであつて、この「うたふ」といふ事は詩歌の發生的意味から言つて重大なる點である事は勿論であるが、これによつて韻文と散文との區別とする事は困難である。かういふ意味で文學形態の分類は容易でないが、抒情文學・叙事文學・劇文學(文學の分類参照)の三形態に分つことは比較的穩當である。この形態論も國文學の形態にその儘適用することは出来ないが、

照)となり、更に「平家物語」を中心とする軍記物語(別項)となる。この軍記物語の内容に見られる劇的性質が次第に形態としての劇文學(戯曲参照)に成長したのが、風流・舞の本(各別項)を経て謡曲・狂言(各別項)に至る過程であり、謡曲・狂言が更に劇文學として展開したのである。明治以後の史劇や近代劇に至つて夢幻的のものから寫實的のものに進展する。別に音樂的舞踊的要素を主とする樂劇も現れた。かうい

儀の原因であつた大金を吉野山に埋め、金塚を築き、その上に世直大明神の幟を立てる。作者はこの幟に突當つて夢がさめる。【構想】「時代世話二挺鼓」(後世)の極めて巧妙に、田沼・佐野事件をほかしてゐるのに比べる

圖は、天明元年八月九日の運上免除を願ふ上州・武州の民衆運動である。豊年は大饑饉の逆、勝負事に勝つて泣くは、不景氣による博奕の大流行を指し、裸参りへの着せ逃げは、追剥の横行を逆にしてゐる。鎌倉の諸大名へ

國符こくふ「符」を見よ。國文學こくぶがく【名義】國文學は國の文學の意と、國文の學の意とがある。國の文學の意にとると、日本文學と殆ど同意義になり、國文の學の意味にとると、國文學の學、又は國文

れ、内容的方面として、神と國家の精神、武士道の精神、義理の精神の如きが擧げられる。心の構へ方としての「まこと」は誠であり、眞實性である。眞實といふことはありのまゝといふ點もあるが、その中に道徳的理想的性質

も加はつてゐる。そこに「まこと」の中に文學精神としては、素樸なる點、寫實的なる點、理想的なる點を含んでゐる。素樸といふ性質は、内容形式の關係から言へば、形式よりも内容を重んずることであり、また表現から言へば、洗練されない點を有してゐる。文學の發生が形式的なるものよりも内容的なるものから出發し、そのために、表現に於ても原始的なるものは洗練されない點がある。かくの如き率直なものから、洗練されてくる形式的な性質としては、第一に形式と内容との調和した「ものあはれ」的な性質が擧げられる。「ものあはれ」は、ものに即して起るあはれであり、あはれは感動であるが、それが形式・内容の調和を求めるところから特殊な性質を有するのであり、従つて、「もの」にも限定が行はれるのである。それは表現美としての性質を有するのである。かくの如き美的性質が象徴的性質を有してくる時、幽玄の精神が起る。幽玄の内容は時代により人によつて異なり、靜寂なるもの、妖艶もしくは艶麗なるもの、平淡なるもの等があるが、象徴的なる性質は共通する。それは「にほひ」や「さび」にも共通する。かういふ象徴的性質は、日本の藝道や生活にも流れてゐるのであり、氣韻生動(別項)もこれである。近世精神としての「通」や「粹」(各別項)や濫い味もこれである。さうして平淡な美を重んずることが「輕み」と「深さ」を根柢に有する平淡と異なるのは、その根柢にある心の「深さ」であり、「まこと」である。その點に素樸と平淡とが結びつき、童心と老境とも接するのである。かういふ形式美に對して、内容美として神・國家の精神や、武士道的

精神、義理の精神が擧げられるが、神・國家の精神は「古事記」「祝詞」をはじめ、上代文學に主として見られるのであり、中世の「神皇正統記」を経て近世の國學に至り、明治以後に至るまで流れてゐる。國家は神の創造、統一せられたといふ歴史的事實が、この精神の根柢となつてゐるのであり、それが現在にまで流れてゐるのである。而して武士道の精神は武士が肉體を輕んじて精神を尊重する態度、主のために身を棄て、盡す主従關係、並に個人よりも家を重んずる態度等を中心としてゐる。その點は君臣關係に於ける忠君の精神と同様である。又武士道の精神は、近世の平民に於ける義理(江戸時代文學參照)の精神と通ずる。肉體よりも精神を重んじ、自己を棄て、他のために盡すといふ點が共通する。それは小さい自己を棄て、大きな自己を建設する事である。それは又神や國家の精神と共通するものである。さうして此の如き日本文學精神の内容は形式的方面と調和され、それが直觀的全一的な形態に於て見られる所に特質がある。【國文學の形態】文學の形態は、文學の精神が文學の素材をかりて表現される時の形を意味する。この形態は文學の精神が生み出したものであつて、精神から離れて存在するものではない。併し如何なる文學も特殊の形態を以て表現される故に、形態の上から國文學を見ても必要である。國文學の形態としては極めて多方面であつて種々の分類が出来る。韻文と散文とに分つのも一の方法であるが、日本に於ては韻律をなす要素は音數律が主であつて、音位律や音性律は尠いのであるが、音數律のみから文學の作品を區別することは困難である。又「うたふ」といふ事を散文と韻文と

の重要な區別とする本居宣長等の説もあるが、うたふ歌とうたはない歌とが存するのであつて、この「うたふ」といふ事は詩歌の發生的意味から言つて重大なる點である事は勿論であるが、これによつて韻文と散文との區別とする事は困難である。かういふ意味で文學形態の分類は容易でないが、抒情文學・叙事文學・劇文學(文學の分類參照)の三形態に分つことは比較的穩當である。この形態論も國文學の形態にその儘適用することは出来ないが、大體この形態論によつて形態の發生、展開を跡づけることが出来る。これに就いて文學の發生形態に關する諸説があるが、叙事文學と抒情文學との先後は容易に決し難い。併し神話・咒文・民族的歌謠等から出發したと見る事は正しいであらう。神話・咒文から民族的叙事文學が生じたのである。これを作品の上から歌謠が生じたのである。これを作品の上から言ふと祝詞の中に神話的なものが見られ、「古事記」に民族的叙事文學が見られ、記紀歌謠から「萬葉集」の中に民族的抒情文學から個人的な抒情文學の展開が見られるのである。さうして「萬葉集」の長歌が次第に分解されて衰退し、短歌が中心となつてゆく過程を「萬葉集」から「古今集」によつて見得るのである。詩歌に於ても諸はれる詩歌と諸はれない詩歌とが獨立すると同時に、個性的抒情文學から個性的叙事文學としての物語が生ずるのである。この物語も最初の歌物語・傳奇的物語から、次第に統一されると共に、新たに起つた日記隨筆形態の寫實性が結びついて、寫實的理想小説としての源氏物語となり、更に「狭衣物語」以下に於て物語(別項)の性質に變化を生ずると共に、歴史物語(別項)・傳説物語(説話文學參

照)となり、更に「平家物語」を中心とする軍記物語(別項)となる。この軍記物語の内容に見られる劇的性質が次第に形態としての劇文學(戲曲參照)に成長したのが、風流・舞の本(各別項)を経て謡曲・狂言(各別項)に至る過程であり、謡曲・狂言が更に劇文學として展開したのが近世の淨瑠璃・脚本(各別項)である。それは明治以後の史劇や近代劇に至つて夢幻的のものから寫實的のものに進展する。別に音樂的舞踊的要素を主とする樂劇も現れた。かういふ形態的成長と共に詩歌形態に於ても諸はれない詩歌としては、和歌から連歌・俳諧・狂歌・川柳・新體詩(各別項)・長詩となり、歌謠では神樂・催馬樂・風俗歌・今様から宴曲・小歌(各別項)となり、近世の種々の歌謠形態となり、唱歌・軍歌(各別項)等に至るのであり、小説形態としては保守的な擬古物語とと共に、お伽草子を経て假名草子・浮世草子・洒落本・讀本・合巻・滑稽本・黄表紙・人情本(各別項)等の諸形態が生じ、また明治以後の小説(明治文學・大正文學參照)となるのである。かういふやうにして文學形態に於て、抒情文學・叙事文學・物語文學・劇文學の諸形態が、互に交渉しながら展開するところに國文學の形態は存するのである。【國文學の素材】國文學の素材といふのは、國文學に扱はれてゐる題材・材料をさすのであり、普通の場合には内容とも言はれる。が、内容は表現された内容、従つて表現化された内容を指して表現前のそれと區別する。而して國文學に扱はれてゐる素材も多方面であるが、大きく自然と人生とに分けることも出来る。人生の中には、複雑なる諸方面が含まれてゐる。(一)國文學の素材としての自然は、

相當に重き地位を占めてゐる。殊に詩歌に於ては、和歌・俳諧の如き自然を獨立に題材とした場合も多い。しかし日本の自然の性質上、また日本の民族性上から、優美なる自然を主として、靜寂なる自然を第二に多く扱つて居り、雄大な自然は比較的尠い。従つて春と秋とが主であつて、夏・冬は尠い。さうして自然は詩歌に限らず、小説・戯曲の上にも重要な素材として、人生の背景として常に用ひられてゐるのである。(二)人生の方面としては時代によつて相違があるが、第一に神を素材としたのは「古事記」や「祝詞」に於て見られる。日本の神話は、神による國家の建設、統一を中心としてゐるだけに、人格神が神話の根幹をなして居り、人格神の中でも國家的祖先神が重きをなしてゐる。さうして神と人間とが自由に交通し得る時代から、神は次第に絶對のものとなるに従つて、神の御自らの行爲は見られなくなるが、神力の示現として現れるのであつて、重要な素材となつてゐる。さうして神に對して佛を主とした佛敎文學(別項)が一方に存する。第二に戰爭を素材とした文學は「古事記」等にも見られるが、殊に中世に於ける軍記物語は戰爭を主材としてゐる。もとよりこの戰爭も國家統一の過程である場合や、無常觀への動機である場合、武士道の發揮といふ場合もあるが、とにかく戰爭が重要な素材となつてゐる。第三に戀愛は國文學に於ても各時代を通じて重要な素材となつてゐる。上代の熱烈な靈肉一致の戀愛や、中古の情趣的な戀愛や、更に中世に於て、肉體よりも精神の愛を求めに至る等、戀愛そのものにも變化は見られるが、自然と共に最も重要な素材である。この他、死・別離を素材

とした文學をはじめ、種々の素材が扱はれるが、以上に擧げた自然・神と佛・戰爭・戀愛の如きは著しきものである。而して如何なる素材を扱つても、寫實的に扱ふよりは美化し、理想化し、情趣化する所に特質が認められる。【國文學の背景】國文學の背景は、各方面に見られる。國文學の生み出される環境としては土地といふ事も注意せられる。海に圍まれ、美しき自然を有する日本の國土は、國文學の性質を定める重要な要素である。國文學の素材として自然が多く扱はれるのも、かういふ自然が影響してゐるのである。さうして山を中心とする大和や山城に都せられた時代の文學と、水に近い江戸に文化の中心の遷つた時代の文學とは自ら異なるのである。また大和地方は水に乏しいのに對して、山城の京都は加茂川が流れて水の豊富であることが自然を美しくし、それが文學の性質にも素朴な性質と、洗練された性質との區別を與へてゐるのである。而して江戸時代文學に於ては一層水に關係が深いだけに、明るい朗かな性質がある。かくの如き點は時代的のみならず、個人の上でも、山國の出身の作家と、水邊の國の作家との間に相違がある如き現象を見るのである。また國文學の背景として時代といふものが作品に與へる影響は著しい。各時代の文學がそれ／＼異なつてゐるのは主としてそのためであらう。平安時代文學(別項)と江戸時代文學の有する特質は、江戸時代の文化や環境によつて影響されることが著しい。その他文學の表現の材料である文字や、廣く國語(別項)の性質が文學に與へる影響も著しい。大和時代の漢字を専ら用ひた文學と、假名(別項)の行はれるやうになつた平安以後の文學とで

は、多くの相違が生ずるのであるが、廣く云つて國語の有する性質が流麗纖細な表現をなすに適してゐたと思はれる。その他種々の背景が國文學の上に與へた影響は尠くない。(文學・詩歌物語・戯曲・日記文學・紀行文文學等参照) 【參考】文學論夏目漱石(國文學の本質松浦一) 文學概論石山徹郎(綜合日本文學概論三浦圭三) 國文學概論齋藤清徳(國文學講座) 日本文學概論久松義一(岩波日本文學) 日本文學概論新屋敷幸繁・峯岸義秋(日本文學の母胎(國語と國文學特別號)) 國語國文學本質研究(同上) 【藤村・久松】

意味もあるが、普通には國の文學の歴史の意味に解せられる。従つて日本文學史とも同意義である。【性質】文學史は、文學の歴史的事實の探求であるとともに、歴史的事實の展開を明かにすることを目的とする。従つて文學の歴史的事實としての作家と作品とを精密に研究すると共に、作品と作品との展開的關係を明かにすることが必要であり、そのために、作家・作品を生み出した時代的環境の考察も必要である。併し文學史は文學自體の歴史である以上、文學作品の歴史的發展に文學史の中心はあり、國文學史は日本文學作品の歴史的發展に中心を置くのであらう。【國文學史の扱ひ方】國文學史の扱ひ方には種々の態度があるが、之を Gayley and Scott の "Material and Methods of Literary Criticism" によると、(一)政治史的、(二)地理的、(三)作家的、(四)流派的、(五)形態的、(六)思潮的、(七)動機的に分けられる。(一)政治史的といふのは王朝時代から、鎌倉幕府・足利幕府・徳川幕府時代に至る如く、政治の中心の變化するに従つて文學の時期を分けるのであつて、政權の移動が文學に影響する所があるから、かういふ點からの扱ひ方も一の方法である。(二)地理的といふのは土地を中心とした扱ひ方で、上方文學や江戸文學(各別項)の如きそれである。土地の變化が文學に與へる影響は著しいのであつて、山に圍まれた大和や、水に近い大阪や江戸とは、文學の上にも相違がある。江戸文學史、京都文學史の如きこれである。(三)作家的といふのは代表作家を中心とする扱ひ方である。(四)流派的といふのは二條家といふ歌の家や、談林派、在門、白權派(各別項)といふ如き流派を中心として

とするのが至當であらう。平安時代は桓武天皇の平安寛都以後、院政時代の終りまでを指す。この間を三期もしくは四期に分つことが出来る。鎌倉室町時代は、鎌倉幕府の創設から徳川幕府の建てられる迄の間であつて、鎌倉時代・室町時代と更に分けられ、また鎌倉時代の次に南北朝時代をおき、室町時代の次に安土桃山時代を置くことも出来る。徳川時代は徳川幕府の創設から明治維新迄であつて、この間を元禄時代と安永・天明時代と、文

といふ區分も見られる。後の二の區分は文學の思潮や形態の上に立つた區分と見られる。【國文學史の研究史】國文學史の研究が明かに自覺されたのは明治以後であるが、古くから多少の文學史研究の萌芽は見られる。藤原俊成の「古來風體抄」(別項)は、和歌史の萌芽と見られるし、その他平安時代の後期には歌の歴史の意識が見られるのである。更に室町時代

考察するのであつて、國家的思潮(國家主義參照)

考察するのであつて、外的關係から結びついた流派もあるが、談林派や蕉風の如き見解の上から結びついてゐる流派もあつて、文學史上の重要な着眼點である。(五)形態的とは文學形態の上からの區分で、和歌史・俳諧史・小説史・淨瑠璃史・脚本史といふ形態の上から分けて考察するのであつて、各形態獨自の展開をとるためにかういふ態度も必要である。

考察するのであつて、外的關係から結びついた流派もあるが、談林派や蕉風の如き見解の上から結びついてゐる流派もあつて、文學史上の重要な着眼點である。(五)形態的とは文學形態の上からの區分で、和歌史・俳諧史・小説史・淨瑠璃史・脚本史といふ形態の上から分けて考察するのであつて、各形態獨自の展開をとるためにかういふ態度も必要である。

考察するのであつて、外的關係から結びついた流派もあるが、談林派や蕉風の如き見解の上から結びついてゐる流派もあつて、文學史上の重要な着眼點である。(五)形態的とは文學形態の上からの區分で、和歌史・俳諧史・小説史・淨瑠璃史・脚本史といふ形態の上から分けて考察するのであつて、各形態獨自の展開をとるためにかういふ態度も必要である。

考察するのであつて、外的關係から結びついた流派もあるが、談林派や蕉風の如き見解の上から結びついてゐる流派もあつて、文學史上の重要な着眼點である。(五)形態的とは文學形態の上からの區分で、和歌史・俳諧史・小説史・淨瑠璃史・脚本史といふ形態の上から分けて考察するのであつて、各形態獨自の展開をとるためにかういふ態度も必要である。

が重要な素材となつてゐる。第三に戀愛は國文學に於ても各時代を通じて重要な素材となつてゐる。上代の熱烈な靈肉一致の戀愛や、中古の情趣的な戀愛や、更に中世に於て、肉體よりも精神の愛を求めに至る等、戀愛そのものにも變化は見られるが、自然と共に最も重要な素材である。この他、死・別離を素材

のためであらう。平安時代文學(別項)と江戸時代文學の有する特質は、江戸時代の文化や環境によつて影響されることが著しい。その他文學の表現の材料である文字や、廣く國語(別項)の性質が文學に與へる影響も著しい。大和時代の漢字を専ら用ひた文學と、假名(別項)の行はれるやうになつた平安以後の文學とで

力が費されてゐる。即ち著名な研究家の業績を論述することが最も精細で、文學史や歌學史の欠漏を補ふものが多い。今まで何人も企てなかつた國文學關係の學史として記念せらるべき書である。〔久松〕

る影響は著しいのであつて、山に圍まれた大和や、水に近い大阪や江戸とは、文學の上にも相違がある。江戸文學史、京都文學史の如きこれである。(三)作家的といふのは代表作家を中心とする扱ひ方である。(四)流派的といふのは二條家といふ歌の家や、談林派・在門・白權派(各別項)といふ如き流派を中心として

考察するのであつて、外的關係から結びついた流派もあるが、談林派や蕉風の如き見解の上から結びついてゐる流派もあつて、文學史上の重要な着眼點である。(五)形態的とは文學形態の上からの區分で、和歌史・俳諧史・小説史・淨瑠璃史・脚本史といふ形態の上から分けて考察するのであつて、各形態独自の展開をとるためにかういふ態度も必要である。(六)思潮的とは各時代の思潮を中心として考察するのであつて、國家的思潮(國家主義思潮)や、個人的思潮(個人主義思潮)や、浪漫的思潮(浪漫主義思潮)や、寫實的思潮(寫實主義思潮)の如き思潮を中心として扱ふのであり、これは形態的と相俟つて重要な方法である。(七)動機といふのは發生的な立場から文學史を扱ふ方法であつて、文學を單に靜的なものと見ないで、動的に見る點に於て注目される。以上の態度には方法としての發達の段階は見られるが、しかしそれらの方法には各々長所を有してゐるのであつて、互に補ひ合ふべきものと思はれる。

とすることが至當であらう。平安時代は桓武天皇の平安遷都以後、院政時代の終りまでを指す。この間を三期もしくは四期に分つことが出来る。鎌倉室町時代は、鎌倉幕府の創設から徳川幕府の建てられる迄の間であつて、鎌倉時代・室町時代と更に分けられ、また鎌倉時代の次に南北朝時代をおき、室町時代の次に安土桃山時代を置くことも出来る。徳川時代は徳川幕府の創設から明治維新迄であつて、この間を元祿時代と安永・天明時代と、文化・文政時代とに分けられる。東京時代は、明治・大正・昭和に互つてゐる時代である。(一)上古・中古・近古・近世・現代の區分。上古は大和時代に當り、中古は平安時代、近古は鎌倉室町時代、近世は江戸時代、最近世は明治・大正時代、現代は昭和時代に當る。この區分の名稱は、多少の變化がある。上古・中古を上世といひ、近古を中世とする場合があり、上古を上代とする場合、上古・中古を古代とする場合がある。また中古・近古を中世とする場合があり、近代を近世の意味に用ひたり、最近世の意味に用ひる場合がある。藤岡博士の「近代小説史」(別項)は、「近世小説史」の意味であるが、近代劇、近代詩といふ場合には最近世もしくは現代の劇、もしくは詩を指すのである。(三)その他の時代區分として津田左右吉博士の「文學に現れたる我國民思想の研究」(別項)に於ける貴族文學の時代、武士文學の時代、平民文學の時代といふ區分や、尾上博士の「日本文學新史」(別項)の情中心時代、法中心時代、道中心時代、主義中心時代の如き區分もあり、土居光知氏の「文學序説」(別項)に見られる如き敘事文學の時代、抒情文學の時代、物語文學の時代、劇文學の時代

といふ區分も見られる。後の二の區分は文學の思潮や形態の上に立つた區分と見られる。〔國文學史の研究史〕國文學史の研究が明かに自覺されたのは明治以後であるが、古くから多少の文學史研究の萌芽は見られる。藤原俊成の「古來風體抄」(別項)は、和歌史の萌芽と見られるし、その他平安時代の後期には歌の上に古體と近體との區別が認められ、和歌の歴史の意識が見られるのである。更に室町時代には宗祇によつて連歌を三期にわけて發達史觀が説かれてゐる。また近世に於ては富士谷御杖の「和歌六運辨」(別項)の如き和歌の變遷を六期に分けてゐるのであつて、史的な考察と言ひ得る。併し正確な意味の文學史の現れたのは明治以後である。明治に早く出來た芳賀矢一博士の「國文學讀本」(別項)には、文學史の先驅的意義があり、三上・高津兩氏の「日本文學史」(別項)に於てその形式がほぼ成立して以來、種々の文學史が出た。芳賀博士の「國文學史十講」(別項)「國文學史概論」、藤岡博士の「國文學全史平安朝篇」(別項)「國文學史講話」の如きは、國文學史の早期に於ける注目すべき業績であり、殊に「國文學全史平安朝篇」は、平安朝文學史として今日に至るまで唯一の著である。また五十嵐力博士の「新國文學史」(別項)は、各期に於ける主なる作品作家を中心として扱はれてゐる。津田左右吉博士の「文學に現れたる我國民思想の研究」(別項)は、貴族・武士・平民文學に分けて扱つて居り、文學を思想史の材料として扱つて、文學の自律性を認むることの尠い缺點はあるが、かういふ態度の文學史の綜合的研究として注意せられる。尾上博士の「日本文學新史」(別項)は作品・作家よりは、文學の一般的展開を内容

形式の兩方面から考察してゐる。その他藤村博士の「國文學史總説」、岩城準太郎氏の「新講日本文學史」、坂井衡平氏の「國文學通史」等注目せられる。部分史としては武田祐吉氏の「上代日本文學史」、藤岡博士の「國文學全史平安朝篇」、鎌倉室町時代文學史、野村八良氏の「鎌倉時代文學新論」、藤村博士の「上方文學と江戸文學」、「近世國文學序説」(別項)、佐々政一博士の「近世國文學史」、岩城準太郎氏の「明治文學史」等がある。形態史としては佐佐木信綱博士の「和歌史の研究」(別項)、兒山信一氏の「新講和歌史」、高野辰之博士の「日本歌謡史」(別項)、長谷川福平氏の「古代小説史」、藤岡博士の「近代小説史」(別項)、日夏歌之介氏の「明治大正詩史」等がある。その他文學史の部分的研究は漸次進展しつゝある。(大和時代文學・平安時代文學・鎌倉室町時代文學・江戸時代文學・明治文學・大正文學參照)〔藤村・久松〕

國文學史十講 藤村久松 一冊 著者 芳賀矢一 刊行 明治三十二年、東京富山房 解説 本書は明治三十一年帝國教育會の夏期講習會に、十日間、日本文學史の概要を講義した時の速記録に、多少の修正を加へたものである。參考書・註釋書など大切なものを挙げて初學者の便を計つてゐる。第一講緒論に於て、著者は「書いた書き物、即ち製作物」を文學の對象であるとし、國文學とは、「吾々の先祖がその思想感情を、國語の上に現はして置いたのが立派に美術品に出來てゐる」ものをも指し、「國文學の歴史はさういふ美文の歴史」であると定義し、本書は「稍々狭い意味で、美文ばかりを取つて説いてゐる。第二・三講上古文學は萬葉集・祝詞・宣命等、第四・五講中古文學は平安朝時代で、神樂・催馬樂以下後拾

遺集今様、朗詠等を最後とし、第六、七講近古文學は鎌倉時代に當り、軍記物語・連歌等を講じ、第八、九講は近世文學即ち江戸時代であつて、江戸時代文學の重要事項を説いてある。第十講は現代文學及び結論であつて、明治三十年代迄の明治文學を概観してゐる。簡潔正確で、一讀直に國文學の大觀を得べき點、他の追隨を許さぬものがある。

國文學全史(平安朝篇) 藤岡作太郎【刊行】明治三十八年大倉書店。大正十二年以後岩波書店刊行【解説】著者の企圖した國文學史の一部を成すもので鎌倉室町時代文學史と併せ見るべきである。緒言に「本篇は數年前文科大學において講じた國文學史をもととして、これを簡明に叙し、更に一、二節を加へたるものなり」とある。又「わが國文學の研鑽目いまだ淺く、古名著の定本も成らず、その時代も決せざるもの少からず。これを以て文學史を説くに當りてや、まづその材料の價値を考査する必要あり、この書において、たとひ他はこれを煩雜なりとすとも、われはむしろ省略に過ぎたりとせん」とあり、又「本篇の説くところ、文壇の大勢力たりし作家と作物とを主とす」とあれば、内容を推し得られよう。全篇を總論及び四章に大別し、總論に於ては、「一々の作者作品に就いて評論する前に、まづ當時の社會の情況、風俗思想の一斑を示し置くを得策」として、平安朝、平安朝の社會、日常の生活等の項目を擧げ、本文を四つの時期に章を分けて次の如く説いてゐる。第一期弘仁前後を唐朝模倣の時代、詩文流行の時代、第二期延喜・天曆時代は反省自覺の時代、國民文學興隆の時期であるとし、撰集勃

興を説き、第三期道長時代は藤原氏繁昌の時代、女流文學者輩出の時期として力點を源氏物語に置き、前後五章に及んで論じてゐる。即ちその梗概、評釋批評の書、紫式部、古來の準據説がその評論の五項目である。第四期平安末期は、院宣政治の時代、和歌革新の時代として「榮華物語」「大鏡」及び「後拾遺和歌集」以下の勅撰集を論じてゐる。評論がすべて從來の國文學史家のそれと規を異にし、徒らに作品の穿鑿辭に陥らず、十分なる考證の上に、更に獨自な見地から正しい客觀的批評を與へてゐる點、國文學研究の一新生面を開拓したもので、行文流麗今以て國文學者の先づ讀むべき書とされてゐる。

國文學讀本 芳賀矢一・立花銑三郎【刊行】明治二十三年富山房【成立】上田萬年校閱の下に「國文學の通觀」を得、「専ら教育上並に文學上の目的」を以て編纂されたもの。【解説】文學作品を古代から徳川期迄、時代を追ひ作者を主にして排列してある。即ち、柿本人麿・山部赤人・紀貫之・紫式部・清少納言・源隆國・藤原爲業・鴨長明・阿佛尼・吉田兼好・芭蕉・近松門左衛門・新井白石・室鳩巢・賀茂眞淵・本居宣長・横井也右・大田南畝・香川景樹・瀧澤馬琴等である。卷頭約四十頁を緒論に費し、編者の文學論及び國文學概論を簡明に述べて、普通なる概括より單獨なる事物の了解に資する所がある。巻尾に本文中の難解の文字の要を盡した註釋があつて、學習者に便を與へ、作者毎に略傳を附して、「其文彩人物を想像せしめ、且は其著者の目を掲げて讀者が他日改修の便」に供してゐる。編者が緒論に文學を定義して、「文學とは階級の如何を問はず、専門

の如何に關らず、凡て人とし人たらん者に普通なる智識と、普通なる感情とに訴へて多少の興味を有するものはなり」「文學は人間の射映なり」と述べてゐるのは、當時驚異の眼を以て迎へられた「小説神髓」(別項)或は崇拜に近い態度で觀照された歐洲文學、又は種々の文學論等の影響を受けたものと見るべく、編中に「從來我文學上殊に賤め來りたる」江戸時代の戯曲・小説・俳句・狂歌等を採用したのは、上述の一片鱗であり、本書が教科書を目的としたものだけに特に進歩的であると云はねばならない。本書は又國文學史を科學的見地から眺めた最初のものであつて、「一定の統系の下に各項目を編纂してゐるのは、題材の選擇に多少の議論があるとしても、なほその功を没する事は出來まい。明治中葉後の國文學研究勃興の一機軸となり、後來の國文學史又は國文教科書の先驅である點に於て、本書の價値は大きい。

國文叢書 大正元年、博文館。【解説】池邊義象【刊行】大正元年、博文館。【解説】正しくは「校註國文叢書」。本叢書は明治四十五年博文館創業二十五年記念のため、本居豊穎・井上頼園の協賛の下に、池邊義象主として校訂に當り、萩野由之・關根正直これを輔佐して約二年間に刊行された。藝に刊行された「日本文學全書」(別項)の更に集大成されたものと見られる。頭註が各冊とも詳細に互つてゐるのは、初學者に便益を與へる點が少くない。所收書目すべて五十二種、古典の主なるものは大抵收載してゐる。

國文大觀 丸岡桂・松下三郎共編【刊行】明治三十六年、板倉屋書房。【解説】明治後半期の國文學研究熱の勃興に乗じて刊行されたもので、本居豊穎・木村正辭・小杉樞郎・井上頼園・落合直文等監修の下に、國文學の著名なものの四十七種を收め、第一編から第九編に分け、第一編から第六編までを物語部とし、源氏物語・竹取物語・伊勢物語・宇津保物語等、二十一種の小説を收め、第七編は日記草子部で、土佐日記・枕草子・紫式部日記・十六夜日記・東關紀行等、著名な日記隨筆の類十九種を、第八、九編は歴史部として、大鏡・水鏡・保元物語・平治物語等、八種を收めてゐる。第十編は後れて明治三十九年に刊行された索引一卷であるが、これは本叢書中に現はれた人名索引で、例へば「あすか」のひめぎみ、飛鳥井姫君、仁和寺威儀師、姫君に懸想し、之を誘拐せむとす、狭衣中將之を救ふ(狭二七)の如くに記され、一種の人名辭典とも云ふべく、讀者を益すること多大であり、この種の刊行物に於て最も進歩したものとして云へる。これは本叢書が「宇津保物語」を以て「源氏物語」の先行書であるとし、本居家累代の善本をテキストに用ひて、その價値を強調した點と共に、一特徴と稱すべきであらう。

國民性十論 賀矢一【刊行】明治四十年十二月富山房【内容】本論十項、外に序言・結語がある。(本論) (一)忠君愛國——日本國民にとつては、皇室はカミでありオホヤケであつて、こゝに尊崇と親愛のこもつた秩序がマゴコロとして存立し、君臣の分が定まつてゐる。そしてこれがあらゆる國民生活を規定する原理として作用してゐる。(二)祖先を崇び家名を重んず——わが國は神祇政治・宗族政治であつて、それが

人の氣質は多血質的であつて、幾多の「下がかつた滑稽」が禮節の發達した國人間に残つてゐる所にも、天真爛漫な氣樂な性質が見える。すべてにあきらめがよくて執着が少い點で、江戸つ子氣性は日本人の代表的性格といふべく、武士道乃至俠客肌もこの民性の示現であり、又佛教に接してもその厭世觀に壓服せられないで、却つて俚諺で佛を茶化してゐることも、この性格を發揮したものである。

て、儒教の「禮」によつて發せられたものではない。又西洋のエチケットは平等主義の國の實際上の約束であつて我が國のカミ崇拜を基礎とした禮節とは根本に於て異つてゐる。(一〇)溫和寛恕——神話に見るに、われわれの祖先は略奪虐殺を好まない平和な農民であつた。歴史の上に見ても、國民は武勇ではあるが侵略的ではなく、自衛上必要な場合にのみ立つてその武勇を振ふ。武道の本義は無用

を指示置くを得策」として、平安朝、平安朝の
社會、日常の生活等の項目を擧げ、本文を四
つの時期に章を分けて次の如く説いてゐる。
第一期弘仁前後を唐朝模倣の時代、詩文流行
の時代、第二期延喜・天曆時代は反省自覺の時
代、國民文學興隆の時期であるとし、撰集勃

なる概括より單獨なる事物の了解に資する
所がある。巻尾に本文中の難解の文字の要を
盡した註釋があつて、學習者に便を與へ、作
者毎に略傳を附して、「其文彩人物を想像せし
め、且は其著者の目を掲げて讀者が他日改修
の便」に供してゐる。編者が緒論に文學を定
義して、「文學とは階級の如何を問はず、専門

見られる。頭註が各冊とも詳細に互つてゐる
のは、初學者に便益を與へる點が少くない。
所収書目すべて五十二種、古典の主なるもの
は大抵收載してゐる。
【編者】(土井)
【國文大觀】(土井) 叢書十冊
丸岡桂、松下大三郎共編【刊行】明治三十六
年、板倉屋書房。【解説】明治後半期の國文學

野由之・三上參次等の協力に依り、善く正しき
寫本を後世に遺さうといふ目的のために、國
文中の必要なるものを集め、其内より撰擇し、
「國語國文研究者の座右缺べからざるもの」を
内閣祕庫の本、帝國圖書館本等を底本として、
確實な校定を加へたものと序文にある。收め
る註釋書の數六十八種、平家物語・太平記・源

氏物語・枕草子・大鏡・榮華物語・方丈記・紫式
部日記・土佐日記・大和物語・宇津保物語・今昔
物語・徒然草・萬葉集等に關するもの。刊行當
時にあつては珍書視されたものが含まれて、
學界に大なる便益を與へたのであつた。より
善い寫本が発見された今日から見れば、校訂
に不満もあるが、當時國文學研究の拍車とな
つた功績は大きい。
【土井】

國文東方佛教叢書

【編者】鷲尾順敬

【刊行】大正十

五年、東方佛教叢書刊行會

【解説】東方佛教

とは、支那・朝鮮から傳來した日本の佛教の謂

で、西洋學者の所謂印度・シヤム・ビルマ等の

南方佛教・支那・朝鮮の北方佛教に相對するも

ので、西洋の學者に對して東方佛教の精粹を

知らしめんがために、本叢書は編まれたもの

である。極めて複雑多岐な日本の歴代の佛教

關係の著作を取捨按排して八部門に分ち、一、

宗義部、二、註釋部、三、法語部、四、隨筆部、

五、傳記部、六、紀行部、七、歌頌部、八、文藝

部としてゐる。大部分僧侶の手に成る著作で

あるが、第七卷紀行部には、三條西實隆の「高

野參詣日記」、三條西公條の「吉野詣の記」など

あるが、第十卷文藝部下巻には、落語三十三

題、戲文十題、今様四百首、謡曲二十五番、

狂言・俗語・川柳・俗諺等、凡そ佛教的色彩のあ

るものを能ふ限り收載してゐるのは、國文學

研究者のみならず、一般人に取つて日本文化

がいかに深く佛教に染め付けられてゐるかを

知らせると共に、日本の姿を認めさせる上に

大なる役目を果してゐる。本文は何れも國文

であるのみならず、難解な佛教語には註釋も

施してあるから、晦澁な點がないのも亦本叢

書の特徴である。
【土井】

國民性十論

【著者】芳賀矢一

【刊行】明治四十年十二月富山房

【内 容】本論十項、外に序言・結語がある。【本論】

(一) 忠君愛國——日本國民にとつては、皇室

はカミでありオホヤケであつて、こゝに尊崇

と親愛のこもつた秩序がマゴコロとして存立

し、君臣の分が定まつてゐる。そしてこれが

あらゆる國民生活を規定する原理として作用

してゐる。(二) 祖先を崇む家名を重んず——

わが國は神祇政治・宗族政治であつて、それが

太古以來存續してゐる點に於て、社會進化論

上の一特例をなしてゐる。これは祖先崇拜が

その根幹をなしてゐるため、神話の神々は

自然現象を代表すると共に、又祖先の大功業

者であつて、永く國民共同の祖先として崇め

られ、ひいては家中心の國民生活を發達させ

るに至つた。(三) 現實的實際的——日本人の

活動舞臺は人生である。神話以來、死後を問

題にせず、死を恐れぬ生々主義が一貫してゐ

る。後生を重んずる佛教をさへ、現世利益の

祈禱教に化し、儒教もその實際的傾向が強調

され、西洋文明も實際的利益を中心とした祖

先傳來の採長補短主義の下に移入せられた。

(四) 草木を愛し自然を喜ぶ——現世を愛し人

生を樂しむ國民が、この美しい國土の山川草

木を愛し、自然に憧れるは當然のことである。

古來裝束・甲冑・衣服の色合・家紋・菓子・酒類

等の名稱から女性の名に至るまで植物に因ん

だものが多く、衣食住に、文學に、遊戲に、武士

道に、自然愛が表示され、人と天地自然との

融合が文學の生命をなしてゐる。(五) 樂天洒

落——「酒なくて何のおのれが櫻かな」。サケ

の語根は *sa-ke* でサクラと同一であり、幸・榮・

盛も同じ *sa-ke* から出たものであらう。日本

人の氣質は多血質的であつて、幾多の「下」がか
つた滑稽」が禮節の發達した國人間に残つて
ゐる所にも、天皇爛漫な氣樂な性質が見える。
すべてにあきらめがよくて執着が少い點で、
江戸つ子氣性は日本人の代表的性格といふべ
く、武士道乃至俠客肌もこの民性の示現であ
り、又佛教に接してもその厭世觀に壓服せら
れないで、却つて俚諺で佛を茶化してゐるこ
となども、この性格を發揮したものである。
(六) 淡泊瀟灑——辛辣さや粘り強さや陰險さ
がなく、何事にもあつさりしてゐる。食物に
も脂肪分の少いものを好み、衣服も色は單調、
構造は直線的で、言語も開いた緩音の單純な
音である。俳句・墨繪の簡潔さ、能樂・狂言の
舞臺の單調さ、神社建築の單純さ等、何れも
この國民性の表現であり、富士山の玲瓏な姿
はその理想である。禪宗が汎く行はれたのも
この性情と深く契合する所があるからであら
う。(七) 纖麗巧緻——茶室・俳句・墨繪・記
紀古歌の譬喩法、箱庭・盆栽・活花・刀の鏢・
根付・秋草の趣味等、何れも小さいものを好む
日本人の性質を示してゐる。文學も崇高壯大
とは縁遠く、優美趣味に傾き、小詩形を發達
させてゐる。(八) 清淨潔白——小さくつばりし
た木綿物の着心、新しい青畳の居心を愛し、
入浴を好み、温泉に親しむ等、清潔を愛する
國民で、神話にも御禊があり、古來大祓が行
はれてゐるなど、觸穢を避ける思想が極度に
まで發達してゐる。廉潔といふ性質もこれと
同一根柢から出たものである。(九) 禮節作法
——國語に敬語法の發達してゐることは著し
い事實である。又應對・進物・料理から切腹に
至るまで式法がある。この性情はもととマ
ツリゴトを中心とした建國以來の民性であつ

て、儒教の「禮」によつて啓發せられたもので
はない。又西洋のエチケットは平等主義の國
の交際上の約束であつて我が國のカミ崇拜を
基礎とした禮節とは根本に於て異つてゐる。
(一〇) 溫和寛恕——神話に見るに、われわれ
の祖先は略奪虐殺を好まない平和な農民であ
つた。歴史の上に見ても、國民は武勇ではあ
るが侵略的ではなく、自衛上必要な場合にの
み立つてその武勇を振ふ。武道の本義は無用
の處に力を弄ばぬにあるとせられた。我が歴
史のやうに残虐の跡の少いものは他に例を見
ない。殉死や追腹も或る時代のみのものであ
り、賤民の制はあつたが殺生を厭つたため、
人種の嫌惡からではない。童話その他に殘忍
性を現したのものはないが、それ等は
多く外來のものか、又は犠牲的精神を示した
ものである。武士道は文武二道を兼ね嗜むを
理想とし、物のあはれを知るを眞の武士とし
た。「結語」以上諸性質のうち、崇神敬神は根
本の民性で、その後印度・支那等の影響をうけ
つゝも、益々この性情は發揮せられた。武士
道も要するにこれを核心とした。今や東西文
明融和期に當り、國民は眞に自國の過去を知
り、その上に歐米の長を採り入れる覺悟があ
らう。【價值】文學を中心として、國民生活
のあらゆる事象の上に著しい心性的特質を指
示しようとしたもので、しかも歴史的國際的
な立場に於ける國民的自覺に基づいて、國民
將來の覺悟を導かうとする現實的關心の下に
成つたものである。その方法は直覺的常識的
で、哲學的又は科學的ではないが、そこには
該博さ自由さと共に、確かさ鋭さがある。項
目相互の間にも論理的體系が缺けてゐるかの

やうに見えながら、その奥に基本的性質の暗示があり、立體的機構の萌芽が見える。これは著者の国民性に對する把握の確かさを示すものであるが、更にくだけた觀察と行き届いた思索とは、その表現に的確且つ輕妙な趣を與へて、眞に日本人の性格の所有者である著者の風采を想はせるものがある。この種の論は既に近世國學者の著書中に散見する所であるが、それ等は排他に急な餘り、國なり國民なりの特性を客觀的に闡明しようとする態度に缺けがちであつた。この點で、本書がわが國民性を考察した最初の著であるといふ一般の評は當つてゐる。〔西尾〕

國民之友 雜誌【刊行】明治二十年二月十五日創刊、民友社。爾來十二年、即ち三十二年八月、三百七十二號を以て廢刊。【解説】社會評論を主とした雜誌で、その清新で熱烈な點が頗る社會の歡迎するところとなり、創刊四五ヶ月の後は、創刊號以下の重版を見た。民友社の事業の一つとして、民主主義宣揚の啓蒙的一機關であつたことは勿論である。編輯には創刊以來徳高猪一郎(蘇峰)が當つた。創刊當初は月一回の發行であつたが、第九號から月二回に改め、又二十九年二月には、姉妹雜誌「英文國民之友」を出した。内容は、元來が社會評論の雜誌であるから、從つて政治・社會思想に關するものが多く「藻蘆草」と稱する文藻欄があつたが、なほ直接文學に關係ある記事は甚だ貧弱であつた。然るに、本誌は年一回の夏期特別附録に



於て文學作品を輯め、當時に於ける力作を紹介するに至り、遂にそれは文壇的登龍門の觀を呈するに至つた。事實また本誌によつて紹介された名作も甚だ多い。後、民友社はこれ等の諸作を集めて、國民小説叢書(八冊)と題して刊行した。この叢書には、逍遙・鴨外・美妙・紅葉・露伴・思軒等の諸家を網羅してゐる。殊に、三十七號の新年附録に於ける山田美妙の「蝴蝶(別項)」は、その挿繪に、作者の希望によつて、當時として正に驚異であつた女の裸體畫を挿入して、社會問題を惹き起したことは有名である。〔齋藤昌〕

國民文學 歐羅巴に於ては十六世紀以來、上代希臘・羅馬の文學が復興して、各國に於てそれ／＼それを修得し攝取し、近代國家組織が確立すると共に、そこに初めて中世紀以來の共通傳統とは異つた各

する外敵はあつたにもせよ、自分等と文化を争うて飽くまで對立を持續する國民は考へられなかつた。希臘はペルシヤの侵襲を打破して自國の文化を世界に敷き、羅馬はカルタゴを滅ぼして後は、天下はただ羅馬帝國あるのみ。從つて近代歐羅巴諸國が對立的に自國の文化現象として文學を意識的に持つといふ事はなく、自國の文學は直に世界の文學であると考へられた。然るに十六世紀以來、近代の歐洲諸國は對立したる國家關係からして、文學そのものには國民的意識が自づと加へられて、西班牙及び英國の十六世紀、佛蘭西の十七世紀、獨逸の十八世紀末の如き、國民古典(National Classics)と呼ばるゝ文學が作り出さるゝに及んで、國民文學なる觀念は一層明瞭になつて來たのである。日本文學に於ては明治以前、支那との交渉が屢々あつたといへ、一國民としての對抗意識を持つといふ機會は稀れであつて、それだけ國民意識が文學全體に表現せらるゝといふ現象も顯著ではな

ひ合つたお鷹・お蝶の話をする、およしは吉原の客の噂をした。松賀屋の初鳥が、色男と大盡客と落ち合つた時、大盡客に心中を見せると云つて指を切つた。而も指の行方が見えなくなつたので、更にもう一本切らうとした。居合はした人々が留め、大盡客も納得した。而も寢返りされた筈の色男も前より熱心に通つて來る。皆不思議に思つたが、初鳥が身請けされる時種を明かして行つた。實は行方不明と見せた指先は、新造が手早く隠して、色

國民文學 歐羅巴に於ては十六世紀以來、上代希臘・羅馬の文學が復興して、各國に於てそれ／＼それを修得し攝取し、近代國家組織が確立すると共に、そこに初めて中世紀以來の共通傳統とは異つた各

する外敵はあつたにもせよ、自分等と文化を争うて飽くまで對立を持續する國民は考へられなかつた。希臘はペルシヤの侵襲を打破して自國の文化を世界に敷き、羅馬はカルタゴを滅ぼして後は、天下はただ羅馬帝國あるのみ。從つて近代歐羅巴諸國が對立的に自國の文化現象として文學を意識的に持つといふ事はなく、自國の文學は直に世界の文學である

ある。なほ末に對馬の人河野定俊と西鶴との兩吟歌仙一卷を添へてゐる。京江戶・大阪の談林派の俳傑の作である點に於て、談林派の作中注意すべきものである。〔萩原〕

國民文學 短歌雜誌【創刊】大正三年五月【解説】明治三十九年十月、窪田空穂を中心に門下の半田良平・田中完治(今の對馬完治)・植松壽樹・川崎左右(今の川崎社外)・宗耕一郎(今の硯工不昂)・松村英一等相集まつて、十月會を結んだ。同會から選集「白露集」「黎明」を出した。「國民文學」が同會の機關雜誌として發刊されたのは黎明「刊行」以後である。そして十月會といふ小團體を擴充する必要に迫られて遂にこれを解散し、新しく國民文學派なる名稱の下に、團體が結成された。而して「國民文學」は、歌壇の主潮とはならなかつたが、その實質な歌風は空穂が推戴されたと共に、漸次歌壇の重要な位置を占むに至つた。〔松村英〕

國民文學 叢書 三十六冊【編者】國民文庫刊行會【刊行】明治四十二年から四十四年【解説】當時刊行された諸種の國文學關係の叢書の中で、本文庫は最も廣い範圍を極めて少い分量の中に集大成したものと云へよう。例へば、第一・二編に「萬葉集略解」、第三・四編に「八代集」、第五編は「山家集」以下の私家集、第六編に俳諧俳文集、第七・八編に「源氏物語」、第九編以下は王朝文學、或は「方丈記」「徒然草」等の隨筆・論曲・狂言、第十編「源平盛衰記」以下の軍記物語數篇、第二十編以下は「元祿時代小説集」を初め、「近松戲曲集」「里見八犬傳」「浮世風呂」に至る近世の小説・戯曲等を収めてゐる。校訂者の明示がないために多少の不安はあるが、一讀直ちに日本文學の大系を感得されるやうに材料を選んだ點は、大なる容量を要しない點と共に特徴のある編輯である。第三十七編は「總目錄」であつて、これ亦使用者に便である。〔續編

ある。なほ末に對馬の人河野定俊と西鶴との兩吟歌仙一卷を添へてゐる。京江戶・大阪の談林派の俳傑の作である點に於て、談林派の作中注意すべきものである。〔萩原〕

として「續國民文庫」十八冊が、同一刊行者の下に、明治四十五年から大正二年に亘つて出版された。正編に比すれば統一性のない取材である。「川柳集」「滑稽本集」「狂歌狂文集」等は、正編に漏れたものを集めたと思はれる。『眞書大閣記』『水滸傳』等に力を注いで、挿繪までも忽せにしない態度は、この文庫の性質から見ていかかと思はれる。校訂者をやはり明示してない。〔土井〕

ひ合つたお鷹・お蝶の話をする、およしは吉原の客の噂をした。松賀屋の初鳥が、色男と大盡客と落ち合つた時、大盡客に心中を見せると云つて指を切つた。而も指の行方が見えなくなつたので、更にもう一本切らうとした。居合はした人々が留め、大盡客も納得した。而も寢返りされた筈の色男も前より熱心に通つて來る。皆不思議に思つたが、初鳥が身請けされる時種を明かして行つた。實は行方不明と見せた指先は、新造が手早く隠して、色

ある。なほ末に對馬の人河野定俊と西鶴との兩吟歌仙一卷を添へてゐる。京江戶・大阪の談林派の俳傑の作である點に於て、談林派の作中注意すべきものである。〔萩原〕

ある。なほ末に對馬の人河野定俊と西鶴との兩吟歌仙一卷を添へてゐる。京江戶・大阪の談林派の俳傑の作である點に於て、談林派の作中注意すべきものである。〔萩原〕

した。内容は、元來が社會評論の雜誌であるから、従つて政治・社會思想に關するものが多く「藻蘆草」と稱する文藻欄があつたが、なほ直接文學に關係ある記事は甚だ貧弱であつた。然るに、本誌は年一回の夏期特別附録に

國それらの特殊な文藝表現を持つやうになつて來た。これが歐羅巴に於ける國民文學といふ如き稱呼の起原である。【解説】希臘及び羅馬に於ては、近代歐羅巴に於ける如き國民文學といふ觀念は殆どなかつた。自國に對

日本の文學は、明治以前に於て支那との關係を除いては、凡そ希臘文學とほぼ同じ發生相を示し、明治以後は未だ歐洲の文藝復興期に於ける如く、諸種の刺戟・影響を感ぜしつゝ、習得攝取しつゝあるものであつて、その綜合せられたる文藝表現は、今後暫くを待たねばならぬと言ふべきである。【言江】

戯曲集「里見八犬傳」「浮世風呂」に至る近世の小説・戯曲等を收めてゐる。校訂者の明示がないために多少の不安はあるが、一讀直ちに日本文學の大系を感得されるやうに材料を選んだ點は、大なる容量を要しない點と共に特徴のある編輯である。第三十七編は「總目錄」であつて、これ亦使用者に便である。續編

として「續國民文庫」十八冊が、同一刊行者の下に、明治四十五年から大正二年に亙つて出版された。正編に比すれば統一性のない取材である。「川柳集」「滑稽本集」「狂歌狂文集」等は、正編に漏れたものを集めたものと見られる。「眞書大閣記」「水滸傳」等に力を注いで、挿繪までも忽せにしない態度は、この文庫の性質から見ていかかと思はれる。校訂者をやはり明示してない。【土井】

語系「語族」を見よ。

古契三娼 江戸にさまゝの横道ある中に、きんご新道と云ふのは、圍ひ者の多い故にかく名づけたので、そこに三人の遊女上りが住んでゐた。吉原出はおよし、深川出はお仲、品川出はお品と云つた。合借家同士の心安さ、折節は昔の思出話を楽しみにしてゐた。丁度四月なかばの事、三人が寄り合つた。先づ髪がよく結へた話から、遊里三ヶ所の髪と比較話が出る。續いてお品が品川の遊女の噂、年中行事の通を聞かせる。間々およしは吉原、お仲は深川のそれに因んだ話をする。ついでお客の噂になつて、お品は品川の大店松阪屋野風と、芝の通人介との虚々實々の戀の諸分けに就いて語つた。次にお仲は、深川に於ける黒さんと云ふ簪客の不男を、遊女の意地で奪

ひ合つたお鷹・お蝶の話をする。およしは吉原の客の噂をした。松賀屋の初鳥が、色男と大盡客と落ち合つた時、大盡客に心中を見せると云つて指を切つた。而も指の行方が見えなくなつたので、更にもう一本切らうとした。居合はした人々が留め、大盡客も納得した。而も寢返りされた筈の色男も前より熱心に通つて來る。皆不思議に思つたが、初鳥が身請けされる時種を明かして行つた。實は行方不明と見せた指先は、新造が手早く隠して、色客の方へ届けてゐたのであつた。話のうちにやがて夕暮近くなつた。

【構想】本書以前に、京傳は「金子洞房」「客衆肝照子」「通言總籙(各別項)」を發表してゐるが、皆吉原を描いて、品川・深川に及んでゐない。それで本書に於て、辰巳・南江にも亦通であることを見せたのであらう。吉原その他の遊里の比較をなすものが、洒落本中に一系統をなしてゐる。本書はこの系統に屬するもので、明かに優劣まで論斷してゐるものもあるが、比較以上には及んでゐない。【山崎】

虎溪の橋

井原西鶴【角書】【名義】虎溪三笑の義であるが、本文には直接關係がない。「西鶴名残の友」卷之三に、「或日智恩院の門前、那波律宿の庵に好人寄合ひ、三吟三百韻取立、何か珍らしき事いふにもあらねば、世の笑ひ草になれるは、それより合點して、虎溪橋と題號するなり云々」とある。【刊行】延寶六年【諸本】新選西鶴全集(石川巖編)俳諧篇・談林俳諧集(日本俳書大系)所收。【解説】田代松意が江戸から上洛したので、一日西鶴が彼を智恩院門前なる那波律宿の庵に伴ひ、一日中に西鶴・松意・律宿の三吟三百韻を卷いたので

ある。なほ末に對馬の人河野定俊と西鶴との兩吟歌仙一卷を添へてゐる。京・江戸・大阪の談林派の俳傑の作である點に於て、談林派の作中注意すべきものである。【萩原】

湖月抄

北村季吟【名稱】紫式部が、石山寺に籠り、湖上の月を見て源氏物語の筆を執つたといふ傳説に基いて命名したもの。明治以後「湖月抄」の上に、「源氏物語」の四字を冠した活字本も出たが、季吟の自跋にはもとより、木版本にもこの四字はない。【成立・刊行】延寶元年十二月成。自序同二年七月、林和泉等外三名によつて刊行。【諸本】前記木版刊本の外、小田清雄校の「訂正源氏物語湖月抄」八冊、猪熊夏樹校の「補源氏物語湖月抄」八冊、吉澤義則・宮田和一郎校の「湖月抄」七冊がある。【内容】發端一卷、系圖一卷、年立二卷、表白一卷、雲隱說一卷、本註五十四卷より成る。本書は、著者が三條西家の學統たる箕形如庵(條宮に奉仕)から「源氏」の講談を聞き、秘訣口傳を受け、更に松永貞徳に師事して、九條家の學統を受け、「細流」「孟津」の兩抄を元として「河海」「花鳥」の要をとり、「弄花」「明星」を參考し、師説を交へ、私考を加へて完成した「源氏物語」の全註である。先づ發端の卷に、

(一)此物語作者事。(二)紫式部系圖并傳居墓所等。(三)號紫式部事。(四)式部廣才事。(五)物語之發起。(六)文法。(七)大意。(八)物語准據。(九)物語時代之下意。(一〇)物語述作之時代。(一一)此物語故人稱美事。(一二)題號稱光源氏物語事。(一三)源氏字事。(一四)源氏姓事。(一五)物語冊數事。(一六)卷々次第。(一七)諸本不同。(一八)諸抄。(一九)凡例。(二〇)卷々付名事。(二一)此物語有并之

卷事等の條々を網羅し、凡例には數項目を出して編述の用意を示したが、(二〇)以下は恐らく追補として記されたものであらう。この發端の説は、「明星抄」を中心とする舊説の集大成と見るべきである。系圖は奥に「此一冊、依桂藏主所望、以家本一加書寫」者也、天文十九年六月日、桃華宋央判同月二十七日一校合」とあつて、一條家の本である。季吟はこの系圖の人名及び註に存する不審につき、河内本・青表紙本の差異に依るかと思つてゐる。次に年立は、兼良の作で、奥に冬良の永正七年の跋と、一本奥書とて、桃花末葉の跋とを有する本である。次に表白は從來安居院法印聖覺の作と稱せられたもの、雲隱説は、古來の諸註を集成し、自案を加へたものである。註釋は先づ本文を掲げて、その傍又は上欄に古註もしくは著者の考按を標註してゐる。右のうち傍註は、人名・人の應對・文意・略解等を記し、頭註は、考證を要するものを集めた。【價値】本居宣長が、「玉の小櫛」に「今の世の中にあまねく用ふるは湖月抄なり。げにこの抄はさきさきのもろもろの抄どもをあまねくよきほどに頭と傍とに引出で、師説今案をもまじへ、すべてよるにたよりよきさまにぞ書きなしたる」と云つてゐるが、適評である。本書は、廣く古註を集成し、適當に取捨し、本書一冊にて、古註の大意に互らしむる便がある。註釋もまた親切穩健であるが、新説は比較的少い。併し、本書は未だ古典研究の初期の時代に成つたもので、句點の誤り、清濁の不當、假名遣の不正等があり、本文の吟味不足で校訂もたしかでなく、且つ「河海」「花鳥」等より孫引して、原典をきはめないやうな不用意も少くない。「河海」「花鳥」に出た説は、これ等

文庫には四卷本一部と殘闕の二卷本があり、東大國文研究室には内閣文庫本の寫しと第三卷のみの殘闕があり、帝國圖書館には黒川春村藏本系統の十冊にした一本及び四卷本がある。又京大國文研究室本は四卷本の第一及び第三卷のみで、神宮文庫本は同じく第一・第四卷ばかりである。刊本なし。【成立】「風葉

もとから病弱であつたために、間もなく死んだ。内大臣は最愛の子を失つて嘆き悲しみ、健康次第に衰へて行く。關白の若君は、七歳で元服して殿上した歳に内大臣は世を去つたが、生前久しく不和であつた弟の右大將を呼んで亡き後の事を頼む。やがて右大將は内大臣に進む。翌年西院の姫君六歳で裳着あり、

のために自身への非難も罪も受けようと、内大臣にその姫君を求めぬ。内大臣もせん方なく承諾して歸る。丁度右大臣の姫君が入内して麗景殿に入つたので、この間に事を行はうとするが、東院の上はこの事を嫉んで、弟の中納言に姫君を奪ひ取らせようとする。ところが間違へて帥宮の上を盗み出す。中納言

老の身を嘆きながらも、遺子に關白を譲るまではと思つて只管その成長を待つてゐる。弘徽殿の女宮も同じく世をはかなみ、嵯峨の院に移つて入道する。東院の上の弟中納言に奪はれた帥宮の上は、隠された双生児の姉の方を引取つてゐたが、悲しみのために死に、この姫君は、式部卿官方に住む母君の伯母對の君

に引き取られて養はれる。此處には帥宮上の妹君の十七になるのがあつて、仲よく暮してゐる。右大將の男君は段々成長して位も進み大納言兼大將になる。姫君は宮中で二の宮兵部卿官と共に育てられてゐたが、漸く長すると共に、宮は姫君を慕はれるやうになるが、姫君は裳着の後東宮に參ることに定まる。兵部卿官には式部卿の姫君をと定まる。されどその後宮の御心なほ止まず、遂に或るもの紛れに一度會ふ事がある。これに依つて女御は懐妊し、やがて男宮を産むが、その御形は兵部卿官によく似てゐる。關白は位を大將に譲り、北の方と共に出家する。宮は對の君に養はれる帥宮の姫君が東宮の女御に似てゐるので、これに通ひ、段々足繁くなると共に、式部卿官の上はこの姫君に辛く當り出す。遂に懷妊の身で、ゆかりある住吉の尼の許へ逃れ、此處で男子を産んで亡くなる。兵部卿官はその後嘆きのために病となり、住吉の神託によつて、我が子を引取る事が出来たが、御見舞の行幸があつた翌日遂にはかなくなる。冷泉院も崩ぜられ、主上禪讓あつて三條院に居られ、女御は中宮となる。然るに九月頃から御惱にかゝられ祈禱も甲斐がない。時に何處からともなく怪しい僧が出て祈ると、兵部卿官の御靈が現はれて消え去る。女院は思ひ當る事あつて今更後悔される。併し中宮の病は平癒して、僧は又何處ともなく去つて行つたが、殘した歌によつて右大將入道と解る。入道は佛の示現によつて御子の病を癒したのであつた。けれどその後も入道の行方は知られなかつた。

【構想】本篇を貫くものは、人生無常の思想である。前半の女主人公たる大將北の方は幼く母に死に別れ、繼母の手を逃れて榮ある地位に登つたのも東の間、弘徽殿の女宮の降嫁の事起つて、そのために病になり、幼い二兒を残して死ぬ。大將は行く行くは關白ともなるべき一生を捨てて若の衣の變つた姿になる。後半の主人公たる兵部卿官は一緒に育つた大將入道の姫君を戀して戀を得られず、せめて貌の似てゐるので通つた帥宮の姫君は、又孤獨の身を悲しんで住吉に逃れ、やがて死ぬ。かくて兵部卿官も遂に同じく亡き人の數に入る。かやうに無常のみを主題とし、これに利生説話、繼子説話、戀愛談を配して一篇が出来てゐる。物語の本筋ではないが、奪ひ取られて悲しみの中に死んだ帥宮の北の方及び住吉で死んだその子の事も亦哀れ深い。それから大將北の方が弘徽殿の姫君の降嫁の事に依つて惱むのは、源氏に女三の宮を賜はらうとして紫の上が悲しみ遂にはかなくなるのと似てゐる。又兵部卿官と梅壺の女御の事は源氏と藤壺の關係に似てゐる。その他、源氏の影響を多く見る事が出来る。又繼子の條では卑しき者ではなく、弟に盗ませるのだが落窪、住吉などにありふれた構想で、ただこの方が時代が下るだけに道徳的になり、身代りを盗む事とし、又東院の上が後悔してゐる。後章の帥宮の姫君が周圍を憚つて住吉に逃れるのは「住吉物語」に端を得てゐるらしい。一般に同じ説話ながら悲觀的厭世的になり、一面宗教的・道徳的になつてゐるところは、鎌倉時代文學の特徴をよく現はしてゐる。【批評】中世思潮を以て一貫したところに本書の價值がある。文章は流麗であるが、構想としては明かに前半と後半とに別れ、その間には單なる時間的の關係よりないのは小説として失敗である。併しこのやうに三代の人生を描いて、隆

替興亡を示したところに、人生無常の感を抱かせること一層深いものがある。【大野木】
語源 ごげん 言語學【名稱】【英】etymology【獨】Eymologie【佛】étymologie【解説】一つの單語の起原及び歴史。これを對象とする言語の歴史的研究の一部門(言語學参照)を語源學と云ふ。例へば「たけのこ」(筍)といふ語は、別に「竹の子」の二といふ語があるので、その連想上「竹の子」といふ合成語である事は、言語研究専門家でなくとも、通常の人の語源的意識で分る。英語の shepherd (羊飼) は、sheep (羊)と herd (家畜・世話人)との合成であることも、少しく考へれば容易に分る。これは語の外形(音聲)に於て多少變化してゐるが、意義の上から容易に連想を喚起し得るからである。しかし lord (貴族・主人)のやうな語は、もはや常識的語源意識が無い。この時は古語に遡ると、中期英語に loved の形があり、古代英語に luford の形があるのを發見し、これが結局 luf (ハン・食物)と word (守護者・世話人)との合成語で、「一家の主人は食物の世話をする人、家族を養ふ人」の義から出てゐることを知る。故に或る單語の語源を調査するには、先づその國語の最も古い時代から各時代に互つて、外形と内容と両面より考へなければならぬ。殊に外形に於て音聲法則(別項)を十分参考しなければならぬ。且つ「ねずみ」(鼠)は「不寢見」又は「盗み」の轉であるといふ如き、二三の單語の偶然的類似のみを考へるのは、非科學的である。多數の語を参考して音聲法則を發見し、これを基としなければならぬ。また同國語中の最古の文獻に徴する外、同國語中の各地の方言を参考すること、及び同じ語族(別項)に

屬する他の國語との比較をなすことも必要である。
【参考】W. W. Skeat: Science of Etymology. Oxford. 1912. 【神保】
語源學 ごげん 「語源」を見よ。
五元集 ごげん 俳諧集四冊【編者】小栗旨原【名義】延寶・天和・貞享・元祿・寶永の五元に互れる其角の發句を集めたものであるから、かく題したのである。旨原の序に、「長慶集・元亨釋書などときこえしは、集編なりたるその年の號をやがて名となむせられたり。これは延寶に初りて寶永に終る。その間五元をあらためたるが故なりかし」とある。【刊行】延享四年【諸本】版本には江戸の書林竹川藤兵衛本と前川六左衛門本とある。其角全集(俳諧文庫)・其角全集(勝峰晋風編)・元祿名家句選(俳書大系)所收。【内容】本書は「五元集」一冊の「おのがね鶏合」より成り、元・亨・利・貞の四冊にわかれてゐる(俳諧文庫の其角全集本には「おのがね鶏合」が省かれ、元祿名家句選には「五元集」のみが収められてゐる)。即ち元・亨の二巻は「五元集」で、もと其角が自撰稿本八十八葉を一冊として置いたので、其角の自序がある。或る神社(芝神明宮)に仕へる大徳の愛蔵に係るものであつたが、旨原、その傳來者に懇望して漸く手に入れ、初め、その書寫を燕村に依頼したのであつたが、燕村、約を果さず、遂に編成をして一點も違へず寫させて刊行したのである。句數一千餘句、四季に分れてゐる。利の「おのがね鶏合」は鬪鶏の戯に因んだ句合で、元來七十番の句合であるもの、後半、三十六番以下を採つたのである。作者に其角・辰下・百之・習魚・雪花・何虹・焉子・每閑等がある。(「おのがね鶏

合「の前半は「類柑子」(別項)に収められてゐる。貞の「五元集拾遺」は、發句六百四十句、鉢た、きの歌一章、唱句十句、狂歌六首を含み、旨原の序がある。この序によると、「本集は其角の自書讀や醉吟や柳巷の曉、旅店の暮のよみすてなどを旨原が拾つたものである」とある。なほ旨原は、延寶より寶永に至る其角の附句一千一百六十五句をあつめて、寶曆二年「續五元集」(三冊)を刊行してゐる。また、由誓の「五元集脱漏」(俳諧文庫其角全集所収)もあつて、發句百三十一句を集め、句の上に出典を記し、四季に分類してある。【價值】其角自選の「五元集」は、古い時代には俳人の自選句集の極めて乏しい中の一であることと、自選なる確實性とに於て價値を拂ふべきものである。且つ僅かながらも自註も加へられてゐるので、取意にも助けられる。それに「拾遺」や「脱漏」を加へると、其角の作句は殆ど網羅されることになるので、其角の俳句研究には多大の便宜を與へられる。蕪村の「新花摘」(別項)に、「五元集」の句の質や蕪村が謄寫し得なかつた事情を述べてゐるから、参照すべきである。

【参考】晋子發句撮解 莊丹 ○晋子五元集句解 文來庵 ○露陀羅尼參松 ○五元集拾遺頭註 晋如 考 ○其角俳句評釋 河東碧梧桐 ○其角研究 葵川 鼠母等 ○其角の名句 岡倉谷人 ○五元集全解 岩本梓石 ○旨原評註 五元集 牛門 【蘇原 志田】

五元集拾遺 續註「五元集」を見よ。虎關師鍊に就て「師鍊」を見よ。語源俗解に就て「音聲變化」を見よ。

古言梯 語學書一卷 【著者】榊取彦彦【成立】明和元年八月【諸本】初版本は明和二年五月刊行。加藤宇萬伎の序(明和二年四月)賀茂眞淵の跋がある。次いで「古言梯再考全」が出で、次いで寛政七年に村田春海が增訂し、享和二年に清水濱臣が增訂して「古言梯再考」と題するものが出た(文政三年十二月再刻)。これには清水濱臣の跋がある(文政四年三月附)。また山田常助が增訂した「論古言梯

新葉のつぼみ 地音門に入
ありては水の音もさかき
いへりては風の音もさかき

其角

(文 序) 集 元 五

五元集 其角の賀一(彦彦)の跋
加藤小松 祝言を奉る
んりては風の音もさかき
いへりては水の音もさかき
ありては水の音もさかき
いへりては風の音もさかき

年四月)賀茂眞淵の跋がある。次いで「古言梯再考全」が出で、次いで寛政七年に村田春海が增訂し、享和二年に清水濱臣が增訂して「古言梯再考」と題するものが出た(文政三年十二月再刻)。これには清水濱臣の跋がある(文政四年三月附)。また山田常助が增訂した「論古言梯

標註が出た。この外に「掌中古言梯(藤重臣補文化五年刊)」「袖珍古言梯(天保五年刊)等がある。【内容】本書は假名遣辭書といふべきものである。著者は假名遣研究に於ける契沖の「和字正濫抄」(別項)の功を賞讃し、その足りない所を補ひ、誤を訂したのであつて、古書から假名遣の證據となるもの千八百八十三言を抜き出し、悉くその出所を擧げて根拠を示してゐる。著者が引用した古書は、「古事記」「日本書紀」「續日本紀」「續日本後紀」「祝詞」「宣命」「萬葉集」「新撰萬葉」「新撰字鏡」「和名鈔」(各別項)等を初め、「風土記」「神樂」「催馬樂」「古今集」(各別項)、その他古い物語類である。これ等から抽出した語を五十音順に排列した。契沖の「和字正濫抄」は、根據たるべき實例を擧げなかつたため、十分人をして服せしめることの出来ぬ憾みがあつたが、魚彦は確實な資料を用ひて、古代の文獻に基く假名遣の法を大成したのであつて、本書は假名遣研究史の上にも假名遣法の上にも一時期を劃するものである。【影響】本書出づるに及んで、一般學界は歴史的假名遣の據るべきものであることを覺り、爾來一般に歴史的假名遣が用ひられるやうになつた。本書の版本は、前記の如く數種あり、又增補訂正した人も數人に及んでゐることは、本書が如何に世に行はれたかを證明するものである。【編出】

國學に關する隨筆で、神道・國語・國文・古史についての考證が多い。上卷に五十連音・ん文字・冠辭・阿志比伎・比佐加多・佐藤饑泥・伊呂波・旅行以前爲門田・眞似・道祖神・敏太神社・比佐豆知神社・湯立・煤拂・地獄の沙汰も金次第・布久津武・幸伊勢國・波多横山・渡唐天神・須利波太古の二十項、下卷に長瀬神社・御饌殿・寶木・秋茄子嫁に不食・加太古・天狗・萬葉集撰加・赤染衛門・百人一首・蘭茹・草頭藥六代御前碑・葬儀・忌日の十四項を收め、一々の考證は精細に互つてゐる。【和田】

【和語】隨筆 四卷 【著者】摩島長弘(京都の人) 【刊行】弘化三年 【解説】漢文の隨筆で、和漢先儒の言を引いて學術・文章・禮樂・政治を論じ、史上人物を月旦し、見聞雜事を記し、又自己の經歷及び所懷を敘する等頗る雜駁である。卷一に自家立志から清儒學問まで、卷二に劉禹錫・張方平論文から隋煬帝著述まで、卷三に讀書三思から居父母喪まで、卷四に摩島悅翁詩から元遣臣蔡子英まで、各數十條を收めてゐる。天保三年著者の自序がある。【和田】

成分になつた事は、多くの場合、形の上には現はれるのであつて、「(一)ひつばる」「引張」「うつつ」「討手」「あきうど」「あきんど」「商人」、「くらうど」「くらんど」「藏人」等の如く、促音便ウ音便又は撥音便を生じ、或は(二)「くまんばち」「熊蜂」「さくらんばう」「櫻實」の如く、撥音が加はり、或は(三)尤も普通には「さくらばな」「櫻花」「名だかし」「横ぎる」等の如く、連濁を生ずることがある。複合語の成分となつた單語がもとの單語から孤立する度合が甚だしいが、二重複合語(二重複合語)の如きもの

れないものを他の語に附けて出來たもので、これを由生語又は分出語(共に Derivative の譯語)と云ひ、「(一)の如く他の語の上に附けるものを接頭語(又は接頭辭)」「(二)の如く他の語の下に附けるものを接尾語(又は接尾辭)」といふ。以上の二種は、何れも、獨立し得べき單語を構成要素(成分)として新たな單語が構成せられたものであつて、普通の國文法に於て説くのは、多くはかやうな種類のものに限られてゐるが、その外に獨立して用ひられることがない語根(別項)の如きものを構成要素

成分になつた事は、多くの場合、形の上には現はれるのであつて、「(一)ひつばる」「引張」「うつつ」「討手」「あきうど」「あきんど」「商人」、「くらうど」「くらんど」「藏人」等の如く、促音便ウ音便又は撥音便を生じ、或は(二)「くまんばち」「熊蜂」「さくらんばう」「櫻實」の如く、撥音が加はり、或は(三)尤も普通には「さくらばな」「櫻花」「名だかし」「横ぎる」等の如く、連濁を生ずることがある。複合語の成分となつた單語がもとの單語から孤立する度合が甚だしいが、二重複合語(二重複合語)の如きもの

【接頭語の種類】(一)意義を添へるもの、「は

複合語の成分として、他の品詞の上にあるときは、多く動詞は連用形、形容詞は語幹を用ふるのを通則としてゐる。なほ、一見連語(別項)の如くして熟語と見なされるべきものがある。「天の川」「矢の根」「身の土」「身の代」「茶の湯」「砥の粉」「就中」「然らば」など。これ等はこれを構成してゐる單語からの意義の孤立、音韻變化(連濁など)、アクセントの變化等から觀察しなければならぬ。

【接頭語の種類】(一)意義を添へるもの、「は

情を述べてゐるから、参照すべきである。
【参考】晋子發句撮解 莊丹 ○晋子五元集句解
文來庭○露陀羅尼參松○五元集拾遺頭註晋如
考○其角併句評釋河東碧梧桐○其角研究卷川
鼠骨等○其角の名詞訓倉谷人○五元集全解
岩本梓石○其角評註五元集牛門 「萩原・志田」

年四月、賀茂眞淵の跋がある。次いで「古言梯
再考全」が出で、次いで寛政七年に村田春海が
増訂し、享和二年に清水濱臣が増訂して「古言
梯」考と題するものが出た(文政三年十二月
月再刻)。これには清水濱臣の跋がある(文政四
年三月附)。また山田常助が増訂した「古言梯

【伊勢の人、國學者として聞えた】「名稱」「語語」
と題したのは、著者の本業たる醫術の餘暇に
客と談論した事どもを集録した意と云ふ。外
題に「名鳥隨筆」とあるのは本書の一名と看做
される。【成立】文政九年後藤聖民、同年高橋
知周、同四年柴田以文の三序がある。【解説】

(一)それ以上分解出来ないものがある。語
構成は主として(一)の種類に屬するものにつ
いていふ。【種類】(一)「旅人」「行艱む」など
は、「旅」と「人」、「行く」と「艱む」の如き單語
を合せて一語としたもので、これを複合語又
は熟語といふ。(二)「行く」「こと」などは
「い」「ども」の如く、獨立しては決して用ひら

れないものを他の語に附けて出来たもので、
これを由生語又は分出語(共に Derivative の
譯語)と云ひ、「い」の如く他の語の上に附ける
ものを接頭語(又は接頭辭)、「ども」の如く他
の語の下に附けるものを接尾語(又は接尾辭)
といふ。以上の二種は、何れも、獨立し得べき
單語を構成要素(成分)として新たな單語が構
成せられたものであつて、普通の國文法に於
て説くのは、多くはかやうな種類のものに限
られてゐるが、その外に獨立して用ひられる
ことがない語根(別項)の如きものを構成要素
として構成せられた單語もある。「はるはる」
「はるか」「ひらに」「たひら」など、「はる」「ひ
ら」は語根、「か」「ら」は接尾辭、「た」は接頭
辭。
【以上橋本】

【成立】複合語は二つ以上の單語が合して一
の單語となり、單一の概念を現はすものであ
るが、その現はす意義に至つては、もとの單語
の單なる寄せ集めではない。「花瓶」「花曇」な
ど、いづれも独自の意義を持つもので、或は
「花を挿す瓶」、或は「花の頃の曇」と云ふやう
な意義を現はすが、「を挿す」「の頃の」と云ふ
やうな意義は、もとの「花」が一箇の單語とし
て用ひられた時には、少しも持つてゐなかつ
たものである。「花筏」「花鱈」「花舞」「花火」「花
役者」、それぞれ獨特の概念を現はす複合語
である。分析すればそれ〴〵獨立の意味を有
つてゐるけれども、分析されたものと、複合し
たものとは概念としては全く同じではない。
複合語は形式上から云へば、單語の合したも
のであるが、決して單なる結合ではなく、これ
を構成する單語が合して、單一なる概念を現
はすものである。さうして複合語に於て、もと
の單語が、その獨立を失つて新たな單語の一

成分になつた事は、多くの場合、形の上に現は
れるのであつて、「(一)ひつばる」「引張」「う
つて」「討手」「あきうど」「あきんど」「商人」
「くらうど」「くらんど」「藏人」等の如く、促音
便ウ音便又は撥音便を生じ、或は(二)「くまん
ばち」「熊蜂」「さくらんばち」「櫻實」の如く、
撥音が加はり、或は(三)尤も普通には「さくら
ばな」「櫻花」「名だかし」「横ぎる」等の如く、
連濁を生ずることがある。複合語の成分とな
つた單語がもとの單語から孤立する度合が甚
しくなれば、遂に複合語としての意識を稀薄
にし、學問上の分析の結果にあらざれば、單語
であるか、複合語であるか分らなくなる。特
別の説明のない限り、複合語たること分ら
ぬものは、普通、單語として取扱はれてゐる。
それ故に、單語と複合語との限界は明瞭でな
いと謂つてよい。「なべ」「鍋」「な」「魚」十
「へ」「釜」。「さかな」「魚」。「さか」「酒」十「な」
「魚」。「かなへ」「鼎」。「かな」「金」十「へ」「釜」。
「こけ」「苔」。「こ」「木」十「け」「毛」。「こぶ」
「瘤」。「こ」「木」十「ぶ」「節」。「ちまた」「襦」
「ち」「道」十「また」「股」。「をけ」「袖」。「を」「麻」
十「け」「筒」等を見れば、思ひ半ばに過ぎるも
のがあらう。殊に「むね」「胸」。「む」「身」十
「ね」「根」。「あかつき」「曉」。「あか」「明」十
「とき」「時」。「おとつと」「弟」。「あと」「後」十
「ひと」「人」等、形態上著しい變化を生じてゐ
るものに至つては、いよゝゝ複合語であるこ
とが分りにくくなつてゐる。更に進んで「こ
ち」「東風」などに至ると、「はやて」「疾風」。「ち
ぎ」「千木」「風木」などに比べて、「て」「は」「風」
の意味の單語であつたことが分るが、「こ」は
何か分らない。「つむり」「頭」も「あたま」「頭」
と比べて、「つむ」が「たま」「球」と同じ語源

(ama-rumu)と分るが、「り」は何か分らない
やうな古い複合語もある。若しこの場合、單
語の一つがもとの單語の意義を保存すると共
に、他の成分が抽象的の意味を生じて比較的
自由に用ひられる場合、前者に對して後者は
接頭語、もしくは接尾語となる。例へば複數
を現はす接尾語の「ども」は、もと「とも」即ち
「伴侶」の意味の名詞であつた類で、接頭・接尾
語は概ねこの種のものと思はれるが、その總
てがこの過程を取つて出来たものとは今日ま
だ斷言出来ない。接頭語のうち、單に語調を
整へるため、もしくは全然意義なくして添へ
たものと見えるものを、發語と稱することが
ある(疊語別項)は熟語の特例で、性質は熟語
に同じ。

【複合語の種類】(一)名詞「草木」「春風」(名
十名)。「山遊」「跡取」(名十動)。「目白」「足弱」
(名十形)。「受取」「捨賣」(動十動)。「落葉」「狩
人」(動十名)。「賣高」「待遠」(動十形)。「遠淺」
「赤黒」(形十形)。「高山」「嬉し涙」(形十名)。
「黒光」「高飛」(形十動)。三語以上のものも複
合の形式は同じ。(二)代名詞「わ君」「わぬ
し」「こやう」「そやう」「かやう」「きやう」(代
十名)。(三)動詞「心ざす」「夢見る」(名十
動)。「追拂ふ」「探し廻る」(動十動)。「近附く」
「長引く」(形十動)。(四)熟語の形容詞「名
高し」「心細し」(名十形)。「泰暑し」「讀易し」
(動十形)。「淺黒し」「暑苦し」(形十形)。(五)
熟語の副詞「誠に」「もとより」(名十助)。「總
べて」「試みに」(動十助)。「とくに」「よくも」
(形十助)。「たゞに」「さぞ」(副十助)。(六)熟
語の接續詞「並びに」「道つて」(動十助)。
(七)助詞「にて」「にして」「とて」「として」
「かは」「やは」「がも」「がな」。動詞・形容詞が

複合語の成分として、他の品詞の上にあると
きは、多く動詞は連用形、形容詞は語幹を用ふ
るのを通則としてゐる。なほ、一見連語(別項)
の如くして熟語と見なされるべきものがある。
「天の川」「矢の根」「身の上」「身の代」「茶の湯」
「砥の粉」「就中」「然らば」など。これ等はこれ
を構成してゐる單語からの意義の孤立、音韻
變化(連濁など)、アクセントの變化等から觀
察しなければならぬ。
【接頭語の種類】(一)意義を添へるもの。「は
つ」「はつ春」「うひ」「うひ陣」「にひ」「にひ參
り」「おほ」「み」「おほみ」「おほん」「おん」「お
り」「おほ君、お話」「こ」「こ山」「す」「す裸」
「き」「(生紙)」「こと」「(異人)」「えせ」「(えせ法師)
「もろ」「(もろ人)。(二)殆ど意義なく、まゝ、語
勢を添へると見えるもの。いづれも動詞より
轉じて獨立を失つたものである。「うち」「(う
ち聞く)」「さし」「さし覗く」とり「とり亂す」
「たち」「たち別る」「もて」「もて惱む」「あひ」
「相構へて」。(三)意義なき短小なる語形のも
の。語調を整へると見えるものもある。發
語。「さ」「(さ夜)」「み」「(み山)」「を」「(小野)」「け」
「(け)壓さる」「た」「(た隣)」「ま」「(ま心)」「か」「(か
よわし)」「い」「(い)坐す」「そ」「(そ)叩く」。
【接尾語の種類】(一)意義を添へるもの。「ど
も」「(私)ども」「(我)ら」「(貴)方」「(貴)方」
「(私)たち」「(殿)ばら」「(少)尉」
「の」「(さま)」「(佛)さま」「(叔)父さん」「(き)み」
「(兄)ぎみ」「(父)うへ」「(父)うへ」「(父)うへ」
(伊藤)うぢ。その他助數詞「數詞」参照。(二)
造語の用をなすもの。イ名詞を作るもの。「さ」
(高さ)。「み」「(深)み」「(寒)け」「(雪)け」。
ロ動詞を作るもの。「めく」「(時)めく」「めかす」
(今)めかす。「(寒)がる」「(古)ぶ」「(古)ぶる」

(學者ぶる)「ばむ(けしきばむ)」「だつ(頭だつ)」。形容詞を作るもの、「けし(露けし)」「らし(男らし)」「らし(子供らし)」「がまし(をこがまし)」。副詞を作るもの、「げ(うれしげ)」「ら(きよら)」「ら(高らか)」「や(花やか)」「さ(面白さ)」「づ(少づつ)」「がて(行きがて)」「がてら(見がてら)」。以上小林

【初演】文久三年八月、江戸市村座。
【名稱】俗に「腕の喜三郎」。時として「昔江戸小腕達引」の名稱に據つても上演せられた。
【作者】二代河竹新七(黙阿彌)。
【名稱】俗に「腕の喜三郎」。時として「昔江戸小腕達引」の名稱に據つても上演せられた。

【梗概】「序幕」神崎甚内の道場を喜三郎の子分の者が覗いて批評したのを門弟共が怒り、小頭の曙源太に難題を持ち掛けて打据えようとしたが、却つて散々にやられる。甚内の留守を預つてゐた高弟大鳥逸平は抜打にしようとしたが、二見重三郎に留められ、源太の額を割つて放つ。そこへ子分の知らせで駈附けた喜三郎は、源太を初め子分の者達を歸して詫び入るが、逸平に勝負を迫られ、已むを得ず相手となり、逸平に打込まうとした時、甚内が現はれて喜三郎を打据ゑる。喜三郎は以前甚内の門弟で眞影流の奥儀まで傳授されたのであつたが、甚内の腰元小磯と通じ姿を晦ましてから師弟の縁を切られてゐたので、甚内の道場と知らずに来たことを述べ、只管に勘氣の赦免を乞ふが許されない。逸平は甚内

の娘お照に想を寄せるが容れられないので、お照から重三郎へ宛てた手紙を證據に二人の不義を言ひ立てる。甚内は既に二人の仲を知つてゐて、夫婦となして跡を相續させようと思つてゐたのであるが、逸平に荒立てられたので、已むを得ずお照を手討ちしようとする。けれども喜三郎の命乞ひで、お照と重三郎とは勘當される。「二幕」殿の懇望によつて甚内が献上した眞影流奥儀の一卷は、御寶藏から何者かに盗み去られる。喜三郎は今後喧嘩をしないといふ證據に右腕を斷ち切つたので、女房のお磯と共に甚内から勘當を赦され、奥儀の祕書左劍の一卷を譲られる。逸平は門弟から喜三郎が喧嘩をしない誓を立てたと聞いて、遺恨の仕返しに喜三郎を散々に打擲する。それを見たお磯の弟曙源太は、自分の喧嘩がその原因になつた事を思ひ、心にもない愛想盡かしを言つて兄弟の縁を切り、その仕返しに行かうとするが、喜三郎にその心底を看破される。お照は自分のために喜三郎が難儀を受けることを心苦しう思ひ、喜三郎の家から重三郎と一緒に逃げ出すが、途中で逸平一味の者共に引渡される。子分の者からかくと聞いた喜三郎は、後事を小頭の紅絹裏甚三に託し、死を覚悟して跡を追ふ。「三幕」逸平の一味は新大橋まで来て、お照を深川の別荘へ送つてから、喜三郎の子分の者を待ち受ける。そこへ仕返しに行かうとする源太とそれを追ひ掛けた幻長藏が來、續いて喜三郎も駈附ける。逸平は喜三郎と渡り合ふうち懐中から眞影流奥儀の一卷を落し、喜三郎はそれを拾つて結局逸平を斬り倒す。そしてその一卷を甚内へ届けてくれと源太へ渡し、切腹しようとする時、繩に掛つた甚三が現はれ

てそれを留める。甚三・源太・長藏の三人は、喜三郎の身代りとなつて人殺しの罪を引受けようとするが、喜三郎はそれを制して自害しようとする。そこへ甚内が駈附けて、逸平は眞影流奥儀の一卷を奪つた盗賊であるから、殺しても差支ないことを告げ、お照も途中で助けて、そこへ來合せて重三郎と共に知邊へ預けて來たと語る。そして奥儀の一卷が甚内の手に入つたことから、お照と重三郎も勘當を赦され、夫婦となつて神崎の家督を嗣ぐこととなる。

【批評】「御所の五郎藏」と共に、先代小團次の演出した代表的の俠客劇で、小ぢんまりとして引きしまり、よく男達の特色を描き出してゐるのは、この作のいゝ所である。

【参考】河竹黙阿彌河竹新七(黙阿彌)全集第四卷(續々歌舞伎年代記) (河竹)

【諸本】黙阿彌全集第四卷所収。【題材】講談に據つたもの。
【梗概】「序幕」神崎甚内の道場を喜三郎の子分の者が覗いて批評したのを門弟共が怒り、小頭の曙源太に難題を持ち掛けて打据えようとしたが、却つて散々にやられる。甚内の留守を預つてゐた高弟大鳥逸平は抜打にしようとしたが、二見重三郎に留められ、源太の額を割つて放つ。そこへ子分の知らせで駈附けた喜三郎は、源太を初め子分の者達を歸して詫び入るが、逸平に勝負を迫られ、已むを得ず相手となり、逸平に打込まうとした時、甚内が現はれて喜三郎を打据ゑる。喜三郎は以前甚内の門弟で眞影流の奥儀まで傳授されたのであつたが、甚内の腰元小磯と通じ姿を晦ましてから師弟の縁を切られてゐたので、甚内の道場と知らずに来たことを述べ、只管に勘氣の赦免を乞ふが許されない。逸平は甚内

【批評】人間の心の本質を自我主義と見て、それを本來の姿に於てさらけ出さうと企てた一つのテストである。それは人間の所有慾に於て現はれ、又戀愛の形でも現はれる。作者のこれ以前の作品に比して、一層深く内側へ入り込んであるが、併しその表はし方は作者のこれ以後の作品に比してまだ幾らか概念的であることを免れない。主題は人間のエゴイズムの醜さの暴露で、絶望的な色調が行き互

【参考】河竹黙阿彌河竹新七(黙阿彌)全集第四卷(續々歌舞伎年代記) (河竹)

【批評】人間の心の本質を自我主義と見て、それを本來の姿に於てさらけ出さうと企てた一つのテストである。それは人間の所有慾に於て現はれ、又戀愛の形でも現はれる。作者のこれ以前の作品に比して、一層深く内側へ入り込んであるが、併しその表はし方は作者のこれ以後の作品に比してまだ幾らか概念的であることを免れない。主題は人間のエゴイズムの醜さの暴露で、絶望的な色調が行き互

らしく、爾來今日に至るまで各種の本が刊行せられ、一々枚舉するに違がない。叢書に收められたものだけでも、古くは群書類従本、近くは岩波文庫・日本文學類從・日本國粹全書・國民思想叢書等の多數に上つてゐる(但し、後三者は假名交り文)。大正十三年には英譯も出版せられ、同十四年には尊經閣叢刊として、前田侯爵家の亮順本が原本通り複製刊行された。【解説】別に章節の分ちはない。先づ神代の昔に筆を起して、齋部氏の祖神天太玉命が天照大神の窟戸隱、天孫の降臨等に際して樹てた功業を記し、次にその孫天富命が神武天皇に仕へた有様、一族の諸國に蕃衍した事情を述べ、以て齋部氏の地位・功績の決して中臣氏に劣るものでなかつたことを強調してゐる。次いで神武天皇以來の大體の歴史を叙し、孝徳・天武の朝の交より齋部氏漸く衰へ、遂に現在に於て古制の遺却せられること、十一條に及ぶ由を擧げて一篇を結んでゐる。【價值】古くから神道書として尊ばれたことは古寫本に見える多くの奥書によつても知られるが、現在では、紀・記に漏れた上古の遺聞を存する古典として重んぜられる。もとゞゞ撰進の動機から言つて、その齋部氏に關する部分には舞文誇張の跡を認めねばならないが、齋部氏の東國拓殖、三藏の分立等は、古くより本書のみの傳へた事實として學界に喧傳されたことである。なほその他の記事に於ても、本書が我が古代史に對して、多くの示唆を與へ得べき點がある。【註釋書】古語拾遺句解藤原齊延(元祿十一年刊)○古語拾遺言餘鈔龍野經近(寶曆十一年刊)○標註古語拾遺村上忠順(明治八年刊)○古語拾遺講義久保季茲(同十六年刊)○古語拾遺新

【参考】河竹黙阿彌河竹新七(黙阿彌)全集第四卷(續々歌舞伎年代記) (河竹)

【批評】人間の心の本質を自我主義と見て、それを本來の姿に於てさらけ出さうと企てた一つのテストである。それは人間の所有慾に於て現はれ、又戀愛の形でも現はれる。作者のこれ以前の作品に比して、一層深く内側へ入り込んであるが、併しその表はし方は作者のこれ以後の作品に比してまだ幾らか概念的であることを免れない。主題は人間のエゴイズムの醜さの暴露で、絶望的な色調が行き互

註池邊眞慶(昭和三年刊)
【参考】古語拾遺の研究 津田左右吉(史學雜誌三九)

思へぬ生活の中に少しづつ入り込んで行き、先生の孤獨な淋しい境涯に同情しながら不審を懷き、次第にその人間嫌ひな厭世思想の根本をつき留めようとして、遂に先生をして適當な時機が來たら過去の歴史を告白しようと思はせ

【批評】人間の心の本質を自我主義と見て、それを本來の姿に於てさらけ出さうと企てた一つのテストである。それは人間の所有慾に於て現はれ、又戀愛の形でも現はれる。作者のこれ以前の作品に比して、一層深く内側へ入り込んであるが、併しその表はし方は作者のこれ以後の作品に比してまだ幾らか概念的であることを免れない。主題は人間のエゴイズムの醜さの暴露で、絶望的な色調が行き互

【批評】人間の心の本質を自我主義と見て、それを本來の姿に於てさらけ出さうと企てた一つのテストである。それは人間の所有慾に於て現はれ、又戀愛の形でも現はれる。作者のこれ以前の作品に比して、一層深く内側へ入り込んであるが、併しその表はし方は作者のこれ以後の作品に比してまだ幾らか概念的であることを免れない。主題は人間のエゴイズムの醜さの暴露で、絶望的な色調が行き互

一聞夫開闢之初伴將諾伴英三神
共為夫婦生大八洲國及山川草木
次生日神月神宸後生素養為尊而

元 青年は重病の父を看護するため大學を卒業すると

【批評】人間の心の本質を自我主義と見て、それを本來の姿に於てさらけ出さうと企てた一つのテストである。それは人間の所有慾に於て現はれ、又戀愛の形でも現はれる。作者のこれ以前の作品に比して、一層深く内側へ入り込んであるが、併しその表はし方は作者のこれ以後の作品に比してまだ幾らか概念的であることを免れない。主題は人間のエゴイズムの醜さの暴露で、絶望的な色調が行き互

【批評】人間の心の本質を自我主義と見て、それを本來の姿に於てさらけ出さうと企てた一つのテストである。それは人間の所有慾に於て現はれ、又戀愛の形でも現はれる。作者のこれ以前の作品に比して、一層深く内側へ入り込んであるが、併しその表はし方は作者のこれ以後の作品に比してまだ幾らか概念的であることを免れない。主題は人間のエゴイズムの醜さの暴露で、絶望的な色調が行き互

内が現はれて喜三郎を打据ゑる。喜三郎は以前基内の門弟で眞影流の奥儀まで傳授されたのであつたが、基内の腰元小磯と通じ姿を晦ましてから師弟の縁を切られてゐたので、甚内の道場と知らずに来たことを述べ、只管に勘氣の赦免を乞ふが許されぬ。逸平は甚内

それを追ひ掛けた。長藏が來、續いて喜三郎も駈附ける。逸平は喜三郎と渡り合ふうち懷中から眞影流奥儀の一卷を落し、喜三郎はそれを拾つて結局逸平を斬り倒す。そしてその一卷を甚内へ届けてくれと源太へ渡し、切腹しようとする時、繩に掛つた甚三が現はれ

は、吉田子爵家の所蔵する嘉祿元年書寫の奥書あるものであり、次は前田侯爵家所蔵の元弘四年書寫の奥書ある亮順本である。前田侯爵家には、なほ二種の古寫本を蔵し、その他諸所に多くの寫本が存してゐる。刊本では、元祿九年大伴重堅の跋を持つものが最も古い

我が古代史に對して、多くの示唆を與へ得べき點がある。【註釋書】古語拾遺句解藤原齊延(元祿十一年刊)○古語拾遺示蒙節解高田末白(寶永六年刊)○古語拾遺言餘鈔龍野輝近(寶曆十一年刊)○標註古語拾遺村上忠順(明治八年刊)○古語拾遺義久保季茲(同十六年刊)○古語拾遺新

註池邊眞經(昭和三年刊)
【參考】古語拾遺の研究 津田左右吉(史學雜誌三九)

思へぬ生活の中に少しづつ入り込んで行き、先生の孤獨な淋しい境涯に同情しながら不審を懷き、次第にその人間嫌ひな厭世思想の根本をつき留めようとして考へて、遂に先生をして適當な時機が來たら過去の歴史を告白しようと思はせ

てあつた。【批評】人間の心の本質を自我主義と見て、それを本來の姿に於てさらけ出さうと企てた一つのテストである。それは人間の所有慾に於て現はれ、又戀愛の形でも現はれる。作者のこれ以前の作品に比して、一層深く内側へ入り込んであるが、併しその表はし方は作者のこれ以後の作品に比してまだ幾らか概念的であることを免れない。主題は人間のエゴイズムの醜さの暴露で、絶望的な色調が行き交つてゐる。これが次の「道草」(別項)になると、運命に對する一種のあきらめとなり、最後に「明暗」(別項)に於ては、更に高い所から見た憐愍の情で統一されるやうに進んで行つたのである。

らず、淋しきの餘り、もと腰元で譯のあつた娘を尋ねて千住に行き、今鈴名屋でおころと名乗り、遊女となつてゐると聞いて赴くと、巻衣がお鈴と改名してそこにゐるのに測らず再會した。おころはお鈴と松壽との私語を聞き、嫉妬の餘り、有節に密告した。有節は早速來て、一時なりとも男を立て、くれれば思ふ人と夫婦にしてやると欺いて、お鈴を身請し自宅で虐待する。その境遇に同情した下男頼作がお鈴を救ひ出し、伯母の家に置く。お鈴は病んで寝ついた。一方失望した松壽はおころに慰められて通ふうち、おころの懷に赤蛇の出入するのを目撃する。お鈴の生靈のせむである。有節はおころの親切を想ひ起し同じく通ふ。松壽はおころへの戀もさめ行くうち、親の知行所上總市見郡へ追ひやられた。お鈴は病氣全快し、松壽の在所を尋ね知り、そこへ赴く船中に、同國修行者に扮装した孫六がゐた。お鈴は途中で數人の惡漢に捉へられんとしたのを孫六に救はれた。おころも松壽を慕つてこゝに來たが、孫六が説諭して連れ歸り、お鈴は松壽と陸まじく同棲した。父松太夫が大病の通知が來たので松壽は郷里へ歸つた留守中、お鈴は偽手紙を信じ再び惡漢の手に落ちんとした折、これまで度々親切を見せた白藤源太に救はれた。やがて松壽はお鈴を迎へて妻とし、おころは松壽を諦めて有節の妻となり、お鈴の兄蜘蛛八は度々子分の惡漢を使つてお鈴を金にしようとして企ててゐたが、技に前非を悔い、僧となつてしまつた。

舊説散以上聞ふ余

一聞夫開闢之初伴特諾伴共三神

共為夫婦生大八洲國及山川草木

次生日神月神宿後生素戔嗚尊而

素戔嗚神常以央流為行政令人民

友打青山變枯因斯父母二神勅曰

汝甚無道宜早退去於根國矣又天

地割判之初天中不生之神名曰天

御中主神其子有三男長男高皇

產靈神 古語多賀美武項此是為鸚鵡神
御中主神 是為皇親神御中主神
次津速產靈神 是天兒生令中臣朝臣手

心こころ 小説

【作者】夏目漱石 【發表・刊行】大正三年四月二十日から八月十一日まで朝日新聞(東京・大阪)に連載。同年十月作者自ら裝幀して刊行。漱石全集第六卷・同普及版第九卷所収。

【梗概】上篇「先生と私」——説話者なる一青年が如何にして海水浴場で廣田先生と相知るやうになつたか、如何にして東京に歸つてからその家庭に出入するやうになつたか、から説き起し、廣田先生と細君との間の、決して仲が悪いのではないが、さればとて幸福とも

「先生と遺書」——書留郵便は先生の遺書であつた。今まで秘密にされてゐた先生の過去がその中に詳しく語られてあつた。彼が如何にして伯父に財産を横領されたか、如何にして人を信用しなくなつたか、如何にして下宿の娘と戀に落ちたか、如何にして友人Kとその戀を争つたか、如何にしてKは自殺したか、如何にして罪惡の觀念を深刻に味ふやうになつたか、如何にして最後の自己救済の手段として、彼自身もまた死を決するやうになつたか、その間の心的經過が委曲を盡して記され

【梗概】北里瀬戸町(江戸町)二丁目松金屋の遊女巻衣に情人があつた。ね越(根岸)の里に住む尾形松太夫の息松の介、俳名を松壽と云ふ者である。竹の塚の豪農俳名有節と云ふ者も同じく通ひ、互に競争したが、有節は遂に巻衣を身請する事になつた。巻衣、松壽と謀し合はせ、兄蜘蛛八に十兩を與へ、途中で自分を奪はせ、そして松壽と墮落する計畫であつたが、蜘蛛八は妹を奪ふと舟でへな川(品川)に連れ行き、口入屋孫六の媒で鈴名屋四郎兵衛方へ賣つてしまつた。松壽は巻衣の行方がわか

【梗概】依然として洒落本の名残を留めて、遊廓の穿ちなどがある。松壽に對するお鈴、おころの戀の競争もかなり深刻惡辣で、生靈の祟りまで用ひてある點は、彼の作「廓雜談」(別項)

に似てゐる。有節の變態的な執着心などもかなり特色あるものである。

【山崎】
心謎解色絲

十四場 世話物 【作者】四代鶴屋南北 【通稱】お祭左七。本町糸屋娘 【別名題】誰かお祭左七。本調子音色。【興行】文化七年正月十五日初日。江戸市村座上演「春榮松會我」第二番目。

【役割】齋の者お祭左七（尾上松助）、半時九郎兵衛（五代松本幸四郎）、本庄彌五郎（三代坂東三津五郎）、糸屋娘お房（九郎兵衛女房お時）（五代岩井半四郎）、安野屋十兵衛（助高屋高助）、齋者中根屋お糸（二代澤村田之助）、神原屋左五郎（七代市川團十郎）、齋の者風の神喜左衛門（尾上松緑）、糸屋番頭佐五兵衛（澤村四郎五郎）、山住五平太（市川宗三郎）、石塚彌三兵衛（市川門三郎）、家主栗島権兵衛（坂東善次）、糸屋後家おりの（芳澤翠いろは）、松本女房お葛（小佐川七蔵）、醫者百川東林（松本小次郎）、十兵衛女房おら（市川團之助）。

【梗概】「序幕」（深川八幡）齋者お糸の兄、半時九郎兵衛は赤城の家中本庄綱五郎から金を騙らんとして失敗する。（二軒茶屋松本）お糸が借金のために満座の中で襦袢一つにされるのを見兼ねた齋のお祭左七が、夜具をかけてやつたが縁で二人は言ひ交す。石塚彌三兵衛は預かりの小倉の色紙を紛失した科で切腹する破目になったのを綱五郎が身に引請けて浪人する。左七は彌三兵衛の實子なので、色紙詮議に心を砕く。（深川裏手）半時九郎兵衛は金を奪はうとして鳥追娘お君を殺す。山住五平太が落した五十兩を九郎兵衛女房お時が拾ふ。（二幕）（本町糸屋）娘お房は浪人の綱五郎に戀してゐるが、母おりのの勧めでは

非なく神原屋左五郎を聲に迎へる。番頭佐五兵衛もお房を手に入れたく、醫者東林の悪智恵で、後に蘇生させる条件でお房に毒薬を服ませるのでお房は急死する。（糸屋裏手）色紙質請けの金の才覚に苦しむ綱五郎は、お房の棺に百兩を入れて埋めると聞き一思案する。半時九郎兵衛もこれを立聞く。（三幕）（大林寺墓地）佐五兵衛はお房を蘇生させようとして間違へて家主栗島権兵衛の女房を捕へる。綱五郎は金を奪はうとした時、お房は蘇生し、迫られるので連れて立退く。九郎兵衛窺つて



お房の片袖を切る。（四幕）（安野屋）十兵衛の家に預けられたお糸は、女房おらの勧めで、五平太から色紙を奪ひ返すため、心にもなく左七に愛想づかしを言ふ。（洲崎土手）お糸を心變りと思ひ込んだ左七は遂に待ちうけてお糸を殺す。（大切）（小石川極楽水）左七は養父風の神喜左衛門を訪ねて、お糸を殺した事を告白する。（綱五郎住居）綱五郎がお房を匿まうのを知った九郎兵衛は、女房お時を使つて美人局を仕掛け、百兩を奪はうとしたが、十兵衛の話で、お時は綱五郎の許婚と解

り、九郎兵衛も悔悟する。（小石川寺町）綱五郎・九郎兵衛は、五平太・佐五兵衛より小倉の色紙を取返す。

【解説】「色櫻本町育（別項）では二枚目の優男である左七を、勇みの齋の者に改め、深川藝者と並べて江戸人の意気地を見せる趣向は受けつた。お房・綱五郎の件が、沙翁の「ロメオとジュリエット」に相似してゐる點が面白い。左七の性格は巧みに描かれ、縁切りの場など後年の改訂脚本より無理がない。後には左七の件だけ獨立し、又三代河竹新七の改訂を経て、今日の「江戸育お祭左七（別項）」となつた。

心の花

【名義】和歌は人の心の花であるといふ意である。「心の華」とも書く。【解説】佐佐木信綱の主筆する竹柏會（別項）の機關雜誌で、明治三十一年二月の創刊。最初は、石樽千亦と井原義矩とが編輯の任に當り、第三卷第六號からは、岡麓・香取秀

が、現在は、印東昌綱・山下陸奥・兒山敬一・齋藤・栗原潔子・佐佐木雪子等が編輯に與つてゐる。

心の闇

【作者】尾崎紅葉 【發表・刊行】明治二十七年四月、讀賣新聞連載。同二十七年五月春陽堂刊行。紅葉全集第三卷・明治大正文學全集第五卷所收。

【梗概】宇都宮第一の旅籠千束屋へ夜ごと通つて来る盲按摩佐の市は、その一人娘お久米を人知れず戀ひ慕つてゐた。十五の年から十年近くも目をかけられて大事な稼ぎ場としてゐる得意先の、而も名に立つほど器量よしの祕藏娘が、自分のやうな貧しい不具者にどうにもならないのは知りながら、それでもひたすら「命かけても添はねばおかぬ、添はにや生きてる甲斐がない」と唱つて、僅かに鬱憤を洩らさずにはゐられなかつた。東京から身分の高い官吏が来て泊つた時、知事の所望でお久米が給仕に出たのを、町の一部では夜の伽でもしたやうに噂する者があつた。それを床屋で耳にした佐の市は躍起となつて打消して言ひ罵り、相手の無頼漢に殴られ突き倒されてもなほ屈しなかつた。千束屋ではこの忠義立てを嬉しく、怪我の見舞を與へた上、娘が手づから縫つた浴衣さへ贈つた。お久米にしては、この事があつて一層やさしく盲目の身を勞はり慰めるのであつた。両親は年頃の娘を一人で置くからの災いと急に縁談を急いで、縣會議員築居の長男が器量望みでは是非にと求めるまゝに、家業は主人の甥につがせる事にして、この上なき良縁と嫁入らせることに取りきめた。それと知つた佐の市はあるにあらぬ氣持だつた。闇の中に頼つた唯一つの燈がふつ

と吹き消されたやうな悲歎と憤恨とに一時に襲はれ、涙を出さぬ泣顔に陰惨な表情を浮べて、夜毎の千束屋通ひが苦痛にさへなつた。お久米が或る夜呉れた菓子のお包をにべもなく拒んで、取り落したのを拾ひもしなかつた。その胸一つに秘めた無量の思ひが自ら娘の心にも通じたか、お久米は何となくわが身に罪のあるやうに覺えて、佐の市が、豫て與へた浴衣を戀の起請だと云つて、佐の市が夫婦約束の履行を迫る不氣味なあられもない夢に脅

強ひて解決を與へず、ひたすら不具者の特殊な心境に筆を進めて、見事な成功を収めてゐる。紅葉の作中、藝術的價値に於て一二を争ふべき逸品である。なほこれの脚色されたものが屢々新派劇の舞臺に上場された。（小島）

語根

【獨】Wurzel【佛】Racine【解説】語詞分析の結果、若干の語に語源的に相互關係ありと認むる時、その諸語に共通せる要素を指していふ語。全然學問上の分析によつて見出され

十一の説話より成る。書名の示す如く、堪忍に關する古今の傳説・巷説を集め綴つて、教訓としよつたものである。但し堪忍の意義は、序に「神道において土金の傳あり、慎の道なり。儒家に五常といふ事あり、信の一字にあり。修多羅藏に四重五戒の律あり。三

も、町人・百姓・僧侶・遊女・武士に及んでゐる。畢竟教訓的態度の全篇を貫くものはあるが、その教訓の基礎となる特殊精神の、強く著しく表はされてゐるものはない。説話集としても、教訓文學としても、平凡の作たるを免れない。

【藤村】

浪人する。左七は彌三兵衛の實子なので、色紙詮議に心を砕く。(深川裏手) 半時九郎兵衛は金を奪はうとして鳥追娘お君を殺す。山住五平太が落した五十兩を九郎兵衛女房お時が拾ふ。(二幕)(本町糸屋) 娘お房は浪人の綱五郎に戀してゐたが、母おりの勧めで是

お糸を殺す。「大切」(小石川極楽水) 左七は養父風の神喜左衛門を訪ねて、お糸を殺した事を告白する。(綱五郎住居) 綱五郎がお房を匿まうのを知つた九郎兵衛は、女房お時を使つて美人局を仕掛け、百兩を奪はうとしたが、十兵衛の話で、お時は綱五郎の許婚と解

十一の説話より成る。書名の示す如く、堪忍に關する古今の傳説・巷説を集め綴つて、教訓として用いたものである。但し堪忍の意義は、序に「神道において土金の傳あり、慎の道なり。儒家に五常といふ事あり、信の一字にあり。修多羅藏に四重五戒の律あり。三教すべて忍を以て要とす。

も、町人・百姓・僧侶・遊女・武士に及んでゐる。畢竟教訓的態度の全篇を貫くものはあるが、その教訓の基礎となる特殊精神の、強く著しく表はされてゐるものはない。説話集として、教訓文學としても、平凡の作たるを免れない。(藤村)

と吹き消されたやうな悲歎と憤恨とに一時に襲はれ、涙を出さぬ泣顔に陰惨な表情を浮べて、夜毎の千束屋通ひが苦痛にさへなつた。お久米が或る夜呉れた菓子子の包をにべもなく拒んで、取り落したのを拾ひもしなかつた。その胸一つに秘めた無量の思ひが自ら娘の心にも通じたか、お久米は何となくわが身に罪のあるやうに覺えて、佐の市が、豫て與へた浴衣を戀の起請だと云つて、佐の市が夫婦約束の履行を迫る不気味なあられもない夢に脅かされたりするのだつた。やがて目出たき興入の晩、閑近く塀の外の雪道を佐の市が彷徨してゐるのを知つては、顔色を變へて怖れ願へた。佐の市が自分を思つて執念深くこゝまで慕ひ寄つたかどうか、それは確かに知り難いが、さきの日に見た怪しい悪夢が、影の如く心に潜んでゐて、恐ろしい者に見込まれた不仕合を思ふと胸が塞がった。その後にも月に二三度は佐の市が夢に現はれて、叶はぬ戀を今に捨てかねて怨み泣くのだつた。當の佐の市は青ざめやつれて、相變らず毎夜千束屋へ療治に通つては、人なき所で「命かけて」を唱ひやまなかつたが、その戀人の名を誰に洩らすこともなかつた。「言はずして思ひ、疑ひて懼る。これも戀か、心の闇。」

強ひて解決を與へず、ひたすら不具者の特殊な心境に筆を進めて、見事な成功を収めてゐる。紅葉の作中、藝術的價値に於て一二を争ふべき逸品である。なほこれの脚色されたものが屢々新派劇の舞臺に上場された。「小島」語根とて 言語學【名稱】【英】Root【獨】Wurzel【佛】Racine【解説】語詞分析の結果、若干の語に語源的に相互關係ありと認むる時、その諸語に共通せる要素を指していふ語。全然學問上の分析によつて見出される形體であつて、これを過去に於て實在した單語と觀じ、古く語根のみを用ひた語根時代(Root period)と稱する言語の原始的時期があつたと想像したこともあるが、今日では認容せられない。例へば、「見る」には類似の語彙「ま」「め」「目」「もる」「守」「む」「めり」(共に助動詞)等がある。その共通の要素mが語根。同様に「取る」は「た」「て」「手」「つれ」「連」「ちぎる」「振」「つる」「釣」「ちる」「散」「つむ」「積」

「と」「て」共に助動詞と比較分析する時は、共通のtを語根とすべく、「くろし」(黒)は、又「くらし」(暗)「くれ」(暮)「くる」(暮)等と比較して「目」を語根として分析抽出することを得る類である。語根は往々そのまゝ直ちに語幹たるものもあるが、これに造語的の接辭が附いて語幹となるものが多く、「見る」は語根mに「i」取る「は、語根tにorが附いてそれ、動詞の語幹となるのである。嘗ては語根を語幹(別項)の意味に用ひた人(大槻博士の如き)もあるが、穩かでない。(小林)

古今四場異百人一首 演劇書 一册 【著者】童戲堂四轉、頭書ほめ言葉は戀雀亭四染、共に傳未詳。【畫工】鳥居清信【別名】後に「古今四場異色鏡」と改題【刊行】元祿六年【諸本】後述の理由によつて、江戸時代にも傳本甚だ稀少であつたが、

【批評】作者が西鶴心酔期の後を享けて、文體は「三人妻」(別項)等と同調ではあるが、内面的な心理描寫の點に力を盡くして、殆ど別種の作品となつてゐる。若い盲目の戀——切ない失戀の苦惱をあますところなく細叙し、片意地な執着を描出して深刻を極め、一篇のすぐれた心理小説を成してゐる。謂はゆる悲惨小説が徒に事を設けて不自然に墮する弊もなく、又構想を主とする在來の作風から離れて

【作者】青木鷺水【刊行】寶永五年【諸本】浮世草子集(近代日本文學大系)所收。【解説】卷一・二・四・七各四、卷三・五・六各五、計三

古今堪忍記 浮世草子 七册



古今四場異百人一首 (藏館書圖大東) 首一人百異場四今古

今日では、東京帝國大學附屬圖書館所藏本(狂歌堂真類 古好亭 林忠正・宮武外骨 渡邊龜亭等書體)の外に存するを聞かぬ。これは稀書複製會から覆刻出版されてゐる。なほ演義珍書刊行會から寫眞版として刊行されたものもある。

【解説】美濃判。性悪軒四泥子の序、頓作庵四藤鹿の跋が前に付き、以下萬治以後當時までの俳優百人を選び、鳥居清信筆の肖像畫に添へて、小倉百人一首に擬してそれ、狂歌を記す。例へば、市川段十郎の項は「顔やけでつれなく見えし我かれいの、あかつらばかりよき物はなし」の如くで、更に上段には、その説明的意味をこめた戯文風の所謂「ほめ言葉」を載す。終りに道樂軒の後序がある。はじめ「古今四場異百人一首」の書名について、河原者を小倉の撰に比すると、當時の書物奉行脇部甚太夫の忌諱に觸れたので、「古今四場異色競」と改題したが、なほ町奉行能勢出雲守より發賣を禁止され、絶版の上、版元は輕道放に處せられた(後考評判記年表稿本)中の開根只誠の考證、宮武外骨の「筆禍史」等による)。「花江都歌舞妓年代記」には、著者馬馬所藏本中の挿畫を摸刻してあり、その他本書については「近世奇跡考」「さへぶり草」「鳥居書系譜考」等に記事が散見する。鳥居派繪畫史上の價値は説くまでもないが、中に扱はれた各俳優に關するこの外に、當年の風俗史演劇史の研究資料として貴重な文獻である。

【古今神學類聚鈔】「時繩」を見よ。

【古今短冊集】 伊諾眞蹟 二册【編者】大夢庵毛越【刊行】寶曆二年【成立】寶曆元年冬【由来】叙によると、發句の「新古の姿を傳へて新風の手鑑たらしめよう」とある。第二十六篇は怪異

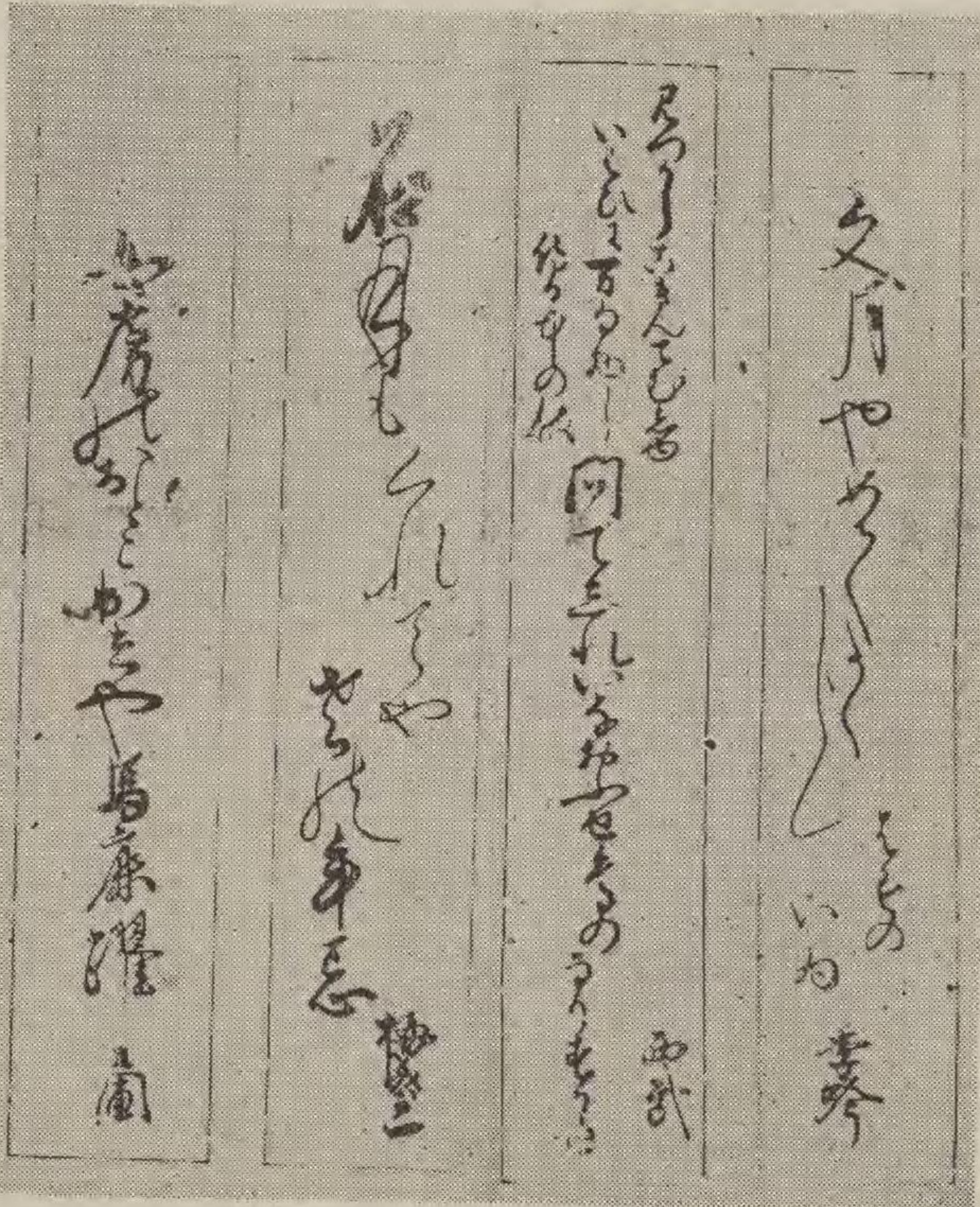
第二十五篇は興言利口で、家成の家臣の馬の話、實綱の試膽會、進士志定茂の行際や夏の袍の話、外宮權禰宜、宮腹の女房と法師、名僧と泣尼、落馬等の卑俗な滑稽談が多數載せてある。第二十六篇は怪異

で、旋風・流星・海草・幽魂等の異變の話。第二十七篇は變化で、鬼魅・餓鬼・天狗等の靈異譚、古狸狐猫等の化ける話。第二十八篇は飲食で、三條中納

右今著聞集卷第一 神哉第一 天地のつらきも 運洗鶏の子は 雲のうらみ 雨のあはれ 天のつらきも 運洗鶏の子は 雲のうらみ 雨のあはれ

年にも生れ、安政三年(二五六一)十二月二十六日歿した。享年四十八(法名)古今院眞生日縁(墓所)本所區表町本久寺(開歴)初代三遊亭圓生(別項)の門人となり、圓太と名乗り、

本は東洋文庫・内閣文庫・帝國圖書館等に藏せられる。前二者は同系のもので、東洋文庫のには筆寫者の跋文と、寛文十三年の日附があり、流布本と異なる。流布本には元祿三年と明和七年の繪入二十册本がある。なほ東京帝國大學附屬圖書館の元祿三年刊本は、東洋文庫本同系のもので校合して、その跋文をも載せてある注意すべきものである。史籍集覽・國史大系・日本文學全書・國文叢書・有朋堂文庫・日本文學大系等に所收。



古今短冊集(東大圖書館蔵)

して古今の短冊を集めたので、古人の眞蹟鑑定の資料たらしめようとして編んだのではないとある。寶曆元年臘八日附編者の自叙と寶曆辛未(元年)冬附谷口蕪村の跋とがある。【諸本】古俳書文庫の編外として複製本がある。【解説】本書は松永貞徳以後寛延・寶曆頃に至る間の出色の俳家二百八十人に就き、その眞蹟を短冊に求めて、これを集めたものである。松永貞徳・安原貞室・北村季吟・西山宗因。

【出典】本書の説話の出典は明記してあるものには、宇治左府日記・往生傳・北山抄・しらら物語(現存せず)・李部王記・小野宮記・中右記等があるが、なほ明記しないものには日本靈異記・本朝法華驗記・拾芥抄・江談抄・三代實録・扶桑略記・袋草紙・今昔物語・宇治拾遺物語・古事談・十訓抄等がある。

【内容】全巻を三十篇に分けて、主として日本の説話を収録してゐる。第一篇は神祇で、神の示現夢託靈驗の説話がある。日吉神のやうに神佛混淆を示す説話もある。第二篇は釋教で、聖德太子・行基・淨藏等の名僧の説話、三井寺や當麻の曼荼羅の縁起譚、難船を觀音に救はれる靈驗説話等がある。第三篇は政道忠臣で、延喜聖主と菅公、村上帝と老翁、匡房

頼朝の旗上等の説話がある。第四篇は公事で、朝廷の行事としての節會・舞樂・宴會等故實の話がある。第五篇は文學で、漢詩に關するもの多く、文時が白氏文集第一の詩を選ぶ話、裔然の蒼波の詩、都良香の竹生鳥の詩、顯基や道眞の詩、尙齒會の詩等の話である。第六篇は和歌で、歌合、尙齒會等の歌・連歌を集め、入麿・和泉式部・能因・伏柴の加賀等、著名な説話と歌とが出てゐる。第七篇は管絃歌舞で、胡飲酒・採桑老・萬歲樂・神樂等の舞踊の説話と、器樂に關連する博雅三位・源義光・福天神・廉承武等の話がある。第八篇は能書で、嵯峨帝と弘法大師の能書競べ、道風や行成の能書、樂音寺の能書の靈異等の説話がある。第九篇は術道で、陰陽道等の説話。第十篇は孝行恩愛で、養老孝子・武則公助・赤染衛門等の説話。第十一篇は好色で、二柱神より和泉式部・小侍從・爲家等の情話、紫金山寺の男色等。第十二篇は武勇で、頼光・頼義・義家・義經・貞綱等の武勇譚。第十三篇は弓箭で、季武・昵等の弓に達した話。第十四篇は馬藝で、經家・久清・高遠等の話。第十五篇は相撲強力で、大貳・水汲女・金女・重忠・伊成等の強力譚。第十六篇は書圖で、金岡・鳥羽僧正・良親等の繪、或は繪合の話等。第十七篇は蹴鞠で、成通と鞠の精等の話。第十八篇は博奕で、花山院の時七半の話、天竺冠者・法深房等の話。第十九篇は偷盜で、有名な釜盜人、大殿小殿、滑稽な強盜談等。第二十篇は祝言。第二十一篇は哀傷で、詩歌を配して哀傷を述べてゐる説話多く、宗行の菊川の話、義懷惟成の話等。第二十二篇は遊覽で、大井川行幸の話等。第二十三篇は宿執で、西行、啄木の曲の話等。第二十四篇は闘争で、靜賢法師の馬允の話等。

神祇その他二十部に分類し、歌數千百餘首を掲げ、赤良の「萬載狂歌集」(別項)、「後萬載集」には見えない狂歌師の作歌も多く、所謂天明調の特徴を示したものである。【野崎】

古今化物評判 五册合二册【作者】談洲樓馬馬【畫工】歌川國貞【名稱】古今の有名な化物と歌舞伎役者の化けくらべを意味する。角書には、「大和屋音羽屋、成田屋狂言奇話」とある。【刊行】文化十一年、永壽堂板。【題材】文化十年中村華の三津五郎の十二月所作事、森田屋の

古今短冊集 俳諧眞蹟 二冊【編者】大夢庵毛越【刊行】寶曆二年【成立】寶曆元年冬【由来】叙によると、發句の
新古の姿を傳へて新風の手鑑たらしめようと

書に收め得たのは、蓋し俳書中の一偉觀である。さて本書はこれ等の内容を乾坤二冊に分載したのであるが、編者の自叙、燕村の跋、共にそれらに眞筆を以てしてある。【各務】
古今著聞集【成立】建長六年【諸本】寫

の示現夢託靈驗の説話がある。日吉神のやうに神佛混淆を示す説話もある。第二篇は釋教で、聖德太子・行基・淨藏等の名僧の説話、三井寺や當麻の曼荼羅の緣起譚、難船を觀音に救はれる靈驗説話等がある。第三篇は政道忠臣で、延喜聖主と菅公、村上宿と老翁、匡房、

神祇その他二十部に分類し、歌數千百餘首を掲げ、赤良の「萬載狂歌集」(別項)、「後萬載集」には見えない狂歌師の作歌も多く、所謂天明調の特徴を示したものである。【野橋】
古今化物評判【作者】談洲樓馬馬【畫工】
卷五册合二册【作者】談洲樓馬馬【畫工】
歌川國貞【名稱】古今の有名な化物と歌舞伎役者の化けくらべを意味する。角書には、「大和屋音羽屋、成田屋狂言奇話」とある。【刊行】文化十一年、永壽堂校。【題材】文化十年中村座の三津五郎の十二月所作事、森田座の團十郎八景所作事、森田座・市村座の松緑の「洗濯話」(累淵撰其後)及び大江山酒吞童子傳説等。

第二十五篇は興言利口で、家成の家臣の馬の話、實測の試膽會、進士志定茂の行藤や夏の袍の話、外宮權禰宜、宮腹の女房と法師、名僧と泣尼、落馬等の車俗な滑稽談が多數載せてある。第二十六篇は怪異で、旋風・流星・海草・幽魂等の異變の話。第二十七篇は變化で、鬼魅・餓鬼・天狗等の靈異譚、古狸狐猫等の化ける話。第二十八篇は飲食で、三條中納言の水飯の話、實賢僧正の餅の話、或は食物の名をもぢつた歌等を載せ、第二十九篇は草木で、菊・櫻・根合等、植物に關する有職故實を取扱つた話があり、第三十篇は魚蟲禽獸で、家畜・猿・狐狸・蛇・人魚・鳥等を人格的に靈異視した話が多いが、殊に狐や龍と婚姻する話、蟹が蛇を殺して娘を救ひ報恩する話等が注目を惹く。なほ本書の内容から判断すると、成季一人の手に成つたとは思はれない點がある。

年に生れ、安政三年(五一六)十二月二十六日歿した。享年四十八【法名】古今院眞生日縁【墓所】本所區表町本久寺【開歷】初代三遊亭圓生(別項)の門人となり、圓太と名乗り、

代と同じ。【開歷】大兵肥滿で、臂力も衆に勝れてゐた關係上、最初は力士を志願したが、それを止めて本所相生町の餅菓子屋の職人となつた。その頃近所に初代しん生が住んでゐたため、その門人となり、治六或は壽六と名乗り、前座から修業し、やがて古今亭今輔と改め、後、師名を相續して古今亭しん生となり、眞打に進んだ。【藝風】お角力と紳名さされて人氣を得た。力士の話や、情話や、田舎の婆さんや、その他往くとして可ならざるなき有様であつた。殊に藝道熱心の彼は、演出上にも特に注意し、與三郎鳥破りの話をする時は、わざと髭も剃らず、薄鼠色の着附けで、鳥破り者らしい氣分を漂はしたり、夜の話には蠟燭の心を切らずに暗くし、夜明けに至ると心を切つてパツと明るくするなど、高座に氣分を出すことに力めた。無邪氣な性質と偉大な體軀と、藝道熱心とによつて人氣を得、大眞打としての名を辱しめなかつた。得意は九州吹戻しであつた。門人に五明樓今輔・五明樓玉輔がある。【三代】【姓名】未詳【生歿】生年未詳。大正七年五月十日歿。【開歷】二代目古今亭今輔の門人となり、昔屋今松と名乗り、又紳名をしまよと言はれてゐた。軍鶏屋に今松といふのがあつたからである。聲色が得意であつた。後、雷門助六となり、ついで、しん生を襲いだ。【小柴】

【梗概】【前編】大江山の酒吞童子、このほど化物の世界が甚だ逼迫したのに困り、恢復の途を講ずるため江戸行を決心し、うぶめ・長壁の二怪を下して様子を探らせる。二怪共に歌舞伎の人物に脅されて逃げかへる。【後編】酒吞童子が蘇生させた淺草鞠音堂の繪馬の鶴が童子の命によつて様子をみる。鶴は三津五郎の所作十二變化に膽を消し、その果ては人間に捕へられて見世物にされる。さうと知らぬ童子は大勢の化物どもを率ゐて、江戸に下る。化物共は團十郎の所作八變化に驚き、童子もまた松緑のろくろ首の芝居に恐れ入る。童子は館林の茂林寺の狸に相談に行く。その狸も松緑の累の怨靈の役に仰天する。童子も狸も狂歌師四方眞顔を尋ねて行き、松緑の化物盡しの褒め言葉を教へて貰つて、市村座の切おとしの間立つて褒め立てる。【構想】馬馬は、當時評判の歌舞伎役者の當り藝を禮讚するために、酒吞童子その他の化物を藉りて來たのである。所作事の十二變化・八

【参考】古今著聞集類標著者不明○鎌倉室町時代文學史藤岡作太郎○鎌倉時代文學新論野村八良○國文學通史坂井衡平○日本文學史潮鈴木敏也○歌謠今昔物語集芳賀矢一【高島】
古今亭しん生【姓名】未詳【號】壽耕【生歿】文化六

後、古今亭眞生と改め、ついで眞を假名に改めて古今亭しん生となり、古今の名人と稱せられるに至つた。【二代】【姓名】福原常吉【生歿】天保五年に生れ、明治二十二年十一月二十四日下谷仲徒町の自宅にて歿す。享年五十六【法名】新生院古今日説信士【墓所】初

古本古今著聞集(池田龜繼氏藏)

故混馬鹿集【編者】朱樂菅江【刊行】天明四年【解説】初め「狂言鶯蛙集」と名づけたのを、朱樂館の狂歌會席上で六歌仙を題として詠んだ狂歌を巻頭に載せたために、そのよみ人中の馬場金崎・鹿都部眞顔の頭字をとつて、「馬鹿集」と改めたといふのである。四季・戀羅・騷旅・賀・釋教。

1111

古今著聞集

1111

變化の移り目の鮮かき、怪談劇の舞臺の凄さ、不思議さ、それに化物ともがすつかり膽を消すといふ趣向の下に、三津五郎・團十郎・松緑を褒め立ててゐる。角書には既に大和屋音羽屋成田屋といつてゐる。それ等の狂言は、「四季詠寄三文字」閨妓姿八景、また「尾上松緑洗濯話」「果淵扱其後」であつた。しかし馬馬が主眼とするものは、大和屋の松緑の禮讃である。あとの二人は、いはばワキとしての扱ひである。眞顔の褒め言葉も松緑のために書かれてゐる。その頃草雙紙界では妖怪ものが非常に行はれてゐた。歌舞伎ものも行はれてゐた。この作はそれ等の流行を一つにして、馬馬好みの歌舞伎評判、殊に松緑最良を殆ど自己陶醉の態度で書きつけたものである。この書は半紙刷で普通の草雙紙の型を破つたもの、また毎丁の繪といふ旋に背いてゐる。尤もこの種のものも他にあつて、必ずしも異とするに足りない。謂はゆる擬ひ合巻に屬するものであるが、文字の配りその他についても、いろいろと變化を見せてゐる。或は化物を書の體裁の上にきかさせた作者の工夫であるかも知れない。

古今百馬鹿

滑稽本

作者

成つたものである。【諸本】原本の外に、翻刻されて歌舞伎叢書の中に収められた。但しこの叢書には四巻までしかない。【解説】第一巻に歌舞伎一般とも見るべき、三都の芝居、役者、狂言作者等の發生を説き、第二巻から第四巻に至る三巻が中心と見られ、こゝには立役女方その他、總ての過去の役者の中から主な人物を抜いて、代を追つて評傳を加へた。第五巻は名優の藝、即ち仕打に關する故實を整理し、更に「無間鐘」「淺間獄」「嫁鏡」「佛の原」

式亭三馬【卷册】中本型は三册、半紙二つ折の型は一册【名稱】あらゆる世の愚者を擧げる積りで、かく命名したのであらうが、終にその抱負は實現するに至らないで、ただ初稿として上下二巻、僅かに四種の馬鹿を記したに過ぎない。【刊行】文化九年九月の序があ



古今化物評判

るが、發賣は同十一年正月。葛屋重三郎・越前屋吉兵衛出版。即ち本書の執筆は、「四十八癖(別項)二編と相前後してゐる。従つて兩者の間にも一脈相通するものがあり、或は「四十八癖」の粉本をなしてゐるものもある。而もこの頃は、三馬が油の乗り切つた活躍時代であ

村・市村・坂東(森田)・山村の江戸四座の座元と出勤俳優の名が記され、次に序があり、以下釐頭に當る部分には狂言盡しのせりふ、或は歌謡の詞章とも言ふべきものが、次の順序で掲載されてゐる。
式三番、たかやすかよひ、かん三郎さる若、多門庄左衛門谷中六方、むめがつま(龜井山三郎)、今川忍び車(市村竹之丞、荷田皆之丞)、今川二どの高名、おくりくとき、きぶね道行、平のこれもち千種の花見、ふぢ戸、瀧口よこぶ(玉川千之丞)、すまふのいひたて、八まん太郎(をのへしのびの

る。【諸本】三馬傑作集(帝國文庫)・滑稽本集(日本名著全集)・滑稽文學全集四所収。【梗概】序編として「楊枝隠の傳」といふのを、挿畫二葉と、細字による會話とによつて出している。長鹿先生なるものが、楊枝隠の術を會得したとて一本の楊枝を持ち、秘文を唱へて、自分の姿が見えなくなる筈といつたが、一向隠れない。周囲の人達はわざと見えぬ振をして姿を探すといつて、火吹竹や薪や三尺棒で先生の頭や背中をなぐる。本人は痛さを耐へてはゐたが、終に悲鳴をあげ、楊枝を投げ捨てて「ハイ私はこゝに居ります」と言つて出る。「鼻毛をのばす御亭主馬鹿」女房に甘い癖に、時々浮氣をする亭主があつた。今日も女房は亭主に嫌味を言つて怪氣がましくいふ。亭主はそれを嬉しがつてゐる。が結局その機嫌を取る(こゝに三馬が家の商品の江戸の水や、薄化粧などの廣告が入る)。女房の針仕事の手傳までもしてやり、ねだられるままに何でも承知するといふ甘さである。「負けて腹立つ下手象馬鹿」二八といふ男、六十ばかりの禪門を對手にして将棋をさし、勝つて得意になり、高言を吐く。三吉が代つて二八の對手になる。お互に高言を吐き、地口を言ひながら差す。二八の高言を面憎く思つてゐた岡目の連中が三吉に助言をする。それでも二八は大勢を對手にしてゐるつもりで得意になつてゐたが、多少不利となつたから、二三回待つて貰ふ。それでもとうとう負けてしまつた。すつかり機嫌を損ねて終に喧嘩となる。禪門の仲裁も聴かず、多年の交も破つてしまふ。「お客をしかる替間馬鹿」洒落八といふ替間が、客の席上で身の上話を始めて、終に酒は止める、色慾は慎めなどと訓戒する。

客も折角の酒宴の興醒めて耐らず席を外して了ふ。洒落八は漸く自分の職業意識に回復したが、その拍子に三味線を踏み折る。「腹自慢する大食馬鹿」食助といふ大食自慢の男が昨日は赤飯を一重食つたの、納豆汁三十杯、御飯が十五膳、饅頭が九つ、河豚料理三十人前、汁粉が三十膳、茶漬十四五杯、七色茶漬六十膳、その外に醃五六杯を飲んだ。俺に續く者はあるまいといふ。對手の男が蕎麥の食ひ競べをしようと挑んだので、蕎麥屋から取寄せたが終に食ひ切れず、家に戻つて大食傷をしたといふ。

【構想】「四十八癖」の方向轉換ではあるが、決して新しい世界を開拓したものとは思はれない。むしろ「四十八癖」の刷毛序で書いた言動となるところに馬鹿を見出したものであるが、決して新発見ではない。性癖中心の作から馬鹿中心の作への轉向は當然のものである。前者は性癖を性癖として描いてゐるのに、後者は多少批判を加へてゐるだけの違ひで、實際は主人公が自己を忘失せる痴漢であることは同じである。そこには作者の深い觀察が缺けてゐることは否めない。【小柴】

古今役者大全【小柴】演劇書六卷【著者】八文字其笑・八文字瑞笑。他に多田南嶺も關係したらうとの説がある。【名稱】撰と角書がある。【刊行】寛延三年三月【由来】八文字屋は元禄十二年の「役者口三味線」以来、年々一回乃至二回の役者評判記の出版を續けて來たが、寛延に入つては既に二百部を越えたので、通讀の容易ならぬ困難を救ふために、又當時漸く劇界に研究心の發生した趨勢に乗じて、評判記の摘要を主體として

刊行。【諸本】内閣文庫に白表紙半紙本の五百十八巻に目錄一卷あるものを合本して百七十八冊としたものと、黄表紙美濃本で四百八十三巻目錄一卷あるものと二本があり、黒川家本は合本百冊、岩崎文庫本は合本七十六冊あつて、四本各々長短がある。帝國圖書館本は三百三巻あるが、各巻に缺脱が少なくない。板本には我自刊我叢書本と、存探叢書本とがあるが、前者は神祇・姓氏・時令・地理・曆占・歳時・器財まであるが缺脱が多く、後者は「古今要書抄」と題し、單に總説と釋名と正誤

卷一に岩崎文庫本から弘賢の寛政十年九月二十一日に作つた凡例を載せて、本書編纂の意志の遠き以前の事であつたことを示し、又黒川家本から調進目錄を抜いて載せ、更に卷六には小杉楳村博士撰述の「源弘賢翁の小傳」を載せてある。【石村】

古今類句【石村】和歌索引 十卷【編者】山本春正【刊行】寛文六年【内容】三十六卷本もあるが、内容は同様である。古歌の下句の頭字によつて、いろは順で分類したもので、下句のわかつてゐる場合は上句を知る

に足りない。謂はゆる擬ひ合巻に属するものであるが、文字の配りその他についても、いろいろと變化を見せてゐる。或は化物を書の體裁の上にきかした作者の工夫であるかも知れない。

【山口】
古今百馬鹿

成つたものである。【諸本】原本の外に、翻刻されて歌舞伎叢書の中に収められた。但しこの叢書には四巻までしかない。【解説】第一巻に歌舞伎一般とも見るべき、三都の芝居、役者、狂言作者等の發生を説き、第二巻から第四巻に至る三巻が中心と見られ、こゝには立役女方その他、總ての過去の役者の中から主な人物を抜いて、代を追つて評傳を加へた。第五巻は名優の藝、即ち仕打に關する故實を整理し、更に「無間鐘」「淺間鐘」「嫁鏡」「佛の原」「道成寺」「非人敵討」「夕霧」等、所謂名狂言の由來と仕打等を解説した。第六巻は廣く各役者の師弟系譜を載せてゐる。前述の評判記や優家七部書の如き故名優の藝談筆記の類が基礎資料となつて記述されたものであるから、比較的確實性を持つた演劇史・俳優史の様式を見出す事が出来る。後年の「歌舞伎事始」「新刻役者綱目」「役者全書」(各別項)等は本書を學んだものである。又、江戸歌舞伎に關する歴史的资料は比較的整理されてゐるが、上方歌舞伎のものは甚だ乏しく、現代に於ても直接の基礎資料は極めて稀なので、元祿期を中心とする上方歌舞伎の研究資料としては、今日もなほ十分の價値を有してゐる。

【守隨】
古今役者物語

【編者】不明【書工】菱川師宣【刊行】延寶六年【諸本】原本としては、現在東京・京都兩帝國大學附屬圖書館に各一部所藏されるのみであらう。珍書刊行會の複製があり、又江戸時代文藝資料卷四に翻刻された(繪を缺く)。

【解説】卷頭の文によれば、江戸の芝居の繁昌を地方に傳へんがために編んだと記してゐるが、當代一般好劇家の案内を目標としたものであらう。最初に太夫座元物役者付として中

るが、發賣は同十一年正月。萬屋重三郎・越前屋吉兵衛出版。即ち本書の執筆は、「四十八癖(別項)二編と相前後してゐる。従つて兩者の間にも一脈相通するものがあり、或は「四十八癖」の粉本をなしてゐるものもある。而もこの頃は、三馬が油の乗り切つた活躍時代であ

村・市村・坂東(森田)・山村の江戸四座の座元と出勤俳優の名が記され、次に序があり、以下鼈頭に當る部分には狂言盡しのせりふ、或は歌謡の詞章とも言ふべきものが、次の順序で掲載されてゐる。

式三番、たかやすかよひ、かん三郎さる若、多門庄左衛門谷中六方、むめがつま(龜井山三郎)、今川忍び車(市村竹之丞、荷田皆之丞)、今川二どの高名、おくりくとき、きぶね道行、平のこれもち千種の花見、ふぢ戸、瀧口よこぶ(玉川千之丞)、すまふのいひたて、八まん太郎(をのへしのびのたん本ぶし)、山せうだふあんじゆのひめ、つし王丸本意のしよち入。

主體たるべき毎丁の師宣筆の繪は、中村座及び市村座の木戸口から役者の宴席に侍つた所と樂屋の有様があり、以下は各狂言の舞臺面見物席等を寫してゐる。元祿以前の演劇研究資料が極めて稀である中に、本書の如きは劇場史・俳優史・扮装演出史等、各方面に互つて貴重の文獻たるを失はぬ。殊に本書のせりふづくしや歌謡の詞章は、當時の歌舞伎劇に於ては戲曲的地位を占めるものである事に注意を要する。

【守隨・増田】
古今要覽稿

【幕府の命に依つて、屋代弘賢總判となり、屋代通賢・大河戸儀成・志村知孝・橋本好春・山下正房・林高典・栗山定興・南條近行・栗原信充・松岡行義・岩崎常正・池野好謙等、編輯・校正・圖畫・淨寫等を分擔した。【成立】文政四年から天保十三年に至る二十二二年間に五百六十巻を調進したもので、その順序年月等は調進目録に詳記せられてゐる。【刊行】明治三十八年十一月、同三十九年一月・三月・七月・十二月、同四十年一月の六回に國書刊行會より

二三回待つて貰ふ。それでもとうとう負けてしまつた。すつかり機嫌を損ねて終に喧嘩となる。禪門の仲裁も聴かず、多年の交も破つてしまふ。「お客をしかる封間馬鹿」洒落八といふ暫間が、客の席上で身の上話を始めて、終に酒は止める。色慾は慎めなると訓戒する。

刊行。【諸本】内閣文庫に白表紙半紙本の五百十八巻に目録一卷あるものを合本して百七十八冊としたものと、黄表紙美濃本で四百八十三巻目録一卷あるものとの二本があり、黒川家本は合本百冊、岩崎文庫本は合本七十六冊あつて、四本各々長短がある。帝國圖書館本は三百三巻あるが、各巻に缺脱が少なくない。板本には我自刊我叢書本と、存探叢書本とがあるが、前者は神祇・姓氏・時令・地理・曆占・歳時・器財まであるが缺脱が多く、後者は「古今要覽抄」と題し、單に總説と釋名と正誤とのみを摘録したものに過ぎない。國書刊行會本は、以上諸本を取捨選擇して補正したものである。

【解説】諸般の事項を諸種の部門に分類し、更にこれを各項に分けて、その起原・沿革等を古書・古畫を引いて考證したもので、實に類書の嚆矢ともいふべく、山岡明阿著の「類聚名物考」に基いて立案したといふ事を弘賢の凡例に述べてゐる。その當初に於ては、十八部大凡一千巻の豫想であつたが、業半ばにして弘賢が歿して完成を見るに至らなかつたのである。卷一は神祇部・姓氏部・時令部、卷二は地理部・曆占部・歳時部・器財部上、卷三は器財部下・冠服部・裝束部・政事部・雜藝部、卷四は草木部上、卷五は草木部下、卷六は人事部・病痾部・禽獸部・蟲介部・魚介部・飲食部・菜蔬部、雜部(宇體部・人物部・居處部・災異部)等、舊卷數五百六十巻を収め、各部諸項に分れて、各項、初に總説、次に古文獻を多く列ね、次に釋名と題して別名及びその出典等を記し、又次に正誤と題して、古書の誤つた本文を出してその誤謬を糾し、時に本題に因む詩や和歌を連載するのが大體の記述法になつてゐる。なほ

【石村】
古今類句

【編者】山本春正【刊行】寛文六年【内容】三十六巻本もあるが、内容は同様である。古歌の下句の頭字によつて、いろは順で分類したもので、下句のわかつてゐる場合は上句を知ることが出来る、且つ何集、何の部に出てる誰の作だといふやうなことがわかるのである。二十一代集・新葉集・六家集(月浦集・拾玉集・長秋談・拾遺愚草・壬二集・山家集)及び伊勢・大和・源氏・狭衣物語中の歌を蒐集分類してゐる。

【由來】八文字屋は元祿十二年の「役者口三味線」以來、年々一回乃至二回の役者評判記の出版を續けて來たが、寛延に入つては既に二百部を越えたので、通讀の容易ならぬ困難を救ふために、又當時漸く劇界に研究心の發生した趨勢に乗じて、評判記の摘要を主體として

卷一に岩崎文庫本から弘賢の寛政十年九月二十一日に作つた凡例を載せて、本書編纂の意志の遠き以前の事であつたことを示し、又黒川家本から調進目録を抜いて載せ、更に卷六には小杉楳村博士撰述の「源弘賢翁の小傳」を載せてある。

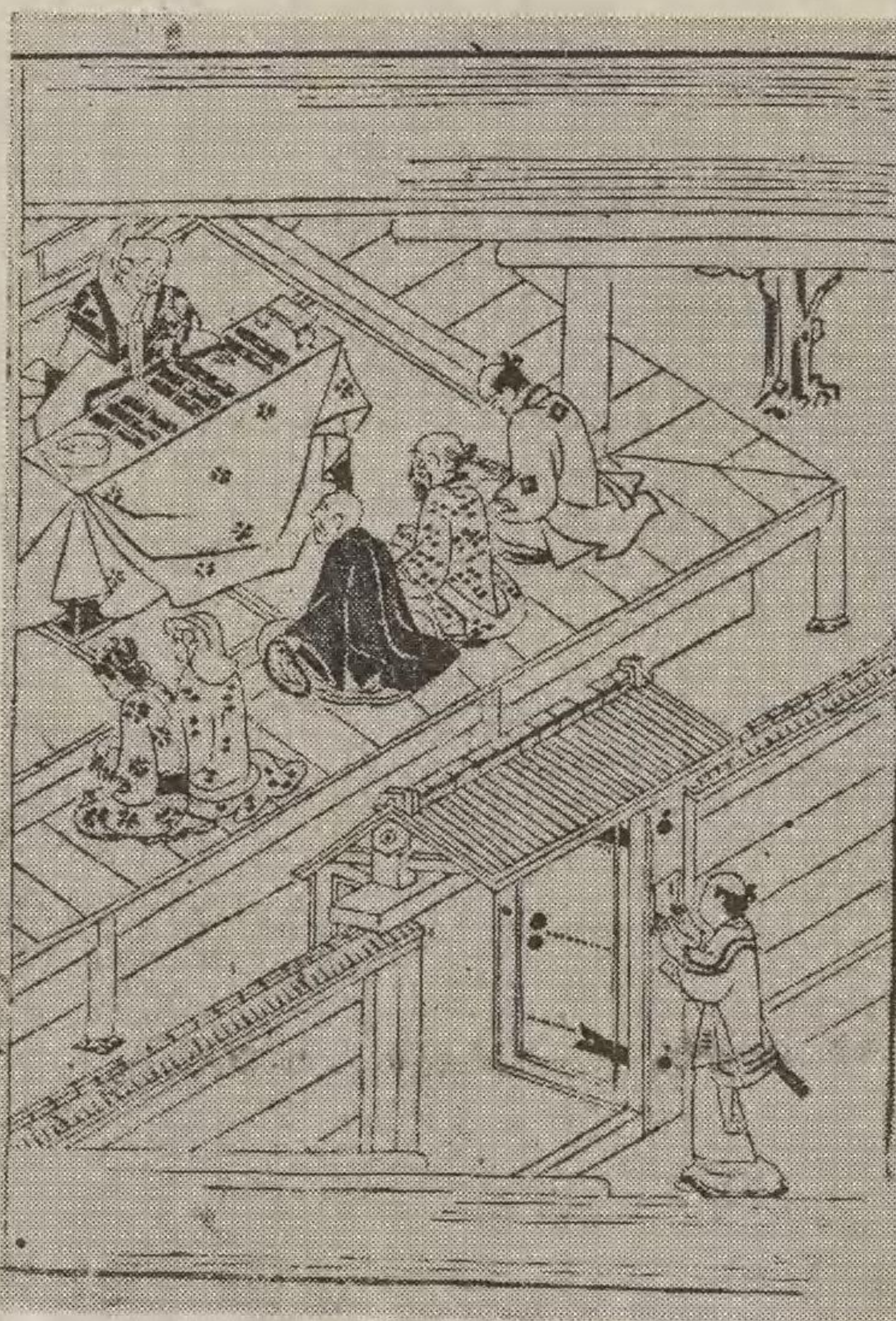
【價値】「國歌大觀」「續國歌大觀」の尨大な五句索引の便利なるものが出來た今日に於ては實質的な價値は失はれたわけであるが、當時に於ては相當學者に便益を與へたものであらう。よりよきものへの暗示と基礎とを與へたといふ先驅的意義に於て尊重されるべきものである。

【藤川】
小前張

【假名草子】五巻【作者】山岡元隣【名稱】小厄は厄言から出た語。厄は酒を盛る器。厄言は酒を飲みて味あるが如き美言、即ち狂言綺語の面白きに該當する。【刊行】寛文中頃以後と思はれるが刊記はない。【諸本】延寶四年再版した時に「雨夜の友」と改題して四冊となし、更にこれを「鶯歌あらそひ」と改題してゐるが、これが多分三版であらうと思ふ。その刊年月は不明である。

く、教訓的短篇集ではあるが、多少異つた點がある。「他我身之上」が、殆ど聖語と世話との義理の説明に終つてゐるに對し、「小厄」は半ば、いろ／＼の世話から成つてゐる。例へば夢物語の如き、又古休といふその道に通じた宗匠が、ふと慾に眼が眩んだばかりに、鑑定を誤つて偽物を掴む話など、作者の空想や巷談めいた題材も交つて、「他我身之上」よりは面白くなり、文も大に圓熟したのは、進境を示したものと云へる。夢物語といふは、或る人の夢に、鶯と雀とが、巢を造らうと庭前の梅の木を争ひ、聖鳥風

の裁斷を仰がうとしたので、鶯が勝つたやうに、兩鳥の系圖を調べた上、正しい方に梅花の受領を許すと申渡す。鶯と雀とは、互ひに主張を曲げず、古書や詩歌を證して、有利に導かうと争つて、いつ迄しても果しがつかぬから、風風が出て裁定を下し、兩鳥が和睦するといふ話。即ち利慾のために争の止まないのを戒めた寓話である。その他蛙の願立、風露先生の頓作、山寺の御兒の才覺、寺の上人ぬけの事等、禪問答又は輕口咄に類するものもあつて、老莊又は禪學の影響を受けた點が、著しく目に着く。而も一貫する思想は教訓主義にあり、又故書の來歴を煩はしく説くことは、依然術學的であるが、「他我身之上」に比すれば、遙に優れた作である。併しそれほど行はれなかつたものと見え、傳本が稀である。



小厄挿畫

九卷十二册【作者】山東京山前編、櫻亭琴魚(後編)【畫工】歌川國貞(前編)、北明樓戴儀、合川館珉和(後編)【名稱】角書に小説とある。内容が支那小説と關係があるので特に斷つたのであらう。小櫻姫風月奇觀は前編の名で、後編は「小櫻姫風月後記」と云ふ。主要人物小櫻姫の名を取つたものである。【刊行】文化六年より文政三年まで。【諸本】京山全集(續帝國文庫)所收。【題材】支那小説「龍圖公案」中の金鯉魚の怪から暗示を得、京傳の「櫻姫全傳」(草紙)を模したもので、人名に同

身の上ばなしをしてゐるところへ、母親のお勢もやつて来る。今朝七之助がお瀧に與へた八十兩の大金と云ひ、また腹懸にあつた血だらけの手拭と云ひ、不審に堪へず訴人したところ、昨夜の人殺しが七之助と極つたからとお瀧に因果をふくめるためだつた。(其二)同境内藥師堂の場。捕手がかゝるので、七之助は事態を知り「お瀧、手前は今になつて命が惜しくなつたか、ウム、もうかうなりやア道連れだ」と匕首をかざして大立廻りとなり、お勢を斬つて遂に繩にかゝる。

【櫻姫】「序幕」(其二)永代橋下船中の場。淺草廣小路の藝者お瀧は、御守殿と紳名に呼ばれ男嫌ひで通して来たが、どうした縁でか山谷の小舟乗七之助と戀仲となり、一人船頭一人藝者の法度を犯した船の中で、夜をも待たで楽しい首尾を交す仲になつた。と舷に流れ寄る溺死體があるので、引き揚げて呼び生かすと、それは新川の酒問屋の手代宗吉であつ

【役割】小猿七之助(市川左團次、籠の屋お瀧、東秀調)、網打の七藏(市川中車)、お瀧の母お勢(市川紅若)等。

小坂部館の段(蝶花形名歌鳥臺)を見よ。

【櫻絨】雜誌【刊行】明治二十五年十一月、江見水蔭の江本社より發行、二十六年七月、第五號で廢刊。【解説】四六版、瀟灑の小冊子。硯友社の作風に準らずとし、詩趣豊かに、新味あるものに志してゐた江見水蔭・田山花袋・太田玉若等、主として筆を執り、なほ宮崎湖處子・松岡(柳田)國男等の詩歌を載せた。

小櫻姫風月奇觀(齋藤昌) 讀本

じものが多く、又挿話にも類似のものが多く。後編は琴魚が京山の意圖を享けて繼承したものである。

【櫻絨】(前編) 倭藤太秀郷が三上山の蜈蚣を射止め、龍女から寶刀龍神丸を得たが、その祟りは秀郷の後胤江州栗本郡釣里の庄司藤原爲兼に及んだ。一日爲兼の子清若丸は石山寺に詣でたまふ歸らず、寶刀龍神丸をも失つてしまふ。又その娘小櫻姫は美少年瀧窓志賀之助と戀に落ち、病み患つて琵琶湖畔の別荘に移り、計らずも彼と會つて契りを結ぶ。いづれも金鯉魚の變化が爲兼に仇をしようとするものであつたが、實の志賀之助のためにその正體を顯はされる。かくて小櫻姫は幻住寺の佛眼禪師の物語で志賀之助が兄の清若丸であることを知り、遁世して松窪に赴いた。こゝに信田左衛門清玄といふ者、姫を誘拐して三上山の山築に連れ行く。姫は公光・山吹の苦肉の策によつて助けられたが、又同玄の毒牙にかゝらうとし、嘗て清若丸に従つて石山寺參詣の歸途、若君諸共寶刀を失ひ、主家を追はれた眞野水二郎が來り會して同玄を斬り姫を救ふ。【後編】一方爲兼は清玄の夜襲に會つて非業の死を遂げる。志賀之助・公光等奮戦したが、敗れて爲兼の室彌生の方も擒へられてしまふ。そこで一先づ佛眼禪師の許に隠れて再興を計ることになつた。又水二郎は小櫻姫・山吹を匿まつてゐたが、その妻お棍は金鯉魚の妖精の傀儡となつて姫に仇をする。一日、水二郎は彌生の方を救はうとして、娘玉琴を、漁夫網六を通じて清玄の許に仕へさせる。網六は實は執權北條義時の子田島造酒之丞であつた。彼はその忠節に感じて、彌生の方と玉琴を清玄の許から奪ひ去る。志賀之助

【櫻絨】(後編) 倭藤太秀郷が三上山の蜈蚣を射止め、龍女から寶刀龍神丸を得たが、その祟りは秀郷の後胤江州栗本郡釣里の庄司藤原爲兼に及んだ。一日爲兼の子清若丸は石山寺に詣でたまふ歸らず、寶刀龍神丸をも失つてしまふ。又その娘小櫻姫は美少年瀧窓志賀之助と戀に落ち、病み患つて琵琶湖畔の別荘に移り、計らずも彼と會つて契りを結ぶ。いづれも金鯉魚の變化が爲兼に仇をしようとするものであつたが、實の志賀之助のためにその正體を顯はされる。かくて小櫻姫は幻住寺の佛眼禪師の物語で志賀之助が兄の清若丸であることを知り、遁世して松窪に赴いた。こゝに信田左衛門清玄といふ者、姫を誘拐して三上山の山築に連れ行く。姫は公光・山吹の苦肉の策によつて助けられたが、又同玄の毒牙にかゝらうとし、嘗て清若丸に従つて石山寺參詣の歸途、若君諸共寶刀を失ひ、主家を追はれた眞野水二郎が來り會して同玄を斬り姫を救ふ。【後編】一方爲兼は清玄の夜襲に會つて非業の死を遂げる。志賀之助・公光等奮戦したが、敗れて爲兼の室彌生の方も擒へられてしまふ。そこで一先づ佛眼禪師の許に隠れて再興を計ることになつた。又水二郎は小櫻姫・山吹を匿まつてゐたが、その妻お棍は金鯉魚の妖精の傀儡となつて姫に仇をする。一日、水二郎は彌生の方を救はうとして、娘玉琴を、漁夫網六を通じて清玄の許に仕へさせる。網六は實は執權北條義時の子田島造酒之丞であつた。彼はその忠節に感じて、彌生の方と玉琴を清玄の許から奪ひ去る。志賀之助

は家運再興のため一千卷の寫經を志して餘念がなかつたが、計らずも舊臣水二郎と再會し、佛眼禪師の法力にて毎夜小櫻姫を惱ます妖怪が、お棍に憑いた金鯉魚の傀儡であることが顯はれ、金鯉魚は禪師の法聞に隨喜して志賀之助の寫經を乞うて消えた。時に北條義時唐崎に來り、佛眼、志賀之助に對面して清玄復讐のことを許す。又、網六の造酒之丞が救つた彌生の方・玉琴を出し、母子主従の對面をさせた。かくて彌生・小櫻姫は出家し、志賀之助は清玄を討ち、義時の命により玉琴を娶り、本領に安堵した。

【構想】教訓的因果應報物語で、その趣向とするところは支那小説に據る怪異にある。それは、文化二年に出した京傳の讀本「櫻絨全傳」草紙が、淨瑠璃脚本に據つて趣向を立てたのに對するものである。特に外題に小櫻姫の名を用ひたのも、この趣向に據る所があつたからであらう。併し支那小説流の妖怪味を盛つた事に一種の興味はあるが、作意の跡が露骨で決して優れた趣向ではなかつた。未完のままで終つたのも、さしたる評判がなかつたからであらう。その後十一年経つて琴魚が後編を繼いで始めて完結したが、取り立て、言ふほどの事もない。ただ趣向の矛盾もなく筆致も同一人の手になつた如く思はせる點に、その苦心を認めねばならぬ。

御座船歌(「御船歌」を見よ) 小猿七之助(「網模様燈籠菊桐」を見よ) 小猿七之助(「御船歌」を見よ)

小猿七之助(「御船歌」を見よ)

【作者】岡鬼太郎【刊行】世話狂言集、鬼太郎脚本集第一卷所收。【興行】大正九年一月、明治座にて初演。

は連歌では一座一句のものであるが、俳諧では二句までは詠んでも差支なく、太古・上古・中古・往古・古代・古今集などの「古」は「いにしへ」の義であるから、「いにしへ」と同じく「座」に二句までは差支ないといふやうに、先づ連歌の制式をゆるめて一座の句数の限度を定め、或は「命」と「玉の緒」は折を變へるべく、「蟲の命」と「玉の緒」とは二句去とすべきであるといふやうに、その去るべき句数を示し、或

【御傘】俳諧式目 三册【編者】松永貞徳【名稱】本名は「誹諧御傘」、御傘は略稱である。御傘の二字は「ごさん」とよむが、古來或は「おからかさ」又「ぎよさん」とよんだ例もある。【名義】自序によると、本書は初め編者が題名に窮し、「そなた次第」と名付けようとして「侍童の非難にあひ、その侍童の按じた「各盡」「めんめんさかづき」と、他の侍童の



の影響を受けた點が、著しく目に着く。而も一貫する思想は教訓主義にあり、又故書の來歴を煩はしく説くことは、依然術學的であるが「他我身之上」に比すれば、遂に優れた作である。併しそれほど行はれなかつたものと見え、傳本が稀である。

【役割】小猿七之助(市川左團次、瀧の屋お瀧、阪東秀調)、網打の七藏(市川中車)、お瀧の母お勢市川紅若等。

【極端】「序幕」(其二)永代橋下船中の場。淺草廣小路の藝者お瀧は、御守殿と紳名に呼ばれ男嫌ひで通して来たが、どうした縁でか山谷の小舟乗七之助と戀仲となり、一人船頭一人藝者の法度を犯した船の中で、夜をも待たで楽しい首尾を交す仲になった。と舷に流れ寄る溺死體があるので、引き揚げて呼び生かすと、それは新川の酒問屋の手代宗吉であつた。掛先を集めての歸り、乗合船で不正博奕に手を出して八十兩巻き上げられ、口惜しさ面目なさの投身であつた。しかも段々の話のうち、その騙りの相手が網打の七藏だと分り、證據の手拭まで持つてゐるので、七之助は親の罪の發覺を怖れて宗吉を川中へ蹴込み板木を振り上げて打殺す。(其二) 深川相川町七藏内の場。暮六つの丁度その時刻、七之助の妹お幸は、佛壇の灯の丁子がねて跳目に入りひどい苦しみをしてゐる。やがて七之助は久々で訪ねて来て、宗吉の投身した一條を語つて七藏に地道な稼ぎを勧め、悪事はよしてくれと諫める。七藏は耳にも留めずうるさいとばかり追立てて一寝入りする。七之助は佛壇にある財布に目をつけ、忍び入つて探り取らうとすると、後の壁を破つて別の手が出て一息早く引さらつて了ふ。(其三) 返し、深川元町河岸通の場。七之助は前場で金を盗んだ巾着切白旗の金太の後を尾けて来て奪ひ合ひとなり、遂に金太を刺して金を手に入れる。【大詰】(其一) 木下川村淨光寺梅林の場。その翌日お瀧は七之助と夫婦氣取りの隠れ遊びに、梅見がてらの薬師參りに来て、掛茶屋で

後編は「小櫻姫風月後記」と云ふ。主要人物小櫻姫の名を取つたものである。【刊行】文化六年より文政三年まで。【諸本】京山全集(續帝國文庫)所收。【題材】支那小説「龍圖公案」中の金鯉魚の怪から暗示を得、京傳の「櫻姫全傳」(草紙)を模したもので、人名に同

身の上ばなしをしてゐるところへ、母親のお勢もやつて来る。今朝七之助がお瀧に與へた八十兩の大金と云ひ、また腹懸にあつた血だらけの手拭と云ひ、不審に堪へず訴人したところ、昨夜の人殺しが七之助と極つたからとお瀧に因果をふくめるためだつた。(其二) 同境内藥師堂の場。捕手がかゝるので、七之助は事態を知り「お瀧、手前は今になつて命が惜しくなつたか、ウム、もうかうなりやア道連れだ」と匕首をかざして大立廻りとなり、お勢を斬つて遂に繩にかゝる。

【批評】親のためにした殘虐が鐘を合圖に妹に報つて行く因果ばなしや、一筋の手拭が各場を縫つて行く手法等、古い歌舞伎脚本の舊套を脱し切つたとは云へないが、その筋動な筋立と洗ひ上げられた臺詞に、よく地方的季節的な景物詩を配し、すつきりした江戸前の佳作を成してゐる。作者の代表作の一つであると共に、從來單に四五の試作に筆を染めるに過ぎなかつた作者が、實際的脚本家として立つに至つたその第一作として、特に留意に値するものである。

【湖山】漢詩人【姓名】小野長恩。字は侗翁、一字は懷之。【別號】狂狂道人【生歿】文化十一年、近江國東淺井郡高畑村に生れ、明治四十三年四月十日歿す。享年九十七。【閱歷】江戸に遊び、梁川星巖に從つて詩を學び、後、三州豊橋城主大河内家に聘せられて藩政に參した。維新の後は詩酒に隠れて仕へなかつた。大沼枕山・鱸松塘と名を齊しうした。

【批評】その詩は豪宕淡雅、毫も修飾がない。故に奇氣が紙上に横溢してゐる。その論詩絶句に、「詩人本意在歳規、語要平常不不要、奇、若就先賢論風格、香山樂府是吾師」とある。

鯉魚の妖精の傀儡となつて姫に仇をする。一日、水二郎は彌生の方を救はうとして、娘玉琴を、漁夫網六を通じて清支の許に仕へさせる。網六は實は執權北條義時の臣田島造酒之丞であつた。彼はその忠節に感じて、彌生の方と玉琴を清支の許から奪ひ去る。志賀之助

る。彫琢を求めずして眞性情を吐露しようとする期した彼の本領を示したものである。湖山樓集の著がある。

【御傘】俳諧式目 三册 【編者】松永貞徳【名稱】本名は「誹諧御傘」、御傘は略稱である。御傘の二字は「ごさん」とよむが、古來或は「おからかさ」又「ぎよさん」とよんだ例もある。【名義】自序によると、本書は初め編者が題名に窮し、「そなた次第」と名付けようとして「侍童の非難にあひ、その侍童の按じた「うへさまのおからかさ」とに就いて神慮にはかり、その結果「うへさま」の五文字を略して「御傘」と題し、これを「ごさん」と音讀することにした。「御傘」と題する心は、この書物があれば、上様の御傘に指合のない如く、俳諧にもその禁制する指合をする人はあるまいといふのである。【刊行】慶安四年初秋。なほ萬治二年中秋版は十冊になつてをり、その他後刷が多い。【由来】當時は京も田舎も、貴賤老若を問はず、齊しく俳諧に耳を敬て心を悦ばせてゐたが、指合や去嫌指合参照等の禁制に惑ふことが多く、隨つてこれに關聯した諷論が絶えないので、二條良基の「連歌新式」(別項)に準據し、私の新法は設けないで僅かに一座一句に限られたものを二句に、七句のものをも五句にする程度の改訂を加へて、門弟のために本書を著すことになつたといふことが、その自序に誌されてゐる。【諸本】荊門俳諧續集(俳書大系第外)所收【解説】上にも述べた如く、本書は俳諧に論議の多い指合と去嫌とを連歌に於ける場合と對照して、それぞれの語また事物に關して詳細に制定し説明したものである。例へば「いにしへ」といふ語

は連歌では一座一句のものであるが、俳諧では二句までは詠んでも差支なく、太古・上古・中古・往古・古代・古今集などの「古」は「いにしへ」の義であるから、「いにしへ」と同じく一座に二句までは差支ないといふやうに、先づ連歌の制式をゆるめて一座の句数の限度を定め、或は「命」と「玉の緒」は折を變へるべく、「蟲の命」と「玉の緒」は二句去とすべきであるといふやうに、その去るべき句数を示し、或

はたとへ夏の季・秋の季をもつ草でも、總べて若葉となればその季は共に春であるなどと季を説き、或は「横川」は水邊でなくて名所であるなどと教へ、或は「雨ならん」の「ならん」は手術遠葉、「雨とならん」の「ならん」は「成」の字を當てる語であると述べるなど、懇切丁寧を極めた叙述に依つて、俳諧の實際家を指導したものである。なほ時に問答の形を借りて自ら定めた制式を補説した所もある。が、この

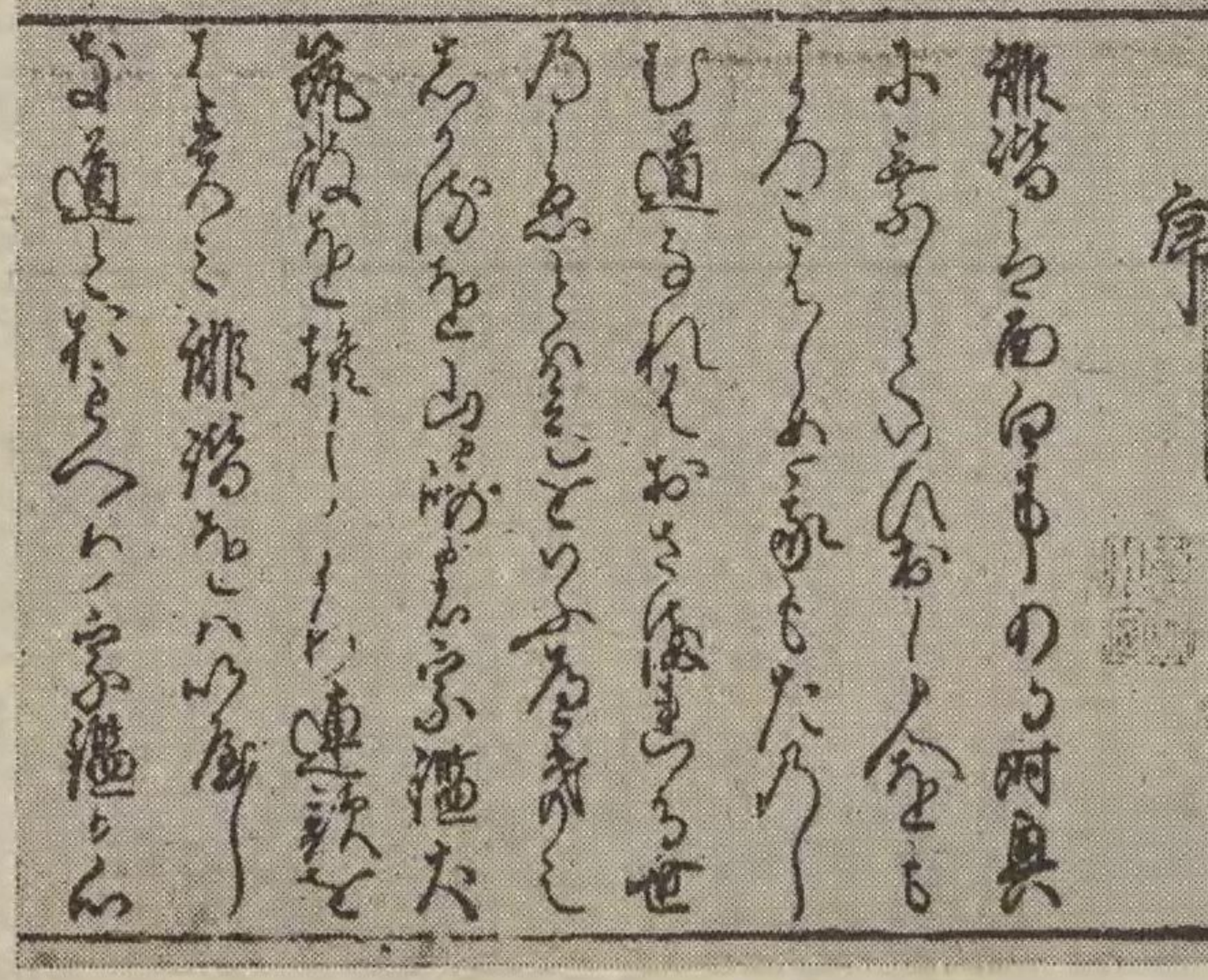
小猿七之助 ちのすけ 脚本 二幕 五場 【作者】岡鬼太郎 【刊行】世話狂言集・鬼太郎脚本集第一卷所收。【興行】大正九年一月、明治座にて初演。

は連歌では一座一句のものであるが、俳諧では二句までは詠んでも差支なく、太古・上古・中古・往古・古代・古今集などの「古」は「いにしへ」の義であるから、「いにしへ」と同じく一座に二句までは差支ないといふやうに、先づ連歌の制式をゆるめて一座の句数の限度を定め、或は「命」と「玉の緒」は折を變へるべく、「蟲の命」と「玉の緒」は二句去とすべきであるといふやうに、その去るべき句数を示し、或

【御傘】俳諧式目 三册 【編者】松永貞徳【名稱】本名は「誹諧御傘」、御傘は略稱である。御傘の二字は「ごさん」とよむが、古來或は「おからかさ」又「ぎよさん」とよんだ例もある。【名義】自序によると、本書は初め編者が題名に窮し、「そなた次第」と名付けようとして「侍童の非難にあひ、その侍童の按じた「うへさまのおからかさ」とに就いて神慮にはかり、その結果「うへさま」の五文字を略して「御傘」と題し、これを「ごさん」と音讀することにした。「御傘」と題する心は、この書物があれば、上様の御傘に指合のない如く、俳諧にもその禁制する指合をする人はあるまいといふのである。【刊行】慶安四年初秋。なほ萬治二年中秋版は十冊になつてをり、その他後刷が多い。【由来】當時は京も田舎も、貴賤老若を問はず、齊しく俳諧に耳を敬て心を悦ばせてゐたが、指合や去嫌指合参照等の禁制に惑ふことが多く、隨つてこれに關聯した諷論が絶えないので、二條良基の「連歌新式」(別項)に準據し、私の新法は設けないで僅かに一座一句に限られたものを二句に、七句のものをも五句にする程度の改訂を加へて、門弟のために本書を著すことになつたといふことが、その自序に誌されてゐる。【諸本】荊門俳諧續集(俳書大系第外)所收【解説】上にも述べた如く、本書は俳諧に論議の多い指合と去嫌とを連歌に於ける場合と對照して、それぞれの語また事物に關して詳細に制定し説明したものである。例へば「いにしへ」といふ語

はたとへ夏の季・秋の季をもつ草でも、總べて若葉となればその季は共に春であるなどと季を説き、或は「横川」は水邊でなくて名所であるなどと教へ、或は「雨ならん」の「ならん」は手術遠葉、「雨とならん」の「ならん」は「成」の字を當てる語であると述べるなど、懇切丁寧を極めた叙述に依つて、俳諧の實際家を指導したものである。なほ時に問答の形を借りて自ら定めた制式を補説した所もある。が、この

はたとへ夏の季・秋の季をもつ草でも、總べて若葉となればその季は共に春であるなどと季を説き、或は「横川」は水邊でなくて名所であるなどと教へ、或は「雨ならん」の「ならん」は手術遠葉、「雨とならん」の「ならん」は「成」の字を當てる語であると述べるなど、懇切丁寧を極めた叙述に依つて、俳諧の實際家を指導したものである。なほ時に問答の形を借りて自ら定めた制式を補説した所もある。が、この



(文 序) 傘 御

極めて複雑多であることは、一面の功はありながらも、實際上には寧ろ不便を招き、その結果、點者と執筆とが名利を擅にするやうになり、殊にその利のために、貞門の名流をして再び確執反目を事とせしむるに立ち至つた。

唐詩の弊を知ると共に、僞宋詩の更に如何に賤しむべきであるかといふことを、その詩話の中に言つてゐる。

【小山金五郎】
「金屋金五郎浮名額」
「佐久」

五山堂詩話
「著者」菊池五山「解説」五山は遺三卷八册

ゐない。

【解説】鎌倉時代の初期から宋との交通が漸く盛んになり、學僧の渡航する者が多かつた。その中期以後、宋の國が衰亂に陥つて、彼地の禪僧が渡來して鎌倉に入り、禪僧の往來が頻繁になつた。これより鎌倉に禪宗が興り、禪林に漢詩文が流行することとなつた。宋の渡來僧の蘭谿道隆・大休正念・子元祖元・鏡堂覺圓・西礪士曇等が皆漢詩文を善くし、入宋僧の圓爾辨圓・心地覺心・無象靜照・山叟慧雲・南浦紹明・無蘭普門・白雲慧曉等が大に聞えた。彼等は皆漢詩文を善くしたのである。鎌倉時代の末期に宋が衰亡し、元が盛興するに至り、禪僧の往來は常に絶えなかつた。それで禪林に漢詩文が流行したのである。元の渡來僧の一山一寧・東明慧日・清拙正澄・東陵永瑛・明極楚俊・空隱梵仙等が聞え、入元僧の嵩山居中・月林道皎・虎關師鍊(別項)・雪村友梅(別項)・寂室元光・別源圓旨・中巖圓月(別項)等が大に著はれてゐる。鎌倉幕府が倒壊して自ら禪宗の形勢が變遷し、京都に禪宗が興り、また同じく禪林に漢詩文が流行することとなり、こゝに五山文學が成立することとなつた。當時京都の公卿の學問文藝は漸く衰へ、諸國の武士は勃興したが固より彼等に學問文藝の注意せらるべきものがない。佛教の諸宗に専門の學者があつたが、世間に交渉がなかつた。この間にあつて、京都の禪林には學問文藝を以て一代に聞えた禪僧が多かつた。それで五山文學は、一方にかがやく燈明臺であつたと見られるのである。それは、南北朝時代・室町時代に互る二百餘年の事實である。然るにこの期間の形勢を觀察するに、自ら前後二分してゐる。即ち前期は南北朝時代より室町時代の應永の

末に至る凡そ一百年の間で、學問詩文が盛興してゐる。その著名なるは、虎關師鍊・雪村友梅・寂室元光・別源圓旨・中巖圓月等を経て、絶海中津・義堂周信(各別項)・觀中中諦・岐陽方秀(別項)・惺隱惠森等に至つて、盛興極まつてゐる状がある。虎關師鍊・中巖圓月・雪村友梅の學問人物、絶海中津・義堂周信・岐陽方秀(各別項)の詩文は、五山文學の王座を領するものとせられてゐる。永享以後一餘年の間には、唐宋の詩文の講説註釋が盛行してゐる。この間には、空雲等蓮・太岳周崇・桃源瑞仙・瑞溪周鳳(別項)・天隱龍澤(別項)・江西龍派・村菴靈彦・雪嶺永瑣・笑雲清三・月舟壽桂・萬里周九(別項)等が著はれてゐる。彼等は詩文を善くしたが、盛んに杜子美・蘇東坡・黄山谷等の詩を講説註釋したものである。當時、横川景三・彦龍周興・景徐周麟・惟肖得巖(各別項)・仁如集堯・策彦周良は、詩文の豊富を以て知られてゐる。

【詩文集】五山文學の中心になるものは、五山の禪僧の詩文集である。彼等の漢詩文を編輯したものは「翰林五鳳集」(別項)「禪林風月集」「花上集」(北斗集)「通界一覽集」等がある。が、もとよりその全部を収録したものでない。當時の諸禪僧の詩文集は禪林に寫傳せられてゐるものが極めて多い。それで五山文學の中心をなせるものが、未だ廣く世間に行はれてゐない。こゝにその主要なるもの目録を掲ぐることにする。

○岷峨集	二卷	雪村友梅
○南遊東歸集	二卷	別源圓旨
○天柱集	一卷	空隱梵仙(歸化)
○松山集	一卷	龍泉令泮
○早霧集	二卷	夢巖祖應
○禪餘吟	一卷	默翁妙誠
○隱隱集	五卷	雲溪支山
○西巖集	二卷	同
○雲溪疏	一卷	同
○若木集	一卷	此山妙在
○無規矩集	三卷	天瑩靈致
○空華集	二十卷	鏡舟德濟
○天龍一指集	一卷	義堂周信
○雲門一曲集	一卷	無極志玄
○隨得集	三卷	春屋妙葩
○石屏集拾遺	十卷	龍漱周澤
○石屏集拾遺	一卷	性海靈見
○高園集	一卷	同
○蕉堅集	二卷	汝霖良佐
○青嶂集	一卷	絶海中津
○南遊集	一卷	觀中中諦
○龍涎集	二卷	惺隱惠森
○卍餘集	三卷	天祥一麟
○懶室漫稿	三卷	愚中周及
○眞愚稿	一卷	仲芳圓伊
○繫雲集	一卷	西胤俊承
○龍石稿	一卷	空雲等蓮
○不二遺稿	三卷	東漸健易
○了幻稿	一卷	岐陽方秀
○東海一瀆集	三卷	古劍妙快
○東海一瀆別集	一卷	中巖圓月
○東海一瀆拾遺	一卷	同
○鴉臭集	一卷	同
○雲樞猿吟	一卷	太白眞玄
○繫猿檝	三卷	惟忠通恕

○獅子吼集	一卷	叔英宗播
○碧雲稿	一卷	碧雲忠恕
○業鏡錄	一卷	心華元棟
○紙襖錄	一卷	太清宗渭
○放牧集	一卷	無夢一清
○續翠稿	一卷	江西龍派
○續翠稿	一卷	同
○道隱稿	一卷	同
○春暉集	一卷	月溪中珊
○雲安集	一卷	心岳通知
○松花集	一卷	芳允惠菊
○松夫集	一卷	信仲以篤
○蕉雨餘滴	一卷	同
○明之遺稿	一卷	一韓智翹
○東廬吟稿	一卷	明之永誠
○聽雨集	一卷	維馨梵柱
○春耕文集	一卷	心田清播
○蟬闔外稿	一卷	同
○流水稿	五卷	瑞岩龍惺
○竹林疏稿	一卷	東沼周巖
○臥雲稿	一卷	桂林德昌
○竹窠集	一卷	瑞雲周鳳
○狂雲集	一卷	同
○續狂雲集	一卷	一休宗純
○村菴稿	一卷	同
○村菴疏稿	一卷	希世靈彦
○默雲稿	一卷	同
○天隱文集	一卷	天隱祖澤
○松蔭吟稿	一卷	同
○京華集	十三卷	琴叔景題
○京華別集	一卷	横川景三
○京華續集	一卷	同
○京華新集	一卷	同
○京華後集	一卷	同
○京華外集	一卷	同
○東遊集	一卷	同

南北朝時代より室町時代の末期に互る京都の禪林の漢詩文等と呼ぶのである。當時京都の禪林には、漢詩文を善くする禪僧が輩出して大に流行した。和歌・和文を善くする禪僧が、全くなかつたのではないが、僅かに正徹・永雄等一二人にとどまつた。それで五山文學と云へば漢詩文であつて、和歌・和文は認められて

幻雲文集	三卷	同
鶴集	一卷	南江宗沅
漁菴小稿	一卷	同
四六稿	一卷	同
水拙手簡	一卷	祖溪德庵
枯木集	一卷	春澤永恩
梅溪集	一卷	雪嶺水菴

以上は主要なる詩文集であるが、別に禪僧の語録に見ゆる詩文が極めて多い。(○印は別項) 【註疏類】禪林の漢詩文の流行は、自ら前人の詩文の讀解を促したものである。早く義堂周信の「貞和集」(別項)等が出で、禪林の間に流布した。後になつて天際龍澤の「錦繡段」(別項)

古文眞寶抄	梅屋宗香
湖月抄	湖月信鏡
續錦繡段抄	五卷
青玉案抄	同
帳中香(黃山谷抄)	二十一卷
曉風集(三體詩抄)	六卷
天下白(蘇東坡抄)	二十五卷
龍門集(禪林風月集註)	同

觀がある云へよう。金人劉中の龍門の石佛像に題する詩に、「鑿破蒼崖已失真、又添行客眼中塵、請君看取他山石、不費工夫總法身」と云ふがある。これは禪意を領會したる自然觀であらう。この詩は夙に五山の禪林に傳唱せられてゐたもので、東福寺の太極正易は、この詩を擧げ、「俗士にしてこの語あ

り、以て敬すべきなり。誦文閣梨の知る所に「あらず」と言つてゐる。この見地は、禪僧が自ら大に誇る所である。それでかくの如き禪宗の人生觀・世界觀・自然觀が即ち禪文學の基本的意義でなければならぬ。こゝに禪文學の特徵が發揮せらるゝのである。且つ五山の禪僧に佛儒一致の思想を發表したものがあつた。これは禪宗の見地から、儒教を説明しようとしたものであると見らるゝのである。それで五山文學が變遷して、徳川幕府の儒者の學問詩文の興隆となつたのであるが、全然佛儒一致の思想が無くなり、抗爭の思想が勃興して禪文學の特徵が見られないこととなつたのである。

【参考】五山文學小史 村觀光 ○五山詩僧傳 同上 ○五山文學研究 笹川種郎(日本文學講座)

五山文學全集

【編者】上村觀光【刊行】第一・二輯詩文部、明治三十九年、第三輯詩文部、明治四十一年、第四輯詩文部、大正四年刊、叢書房。【解説】我が國の文學史・宗教史、又は教育史上度外視する事の出来ない五山の僧侶の文學的業績が湮滅に近い有様であるのを慨した編者が、苦心慘澹して蒐集した五山僧侶の詩文集、百十種、日記二十五種及び語録五十八種、總計四百八十五卷を収めたものであつて、その中、詩文集・東歸集・濟北集・鈍鐵集・阜霖集・東海一漚集・空華集・菴壁集・明極楚俊遺稿・業鏡臺・懶室漫稿・不二遺稿・翰林胡蘆集等約三十編のみが刊行された。佛光・虎關・本源・大鑑・竺仙・中巖・鐵舟・義堂・周麟等が以上の著者である。第三輯の例言に於て、編者は苦心を述べて「本集收むる所の典籍、世間に流布するもの太だ稀にして、偶々之を得るも鼠咬蠶食、極めて

多く、且つ寫本の故を以て東東偏偏の誤り尠しとせず、一々之を異本と對校して其缺落を補ひ、誤字を正し、句讀を附すと云つてゐる。その學界に盡す所は多大である。【土井】

古詩

漢詩【名義】「近體」に對して「古詩」と稱する。「文章流別論」には、詩經三百篇を指して古詩といひ、「文選」には漢詩十九首を指して古詩といひ、「文體明辨」には隋以前の作を總稱して古詩といつてゐる。併し今日古詩といふ時は、必ず近體創始以前、換言すれば隋以前の詩の體を指すことになつてゐる。故に隋以前の詩の體に則つてさへ作れば假令今日作つたものでも、古詩と稱することを得るし、さうでなければ假令唐宋時代に作つたものでも、古詩ではなくて近體の詩になつてしまふ。【構造】近體の絶句ならば起承轉合(別項)の四句から成り、律詩別項ならば起聯・頌聯・頸聯・尾聯の四聯八句から成つてゐるが、古詩は長短常なく、一定の篇法といふものなく、節を追ひ段を逐つて任意適當に布置すればよい。平仄の排列にも一定の法式がない。然るに、清の王士禛は「古詩平仄論」といふ書を著して、平韻到底の七言古詩には斷じて律句を用ひてはならぬこと、仄韻到底の七言古詩は稀には律句を用ひても差支へないこと、平仄兩韻を交互に用ひたものには律句を多く用ひても差支へないこと等を主張してゐるが、これは決して定論とはいふことが出来ない。押韻法は、五言ならば第二句以下隔句に韻を押し、七言ならば第一句・第二句に韻を押し、以下隔句に韻を押し、しかも五言でも七言でも韻を押しぬ句の末尾の文字は、韻字と平仄(韻の項参照)を同じうしない

やうにせねばならぬ。而してその韻は、一韻到底と稱し、一韻を以て、一篇全體を終始するものと、換韻又は轉韻と稱し、一篇中幾回も韻を換へて踏むものとの二種がある。換韻法に就いては、理論上より説いて意の轉換する時には必ず韻を換へるべしといふ説と、又實際上より説いて意未だ盡きずとも、その韻の中に最早使用し得べき文字がなければ韻を換へてもよい。又意既に盡きても使用し得べき文字があれば、必ずしも韻を換へるには及ばないといふ説とがある。又、形式の上から見ると、逐段轉韻格と稱して四句ごとに韻を換へるもの、逐段轉韻格と稱して六句・八句・十二句で韻を換へるもの、促進法と稱して二句一轉のもの、單殺法と稱して三句一轉のものなどがある。促進法は毎句に押韻し、單殺法は首尾二句に押韻するものと、毎句押韻するものがある。而して換韻は平韻と仄韻とを交互に用ふるのが正式で、韻を換へたときには、その首句にも押韻するのが、常法となつてゐる。

【参考】初學詩法 貝原篤信 ○詩格集成 長山貫 ○詩轍三浦安貞 ○詩律 赤澤一 ○詩體詩則 林義卿 ○唐詩平側考 盧玄淳 ○古詩聲譜 江馬聖欽 ○詩格刊誤 尾約 ○夜航詩話 津阪孝紳 ○古詩平仄論 清王士禛 ○滄浪詩話 宋嚴羽 ○詩譜 元陳

古詩韻範

韻法書【著者】武元登登庵(名は正實、備前の人)【解説】古詩の韻法を詳説し、唐人の作を引いて範を示したものである。【佐久】

古事記

神話・傳説文學・歴史 三卷【撰録者】太安萬侶。記紀によれば、太(多)氏

の始祖は神武帝の御子、神八井耳命となつてゐる。安萬侶は「續日本紀」に慶雲元年正月に從五位下に、和銅四年四月に文武百寮成選者位に叙せられて正五位上に、靈龜元年正月に從四位下に進み、同二年九月には氏長者となり、養老七年(三三三)七月に死去したが、時に民部卿從四位下であつたと見えてゐる。

【名稱】本居宣長は「古事記傳二之卷」に、「さて日本紀をば、夜麻登夫美と訓を、此記の題號は、訓あることも聞えず。本より撰者の心にも、ただ字音に讀とにや有けむ。されど彼夜麻登夫美の例に倣はば、布瑠許登夫美とぞ訓まし(記號の事)と云つてゐる。佐藤誠實はこの説を承けて「ふることぶみ、又はふることのきと讀むべきか、……古事記を又は舊事記とも書し事のありし故に、それによりてかかる名を負はせしならん(古事記考)と云ひ、井上頼岡も「フルコトブミ」と訓むを可としてゐる(同上)。しかし、田中頼庸が「古事記新釋」に「本記は古より音讀なりけむ、或はフルコトブミと唱ふる説あれど、舊事記も亦同轍に歸するより外なければ從ひがたし」と言つてゐるのに從つて、「ゴジキ」と音讀すべきであらう。【名義】古の事を記した記の意。【書紀】天武の卷に、「記は定帝紀及上古之諸事」とあるのと同義である。

【成立・由來】和銅五年正月二十八日の撰進。その由來は序によつて知られる。即ち天武天皇は、諸家に傳ふる帝紀及び本辭の、正實に違ひ多く虚偽を加へたるを歎き給ひ、邦家の經緯であり、王化の鴻基である帝紀及び舊辭を、撰録討覈して後葉に傳へんと思召されて、非凡なる記憶力を有してゐた舍人神田阿禮に詔して、帝皇の日繼と先代の舊辭とを誦習せ

石戸の内から歡喜び咲くわけを問はれる。宇受賣命が、「大神よりも貴い神が坐す」と答へ、太玉命が鏡を見せると、大神は愈々不審に思はれて、戸から少し出でました時に、手力男命が引き出し奉つた。かくて世界は再び明るくなつた。この事件の結果として、須佐之男命は八百萬の神の決議により、千位置戸を課せられ、手足の爪を抜かれて高天原から追放された。その次は挿話である。須佐之男命は食物を大氣都比賣神に乞はれた。比賣は鼻・口・尻から種々の珍味を取り出して獻つたので、命は怒つて比賣を殺されると、比賣の體に、蠶・稻種・粟・小豆・麥・大豆が出来た。そこで神産巢日命がこれ等の物を取らせて種とされた。放逐された須佐之男命は、出雲國の鳥髮山で美女櫛名田比賣のために詭計を以て八俣の大蛇を退治し、その尾から三種の神器の一なる草薙劍を得て、これを天照大神に奉り、一方では櫛名田比賣を娶つて、須賀の宮に新婚の夢を結ばれた。その結果多くの神々が生れ、その血統を引いて大國主神が生れた。

大國主神の物語は求婚説話に始まる。大國主は、兄弟八十神と稻羽の八上比賣に求婚に行く途中、氣多の前で裸の兔に逢はれた。前に行つた八十神は「潮を浴びて風に吹かれ、高い山の上に寝てゐると、傷は癒へ」と言つた。教に從つた兔は、前より一層激しい痛さに堪へかねて泣き伏してゐた。後から来た大國主は兔の様子を見てその理由を訊ねられる。兔は和邇を欺いたために、怒つた和邇が自分の衣服を悉く剥いだこと、八十神の教に從つて一層激しい痛さを覺えてゐることを答へる。そこで大國主は、兔に深い同情を寄せて、淡水と蒲の黄とによつて、その膚を癒えさせられ

た。兔は大國主を祝福して「貴方がきつと八上比賣を得られるでせう」と豫言する。豫言は果して的中した。八上比賣は大國主に嫁したいと言つた。求婚に失敗した八十神は色々な奸計を以て二度までも大國主を殺す。併し御祖命と神産巢日命の温情によつて二度とも蘇ることが出来た。が八十神の迫害は益々激しくなる。そこで御祖命は心配して、大國主に須佐之男命の坐す根の國往きを勧める。勤めに從つて根の堅州國に往かれた大國主は、須佐之男命の女の須世理毘賣と結婚される。そして須佐之男命のために蛇の室・蟻・蜂の室に入れられて試されたが、これ等の試練は妻の心盡しの領巾によつて切り抜ける事が出来、最後の野火の難も鼠によつて救はれた。さうして須佐之男命の寢息を窺つて、その髪を櫛毎に結び付け、須世理毘賣を背負ひ、生太刀・生弓矢・天沼琴迄も奪つて根の國を逃げ出された。がその時、琴が樹に觸れて大地も鳴動する程の音を立てたので、須佐之男命は驚いて目を醒し、逃ぐるを追つて黄泉比良坂まで行き、遙かに望んで「大國主となれ」と叫ばれる。根の國から歸つた大國主は、かの生太刀・生弓矢を以て、八十神を追ひ伏せ追ひ拂ひ、國土の經營を始められた。

次は戀愛物語である。八上比賣は嫡妻須世理毘賣の嫉妬を恐れて、生んだ子を殺して稻羽へ歸つたが、大國主はその嫉妬をもつともせず、高志の沼河比賣に求婚に行かれた。沼河比賣との間に、二つの美しい長歌が唱和される。又その次には須世理毘賣の嫉妬を記した長歌、それに答へた姫の愛情を歌ふ長歌が引いてある。長歌の後には大國主の神裔が記され、その次に少名毘古那神との國土經營の物語が続く。羅摩の船に乗り、鵜の皮を衣服として海路から御大の前に来た少名毘古那は、大國主を助けて國土を作り堅めた後、常世國に渡つた。大國主が歎き悲しんでゐると、海原を照して近寄つて来る神があつた。その神は「我を厚く祀るならば、國土の經營を助けよう」と言つた。大國主が如何にして祀るかを尋ねられると、「我を大和の青垣東の山の上に齋き奉れ」と答へた。その後には大年神の神裔が記されてゐる。

出雲神話が薄暗い低調によつて終りを告げると、そこに突如として、豊葦原の千秋の長五百秋の水穂の國は、吾が御子正勝吾勝々速日天忍穗耳命の知らさむ國」といふ天照大神の命令によつて、高天原の物語が展開される。地上の君主として新に指名された天忍穗耳命は、天浮橋に立つて水穂の國を見給ふと、非常に騒然としてゐるので引返された。そこで八百萬の神々を集めて會議が開かれ、天善比神の派遣が議決された。が、この神は地上に降るや大國主に媚び付いて、三年に至るまで復奏しなかつた。天上では再び會議が開かれ、その結果天若日子が弓矢を賜はつて降る事に決つた。然るに天若日子も亦大國主の女下照比賣を娶り、又水穂の國を奪はうと企み、八年に至るまで復奏しなかつた。天上では三度會議が催され、雉名鳴女を天若日子の問責使として遣はした。雉は天若日子の門にある楓の上に降りついて、つぶさに天神の詔命の通りに問責した。所が天佐具賣が雉の鳴聲を聞いて、この雉の鳴聲は悪いからお射殺しになるやうにと日子に進言したので、日子は天神から賜はつた弓矢でその雉を射殺した。その矢は雉の胸を貫いて、逆さまに射上げられて

金神・手力男神・天石門別神を従へ、三種の神器を得て筑紫の日向の高千穂の久士布流多氣に天降り坐した。そして笠沙の御前に壯大な宮室を營まれた。次は挿話である。天孫は天字受賣に「猿田毘古は汝の顯はした神であるから送り申せ。又その神の名を負へ」と仰せられたので、その子孫を猿女君といふ。所で猿田毘古は阿邪訶にゐた時、比良夫貝に手を挾まれて海に溺れた。が一方この神を送つて還つて来た宇受賣は、大小の魚を悉く聚めて、天

千鈎を作つて償はうとしたが、兄はどうしても許さない。途方に暮れて海邊で泣いてゐると、鹽椎神が同情して、小舟を造つてそれに載せ、海宮への道を教へる。命は教のまゝに海宮を訪ね、海神の娘豐玉毘賣と婚して、歡樂の三年を過ぎたが、或る日命は失つた鈎の事を思ひ出して長歎される。比賣がそれを氣にして父神に告げ、父神に事情を聞かれた命は、悉皆打明けられる。そこで海神は大小の魚を召集して鈎の詮議をなし、鯛の喉から失

て戦死される。そこで皇軍は南に廻つて熊野に行つたが、熊野山の神は毒氣を以て皇軍を無力にする。が、高倉下の獻つた靈劍の威力によつて忽ち切り仆された。その次に、挿話として、高倉下が天照大神・高木神の命を受けた建御雷神から靈劍を與へられた物語がある。皇軍は八咫鳥の先導によつて熊野から吉野、吉野から大和へ國津神を従へつゝ行くと、宇陀に兄宇迦斯弟宇迦斯が居る。兄は押機を作つて天皇を弑さうとするが、陰謀は弟の密

め殺された。第二代綏靖天皇以下、安寧・懿德・孝昭・孝安・孝靈・孝元・開化の八代の間には、物語らしいものは無く、御系譜の連鎖である。第十代崇神天皇に關する物語は、神の祭祀に始まつてゐる。この御世に疫病が流行して、人民が夥しく死んだ。天皇はそれを愁ひ歎き給うて、或る時神床に坐ますと、夢に大物主神が現はれて、意富多泥古をして吾が御前を祭らしめられるれば、疫病終熄し、世の中が平安になる

であらうと告げた。そこで意富多泥古を祭

兎の様子を見てその理由を訊ねられる。兎は和邇を欺いたために、怒つた和邇が自分の衣服を悉く剥いだこと、八十神の教に従つて一層激しい痛さを覚えてゐることを答へる。そこで大國主は、兎に深い同情を寄せて、淡水と蒲の黄とによつて、その膚を癒えさせられる。

比賣との間に、二つの美しい長歌が唱和される。又その次には須世理毘賣の嫉妬を詠びた長歌、それに答へた姫の愛情を歌ふ長歌が引いてある。長歌の後には大國主の神裔が記され、その次に少名毘古那神との國土經營の物語

の上に降りついて、つぶさに天神の詔命の通り問責した。所が天佐具賣が雉の鳴聲を聞いて、この雉の鳴聲は悪いからお射殺しになるやうにと日子に進言したので、日子は天神から賜はつた弓矢でその雉を射殺した。その矢は雉の胸を貫いて、逆さまに射上げられて

造り賜はらん事を乞うて、出雲の多藝志の小濱に御舎を造つて隠退した。地上が既に平定されたので、天忍穂耳命に、再び葦原中國の統治の命が下つたが、命はこれを己が子邇々藝命に譲られた。そこで天孫は猿田毘古神を先導となし、五伴緒を初め思

金神・手力男神・天石門別神を従へ、三種の神器を得て筑紫の日向の高千穂の久士布流多氣に天降り坐した。そして笠沙の御前に壯大な宮室を營まれた。次は挿話である。天孫は天宇受賣に、「猿田毘古は汝の顯はした神であるから送り申せ。又その神の名を負へ」と仰せられたので、その子孫を猿女君といふ。所で猿田毘古は阿邪訶にゐた時、比良夫具に手を挾まれて海に溺れた。が一方この神を送つて還つて来た天宇受賣は、大小の魚を悉く聚めて、天孫に仕へ奉るや否やを問うた。その時諸々の魚は皆仕へ奉る事を誓つたが、海鼠だけが答へなかつたので、紐小刀で海鼠の口をさいた。そこで、御世々々志摩から初物を獻る時には猿女君に賜ふのである。

千鈞を作つて償はうとしたが、兄はどうしても許さない。途方に暮れて海邊で泣いてゐると、鹽椎神が同情して、小舟を造つてそれに載せ、海宮への道を教へる。命は教のまゝに海宮を訪ね、海神の娘豊玉毘賣と婚して、歡樂の三年を過ぎたが、或る日命は失つた鈞の事を思ひ出して長歎される。比賣がそれを氣にして父神に告げ、父神に事情を聞かれた命は、悉皆打明けられる。そこで海神は大小の魚を召集して鈞の詮議をなし、鯛の喉から失せた鈞を得て命に奉る。鈞を得た命は、海神から兄を苦しめる策を授かり、鹽珠・鹽乾珠を持つて上津國へ還り、兄に復讐して遂に夜畫の守護人とされる。一方既に身重になつてゐた豊玉毘賣は、産期が近づいたので、夫の後を追つて上津國に來り、海邊に鶴の羽で葺いた産屋を造らせたが、その屋根を未だ葺き終へないうちに、産氣づいて來た。比賣は夫に本國の形になつて産をするから、産屋の中を覗かないやうにと言つたが、好奇心に驅られた命は、その禁を破つたので、比賣は心恥かしく思つて、子を生み置いたまゝ海邊を塞いで海宮へ還られた。然し後には夫戀しさに堪へないで、妹の玉依毘賣を通じて春の君に戀歌を送り、春の君も戀情をこめた歌を送られた。次に鶴草葺不合命の御事が記されてゐる。

〔中巻〕 鶴草葺不合命と海神の女王玉依毘賣との間に生れ給うた神倭伊波禮毘古命（神武天皇）は、高千穂宮に坐して皇兄五瀨命と東征を議られた。御東征の議とその途中の事が極めて簡単に語られる。戦端は先づ那賀須泥毘古との間に開かれたが、皇軍は日に向つて戦つたので敗戦し、五瀨命は紀の國なる男之水門で戦死される。そこで皇軍は南に廻つて熊野に行つたが、熊野山の神は毒氣を以て皇軍を無力にする。が、高倉下の獻つた靈劍の威力によつて忽ち切り外された。その次に、挿話として、高倉下が天照大神・高木神の命を受けた建御雷神から靈劍を與へられた物語がある。皇軍は八咫鳥の先導によつて熊野から吉野、吉野から大和へ國津神を従へつゝ行くと、宇陀に兄宇迦斯・弟宇迦斯が居る。兄は押機を作つて天皇を弑さうとするが、陰謀は弟の密訴によつて暴露し、却つて己が作つた押機に打たれて死ぬ。かくて皇軍は弟の獻つた大饗を以て酒宴を催し、兄宇迦斯を嘲笑する長歌を歌ふ。皇軍は轉じて忍坂の大家なる土雲八十建を詭計によつて打滅ばし、又登美毘古をも兄師木・弟師木をも撃つたが、一撃たずば止まじ」といふ強烈な意欲を現はした御歌が結びつけられて、物語を一層英雄的ならしめてゐる。かくて天皇は荒ぶる神及びまつろはぬ人を平げ給うたので、畝尾の白鹿原宮で始めて天下を治められた。天皇は皇后とすべき美人を求められる時に、大久米命がその候補者として、神の御子なる伊須氣余理比賣を勧めた。この比賣に關して一挿話がある。それは大物主神が丹塗矢に化して勢夜陀多良比賣と婚し、この比賣を儲けたといふ神婚説話である。天皇は高佐士野を行く七人の媛女の中に伊須氣余理比賣を認められ、大久米命を媒人として比賣と婚せられた。ところが天皇崩御の後、天皇の長子當藝志美命は庶母伊須氣余理比賣と婚けて、その腹なる三人の庶弟を殺さうとする。母は患苦ひて二首の歌を詠じてその子達に、暗に庶兄の殺意を告げられたので、御子達はそれと覺つて、逆に庶兄を攻

め殺された。第二代綏靖天皇以下、安寧・懿德・孝昭・孝安・孝靈・孝元・開化の八代の間には、物語らしいものは無く、御系譜の連鎖である。第十代崇神天皇に關する物語は、神の祭祀に始まつてゐる。この御世に疫病が流行して、人民が夥しく死んだ。天皇はそれを愁ひ歎き給うて、或る時神床に坐ますと、夢に大物主神が現はれて、意富多多泥古をして吾が御前を祭らしめらるれば、疫病終熄し、世の中が平安になるであらうと告げた。そこで意富多多泥古を探し出して見ると、それは大物主の後裔であつたので、早速三輪大神をはじめ他の神々を祭らしめられると、果して疫病熄み、世は平安となつた。その次に意富多多泥古の子である由來が挿話として入れられてゐるが、それは大物主が美人活玉依毗賣に夜のみ通つたといふ三輪山傳説である。さて高志征伐に向つた大毘古命は、山代の幣羅坂で、腰装着た少女の歌ふ長歌を聞いて、皇兄建邇安王の叛意を知り天皇に告げる。そこで大毘古命に軍を副へて庶兄を攻め殺さしめられた。かくて大毘古命及びその子建沼河別命の力によつて國々も平いだったので、世は治まり民は富み榮え、調の制も定まり、世人この天皇を「初國知らしし御眞天皇」と稱へ申した。

次の垂仁天皇は、沙本毘賣を后とせられてゐた。或る時、后の兄沙本毘古王は、妹に「夫と兄と孰れか愛しき」と聞いた。后は面と對つては心強く言ひかねて「兄ぞ愛しき」と答へられた。そこで兄は謀叛を企て、汝まことに我を愛さば汝と共に天下を治めようと言つて、紐小刀を妹に與へ、天皇を弑し奉れと強要す

る。后は己が膝に枕して御寝ました天皇の御類に、三度小刀を擬したが、愛に引かされて果さず、さめくと泣き給ふ。その涙が天皇の御顔にかゝり、ために天皇は御目を覺され、沙本の方から暴雨降り来て吾が面を汚らし、又錦色した小蛇が我が頸に繞つた夢を見たが、これは何の兆であらうかと后に訊ねられる。后は兄の叛意を隠さず打明けられたので、天皇は怒つて沙本毘古を攻められたが、后は兄を思ふ情に堪へかねて、懷妊の身にも拘らず、密かに後門から逃れて兄の稻城に入られる。天皇は后と御子に對する愛の故に、攻手を緩められる。やがて后は稻城の中で出産され、その御子を天皇にお渡ししたいと申し出られる。天皇は優れた力士達に命じて、御子を抱いて出られた后を、御子諸共に奪はせようとされたが、后は豫ねて天皇の御心を覺つて、髪を剃り、玉の緒を腐らせて捕へようとする力士達の手からすり抜けて、稻城の中へ逃げ歸り、子供については母らしく、天皇に向つては妻らしく振舞ひながら、遂に兄と共に死に就かれた。所が御子本牟智和氣王は八拳鬚が胸前に至る迄口が利けなかつた。が或る時、高往く鳴が音を聞いて始めて言葉を出されたので、大鶴といふ人を遣はして、その鳥を高志國の和那美の水門で捕へさせた。然し御子はその鳥を見ても、やはり物が言へなかつた。天皇はこれを思ひ悲しんで居られたが、或る夜の夢に、自分の宮を大君の宮のやうに造つたならば、御子の口が利けるであらうと覺す神があつた。太占に卜つて見ると、その祟は出雲大神のなす所と解つた。そしてこの神を拜むことによつて験がある事を宇氣比によつて確めたので、出雲に行つて大神を

拜むと、果して歸り途から口が利けるやうになつた。又御子は出雲に於て一夜肥長比賣を婚された。所が、その姫を竊み見ると蛇であつたので、御子は驚いて逃げられる。姫は患ひ歎いて海原を光らして追つて来る。御子は愈々恐れて船を山越えさせて逃げ還られた。天皇は御子の口が利けるやうになつたので心から喜ばれ、直に大神の宮を壯大に營ましめられた。又天皇は后の獻言に従つて四人の少女を召されたが、美しい二人だけを留めて醜い二人を還された。醜い圓野比賣はそれを氣にして自殺した。また天皇は多遲摩毛理を常世國に遣はして、橋を求めしめられたが、多遲摩毛理の歸らない前に崩御せられた。歸つた多遲摩毛理は崩御を悲しみ歎き、木の實を御陵に捧げ、哭き叫びながら死んだ。景行朝の物語は、小碓命の物語によつて満されてゐる。天皇は大碓命が朝夕の大御食に顔を出さないのを、弟の小碓命をして諭さしめられた。弟は兄が廁に入つた所を捕へて、楹み批いでしまつた。そこで天皇は小碓命の荒い心に恐れをなされて、熊曾建征伐に遣される。小碓命は妹比賣より貰つた御衣御裳を以て女装し、熊曾建の宴樂の日に女人の中に交り、建の寵愛を得つゝ宴酣する時に、劍を抜いて兄の建を刺し殺された。驚愕して遁ぐる弟建をも階段の下で刺された。瀕死の弟建は、「倭建」の御名を獻する。命は更に山神・河神・穴戸神を征服し、出雲建を殺さうとして、建と親友の契を結び、共に肥の河に水浴に行かれる。そして河から先づ上つて、自分の詐刀と建の直刀とを取換へ、決闘して建を打殺された。西征を終へて大和へ歸られると、天皇は再び命に東方征伐の命を下された。命は

伊勢に行つて倭比賣に天皇の御心を恨み歎かれたが、比賣は命を感めて草薙劍と囊とを與へられる。そこで命は尾張に到つて美夜受比賣と婚約し、山河の神を平定しつゝ相模に到つて野火の難に逢はれたが、その危難は草薙劍と囊の中の火打によつて救はれる。次いで走水の難航の際には、后弟橋比賣の入水によつて救はれた。后は夫を思ふ惻々たる愛情を辭世の歌に表白して、從容として死につかれたが、この愛情に對しては、足柄時於ける命の「あづまはや」の長歌がある。やがて次には美夜受比賣との戀歌の唱和があり、命は劍を比賣の許に置いて伊服岐山の神を殺しに行かれる。そして山の神の毒氣にあてられ、漸くにして能煩野に到り、望郷の歌を詠じて死んで行かれた。薨後、命は八尋白智鳥になつて空を飛んで行つた。そこで后や御子達は泣く泣く挽歌を歌ひつゝその後を追はれた。白鳥は河内の志幾に留まつたので、そこに白鳥の陵を作つた。

成務朝には、國縣制定の事があるのみ。仲哀朝の物語は筑紫を舞臺とする。天皇は神功皇后と共に筑紫の詞志比の宮に坐した。或る時皇后に「西方の寶の國を歸服させよう」との神託があつたが、天皇はこれを信じ給はなかつたので兩御せられた。そこで國の大祓が行はれた。大祓の後に再び神託があつて、その神の名と西方の國を平定する方法が教へられる。教のまゝに軍船を乗り出すと、神佑忽ちに現はれ、新羅王は戦はずして降服を誓つた。かくて皇后は目出度く凱旋せられ、筑紫の宇美で皇子(應神天皇)を産まれた。皇后が皇子を連れて大和へ還られるといふ噂を聞いた皇子の庶兄香坂王、忍熊王は、庶弟を殺さうとし

れたが、皇后の嫉妬を恐れて本國へ歸る。天皇は黒日賣が船出するのを望んで姫に對する愛情を歌はれ、姫を戀つて吉備へ忍び下られると、そこに又その愛情が美しい歌によつて語られる。別れに臨んで姫は別離を悲しんで歌ふ。その後皇后が饗宴のための御綱柏を取り紀の國に行かれた留守に、天皇は異母妹八田若郎女を婚された。この事を聞かれた皇后は、怒の餘り柏を海に投げ棄てて、宮へ還らず山代から大和へと行つて了はれる。天皇は

志都歌を中心とした快足船「枯野」の語がつづいてゐる。仁徳帝に續いて履仲帝が即位せられた。この天皇が難波の宮に坐した時、皇弟墨江、中王は皇位を奪はうと、天皇の御寢を窺つて宮に火を放つ。天皇は阿知直に救はれ當麻道を廻つて石上神宮へ入られた。そこへ皇弟水齒別王が訪れられたが、天皇は邪心なきを示すために中王を殺せと命ぜられる。水齒別は隼人曾婆訶理を欺して、中王を殺させ、又己が君を弑した不義なる隼人をも詭計

逃げ入る。その頃童男であつた大長谷王は、この變を聞くや慨々として、二人の兄に善後策を相談されたが、二人共取り合はれないので、大に怒つて斬り殺し、自ら軍を興して意富美の家を圍まれる。意富美の方でもこれに應戦したが、力窮まり矢も盡きたので、意富美は王子の言によつて先づ王子を刺殺し、自ら頸を刎ねて死んだ。次には市邊忍爾王が近江の久多綿の蚊屋野に於て大長谷王に殺される事を語り、延いては市邊王の御子なる意

て宇氣比狩(祈り狩)をしたが、香坂王は怒れる猪に昨殺された。然し忍熊王はそれに恐れず軍を興して皇后の軍を待ち迎へたが、詭計に陥つて近江の海で死なれる。その次に角鹿の氣比大神と御子が名易へをする物語があり、皇后が御子を祝福して「酒樂の歌」を詠まれ、建内宿禰がそれに和して歌つたといふ二首の歌が記されてゐる。

應神朝の物語は、先づ、天皇と矢河枝比賣との戀物語に始まり、その中心をなしてゐるのは、戀人との酒宴に歌はれた一つの長歌である。次に髪長比賣を太子大雀命に譲られる話があり、四首の美しい歌が此處にも結びつけられてゐる。次には吉野の國主等が大雀命の劍を讚美する歌、酒を獻する歌がある。それに續いて部の制定、池の築造、韓人渡來などの事件が簡単に記されてゐる。そこに突然大山守命の反亂が物語られる。大山守命は皇位を奪はうとして弟命なる宇運能和純郎子の太子を殺さうとする。が、その陰謀は大雀命の知る所となり、太子に告げられた。太子は驚いたが却つて詭計を以て大山守命を殺された。そのあとに二つの挿話がある。一つは新羅の王子天之日矛の渡來と難波の比賣許曾社の由來を語るものであり、他は伊豆志大(日矛の齋らした八種の神寶)の女伊豆志登(秋山之下水壯夫と春山之霞壯夫といふ兄弟の神が賭をして争つたが、母の同情を得て弟が求婚に成功したといふ物語である。

〔下巻〕仁徳朝の物語に始まる。最初は天皇が民の貧窮を憐み給うて三年間課役を免じ給うたといふ御仁慈の物語である。次には皇后石之日賣の激しい嫉妬を背景とする天皇の戀物語が展開する。吉備の黒日賣は天皇に召さ

が、或る夜の夢に、自分の宮を大君の宮のやうに造つたならば、御子の口が利けるであらうと覺す神があつた。太占に卜つて見ると、その祟は出雲大神のなす所と解つた。そしてこの神を拜むことによつて験がある事を宇氣比によつて確めたので、出雲に行つて大神を

神・穴戸神を征服し、出雲建を殺さうとして、建と親友の契を結び、共に肥の河に水浴に行かれる。そして河から先づ上つて、自分の詐刀と建の直刀とを取換へ、決闘して建を打殺された。西征を終へて大和へ歸られると、天皇は再び命に東方征伐の命を下された。命は

名と西方の國を平定する方法が教へられる。教のまゝに軍船を乗り出すと、神佑忽ちに現はれ、新羅王は戦はずして降服を誓つた。かくて皇后は目出度く凱旋せられ、筑紫の宇美で皇子(應神天皇)を産まれた。皇后が皇子を連れて大和へ還られるといふ噂を聞いた皇子の庶兄(磐坂王)・忍熊王は、庶弟を殺さうとし

神が賭をして争つたが、母の同情を得て弟が求婚に成功したといふ物語である。
〔下巻〕 仁徳朝の物語に始まる。最初は天皇が民の貧窮を憐み給うて三年間課役を免じ給うたといふ御仁慈の物語である。次には皇后石之日賣の激しい嫉妬を背景とする天皇の戀物語が展開する。吉備の黒日賣は天皇に召さ

れたが、皇后の嫉妬を恐れて本國へ歸る。天皇は黒日賣が船出するのを望んで姫に對する愛情を歌はれ、姫を戀つて吉備へ忍び下られると、そこに又その愛情が美しい歌によつて語られる。別れに臨んで姫は別離を悲しんで歌ふ。その後皇后が饗宴のための御綱柏を取りに紀の國に行かれた留守に、天皇は異母妹八田若郎女を婚された。この事を聞かれた皇后は、怒の餘り柏を海に投げ棄てて宮へ還らず山代から大和へと行つて了はれる。天皇は驚いて山代なる皇后の許へ舍人の鳥山、續いで口子臣に歌を託して遣はされたが、皇后は故意に會はれない。せん方なく口子臣が庭中に跪くと、折柄の大雨で庭溝が紅紐に浸んで、青摺の衣が紅に變つた。それを見兼ねて妹の口比賣は皇后の憐みを乞ふ歌を詠じた。その後、天皇は蠶を見そなはずの口實に、皇后の坐ます山代の筒木に幸でまし、歌を以て迎へに來た事を告げられた。こんな事件のために若郎女との仲は中斷され、それが却つて天皇の若郎女に對する愛を募らせる。二人の愛情は美しい二首の歌に現はされてゐる。又天皇は皇弟速總別王を媒人として異母妹女鳥王を乞はれたが、女鳥王は皇后の嫉妬の強さを恐れ、天皇の召に應ぜず、速總別王と結婚し、天皇への反抗心を示す。天皇は怒つて二人を攻め殺さうとされたが、二人は共に倉崎山に逃げ、愛の強さを歌ひ、遂に宇陀で殺された。その後或る饗宴の日に、皇后は親ら御酒の柏を取つて氏々の女等に賜うた。その時女鳥王の玉釧を手を纏いた大桶連の妻を見出され、女鳥の膚の温かいうちを刺いで持ち來り、己が妻に與へた大桶連を死刑に處せられた。その次に本岐歌を中心とした雁が卵を生む話と

志都歌を中心とした快足船「村野」の話がつづいてゐる。仁徳帝に續いて履仲帝が即位せられた。この天皇が難波の宮に坐した時、皇弟墨江・中王は皇位を奪はうと、天皇の御寢を窺つて宮に火を放つ。天皇は阿知直に救はれ當麻道を廻つて石上神宮へ入られた。そこへ皇弟水齒別王が訪れられたが、天皇は邪心なきを示すために中王を殺せと命ぜられる。水齒別は隼人曾婆訶理を欺して、中王を殺させ、又己が君を弑した不義なる隼人も詭計を以て殺して邪心なきを立證せられた。次に系譜が反正・允恭と續き、新羅の名醫が來朝して允恭帝の御病を癒した事、氏姓を正すために探湯を行つた事を述べ、輕太子と衣通王との戀物語に移つてゐる。太子は爲すべからざる實妹との戀を遂げて、苦痛に満ちた愛の勝利を歌はれる。民衆は輕太子に背いて穴穗皇子に歸したので、太子は恐れて大臣の家に逃げ込まれる。穴穗皇子が大臣の家を攻められると、大臣は皇子を諫めて太子を捕へて渡す。捕へられた太子は妻の悲しみを思つて歌ひ、伊余の湯に流されようとする時にも、愛情を籠めた歌が唱和される。が妻は戀しさに堪へずして夫の後を追ひ、再會の悲しい歡喜を夫は二首の長歌で詠じ、遂に二人は自殺された。次の安康帝は、皇弟大長谷王のために、根臣を使として大日下王の妹を乞はれた。王は勅命に感泣し、押木の玉縷を禮物として獻じたが、玉縷に目が眩んだ根臣の讒言を信じて大日下王を殺し、その嫡妻を納れて皇后とせられた。所が或る時連子なる目弱王は、天皇と皇后との御物語を洩れ聞いて父の仇が安康帝なるを知り、僅か七歳ながらも天皇の御寢を窺つてその頸を打落し、都夫良意富美の家に

逃げ入る。その頃童男であつた大長谷王は、この變を聞くや慨き忿つて、二人の兄に善後策を相談されたが、二人共取り合はれないので、大に怒つて斬り殺し、自ら軍を興して意富美の家を圍まれる。意富美の方でもこれに應戦したが、力窮まり矢も盡きたので、意富美は王子の言によつて先づ王子を刺殺し、自らも頸を刎ねて死んだ。次には市邊忍齒王が近江の久多綿の蚊屋野に於て大長谷王に殺される事を語り、延いては市邊王の御子なる意富美・袁那王がこの亂を聞いて、針間國に身を隠される事を語つてゐる。
次は雄略朝の物語である。先づ吳人の來朝を語り、次に河内の志幾の大縣主が、その家に堅魚木をあげて皇宮に似せた廉で、逆鱗に觸れたが、謝罪の幣物を獻つて許された事を語つてゐる。次に若日下部王を思はれる天皇の御歌があり、續いて赤猪子の悲喜劇が物語られる。赤猪子は天皇の大御言を信じて、八十年の間嫁がずに待つてゐたが、御召がなかつたので、今迄待つた志を顯はさうと思つて宮へ參る。天皇は約束を忘れられた事を悔い、徒に盛りの年を過した赤猪子を憐れんで御歌を賜ひ、赤猪子も泣く／＼それに答へた。續いて吉野の童女との御結婚、阿岐豆野の由來、葛城山の犬猪などを歌物語風に語り、一言王大神の話を挟んで、再び歌物語風に歸り、金鉦岡の由來、三重の姪、春日の袁杼比賣の事を語つてゐる。

次の清寧天皇は、皇后も御子も坐さずして崩御せられたので、飯豐王が暫く朝政を見せなはした。所が播磨の國司山部連小楯が、その國の人志自卒の新室の祝宴に招かれた時、はしなくもその家に火燒少子として使はれてゐた意富美・袁那の二王を見出し、飯豐王の許へ連れ戻す。が、かくして見出された袁那王は志毘臣の侮りを受け、歌垣に於て婚さんとした美女を横取りされたが、その翌朝志毘を殺された。かくて兄弟は皇位を譲り合はれたが、結局弟が先づ皇位に即かれ(顯宗天皇)、置目老嫗の記憶によつて父王の骨を求め、又父王の仇なる雄略天皇の陵を壞さうとされたが、兄王の諫によつて僅かにその陵邊を掘るに止められた。
以上で物語は實質的には終り、以下、仁賢・武烈・繼體・安閑・宣化・欽明・敏達・用明・崇峻・推古の十朝の間は系譜の連鎖である。
〔解説〕 上巻は天地開闢の時から鶴草葺不合命まで、中巻は神武天皇から應神天皇まで、下巻は仁徳天皇から推古天皇までの記事を取め、皇室の御系譜を經とし、神話・傳説・說話を緯として、國土の起原、皇室の由來、諸氏族の出自を語り、全體に一貫した國家的精神を以て統一したものである。而してこの記の材料となつた稗田阿禮が誦習した帝皇日繼と先代舊辭とであるが、序に見ゆる帝紀・帝皇日繼・先紀・本辭・舊辭及び先代舊辭の性質内容に關しては、學者の間に異説が多い。宣長は帝紀・帝皇日繼、及び先紀を同義異稱のものとして認め、天武紀に帝紀、推古紀・皇極紀に天皇紀とあるに同じく、御歴代の天津日嗣を記した書といひ、古事記傳、津田左右吉氏もこれと同説で、御歴代の御系譜及び皇位繼承の事を記したものと説き(古事記及び日本書紀の新研究)、安藤正次氏は、帝紀は支那の歴史の本紀に當るもので、御歴代の御傳記、帝皇日繼は御系譜と兩者に區別を認め(日本文化史、古代)、橋本増吉氏もこれと同説である(史學一ノ一)が、三

こじき

者は同一のもので、皇位繼承のことを併せ記

した皇室の御系譜と見るべきであらう。又本

辭・舊辭・先代舊辭に就いて、宣長は、天武紀に

上古諸事、推古紀に國記臣連伴造國造百八十

部并公民等本記、皇極紀に國記とあるに相當

するもので、何れも同一のもので云ひ(古事記

傳、津田左右吉氏もこれと同説である(古事記

及び日本書紀の新研究)が、安藤正次氏は、本辭

は天皇又は臣民國土等の本辭を語り傳へたも

の、舊辭は廣く上古諸事を傳へたもので、廣

義に解すれば舊辭は本辭を含むものと説いて

ゐる(日本文化史、古代)。然し三者は何れも同一

のもので、統一された神話・説話・傳説を記し

たものと見るのが穩當である。然らば先代舊

辭と帝皇日繼とは何時頃その最初の形が組立

てられたであらうか。これに就いても學者の

間に異論があるが、四世紀初頭からその後半

に至る間に、統一を求める當時の國民的理想

によつて日本國家が成立し、天皇といふ主權

が出現するに伴つて、斷片的に傳承されてお

た神話・説話・傳説を同じ國民的理想によつて

君主を中心として統一し、こゝに本辭の最初

無意識的に様々な變改を受け、漢字の輸入と

共に、これ等の口碑は始めて筆録せられたも

のと思はれる。然るに清寧朝から繼體朝にか

けて、皇室の御血統は衰微し、その結果その權

威は失墜しさうになつたが、建國以來の日本

精神は未だ國民の間に失はれず、天皇の神聖

と權威とは、國民協力して打ち立てることに

なつた。この心的動搖の中から、再び神話・説

話・傳説を統一して、國家的精神を強調しよう

とする機運が生れ、こゝに本辭(帝皇日繼も)

は第二段の發達を遂げたものと思はれる。記

紀共に繼體朝頃から記事の性質が一變してゐ

るのは、この考を裏書するものである。而し

てこれが又後代に傳へられて行く間に、種々

の變改増減が加へられ、各種の異本となつて

現れたので、天武天皇の御削定の動機を誘出

したのである。要するに「古事記」は、最後に

於て官撰的色彩を帯びさせられたといは、

明かに上代の國民的産物であり、日本精神に

よつて成立したものである(日本古代文化、古事

記の新研究)。

男命を模として、天照大神(高天原)と大國主

神(地上界)との交渉を詳説し、天孫の降臨、延

いては海神の宮に就いて物語つてゐる。神話

の舞臺も高天原・地上(主として出雲と日向)・

黄泉國・常世國と變化してゐるが、國家的精神

を以て全篇を貫き、一つの纏つた物語として

叙述されてゐるのがその特徴である。中巻以

下の傳説に於ても、國家的精神がその基調を

なしてゐることは、上巻と同様であるが、天

皇御一代毎に話が改まつてゐるのが、著しい

差異である。また上巻に於ては、神が現身の

まゝに活動してゐるが、中巻以下に於ては現

身を顯はすことなく、神夢・神託によつて人と

交渉してゐること、但し一言主神を除く)即ち上

巻は神の代、中巻以下は人の代と確然と區別

せられてゐるのが特徴である。更に、上・中兩

巻に比して下巻は歌物語的色彩に富んでゐる

こと、及び中巻には天下國家に關係を持つ物

語や神祕的物語が多いに拘はらず、下巻には

それ等が極めて少い事も注意すべき特徴であ

る。次に全篇を通じて見ると、古言古意を忠

適宜に配して本系的説話に變化を與へ、その

質量を増加せしめてゐること。(七)當時の歌

謠を巧みに人物及び事件に結びつけてゐるこ

と。(八)叙事的・抒情的・劇的の諸要素を包括

して一體となし得てゐること。等の點に認め

ることが出来る。

更に觀點を異にすれば、この書は古代國語の

寶庫であり、神話・説話・傳説に富み、精靈及

び神の信仰、祭神の儀式、生死に關する儀式

慣習、禁忌・呪術・宇氣比・探湯・卜占・神夢・神

託・拂淨等の宗教的信仰儀式を豊富に示し、同

時に、歴史的事實を多分に含有してゐるもの

で、實に古代に於ける國民生活を活寫したも

ので、上代の最も貴重なる文獻の一つである。

従つて文學作品としての研究は勿論、言語・神

話・宗教・土俗・歴史・民族心理等の各方面より

の検討を俟つて、始めてその眞價が明かにせ

られるのである。

【註釋書】古事記裏書一册(下部兼文)上中二巻に

註解を加へたもの、古典保存會複製刊行)○古事記

頭書(寫)三册(賀茂眞淵)○古事記詳説五册(田

製)○古事記傳本居宣長(増補宣長全集一四)○
難古事記傳(守部全集第一)○古事記傳(守部全集第三)
○積萬葉集(武田祐吉)○古事記考(上)類例(古
事記及び日本書紀の新研究津田左右吉)○神
代史研究(松本芳夫)○神代史の研究(津田左右吉)
○日本上代史研究(同上)○神代史と宗教思想
の發達(津田右武)○古事記に於ける特殊なる
訓法の研究(三木重松)○古事記と日本神話小
山龍之輔(日本文學講義)○古代純日本思想大
西貞治○古事記の新研究(倉野憲司)○日本古典

對山本氏會話、國學院雜誌三〇ノ八)○古事記傳
書説對反駁説と其所感(會根研三(同三〇)ノ一
一四)○古事記の文學性(久松義一(奈良文化二二
一四)○古事記及び日本書紀の新研究(同上)
讀む(橋本增吉(史學一)ノ一)○古事記の撰録に
ついて(松本芳夫(同六)ノ三)○古事記の構成に
就いて(武田祐吉(信濃教育)○説話文學として
の古事記(同上)○古事記神話の組織と其
の成立の時代(次田潤(國語と國文學二)ノ五)○
記紀歌謠の形態を論ず(山口麻太郎(同四)ノ六
七)○國家的精神の考察(久松義一(同四)ノ一)

【組織・内容】山陽之豹の序と源賀世の跋とを
添へ、本論は於富牟泥として上下に分ち、非
史辨・言靈辨(以上上巻)、神人辨・照應字律辨・
神典一部心法(以上下巻)の五條から成つてゐ
る。非史辨に於ては、宣長の「古事記傳」に
於ける功績を稱揚し、これに啓發せられた由
を述べて宣長の學説を概観し、神典解釋上に
於ける宣長の神祕主義と、言の表によつて靈
によらなかつた點を擧げて反駁し、自己は言
靈を主とする事を主張してゐる。次いで神典

に對する宣長の説を駁して、天地の神祇と人
の神氣の妙用等しきをいふと説き、神典は人
道に對立せる神道に乗り行くべき由を主とし
て説いたもので、善解除・惡解除は神道に乗ら
んがための教であると言つてゐる。而して儒
佛の教は外體はそれと異つてゐるが、神道
の一と見るべき由を述べてゐる。照應字律辨
は、神典を見る上に同字の一律であることと
照應するところを見る事の肝要なるを例證し
たものであり、神典一部心法は、神典一巻の

力に負ふ所が多かつた。この最初の形のものは、口から口へ時代から時代へと傳承され、神武天皇の御東征及び建國創業、崇神天皇の整民、倭建命の御征戰、神功皇后の新羅親征等の國家の發展を物語る傳説その他を加へて後代に傳説されたが、その間に有意義的或は

片歌・旋頭歌・短歌・長歌と形式的に整齊せられた各種の上代歌謡、及び若干の俚諺を織り交せてゐる。上巻の物語は大體に於て、絶對神・自然神・人格神を主動者としての物語を展開し、宇宙の初發から國土人類の生成生死の問題を叙述し、三貴子の出現によつて須佐之

富んでゐること。(三)物語は深刻味に乏しいが、その中に、常に濕やかな情深い調子を含んでゐること。(四)英雄的性質と情願的性質との交錯によつて氣分の轉換が行はれ、これによつて藝術的價值を最も高めてゐること。(五)場面の變化によつて生々とした感じが全篇に漲つてゐること。(六)挿話(episode)を

【厚抄抄三卷 契沖(別項)】○古事記和歌略註一卷 賀茂真淵(眞淵全集所收)○古事記諸歌註三卷 内山眞龍(日本歌謡集成卷一所收)○記紀歌集講義一册 太田水穂○古事記序解一册 龜田長保(明治九年刊)○記紀神名解(寫)四卷二册の場勝美○古事記燈二卷 富士谷成元(別項)○古事記講義讀用武地(國文學研究會講義録一六一)

對山本氏會話、國學院雜誌三〇ノ八)○古事記傳書說對反駁說と其所感 會根研三(同三〇ノ一)○古事記の文學性 久松義一(奈良文化二二・一四)○古事記及び日本書紀の「新研究」を讀む 橋本增吉(史學一ノ一)○古事記の撰録によつて松本芳夫(同六ノ三)○古事記の構成に就いて武田祐吉(信濃教育)○説話文學としての古事記(同上)○古事記神話の組織と其の成立の時代 次田潤(國語と國文學二ノ五)○記紀歌謡の形態を論ず 山口麻太郎(同四ノ六・七)○國家的精神の考察 久松義一(同四ノ一)○古代日本人の世界觀 城戸晴太郎○古事記の文章 倉野憲司(國語と國文學七ノ四)○古事記の形態 同上(國文學研究昭和五ノ一)○在伊勢古事記古寫本について 岡田米夫(歴史と國文學六ノ一)

對山本氏會話、國學院雜誌三〇ノ八)○古事記傳書說對反駁說と其所感 會根研三(同三〇ノ一)○古事記の文學性 久松義一(奈良文化二二・一四)○古事記及び日本書紀の「新研究」を讀む 橋本增吉(史學一ノ一)○古事記の撰録によつて松本芳夫(同六ノ三)○古事記の構成に就いて武田祐吉(信濃教育)○説話文學としての古事記(同上)○古事記神話の組織と其の成立の時代 次田潤(國語と國文學二ノ五)○記紀歌謡の形態を論ず 山口麻太郎(同四ノ六・七)○國家的精神の考察 久松義一(同四ノ一)○古代日本人の世界觀 城戸晴太郎○古事記の文章 倉野憲司(國語と國文學七ノ四)○古事記の形態 同上(國文學研究昭和五ノ一)○在伊勢古事記古寫本について 岡田米夫(歴史と國文學六ノ一)

【組織・内容】山陽之豹の序と源賀世の跋とを添へ、本論は於富牟泥として上下に分ち、非史辨・言靈辨(以上上巻)、神人辨・照應字律辨・神典一部心法(以下下巻)の五條から成つてゐる。非史辨に於ては、宣長の「古事記傳」に於ける功績を稱揚し、これに啓發せられた由を述べて宣長の學說を概観し、神典解釋上に於ける宣長の神祕主義と、言の表によつて靈によらなかつた點を擧げて反駁し、自己は言靈を主とする事を主張してゐる。次いで神典は史の形を借りた非史で、疑なく教を言靈としたものとの本質論に及び、かく「古事記」上巻は實録でないから、御國の初は神武帝であり、上巻に見ゆる天神は神武帝の御神氣、地祇は天下衆人の神氣に名づけ給うたものであり、としてみゐる。言靈辨は彼の言ふ言靈の本質を明かにしたものである。即ち直言を以てはその中心に徹し得ないので、我が國に於ては神氣の妙用を旨とする。倒語する時は神がある。これが言靈であると説き、倒語は言ふと言はざるとの間のもので、思ふ所を言つたものかと思はれば思はぬ事を言つて居り、その事の上かと見ればさうでないもので、これに諷刺(直と相反せる物)と歌(諷刺の一段遠きもの)とがある。倒語はもと直を靈として言を作るもので、その言外に活かし置く所思を言靈と考へてゐる。そして「代匠記」に見ゆる言靈の解を反駁してゐる。神人辨に於ては、先づ神と人との區別を辨ふるを肝要事とし、人は神を身内に宿したもので理を司るもの、神は人の身内に宿つたもので欲を司るものと説き、延いては人道と神道とを區別して、欲のために理の侵されるのが前者で、道理を離れて思ふ事の已むを得ざる道が後者であると、惟神

に對する宣長の説を駁して、天地の神祇と人の神氣の妙用等しきをいふと説き、神典は人道に對立せる神道に乗り行くべき由を主として説いたもので、善解除・惡解除は神道に乘らんがための教であると言つてゐる。而して儒佛の教は外體はそれ、異つてゐるが、神道の一と見るべき由を述べてゐる。照應字律辨は、神典を見る上に同字の一律であることと照應するところを見る事の肝要なるを例證したものであり、神典一部心法は、神典一巻の大綱を七神三段・神世七代とし、源能基呂鳥の段以下をその註釋とすべきことを詳述したもので、源能基呂鳥の條を總釋と見、以下を五段に分ち、卷末に一部四十六件を目を示してゐる。さて京大本及び上田博士本は、御杖が上述の思想の上に立つて、「七神三段神世七代」及び一部四十六件に對する註釋を試みたものの一部分である。即ち京大本は七神三段の冒頭にある「天地初發之時」の六字を擧げて註釋したものであるが、殊に初發の二字を重視して、その言靈を明らかにしようとするのが本書の趣旨である。上田博士本は、神道大意、源能基呂鳥第一、第二先言之件、第三改言之件といふ内容を有してゐる。即ち大旨に示した四十六件中の第一から第三までの部分に相當してゐる。成元の神典一部に對する註釋は、以上二本の部分しか發見せられてゐないが、「萬葉集燈(別項)」によると、彼の註釋事業はかなり進んでゐたことが推測されるが、果してどの程度に進んだかは、今日のところ不明である。

【價值】宣長の名著「古事記傳」に對して反對の態度をとつたものは、僅かに本書と橋守部の「難古事記傳」であり、この意味に於て注目

こじき

○古事記傳 本居宣長(增補宣長全集一・一四)○難古事記傳 橋守部(守部全集第一)○古事記傳略 吉岡徳明○稜威言別 橋守部(守部全集第三)○續萬葉集 武田祐吉○古事記考 井上頼樹○古事記及び日本書紀の「新研究」 津田左右吉○神代史研究 松本芳夫○神代史の研究 津田左右吉○日本上代史研究 同上○神代史と宗教思想の發達 津田敬武○古事記に於ける特殊なる訓法の研究 三矢重松○古事記と日本神話小 山龍之輔(日本文學叢書)○古代純日本思想 大西貞治○古事記の「新研究」 倉野憲司○日本古典研究 植木直一郎○古事記論 中澤見明○古代文學研究 倉野憲司○古事記の研究 同上 岩波講座 日本文學○日本古代文化 和辻哲郎○日本文化史(古代) 安藤正次○比較神話學 高木敏雄○日本神話傳説の研究 同上○原始國文學考 德田澤○紀記論 松岡靜雄○古語大辭典 同上○日本上古史 評論(Chamberlain)著 飯田永夫譯 B. H. Chamberlain, The Kojiki vol. 1 1883 (The Transactions Asiatic Society of Japan, X) J. C. Ferguson and M. Aneski, Chinese-Japanese Mythology vol. 1 1928 (The Mythology of All Races, VIII) N. Matsumoto, Essai sur la Mythologie japonaise vol. 1 1928 (Aus-iro-Asiatia II)

○記紀文學學號 早稻田文學二六三)○古事記訓義考 山田孝雄(アララギ一四ノ六)○古事記は偽書か 中澤見明(史學雜誌三五ノ五)○古事記偽書說に就て 安藤正文(同三五ノ九)○古事記の實質と撰録の事情 木村春太郎(同三五ノ一二)○古事記論 三井甲之(早稻田文學一四〇)○古事記に見ゆる神名の語源 松村任三(東洋學藝雜誌三八ノ四・五)○古事記は偽書か(中澤氏

對山本氏會話、國學院雜誌三〇ノ八)○古事記傳書說對反駁說と其所感 會根研三(同三〇ノ一)○古事記の文學性 久松義一(奈良文化二二・一四)○古事記及び日本書紀の「新研究」を讀む 橋本增吉(史學一ノ一)○古事記の撰録によつて松本芳夫(同六ノ三)○古事記の構成に就いて武田祐吉(信濃教育)○説話文學としての古事記(同上)○古事記神話の組織と其の成立の時代 次田潤(國語と國文學二ノ五)○記紀歌謡の形態を論ず 山口麻太郎(同四ノ六・七)○國家的精神の考察 久松義一(同四ノ一)○古代日本人の世界觀 城戸晴太郎○古事記の文章 倉野憲司(國語と國文學七ノ四)○古事記の形態 同上(國文學研究昭和五ノ一)○在伊勢古事記古寫本について 岡田米夫(歴史と國文學六ノ一)

【組織・内容】山陽之豹の序と源賀世の跋とを添へ、本論は於富牟泥として上下に分ち、非史辨・言靈辨(以上上巻)、神人辨・照應字律辨・神典一部心法(以下下巻)の五條から成つてゐる。非史辨に於ては、宣長の「古事記傳」に於ける功績を稱揚し、これに啓發せられた由を述べて宣長の學說を概観し、神典解釋上に於ける宣長の神祕主義と、言の表によつて靈によらなかつた點を擧げて反駁し、自己は言靈を主とする事を主張してゐる。次いで神典は史の形を借りた非史で、疑なく教を言靈としたものとの本質論に及び、かく「古事記」上巻は實録でないから、御國の初は神武帝であり、上巻に見ゆる天神は神武帝の御神氣、地祇は天下衆人の神氣に名づけ給うたものであり、としてみゐる。言靈辨は彼の言ふ言靈の本質を明かにしたものである。即ち直言を以てはその中心に徹し得ないので、我が國に於ては神氣の妙用を旨とする。倒語する時は神がある。これが言靈であると説き、倒語は言ふと言はざるとの間のもので、思ふ所を言つたものかと思はれば思はぬ事を言つて居り、その事の上かと見ればさうでないもので、これに諷刺(直と相反せる物)と歌(諷刺の一段遠きもの)とがある。倒語はもと直を靈として言を作るもので、その言外に活かし置く所思を言靈と考へてゐる。そして「代匠記」に見ゆる言靈の解を反駁してゐる。神人辨に於ては、先づ神と人との區別を辨ふるを肝要事とし、人は神を身内に宿したもので理を司るもの、神は人の身内に宿つたもので欲を司るものと説き、延いては人道と神道とを區別して、欲のために理の侵されるのが前者で、道理を離れて思ふ事の已むを得ざる道が後者であると、惟神

に對する宣長の説を駁して、天地の神祇と人の神氣の妙用等しきをいふと説き、神典は人道に對立せる神道に乗り行くべき由を主として説いたもので、善解除・惡解除は神道に乘らんがための教であると言つてゐる。而して儒佛の教は外體はそれ、異つてゐるが、神道の一と見るべき由を述べてゐる。照應字律辨は、神典を見る上に同字の一律であることと照應するところを見る事の肝要なるを例證したものであり、神典一部心法は、神典一巻の大綱を七神三段・神世七代とし、源能基呂鳥の段以下をその註釋とすべきことを詳述したもので、源能基呂鳥の條を總釋と見、以下を五段に分ち、卷末に一部四十六件を目を示してゐる。さて京大本及び上田博士本は、御杖が上述の思想の上に立つて、「七神三段神世七代」及び一部四十六件に對する註釋を試みたものの一部分である。即ち京大本は七神三段の冒頭にある「天地初發之時」の六字を擧げて註釋したものであるが、殊に初發の二字を重視して、その言靈を明らかにしようとするのが本書の趣旨である。上田博士本は、神道大意、源能基呂鳥第一、第二先言之件、第三改言之件といふ内容を有してゐる。即ち大旨に示した四十六件中の第一から第三までの部分に相當してゐる。成元の神典一部に對する註釋は、以上二本の部分しか發見せられてゐないが、「萬葉集燈(別項)」によると、彼の註釋事業はかなり進んでゐたことが推測されるが、果してどの程度に進んだかは、今日のところ不明である。

すべき著作である。然し守部のは「古事記傳」の十七卷までの論難に過ぎず、本書も哲學的思索を以て「古事記」上卷の主旨を述べて、その一部の註解を施しただけで、到底「古事記傳」の完備せるに敵し難く、所説も亦奇僻・不穩當の嫌ひがある。成元の學說の根幹をなす言靈説は、倒語を過重視した不穩當の言説である。従つてこれを論據として「古事記」上卷を史に非ずと觀たことも當を得てゐない。上卷は正しく非史であるが、それは史實や古代人の生活を理想化して物語つた非史で、決して教を言靈としたものではない。故に照應字律も一部心法も、この言靈説に發した奇説と言はざるを得ない。又神の概念を人の身内に宿れるものとする考も、古代人の宗教思想を知らない不備の説である。要するに本書は、世を擧げて宣長の學說に心酔せる時、敢然これを排して神典に哲學的考察を下し、飽くまで自己の信念を以て行かんとする熱心は稱すべきも、價値に至つては記傳に比して遙かに乏しいものである。ただ本書中に「古今集」の假名序は後人の眞名序を改作したもの、「萬葉集」を家持の撰と考へてゐること(言靈辨)は、文學史的に注意すべきである。

【参考】古事記燈をよむ 岡籬(アララギ一八ノ一) 一三〇 富士谷御杖野村八良(國文學研究史) 〇 富士谷御杖の古事記研究(稿本古事記燈神典第一に就て)石井庄司(國語國文の研究四六)(倉野) 五色潮來艶合奏 あだなつればに 合卷六册合三册 【作者】式亭三馬 【畫工】歌川國貞(名稱)角書に お妻八郎兵衛とある 三夫婦の祝言及びその媒妁二夫婦合せて五夫婦の事があるので、五色潮來と名附けたと作者自ら斷つてゐる。 【刊行】文化十四年【題材】

主としてお妻八郎兵衛の淨瑠璃に據る。

【梗概】「上卷」小田原の商人丹波屋工左衛門の養子榮三郎は、大磯三浦屋の遊女古今太夫と馴染が深い。丹波屋の番頭六郎兵衛は主家を横領しようとして企ててゐる。古馴染の鎌倉七里濱の同女お傘と謀し合はせ、榮三郎のために同家の手代八郎兵衛に手形を書かせて、古今身請けの手附金を融通し、それを種として榮三郎と八郎兵衛とを窮地に陥れようとする。丹波屋の一人娘お妻と八郎兵衛との戀仲であることが、この間の事情を一段と紛糾させる。「中卷」榮三郎の實兄侍の吉里良助、また八郎兵衛の許婚お袖の兄相撲取妹春山の計らひで、お傘と六郎兵衛の姦計は露顯したが、八郎兵衛は六郎兵衛から融通された主家の金に對する責任と、お妻と不義の廉で父古手屋太呂兵衛のもとに預けられる。「下卷」そこへ榮三郎と古今とが騙落して來たのをかくまつて置く。お妻も騙込んで來る。様子を探りに來たお傘から聞き込んで三浦屋の主人が掛合に來る。八郎兵衛と太呂兵衛とは古今の身代金で苦勞する。二人は期せずして、太呂兵衛の養女のお袖を遊女に賣つてと考へ、八郎兵衛とお袖との祝言を急いで、夫のために義理づくで納得させようとする。祝言の日の早かれと願つてゐたお袖は、うつつ變つてこれを諾かない。そこへ兄の妹春山が伯父の太呂兵衛に愛想づかしをしてお袖をつれ歸る。お袖はお妻のために身を退き、また八郎兵衛に金を與へるために兄と相談の上、すでに三浦屋に身賣をしたのである。しかし工左衛門の粹な捌きで古今とお袖の身代金を皆済し、榮三郎古今と、八郎兵衛お妻とを夫婦とする。また尼となつたお袖の心情に感じて改心した

六郎兵衛とお傘を夫婦にさせる。これ等三夫婦の媒妁人は三浦屋夫婦、茶屋山口邑の夫婦であつた。

【解説】三馬はお妻八郎兵衛心中事件を主題とする淨瑠璃「櫻鈴恨鮫鮎」(作者未詳、安永二年十一月豊竹座)を主要なる原據として合卷に仕立直したのであるが、原作にある人殺しを避けたこと、また原作のお妻と八郎兵衛の間に生れた幼い子お半を、お妻のため、また許婚の八郎兵衛のために身を犠牲とする貞女にかへたこと、また八郎兵衛に對して六郎兵衛、お妻に對してお傘を配列させたことに趣向があつた。更にまた自序の中にもそれとなく仄めかしてゐるが、支那の李笠翁の十種曲の「隣香伴傳奇」にかすかなる交渉を持たせた趣向も交へてあつた。故に扉に題して傳奇十種之一とも、傳奇小説とも書いて多少氣取りを見せてゐる。要するに、作者は筋の複雑よりも、人物から來る氣分の錯綜することを作の重要條件としたやうである。お傘は作者が少くとも義太夫のお妻八郎兵衛物と違つた氣分を作中に醸させる上から必要としたものであつて、その氣分は潮來節の持味である。書名に「五色潮來」と題するのもそれがためであらう。(お妻八郎兵衛参照) 【山口】

古事記及び日本書紀の新研究

こしきおよびにほん 研究書 一册 【著者】津田左吉吉 【刊行】大正八年八月、岩波書店。 【組織・内容】記紀一般の性質の研究及び仲哀天皇・神功皇后以前神武天皇までの部分に記載せられてゐる種々の物語の批判であつて、初めに總論があり、次に六章に分つて結論を述べ、附録として「三國史記の新編本紀について」の論説を添へてゐる。「總論」に於ては、記

紀研究の二方法として、本文そのものの研究と別の方面から得た確實な知識による研究とを擧げ、民間説話として、上代人の思想と風習を現はしたものと、神話として解釋すべき事を説き、日本民族と漢・韓人との交渉を概観し、文字の輸入は百濟人によつて四世紀後半になされたこと、語部の性質を考究することによつて、それが文字輸入以前に上代の事蹟を語り傳へた職の者でないことを主張してゐる。次に「古事記」の序文を詳細に検討し、その由來と性質を明かにして記傳の說に反駁を加へ、「古事記」は畢竟太安萬侶の私撰であると斷じ、この一家言としての「古事記」の缺點を補ひ、天下の形勢や政治上の事件を記録し、近世の記録をも材料として、堂々たる國史を作らうとする必要に迫られて撰修されたのが「日本書紀」であるとなし、記紀の相違點六條を擧げて、その相違は書紀が種々の異本を採用した事と、書紀の編者の意見に出た事とに原因すると説いてゐる。次いで記紀に採録せられた舊辭帝紀を觀察して、記紀の間邊りに一界線を有することを示してゐると述べてゐる。第一章から第六章までは、神功皇后新羅征討物語から神武天皇東征の物語に至る主要なる物語を一々點檢したものであるが、その結果として、(一)記紀の記載の差異から物語の變化が推測されるが、これは帝紀、舊辭が記紀となつて現れる迄の間に、種々潤色を加へられた事を證するもの、(二)記紀に共通な點に於ても、後人の潤色變改によつて最初の帝紀・舊辭とは、頗る趣を異にしてゐる點があつたらしい事、(三)書紀の物語中には類似の清想が屢々反覆せられてゐる事、(四)

神武帝から仲哀帝に至る物語に於て、國家經略の順序が甚だ整然としてゐるが、これは思想上の構成として見るにふさはしい事等によつて、記紀の上代の部に含まれてゐる種々の説話を、歴史的事實の記録としては認め難い事を論じ、この事は記紀の物語の材料が、(一)後世の事實、(二)民間説話、(三)ありふれた當時の出來事や風俗であることによつても推測されるとし、畢竟記紀の記載は、皇室(若しくは皇室によつて統一せられた國家)の起原と由來とを説いたもので、日本民族の歴史を

反抗して出來たものである。即ち當時の江戸座俳人が、濫りに判者に媚びて腹藁の句を構へ、古人の糟粕を嘗め、只管點の高下を競ふのを慨して、宗瑞・蓮之・咫尺・素丸・長水の五人が、順次一人をその點者として、他の四人で興行した歌仙五卷を判し、互に難陳して眞に俳諧を娛しむ意を示したのである。なほ最後に竟宴として蕉門の故老敬雨(祇堂)を招いて成つた六吟歌仙一卷を添へてゐる。【史的地位・影響】本書は總かに歌仙六卷の小冊子に過ぎないが、俳諧史上に於ては頗る重要な意

外ならない。隨つて「五色墨」は當時の江戸俳壇に對して、革新の一旗幟を繖したものと云ふべく、俳諧史上その運動は最も注目されねばならない。ただ未だ五人の實力と周囲の事情とは、革新の實を擧げ得るまでに至らないで終つたのであつた。

三十五年後の寛政十年六月十三日(六十九歳)であつた。淨書は全部宣長自ら筆を執り、生涯の願望成就の喜びに堪へず、久老等の知友に報じ、千蔭等もその成功を祝福感謝した。又同年九月十三日には、鈴屋に記傳修業慶賀會を催し、披書視古といふ題で師弟共に歌を詠じ、また記中所見の神人を題にして諸國の知友門弟に頌ち歌を募つた(古事記題詠歌集)。なほ記傳卷一の終りの「直臣墨」は明和八年六月九日に記されたもの、同卷十七附録の「三大考」(門人服部中庸著)は、寛政三年五月二十五日

五色潮來艶合奏 あだなつれあし 合巻
六册合三册 【作者】式亭三馬 【書工】歌川
國貞【名稱】角書に お妻八郎兵衛
とある。三夫
婦の祝言及びその媒妁二天婦合せて五夫婦の
事があるので、五色潮來と名附けたと作者自
ら断つてゐる。【刊行】文化十四年【題材】

お袖はお妻のために身を退き、また八郎兵衛
に金を與へるために兄と相談の上、すでに三
浦屋に身賣をしたのである。しかし工左衛門
の粹な捌きで古今とお袖の身代金を皆済し、
榮三郎古今と、八郎兵衛お妻とを夫婦とする。
また尼となつたお袖の心情に感じて改心した

【組織・内容】記紀一般の性質の研究及び仲哀
天皇・神功皇后以前神武天皇までの部分に記
載せられてゐる種々の物語の批判であつて、
初めに總論があり、次に六章に分つて結論を
述べ、附録として「三國史記の新編本紀につ
いて」の論説を添へてゐる。「總論」に於ては、記

舊辭が記紀となつて現れる迄の間に、種々潤
色が加へられた事を證するもの、(一)記紀に
共通な點に於ても、後人の潤色變改によつて
最初の帝紀・舊辭とは、頗る趣を異にしてゐる
點があつたらしい事、(二)書紀の物語中には
類似の着想が屢々反覆せられてゐる事、(四)

神武帝から仲哀帝に至る物語に於て、國家經
略の順序が甚だ整然としてゐるが、これは思
想上の構成として見るにふさはしい事等によ
つて、記紀の上代の部に含まれてゐる種々の
説話を、歴史的事實の記録としては認め難い
事を論じ、この事は記紀の物語の材料が、(一)
後世の事實、(二)民間説話、(三)ありふれた
當時の出來事や風俗であることによつても推
測されるとし、畢竟記紀の記載は、皇室(若し
くは皇室によつて統一せられた國家)の起原
と由来とを説いたもので、日本民族の歴史を
語つてゐるものではない。即ち上代の國家組
織の根本精神を表現したものととして、又よく
國民の内生活を語るものとしての詩であると
結論してゐる。【價值】本書は著者が大正三
年に公にした「神代史の新しい研究」と共に、
記紀研究史上に一新生面を拓いたもので、記
紀の記載を文字通りに詳細に考察して、それ
が歴史でなく物語であることを證明したもの
である。その功績は十分に認めなければなら
ない。かくの如く特筆すべき著作であつたが
故に、多くの學者に注目せられ、その結果、
學界各方面から有力な反對意見が多く現はれ
たのであつて、事實批評の態度や方法、觀察
眼には幾多の異議があり、多少獨斷の憾が無
いでもない。【倉野】

反抗して出來たものである。即ち當時の江戸
座俳人が、濫りに判者に媚びて腹臈の句を構
へ、古人の糟粕を嘗め、只管點の高下を競ふ
のを慨して、宗瑞・蓮之・咫尺・素丸・長水の五
人が、順次一人をその點者として、他の四人で
興行した歌仙五卷を判し、互に難陳して眞に
俳諧を娛しむ意を示したのである。なほ最後
に竟冥として舊門の故老敬雨(祇空)を招いて
成つた六吟歌仙一卷を添へてゐる。【史的地
位・影響】本書は總かに歌仙六卷の小冊子に
過ぎないが、俳諧史上に於ては頗る重要な意
義を持つた撰集である。享保時代の江戸俳壇
の状を窺ふに、其角(別項)の末流及び水間沾
徳(別項)一派の人々が最も跳梁跋扈を極め、
宗匠は頻りに點料を貪り、作者は一意點者の
好みに投じようとして俳風漸く陵夷し、俳閑
の弊も亦加はつた。その間に、巴人・祇空(各
別項)等の如き眞摯篤實な故老もあつたが、そ
の實力未だ一派を統帥するに足らず、況んや
偶々眞面目な新人があつても、その主張などは
到底江戸座(別項)の間には容れられなかつた
のである。而してこゝに相提携して、この弊
風革新のために起つたのが、即ち「五色墨」の
人々であつた。五人のうち長水のみは沾徳門
であるが、而も後伊勢の麥林に歸して居り、
その他の人々は、杉風・嵐雪・素堂(各別項)等の
系に屬し、凡て江戸座の風調に慊らないもの
ばかりであつた。勿論本書の中には江戸座に
對する反抗的氣分を明言してはゐないが、最
後に敬雨を交へた一卷を添へてゐる如きは、
明かに江戸座の點取宗匠に拮抗するの意を示
したもので、享保十八年にこの五人が四季の
景物百題を選んで句合を試み、敬雨の判を乞
うてゐるのなども、亦この反抗運動の連續に

外ならない。隨つて「五色墨」は當時の江戸俳
壇に對して、革新の一旗幟を顯したものと
いふべく、俳諧史上その運動は最も注目されね
ばならない。ただ未だ五人の實力と周囲の事
情とは、革新の實を擧げ得るまでに至らな
いであつた。【附記】なほ寛延四年に至り、二世素丸が二世
宗瑞・斑象・蓼太・竹阿と共に「五色墨」の體に
做つて、四吟歌仙五卷を興行し、「續五色墨」
(中興俳諧名家集所收)を撰んだが、當時は俳壇
の事情も既に異り、ただ「五色墨」の後をつ
いたといふだけで、特に時代的の意義を認める
ことは出來ない。また安永七年に、梅人と野
逸・柏翁・楚若・柳門との「三篇五色墨」も出た
が、これは更に俳壇的に認められることが少
かつた。【原原】

三十五年後の寛政十年六月十三日(六十九歳)
であつた。淨書は全部宣長自ら筆を執り、生
涯の願望成就の喜びに堪へず、久老等の知友
に報じ、千蔭等もその成功を祝福感謝した。
又同年九月十三夜には、鈴屋に記傳修業慶賀
會を催し、披書視古といふ題で師弟共に歌を
詠じ、また記中所見の神人を題にして諸國の
知友門弟に頌歌を募つた(古事記願題歌集)。
なほ記傳卷一の終りの「直毘靈」は明和八年六
月九日に記されたもの、同卷十七附録の「三大
考」(門人服部中庸著)は、寛政三年五月二十五日
に成つたもの、又「古事記傳註釋目錄」三卷は、
宣長の長男春庭が文化三年五月二十五日に編
んだものである。【諸本】古事記傳版本四十
八册(文化五年刊、明治九年再刊)・古事記傳(本居
宣長全集一―三)・訂 古事記傳七册・古事記傳
(増補本居宣長全集一―四)がある。【内容】本書は「古事記」の註釋書であるが、同
時に宣長の古學の道を盡したものである。卷
一は總論ともいふべきもので、古記典等總論、
書紀の論ひ、舊事紀といふ書の論、記題號の
事、諸本又註釋の事、文體の事、假字の事、
訓法の事、直毘靈の九項に互つて論じ、卷二
は序文の註解及び系圖を掲げ、卷三から卷十
七までは上卷(神代)の註釋とし、卷十七の附
卷として服部中庸の「三大考」一册を加へ、卷
十八から卷三十四までは中卷の註釋で、細別
すれば次の如くである。
自卷十八至卷二十は白橋原宮(神武)の段、卷二十
一は高岡宮(磐緒)・淨穴宮(安寧)・境岡宮(懿德)・
掖上宮(孝昭)・秋津島宮(孝安)・黒田宮(孝靈)の各
段、卷二十二は水垣宮(崇神)の段、卷二十四・卷
二十五は玉垣宮(垂仁)の段、自卷二十六至卷二十

五色墨

【著者】半紙本一册【編
者】白兔園宗瑞【刊行】享保十六年辛亥菊秋、
江戸戸倉屋喜兵衛板【諸本】中興俳諧名家集
(俳書大系)所收。【由来・内容】其角がその著
「雜談集」に、利休が茶の湯に道具の新古を論
ずべからざることを教へた例を引いて、「誹諧
もさの如し。句は道具也、點は商人なり」と
論じてゐるのを感じ、點の勝負を争ふ時弊に

こしきす こしきて

八は日代宮(景行)の段、卷二十九は日代宮(志賀宮(成務)の兩段、卷三十、卷三十一は詞志比宮(仲哀)の段、自卷三十二至卷三十四は明宮(應神)の段、卷三十五から卷四十四までは下巻の註釋で、細別すれば次の如くである。

自卷三十五至卷三十七は高津宮(仁徳)の段、卷三十八は若櫻宮(履仲)・多治比宮(反正)の兩段、卷三十九は遠飛鳥宮(允恭)の段、卷四十は穴穗宮(安廣)の段、卷四十一・卷四十二は朝倉宮(雄略)の段、卷四十三は龜栗宮(清寧)・近飛鳥宮(顯宗)・廣高宮(仁賢)・列木宮(武烈)の各段、卷四十四は玉穗宮(繼體)・金簀宮(安閑)・檜垣宮(宣化)・師木島宮(欽明)・他田宮(敏達)・池邊宮(用明)・倉橋宮(崇峻)・小治田宮(推古)の各段。

残り三卷は本居春庭の古事記傳註釋目錄で、傳中の神名・人名・地名・物名及び語句を五十音順に排列して索引としたものである。

〔卷一〕(古記典等總論)「古事記」は、古書中の最古のもので、古語を主とし古の眞の有様を失ふまいと努めたものであるに拘らず、漢學流行の結果「書紀」が甚だしく尊重され、「古事記」が全く閉却された事を慨し、「古事記撰錄後」僅かに八年にして書紀の撰進を見たのは、決して「古事記」に誤があつたためではなく、支那崇拜の結果、支那の國史を模倣して「書紀」は撰ばれたものである事、又「古事記」は決して私の書ではなく、天武天皇の御心に發し、元明天皇の勅命によつて撰錄され、且つ古言を主として古傳の儘を記したものであるから、最も尊重すべき公の書であることを述べ、漢意の潤色なき上古質直の國史として、始めて「古事記」を尊重した眞淵の功績を稱へてゐる。(書紀の論ひ)「書紀」のみを尊ぶ世人の迷を諭し、「古事記」の尊ぶべき由を顯はすため、「書紀」の漢意漢文の潤色の多い事を

心得を次の如く説いてゐる。

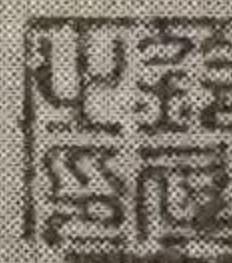
(一)同言を一は委しく書き他は字を會いたのは、委しい方に隨つて訓むべき事、(二)同言を一は假字他は漢文に書いたのは、假字の方に做つて訓むべき事、(三)同じさまの事を一は古語に書き他は漢文の格に書いたのは、古語の方を則として訓むべき事、(四)一句が全くの漢文で書かれてゐる場合は、字に拘らずその意を得るの事、(五)適ふべき古言を思ひ求めて訓むべき事、(六)嚴テニヲハをよく考へて正しく訓むべき事、(七)嚴に假字の清濁を守つて訓むべき事等。

次にアケセントの註記を説いて、語を嚴にす

言ひ、「日本書紀」といふ題號、紀中のこゝかこの記事及び年紀について、それを例證し、「書紀」の遠く「古事記」に及ばないことを力説し、延いては「書紀」の訓讀の困難な理由を述べてゐる。(舊事紀といふ書の論)「舊事本紀」

古事記傳一之卷

本居宣長謹撰



○記ノ成リ
古事記傳一之卷
本居宣長謹撰
改事レルニ書ミテ修シテ
ハテツ豊御食炊屋比賣命ノ廿八年ニ聖德太子命薨哉馬
子大臣ト共ニ天皇記及國記臣連伴造國造百八十部
氏等本記ヲ録レ賜フト書紀ト書紀トトクニ記ゾ始ナレ又
飛鳥御原宮ニ天下御レ天皇ノ十年ニ川島皇子薨ナレ
人ニ天命ヲ帝紀及上古諸事ヲ記スレノ賜フリアリ
トモ此ニノ記共ニ世ニ傳ハラズ於是乎城宮ニ大坐シ刊

古事記下巻終

終字ハ無キ本モアリ又卷ノ末ニ無キ本モ

は「記」紀「古語拾遺」等を輯めて後人の僞作したもので、決して聖德太子所撰のものではないが、その中で、饒速日命の降臨の事(卷三)、尾張連・物部連の世次(卷五)及び國造本紀(卷七)は他の古書に據つたもので、参考すべ

きものである由を述べてゐる。(記題號の事)「古事記」の名義は、天武紀に「記定帝紀及上古之諸事」とあるに同じ事、題號に國號を擧げず卷の分け方も漢籍に倣はず貴くめでたい事、題號の讀み方は撰者の意は字音に讀むに

あつたかも知れないが、フルコトブミと訓むを可とする事、及び上巻はカミツマキ、中巻はナカツマキ、下巻はシモツマキと訓むべき事を述べてゐる。(諸本文註釋の事)自身に見得た寛永版本・延佳本・一本・延佳比校本の寫本、村井敬義所藏本、眞福寺本の寫本の六種について、何れも誤字脱字が多く、中には私見によつて改めたものもあるが、それ〴〵得失があつて照合すれば益となる事、また昔から「古事記」には註釋書がない事を述べてゐる。(文體の事)「古事記」が漢文の格で書かれてゐるのは、當時の風潮に従つたまでの事で、元來國字のなかつた我が上代に漢語漢文が輸入せられた結果、歌謠・祝詞・宣命の如く特殊な目的から單に漢字を借りて國語を表はしたものを除くと、一般的には漢文が行はれてゐたためであると言ひ、「古事記」の文體は純粹の漢文ではなく、國語を主とした一種異體のもので、假

編撰者本居宣長(筆自長宣)

古言・古意・古事を明らかにしたことであるが、細かに見れば、(一)古言・古意・古事を保存した第一の經典としての「古事記」の價値を認めた事、(二)從來の諸本に比して本文の校訂を嚴密になした事、(三)從來の訓點を改めた事、(四)語釋の精密なる事、(五)他の古書の傳承と比較研究を試み正鵠を得んとしてゐる事等である。これ等によつて「古事記」の研究は、本文に於ても、訓法に於ても、語釋に於ても、全く前人未踏の境地を開拓し、「古事記」研究史上に於ける永久不變の功績を残したのである。然し宣長の研究には、不十分不徹底の點

字書・宣命書・漢文等の異なる表現形式の混合したものなる由を指摘し、次に古言を記す四種の様式として、假字(阿来)、正字(天地)、借字(魚鱗)如、以上三種の混用體を擧げ、例外として日下・春日・飛鳥の如きを擧げてゐる。(假字の事)先づ記事の「音」一字の假字の總てを五十音順に清濁を分つて掲げ、天曆以前の諸書は皆假字用格の正しい中で、「古事記」書紀「萬葉」が殊に正しく、就中「古事記」が最も正しい事を述べ、その理由として次の如く記してゐる。

(一)清濁を分つてゐる事、(二)訓を用ひず音のみを採つてゐる事、(三)吳音のみを取り、一字を一音に用ひてゐる事、(四)入聲の字を殆ど用ひてゐない事(但し意のみは入聲である事、又稀に色・甲・服を用ひてゐるが、これは必らずにその韻の通音の連つた處にある事、又「吉」の字があるがこれは正しい假字と聊か異なる事)、(五)同音の中にもその言に隨つて用ふる假字を異にして各々定まつてゐる事が多い。例へば「コ」の假字には、許「古」の二字を用ひ、その中で子には古の字のみを用ひてゐる事を擧げてゐる。次に「合」の假字(人名・地名のみにある)。例へば「阿来」・「壹」・「壹」(人名・地名に多い)例へば「江」・「木」・「狹」・「二合」の借字例へば「穴」・「活」・「稻」等を五十音順に掲げてゐる。

(訓法の事)「古事記」撰錄の趣旨を述べて、古語を委しく考へ訓を重くすべき事、即ち漢のふりの訓らぬ清らかな古語を求めて訓むべき事を説き、専ら古語を以て訓まんとするには、古記中の古語の儘に記した個所、續紀・宣命・延喜式祝詞、記紀所載の歌・萬葉集等を則として訓むべきであるが、これ等の中の漢文風なる個所を擇び去り、歌とただの詞との區別を考へて訓むべき事を述べてゐる。次に訓法の

傳(五卷、天保十三年刊)・「稜威言別(別項)」。田中頼庸の「校訂古事記」(三卷、明治二十年刊)が本書に對抗して著はされた。併し「古事記燈」は御杖一流の言靈説によつて神典研究の主旨を説いただけで肝腎な本文に入つて居らず、所説に不穩當な所があり、「難言古事記傳」も僅に上巻のみの論議で、中には正鵠を得てゐる點もあるが、故意に反對した嫌疑があり、校訂古事記も本文と訓法に就てのみの反對で、必ずしも正しいとは言ひ難く、何れも本書の完成されたものには比較すべくもなく、又本書に負ふ所も多い。又「三大考」に就て見れば、

漢意の潤色なき上古質直の國史として、始めて「古事記」を尊重した眞淵の功績を稱へてゐる。(書紀の論ひ)「書紀」のみを尊ぶ世人の迷を諭し、「古事記」の尊ぶべき由を顯はすため、「書紀」の漢意漢文の潤色の多い事を

は「記」「紀」古語拾遺等を輯めて後人の偽作したもので、決して聖德太子所撰のものではないが、その中で、饒速日命の降臨の事(卷三)、尾張連・物部連の世次(卷五)及び國造本紀(卷七)は他の古書に據つたもので、参考すべき

結果、歌謠・祝詞・宣命の如く特殊な目的から單に漢字を借りて國語を表はしたものを除くと、一般的には漢文が行はれてゐたためであると言ひ、「古事記」の文體は純粹の漢文ではなく、國語を主とした一種異態のもので、假

事を説き、専ら古語を以て訓まんとするには、古記中の古語の儘に記した箇所、續紀・宣命、延喜式祝詞、記紀所載の歌、萬葉集等を則として訓むべきであるが、これ等の中の漢文風なる箇所を擇び去り、歌とただの詞との區別を考へて訓むべき事を述べてゐる。次に訓法の

心得を次の如く説いてゐる。

(一)同言を一は委しく書き他は字を省いたのは、委しい方に隨つて訓むべき事、(二)同言を二は假字他は漢文に書いたのは、假字の方に依つて訓むべき事、(三)同じさまの事を一は古語に書き他は漢文の格に書いたのは、古語の方を則として訓むべき事、(四)一句が全くの漢文で書かれてゐる場合は、字に拘らずその意を得そのまゝに隨つて、適ふべき古言を思ひ求めて訓むべき事、(五)テニヲハをよく考へて正しく訓むべき事、(六)嚴に假字の濫濁を守つて訓むべき事等。

次にアクセントの註記を説いて、語を嚴にすべき由を述べ、最後に助字及び常用の文字を集め掲げてその訓法を示してゐる。(直昆靈)これは古道論である。日本は惟神の國で、古代には道といふ言學はなかつた。唯物に行く道があつたのみで、萬の教を何の道彼の道といふは異國のさたである。然るに典籍傳來後外國の道に對して我が國の古のてぶりを神道と名づくるに至つた。神道は外國の萬の道に勝れて正しく高い貴い道で、天地の自らなる道でもなく、人が作つた道でもない。高御產巢日神の御靈によつて、伊邪那岐・伊邪那美二神が始められ、天照大神が受け保ち傳へ給ふ道であるから神道といふのである。この道の意は、「古事記」をはじめ古の諸書をよく味ひ見れば覺るゝものであるが、世人皆禍津日神にまじこつて、佛意漢意に泥むは悲しむべきであると言ひ、神直毘・大直毘二神の御靈を頂いて、この禍を直さんためにものした由を述べてゐる。(卷二)先づ序文に精解を下してゐるが、その中で、(一)帝紀・先紀・帝皇日繼は同一のものであつて、御歴代の天津日嗣を記した書としてゐる事、(二)本辭・舊辭・先代舊辭も同一のもので、上古の諸々の事を記し

たものとしてゐる事、(三)誦習を誦誦の意に説いてゐる事は注目に値する。次に「大御代之繼繼御世御世之御子」等として、神統・皇統の系譜を掲げてゐる。(卷三)以下は註釋であるが、先づ本文を擧げ、右に片假名を以て書き下しの訓を附し、次に語句を摘出して、或は古書に徵證を求め、或は衆説によつて正し、或は自ら熟慮反覆して訓法を示し、精密周到なる語釋を施し、古意古俗を明かにするに勉めてゐる。なほ卷十七附録の服部中庸の「三大考」は、十箇の圖を掲げて、三大即ち天・地・泉について論じたもので、外國の説を排し、皇國の傳説に隨ひ、「古事記傳」の説によつて論じたものである。

【價値】本書は、「古事記」の註釋書として全く空前絶後の著であつて、加藤千陰が寛政十年十二月十六日に宣長に贈つた書翰中に、「此書皇國之至寶に候を、千歳手を付候もの無之候處、誠に御大業此上も無之御儀、難有御事奉存候」とあり、又漢學者市川多門も、「和學の事は此傳にてつきぬべし」と稱美してゐる。本書出版後、今日に至る迄、「古事記」の註釋書の殆ど總てが、本書の餘光を借りてゐる事を見ても、本書が如何に絶大なる價値を有してゐるかが分る。本書は「古事記」の文獻學的研究書であつて、眞理を愛求する眞面目な研究的精神によつて貫かれてゐる。隨つて研究態度は科學的であり、從來の註釋家の偏見・曲解を排して古典の眞意を究めようとする自由討究主義、空理空論を斥けて古典の事實を基礎として古代を明らかにしようとする實證主義、即ち獨斷妄推を避けて、客觀的歸納的に「古事記」を取扱つて居り、そこに本書の價値がある。而して本書に於て特筆すべきは、精密周到に

古言・古意・古事を明らかにしたことであるが、細かに見れば、(一)古言・古意・古事を保存した第一の經典としての「古事記」の價値を認めた事、(二)從來の諸本に比して本文の校訂を嚴密になした事、(三)從來の訓點を改めた事、(四)語釋の精密なる事、(五)他の古書の傳承と比較研究を試み正鵠を得んとしてゐる事等である。これ等によつて「古事記」の研究は、本文に於ても、訓法に於ても、語釋に於ても、全く前人未踏の境地を開拓し、「古事記」研究史上に於ける永久不變の功績を残したのである。然し宣長の研究には、不十分不徹底の點が多々ある。即ち彼の文獻學的研究に於ては自己の學問を皇國學として絶對的なものに考へ、その結果古代の客觀的闡明がやがて主觀的主張となつて現はれてゐる。この論理的矛盾は、彼の偏狭なる尊王愛國主義と古傳を絶對的に信ずる神祕主義とに煩はされた結果として生じたもので、そこに彼の研究の弱點がある。又本文校訂に於ても材料の不足と粗惡のため不十分の點が多く、同時に首肯し難い故意の作爲を敢てしてゐる。訓法に於ても修正せらるべき點が多く、語釋に於ても未だ思ひ得ざりし點が多い。更に文化學的研究に於ても、僅かに神道學的研究と言語學的研究とが成されたのみで、他の部門は殆ど閉却されてゐる。然しこれ等は本書の瑕瑾に過ぎない。本書は「古事記」研究者が度外視することを得ない不朽の大著である。【影響】本書一度世に出づるや、「古事記」の訓法・解釋の方面に於て全く學界を風靡するの概があり、爾後の註釋書の殆ど總ては、本書に負ふ所大なるものがあつた。ただこの中に在つて、富士谷成元の「古事記燈」(別項)、橋守部の「難古事記傳」(五卷、天保十三年刊)、「稜威言別」(別項)、田中頼庸の「校訂古事記」(三卷、明治二十年刊)が本書に對抗して著はされた。併し「古事記燈」は御杖一流の言靈説によつて神典研究の主旨を説いただけで肝腎な本文に入つて居らず、所説に不穩當な所があり、「難古事記傳」も僅に上卷のみの論難で、中には正鵠を得てゐる點もあるが、故意に反對した嫌ひがあり、「校訂古事記」も本文と訓法に就てのみの反對で、必ずしも正しいとは言ひ難く、何れも本書の完成されたのには比較すべくもなく、又本書に負ふ所も多い。又「三大考」に就て見れば、平田篤胤は「靈能眞柱」(別項)を著してこれを補正し、本居大平は「三大考辨」を出して「三大考」の所説を論破し、篤胤は更に「三大考辨」を著して大平の所説を論難した。又落合直澄も「三大考後辨」をものして中庸の説を論駁した。なほ平田篤胤の「古史傳」(別項)及び鈴木重胤の「日本書紀傳」は何れも記傳を先蹤として著はされたものである。【末書】村上忠順の「古事記標註」(三冊、明治七年刊)は、本書の説を抄録して叮嚀に標註したものである。又吉岡徳明の「古事記傳略」(別項)も記傳を節略し、諸説を以て補正したものである。

【參考】本居宣長 村岡典嗣

古事記傳略

【編者】吉岡徳明【刊行】刊行年月の明記がない。例言の末尾に明治十六年十月とあるが、一之卷と二之卷との間にある序解附録の終りに、明治十八年十月十四日とあるから、それ以後の刊行であらう。【組織・内容】本書の内容は、その例言に「一、此書は大概古事記傳を節略して鈴屋大人のいまだ考へ得ずと云置れたることは古史徵并に

傳を始めその他古今を撰ばずおのが考といへども如此あらむかと思ふほどは注しつ。一、傳の説といへども今にして誰もいかにぞやとおもふことは都て取らず却て其捨られたる説によるしきものあれば之を擧げまた他説の是ぞよろしからむと思ふものを注して後人の參考に備ふ」とあるので明かである。「第一冊」卷一から卷三までを載せてゐる。卷一は記傳卷一・卷二の節略で、古記典論、記題號の事、諸本註釋の事、文體の事、假字の事、訓法の事、序解から成つてゐるが、記傳卷一の書紀の論ひ、舊事紀といふ書の論、直毘靈の三項及び同卷二の系譜を省いてゐる。次に序解附録を加へ、記傳の序解を補正してゐる。即ち先づ記傳に帝紀と天皇目録とを同じ物としたのを非とし、帝紀は支那の國史の本紀に當るもので御歴代の御傳記を指し、天皇目録は御世繼の御名のみを列ねた系圖を指したものとしてみゐる。次に記傳に本辭と舊辭とを同一視した事をも非とし、舊辭は上古の諸事を語り傳へた昔物語であり、本辭は舊辭に含まれ、特に天皇又は臣民國土等の縁起を語り傳へたものとして卜部家の祕書を引いて例證し、帝紀に對して本辭といふ時は、支那の世家列傳と同じく、臣民諸氏の傳記を指すものと言つてゐる。又序に「撰録神田阿禮所誦之勅語舊辭以獻上者」とあるについて、記傳に此に舊辭のみ云て、帝紀を云はざるは舊辭に籠て文を省けるなり」と言つてゐるのを非として、舊辭を撰録したものが即ち帝紀であるから、文を省いたのではないとしてゐる。卷二は記傳の卷三から卷五まで（天地初發から迦具土神被殺まで）、卷三は記傳卷六から卷八まで（黄泉國から天石屋戸まで）の節略である。「第二冊」卷四か

ら卷六まで、卷四は記傳の卷九から卷十一まで（須佐之男命被逐から大國主神の神裔まで）、卷五は記傳の卷十二から卷十四まで（少名毘古那神から大國主神の國譲りまで）、卷六は記傳の卷十五から卷十七まで（天孫降臨から上卷終まで）の節略である。「第三冊」卷七から卷十まで、卷七は記傳の卷十八から卷二十一まで（神武天皇から孝靈天皇まで）、卷八は記傳の卷二十二から卷二十五まで（孝元天皇から垂仁天皇まで）、卷九は、記傳の卷二十六から卷二十八まで（景行天皇、卷十は記傳の卷二十九から卷三十四まで（仲哀天皇から中卷終まで）の節略である。「第四冊」卷十一・十二で、前者は記傳の卷三十五から卷三十九まで（仁德天皇から允恭天皇まで）、後者は記傳の卷四十から卷四十四まで（安康天皇から下卷終まで）の節略である。「價值」本書は、註解詳密、卷帙浩瀚なる記傳を通讀するの困難なところから、その要旨を抽出し、加ふるに記傳の後説を以て補つたものである。従つてただに記傳の趣旨を容易く知り得るのみならず、「古事記」の註釋的研究の一般を窺ふことが出来、そこに本書の價值がある。而も記傳の非を是正し、宣長が未だ思ひ得ざりし點を説き得るところが多いのは、本書の價值を一層高めるものである。例へば記傳に、「辭理巨見以注明意、況易解更非注」としたのを非として、「辭理巨見以注明意、意況易解更非注」とし、意況を意趣と解したるが如き、又記傳に、死由の二字を眞福寺本に留を留と是正したるが如き、又記傳に名義未思得とした彌豆麻岐神を、田に水をまかす神と解したるが如きがそれである。要するに本書は概して正鵠を得、而も繁多に流れない「古

事記」の註釋書であるが、その價值はあまり世に認められてゐない。「倉野」
古事記の新研究 こじきのしんけんきゅう 研究書
 【著者】倉野憲司 【刊行】昭和二年三月、修文館【内容】「古事記」を我が上代に於ける叙事詩的文學として精密に考察したもので、八章、二十五節から成つてゐる。先づ從來の「古事記」の研究を歴史的に考察し、次に歐羅巴に於ける叙事詩論の推移を概観し、延いて西洋諸學者によつて下された叙事詩の定義を瞥見し、その底に流るゝ特性として、その起原及び發達は民族的であること、一貫した主題を有してゐること、その形式は説話的である事、その内容は英雄的である事、一の複合文學である事を認め、この五項を古事記研究の根幹としてゐる。次に叙事詩の起原及び發達の考察に移り、先づ歌謡の起原に關する諸家の説を検討して、その起原を分化する藝術の各方面が融合未分の状態に於ける民衆の原始的歌舞に求め、叙事詩も亦この歌舞に發したものとし、人・群・部族・種族・君主國と社會組織の進展するに平行して、叙事文學も展開する事を述べ、この政治組織と叙事文學との相應關係を、ゲルマン民族の例に徴してゐる。次に我が上代に於て、叙事詩の文學を産み出す背景となるべき英雄時代が存在してゐた事を、日本民族論より、又古代文化の上より、更に「古事記」の物語を通して論證してゐる。以上の論説を基礎として、「古事記」そのものの考察に入り、先づその民族的成立を論じてゐるが、この章に著者は最も力を用ひ、「古事記」の遠い起原を原始的歌舞に求め、近い起原を口碑傳説に求め、その神話・説話・傳説を精細に比較討論して、畢竟 *universe myth* の

現はれとなし、かくの如き神話傳説の統一を日本國家の統一と相應せしめ、兩者等しく國民的理想の表現なりと觀じ、「古事記」の原型的成立を四世紀に於ける國家統一の時代と論じてゐる。續いて語部の性質を検討して、それを西洋の *Dard* や *minstrel* と同性質なりと見、その職能は首長禮讚であつたから、「古事記」原型的成立には、それが與つて力があつたことを述べ、この原型は六世紀に於ける國民の心的動搖によつて刺戟せられて、第二段の發達を遂げたことに論及してゐる。次いで漢字の輸入、延いては口碑が記録に移された事情を説き、「古事記」序文に見ゆる帝紀・天皇目録・先紀及び舊辭・本辭・先代舊辭の性質を究め、天武帝と元明帝の修史の事情、即ち稗田阿禮の誦習と太安萬侶の撰録とに新見解を與へて、「古事記」の成立が成長的であり、民族的である點を明かにしてゐる。次に「古事記」の梗概を述べて、全篇に皇室の由來、諸氏族の出自、血族主義による國家組織を説明せんとする一貫した精神が流れ、個々の物語はこの主題によつて統一せられてゐる事、及びその藝術的價值を品騰して、「古事記」は美と力を有する叙事詩的文學なりと認め、轉じて「古事記」の英雄的性質を、國民的英雄として人物の動作と性格によつて確かめ、その説話的性質を、歴史的事件と作中の事件との關係、上中下三卷に於ける語りぶりの差異、類型的説話法、挿話等によつて確かめてゐる。かくて「古事記」は叙事詩的文學に共通せる五特相を有するが故に、我が上代を飾る一大叙事詩的文學であると結論してゐる。【價值】細部に互つては固より、今後改めらるべき點も多しであらうが、從來史書と認められてゐ

た「古事記」の成立・内容及び形式について、民族的叙事詩の本質的研究を經とし、言語・神話・宗教・人類・土俗・歴史・考古等の各文化學的研究を緯として科學的に研究し、以てその叙事詩的文學としての價值を認めた事、神話・説話及び傳説を比較討論してその性質を明らかにした事、上代の國民思想並びに生活を闡明した事は、本書の特徴であらう。【久松】

又臨終に際しての歌傳説話は、小式部に關するものを母の和泉と混同してある。
 【梗概】中頃、上東門院に仕へてゐた紫式部といふ才色兼備、院中隨一の女房があつたが、或る時不思議の夢を見、やがて玉の如き女兒を擧げた。これが後の泉式部である。六歳の時、歌道の學ぶべき事など教へると、直ちに無邪氣な而も抑捺的な歌を詠んで人々を驚嘆させ、母の式部が宿願あつて石山に籠つてゐた時、繼母の膝下にあり、或る時、繼母が伊勢土産の土の小鍋を實子にのみ與へると、可憐な歌を吟じて繼母を感動させた。紫式部は、

女兒を、官女生活の身を恥ぢて、泣く泣く玉の宝箱に容れて東寺の門前に捨てた。河内國から清水に申子の祈願に來て歸り途の老夫婦これを拾ひて育て上げ、十一になつた時この家に一夜の宿を求めたのは、我が子を探して泊瀬に詣つた母の泉と乳母とであつた。松風に寝られぬ心を口吟んだ歌を、嗤ひ難じて返歌した子供の聲を訝しんで問ひ質すと、それが我が子であり、急ぎ都へ伴はうと云ふと、おうちへばが承知しないのみか、娘も亦自分をお捨てた母を語り、後この事上聞に達し、老夫婦は母後國邊射部を湯まつて、母子は京へ

五子稿 ごしご 「俳諧五子稿」を見よ。
 腰越 こし 幸若舞曲（三十六番の一）
 卷【成立】室町期【諸本】古板本は寛永十二年板（十行本）。明治以後の刊行としては新群書類第八舞曲部所收。節附本は全曲ではないが、越前幸若家元藏のものを日本歌謡集成卷五（近古篇）所收。【内容】判官物。宗盛以下の生捕を護送して凱旋した義経が、梶原の讒によつて鎌倉に入ることを止められたので、辨慶に申狀を認めさせて大江廣元について宛を派へる事、謂はゆる要成伏の件を素材

けるなり」と言つてゐるのを非として、舊辭を撰録したものが即ち帝紀であるから、文を省いたのではないとしてゐる。卷二は記傳の卷三から卷五まで(天地初發から迦具土神被殺まで)、卷三は記傳卷六から卷八まで(黃泉國から天石屋戸まで)の節略である。「第二册」卷四か

が如き、又記傳に、死由の二字を眞福寺本に留の一字とあるところから、皆と思ひ誤つたのを留と是正したるが如き、又記傳に名義未思得とした彌豆麻岐神を、田に水をまかす神と解したるが如きがそれである。要するに本書は概して正鶴を得、而も繁多に流れない「古

以上の論説を基礎として、「古事記」そのものの考察に入り、先づその民族的成立を論じてゐるが、この章に著者は最も力を用ひ、「古事記」の遠い起原を原始的歌舞に求め、近い起原を口碑傳説に究め、その神話・説話・傳説を精細に比較検討して、畢竟 *primitive mind* の

型的説話法、挿話等によつて確かめてゐる。かくて「古事記」は叙事詩の文學に共通せる五特相を有するが故に、我が上代を飾る一大叙事詩的の文學であると結論してゐる。【價值】細部に互つては固より、今後改めらるべき點も多いであらうが、從來史書と認められてゐ

た「古事記」の成立・内容及び形式について、民族的叙事詩の本質的研究を經とし、言語神話・宗教・人類・土俗・歴史・考古等の各文化學的研究を緯として科學的に研究し、以てその叙事詩的の文學としての價值を認め、神話・説話及び傳説を比較検討してその性質を明かにした事、上代の國民思想並びに生活を闡明した事は、本書の特徴であらう。【久松】

小式部

【名稱】小式部内侍の事を書いたからの題名である。内容は紫式部・泉和泉・式部・小式部と、三代に大體等分に占有せられてゐる。

【成立】不明であるが、創作態度、内容の説話、思想傾向、文詞・用語等、種々の點から觀て、室町中期の作と推定し得る。御伽草子の「和泉式部」(別項)等より後のものであるやうに思はれる。【諸本】藤井乙男氏藏の寫本(無畫十行袋綴本。白色の表紙に題簽なく「小式部」と中央に書し、内題・奥書共に無し)を、近古小説新纂(初輯)に收めて刊行。なほ別に同じ題號の奈良繪入御伽草子風の一本(上下二卷。卷末に「居初氏女書畫」とあるもの)があつて、これは本書と全く別箇の内容を有する、内侍の傳記物語である。【題材】「小町草紙」や「和泉式部」のやうな、中古以來の歌物語の流れを承けてゐる作の系統に屬するもの。

前述の如く、小式部についてだけの物語でなく、實事・訛傳・空想さまざまに混淆を極めて居り、いろ／＼の傳説が殆ど無批判に集結せられてゐる。素材の説話中、特に小鍋の歌物語は「俊祕抄」(卷上)、「袋草紙」(卷四)等に、巫女の敬愛の祭は「沙石集」(卷十)に、山里の詠歌問答は「三國傳記」(卷六)の西行が人丸の靈に逢ふ條に見えるそれ／＼の説話から出てゐる。又臨終に際しての歌徳説話は、小式部に關するものを母の和泉と混同してある。【梗概】中頃、上東門院に仕へてゐた紫式部といふ才色兼備、院中隨一の女房があつたが、或る時不思議の夢を見、やがて玉の如き女兒を擧げた。これが後の泉式部である。六歳の時、歌道の學ぶべき事など教へると、直ちに無邪氣な而も擲論的な歌を詠んで人々を驚嘆させ、母の式部が宿願あつて石山に籠つてゐた時は、繼母の膝下にあり、或る時、繼母が伊勢土産の土の小鍋を實子にのみ與へると、可憐な歌を作つて繼母を感動させた。紫式部は、石山で「源氏」六十卷を著し、大般若の裏に書き、庵室を建て繪師に我が姿を寫させて本尊とし、所領を寄進し菩提を頼んで下向した。娘十三の春重病に罹り、母の心盡しの甲斐もなく命危く見えた時、苦しみ息の下に一首詠むと、天井に鬼が現はれて涙を流し、冥府十王その歌に賞でて命を延ばす告があつた。この事上東門院に聞え、召されて數々の褒賞に與つたが、源賴光と共に酒頼童子を退治した藤原保昌は、勳功の引出物にこの泉式部を請うて、宮仕のまゝ妻とした。その頃道命法師と云ふ歌の名人あり、泉はその弟子となつたために疑を得、人々の讒言によつて夫との間に間隙が出来たので、母の紫式部は娘を呼んで女の道を諭し、自身は再び石山に參り、「源氏」六十卷の中から五卷を取つて深く藏めた。「雲隱」の様々の説のうち、これは一説である。泉式部は同情して寄せてくれた赤染衛門の歌に返しを送り、その後やさかなの巫女の勧めで、いづもの社前に和合敬愛の祭をすると、詠歌の徳によつて神の受納あり、再び保昌と睦み合ふことが出来、十七の時に得た美しい

女兒を、官女生活の身を恥ぢて、泣く泣く玉の宝箱に容れて東寺の門前に捨てた。河内國から清水に申子の祈願に來て歸り途の老夫婦これを拾ひて育て上げ、十一になつた時この家に一夜の宿を求めたのは、我が子を探して泊瀬に詣つた母の泉と乳母とであつた。松風に寝られぬ心を口吟んだ歌を、嗤ひ難じて返歌した子供の聲を訝しんで問ひ質すと、それが我が子であり、急ぎ都へ伴はうと云ふと、おうちへばが承知しないのみか、娘も亦自分を捨てた母を詰り、後この事上聞に達し、老夫婦には丹後國與謝郡を賜はつて、母子は京へ歸つた。帝、住吉行幸の時、泉式部は獻詠の宣旨を蒙つたのを娘に譲つて一首任らせ、觀感の餘り小式部内侍として召された。母が久世の戸の文殊を拜みに丹後へ下つた間に、帝の御寵愛の小松が俄に枯れた時にも、母に代つて詠んだ歌で松は蘇り、恩賞を頂いた。丹後から昨日人が上つたと譏する者があつたが、小式部は「大江山生野の道の」の歌を以て、まだ母の文は披き見ぬ由をお答へし、御感更に新たなるものがあつた。泉式部は歸京後永く榮えた。

【参考】近古小説新纂初輯(考説)【鳥津】

古事記謡歌註

【著者】内山眞龍【成立】未詳。「日本紀類聚」謡歌註(別項)と前後して作られたものであらう。【諸本】自筆本が竹柏園に藏せられてゐる。日本歌謡集成卷一所收。【解説】「古事記」の謡歌を、一句ごとに細註を施して擧げ、次に歌格上よりこれを圖示してゐる。橋守部の「長歌撰格」短歌撰格、中村知至の「長歌規則」等には圖解があるが、歌格研究に圖解を用ひたのは、恐らくは眞龍が始めてであらう。【佐佐木】

五子稿

【佛語】五子稿を見よ。

腰越

【名稱】幸若舞曲(三十六番の一)一巻【成立】室町期【諸本】古板本は寛永十二年板(十行本)。明治以後の刊行としては新群書類第八舞曲部所收。節附本は全曲ではないが、越前幸若家元藏のものを日本歌謡集成卷五(近古篇)所收。【内容】判官物。宗盛以下の生捕を護送して凱旋した義經が、梶原の讒によつて鎌倉に入ることを止められたので、辨慶に申狀を認めさせて大江廣元について冤を訴へる事、謂はゆる腰越狀の件を素材としてある。「平家物語」(卷十二)、「義經記」(卷四)と同材。腰越狀は兩書及び「吾妻鏡」(卷四)にも載せてある。【影響】高館最期の時、遺書を口にして死んだといふ義經合狀の傳説は、この腰越狀から轉化したもので、近世の戯曲類に屢々用ひられてゐる。【鳥津】

替使者

【譯者】本書初版の表紙には、羊角山人譯述、本文には羊角山人譯述・思軒居士刪潤、奥附には譯者兼發行人森田文藏(思軒)とあり、今日普通、思軒の譯と呼んでゐる。【名稱】「めくらししや」とも呼ぶ。【發表】明治二十年九月十六日から同年十二月三十日まで、「盲目使者」と題し、嘉坡通信、報知叢談の一篇として郵便報知新聞に連載(署名羊角山人譯)。「刊行」同二十一年五月上巻、同二十四年十一月下巻。同二十五年四月三版の時、上下合冊刊行(五版以後又前後二巻となる)。

起させ、ジベリヤに侵入させる。露帝は、當時シベリヤ總督としてイルクックに駐屯してゐた皇弟の身を氣遣つて密使を急派する。密使の名は、オムスク生れの彌圭兒蘇朗笏といふ。別にイルクックに配流の父を訪ふ那貞丙道といふ少女があつて、二人は途中の冒險に助け合ふ。端なく蘇朗笏は王忽烈の手に囚はれるが、故郷オムスクを通るとき、母に出會つて名乗りかけられたのが禍となり、密使なることを見露はされ、密書を奪はれた上、熱した剣で眼を抉つて、盲目の刑に處せられる(嘗使者又は盲目使者の名はこゝから出たのである)。これに屈せず蘇朗笏は那貞の助けを得てイルクックに辿りつき、偽密使に變装した王忽烈が皇弟太公を刺さんとする刹那、奮然劍を揮つて王忽烈を殺した。彼は盲目の刑を受けた際、母を思うて流した涙の作用で、視力を全く失はずにゐたのである。蘇朗笏と那貞は露帝から恩賞をうけ、偕老の縁を結んだといふ。

【解説】「嘗使者」は、思軒の數多い翻譯物の中でも有名なものであるが、嚴密にいへばこれは思軒の翻譯文章の大成したものでない。思軒の他の譯文に見るやうな、完成した苦心、即ち徳富蘇峰が思軒の文章を評して、「恰も磨き竹を以て建仁寺垣を結ひたる如し」といつたやうな煮煉の跡が少いのもわかる。それだけ読み易い。これは恐らく他人の文章を刪潤したためであらうか。併し概して、この小説を以て思軒の出世譯とするのは當つてゐるであらう。これを翻案したものに、前田曙山の「糸の亂れ」がある。 [柳田泉]

【小侍從集】歌集 一卷 【著者】石清水別當光清の女【別名】待宵小侍從集【諸國史大系・丹鶴叢書等所收。【出典】本書の説話は、「續日本紀」日本往生極樂記や、「續本朝往生傳」等の往生物語、「李部王重明記」敦光朝臣抄物「爲意記」師時卿記「江談抄」扶桑略記「今昔物語」等に基いたものが少くない。【内容】第一卷は王道・后宮篇で、皇室を中心とする史實、有職故實が多く、この外、浦島傳説、融の幽魂、成信と重家の出家譚、白河法皇の話、田樂など注目せられる。第二卷は臣節篇で、著名な臣民の說話が多い。伴善男、清少納言、小野小町、業平、實方と行成などの

本】群書類從卷二七九・丹鶴叢書・續國家大觀歌集部(類從本)に收められてゐる。【内容】類從本は、春十首、夏十首、秋十首、冬十首、戀二十首、雜六十首、計百二十一首をのせ、末尾に、「入撰集此集不見哥」三十三首を録してゐる。丹鶴本は、春十七首(内一首缺)、夏十首、秋十六首(一首缺)、冬十八首(一首缺)、戀一首、雜九首より成り、所々に、「本集」月詠「夫木」摘題など頭註してある。その「本集」と註しある歌は、春に二首、夏に一首、秋に一首、冬に三首あり、字句の異同はあるがそれ、群書類從本に載せてあるものである。「夫木」と註せる歌四、皆「夫木和歌抄」にあり、その題も、「和歌抄」と同一である。「月詠」とあるもの二、「摘題」とあるもの九、「歌仙落書」とあるもの一、これ等は、本書の編者か、又は後人が歌の出據を示したものと思はれる。類從本は體裁と、のび、自撰ではないかと思はれるが、別本は後人が編したものであらう。家集としては何れも小さいもので、類從本の半が雜部で占められてゐるのは、體裁の上で珍らしい。歌風は修辭技巧をこらした時流とやゝ異なり、眞率な情が詞となつて自ら清新な調をなした趣がある。「平家物語」第五「月見」の條に引かれてゐる有名な、「待つ宵にふけゆく鐘の聲聞けば歸るあしたの鳥はものかは」の歌は、類從本戀部の首にあるが、この歌によつて「待宵小侍從」と呼ばれたと傳へられる。著者の歌に、戀歌及びその贈答が多いのも當然かも知れない。類從本雜部は、「久我のおほいどの」「大炊御門の少將等との交渉を示す數多い作と、源三位頼政との戀愛生活を物語る一聯の贈答とで大部分を占めてゐる。頼政の家集にもこの贈答をのせてある

録、同二年五月開題記一卷刊行。文政元年十二月山崎篤利の序、同二年四月新庄道雄の「古史徴のそへこと」があり、外に山崎篤利の「開題記目錄大意」を附してゐる。平田篤胤全集所收。【内容】開題記一卷四冊及び神代部三卷六冊・附録一冊より成り、開題記の第一冊(卷)に、「古傳説の本論」「神世文字の論」「古史二典の論」上を、第二冊(夏)に、同下及び「新撰姓氏錄の論」を、第三冊(秋)に「上」件三典に添讀べき書等の論「上」を、第四冊(冬)に、同下を收めてゐる。「古傳説の本論」わが古傳説の起原

ので、兩集相對比して見ると興味がある。著者の作風は、「待つ宵」の歌のやうな巧みな言ひざまよりも、寧ろ情感の發露した點に特徴があるのではないかと思ふ。朝ごとにかはる鏡のかげ見れば思はぬかげのかひもなきかな

は女性の日常生活の歌であり、晩年出家して八幡に籠居した後の作と思はれる。石清水清き流れの末々に我のみにる名をす、がはや(おもひをのぶ)色にのみ染みし心のくやしきをむなしと説ける法のうれしさ(心經)

なども、戀愛生活の後に、飄然遁世生活に入つた一徹な作家の歌として見て、はじめて理解出来ると思ふ。丹鶴叢書本は、要するに類從本に對する補遺と云へる。そして類從本に少い四季歌をこゝに見ることが出来る點を取る。粉飾の作多き當時にあつて、生活の歌を集めた本集は、異色あるものと云ふべきであらう。 [松浦]

【古史成文】國學書 三卷 【著者】平田篤胤【成立・由來】文化八年十一月駿河國柴崎直古の家に寓し、附近の弟子を集めて古典の講説を試みてゐた篤胤が、十二月初から人を退けて一室に籠り、年來の疑問を決し、遂に彼の思想上に生涯の轉期を劃するに至つた。即ちその五日から三十日まで、感激に充たされつゝ數日間を不眠不休の状態で讀み、且つ考へるといふ如くして書いたもの一つがこれであるといはれてゐる。彼のいふ古史とは記・紀であつて、その古史の文を探り合せて綴り成した所から、「古史成文」と名づけたのである。「伊吹能合先生著撰書目」には十五卷とあるが、現存するのは神代三卷のみであ

る。或は豫定だけで成るに至らなかつたものか。【刊行】文政元年刊。後、考訂再版本が出てゐる。平田篤胤全集所收。【内容】古傳に異説の多いのを不審とし、眞傳は一なるべきものとの見地から、「古事記」「日本書紀」「古語拾遺」「風土記」等をかれこれ參照しつゝ古傳の統一を試みたもので、一卷には天地開闢から素戔嗚尊まで、二卷には素戔嗚尊から大國主命に至るまで、三卷には天孫降臨から神武天皇の御生誕まで、全體を百六十五項に分ち、「古事記」の文に倣つて記してある。なほ文政六年(四十八歳)上京、富小路貞直を介して「古史徴(別項)その他と共に朝廷に獻じた。【價値】著者自身「古史徴」に於て、「阿波禮篤胤を知るもの、それ唯此の成文なるかも、篤胤を非るもの、それ唯此の成文なるかも」といつてゐる如く、本書は先師宣長の古道説の祖述者に過ぎなかつた彼の、祖述しつゝ懷抱するに至つた疑問が解決に達し、こゝに一轉機を劃して平田神道を大成するに當り、まづその上代觀を具現したもので、彼の神道思想の根本をなすものである。これに宣長の「古事記傳」に倣つて詳註を施した「古史傳(別項)を作り、その研究法を考察して「古史徴(別項)を得、併せて本書三部とした。彼の所説を知る上には、重要な資料をなすものである。 [西尾]

【古詩大觀】漢詩註釋 二冊 【解説】津阪東陽が「孔雀東飛」「木蘭辭」の二長篇を訓釋し、末に隋唐以來の二詩についての評論を附載したものである。 [佐久]

【古事談】説話 六卷 【著者】源顯兼【成立】建曆二年以後、建保三年以前【諸本】寫本は、帝國圖書館・内閣文庫・東京帝國大學附屬圖書館等に藏本がある。史籍集覽、

【梗概】角書の如く、當時坊間に行はれた手摺唄を主題とし、その古い事實を温ね、新たに敷衍したもので、第一は、むかふ通るは長兵衛ぢやないか、鐵砲がつかいで小脇差さして、何處へ通ると聞たれば、雉子のお山へ雉子打に、まじはけん／＼ほろ／＼うつ、よつてお茶まいれ、新茶をまいれ、お茶も新茶も吞とふないが、愛な小娘にちよとほれた。といふ唄を前提として、この唄の由來は云々と説話する。松前長兵衛といふ義氣ある武士が、主命を受けて、領内の禁野に雉子を打ち

潤したためであらうか。併し概して、この小説を以て思軒の出世譚とするのは當つてゐるであらう。これを翻案したものに、前田暉山の「糸の亂れ」がある。

小侍從集

歌集 一卷 【著者】柳田泉

國史大系・丹鶴叢書等所收。【出典】本書の説話は、「續日本紀」「日本往生極樂記」や、「續本朝往生傳」等の往生物、「李部王重明記」「敦光朝臣抄物」「爲憲記」「師時卿記」「江談抄」「扶桑略記」「今昔物語」等に基いたものが少なくない。

【内容】第一巻は王道・后宮篇で、皇室を中心とする史實、有職故實が多く、この外、浦島傳説、融の幽魂、成信と重家の出家譚、白河法皇の話、田樂など注目せられる。第二巻は臣節篇で、著名な臣民の説話が多い。伴善男・清少納言、小野小町・業平、實方と行成などの如き説話の例が擧げられる。第三巻は僧行篇で、行基と菩提達磨、弘法大師と守敏、相應淨藏・惠心等の名僧の法力譚を主として、一般僧侶の説話に満ちてゐる。第四巻は勇士篇で、將門・純友・頼義・義家等の武人に關する説話を集め、殊に鎌倉時代の武士道精神を示す説話は、注意すべきである。第五巻は神社・佛寺篇で、寺社の縁起由来を示す説話、關寺・長谷寺・天満宮の話、神佛混淆を示す説話、大日如来と伊勢神と同體を説く話等である。有名な西行の白峯詣の説話もこの篇に在る。第六巻は亭宅・諸道篇で、邸宅・音楽・舞踊・學問・相撲・占術等の説話を載せてゐる。全篇を通じて、佛教關係の超自然説話が、又滑稽な説話が散見する。

【参考】古事談攷證岡本保孝 ○古事談攷證岸本由豆流 ○鎌倉室町時代文學史藤岡作太郎 ○鎌倉時代文學新論野村八良

古史徴 四卷十一冊 【著者】平田篤胤 【成立】文化八年(三十六歲)十二月駿河國柴崎直古の家の奥の間に籠つて稿したものの一つで、初めは「古史或問」と題した。【刊行】文政元年六月、神代部三卷並に附

へられる。著者の歌に、戀歌及びその贈答が多いのも當然かも知れない。類本雜部は、「久我のおほいどの」「天炊御門の少將等との交渉を示す数多い作と、源三位頼政との戀愛生活を物語る一聯の贈答とで大部分を占めてゐる。頼政の家集にもこの贈答をのせてある

録、同二年五月開題記一卷刊行。文政元年十二月山崎篤利の序、同二年四月新庄道雄の「古史徴のそへこと」があり、外に山崎篤利の「開題記目錄大意」を附してゐる。平田篤胤全集所收。【内容】開題記一卷四冊及び神代部三卷

六冊・附録一冊より成り、開題記の第一冊(春)に、「古傳説の本論」「神世文字の論」「古史二典の論」上を、第二冊(夏)に、同下及び「新撰姓氏錄の論」を、第三冊(秋)に、「上」件三典に添讀べき書等の論「上」を、第四冊(冬)に、同下を収めてゐる。「古傳説の本論」わが古傳説の起原は、天孫降臨に當り、天地開闢の以前から御座した天地創造の神なる産靈神が、御親ら成しませるまゝに、その故事を「天つ詞の太詞」をもつて御口づから語り給ひ、又その後の多くの神々もその見聞せられた故事を子々孫々に語りつがれて、世にも弘まり、今に傳はり來つたものである。故に祝詞の傳こそ古傳説の根本で、且つ最も正しい所傳であるとなし、更に祝詞そのものの上古文と後世文との別ある事を述べてゐる。「神世文字の論」神世に文字が無かつたとする事の非なるを、「日本紀私記」「釋日本紀」その他の古書に徴して論じ、かの「釋日本紀」に、假名日本紀に二種あつて、一は和漢字、他は假名を用ひてあつたとあるその和字が、即ち神世文字であつて、これはト占に用ひられた符號から發達したもので、天思兼命がその創製者であり、「釋日本紀」に謂はゆる肥人書・薩人書、私記にいふ梵字體の書等、何れも神世文字であつたとし、この神世文字に漢字を宛て、更にそれを崩して出來たものが以呂波字であるとしてゐる。「古史二典の論」記・紀二典の成立を論じ、伴信友説によつて、「日本書紀」の名は、古くは「日本紀」

【参考】古事談攷證岡本保孝 ○古事談攷證岸本由豆流 ○鎌倉室町時代文學史藤岡作太郎 ○鎌倉時代文學新論野村八良

古史徴 四卷十一冊 【著者】平田篤胤 【成立】文化八年(三十六歲)十二月駿河國柴崎直古の家の奥の間に籠つて稿したものの一つで、初めは「古史或問」と題した。【刊行】文政元年六月、神代部三卷並に附

且つ考へるといふ如くして書いたものの一つがこれであるといはれてゐる。彼のいふ古史とは記・紀であつて、その古史の文を探り合せて綴り成した所から、「古史成文」と名づけたのである。「伊吹能合先生著撰書目」には十五卷とあるが、現存するのは神代三卷のみである

であつて、現存「日本紀」は謂はゆる假名日本紀を、漢文的に修飾したものであるとなし、宣長の古史説については、「古史記」にも事實の錯亂が多いのに、「其の謬を見得られしことは其宜しき事を見得られし如く委しからず」、

また「書紀の優れたる事を得られしことは、其非を見得られし如く委しからず」と評し、なほその他の記註釋書について論じてゐる。「上」件三典に添讀べき書等の論「續日本紀」以下の國史・類聚國史・風土記・舊事紀・令・式・格・律等に互つて評論してゐる。卷二・三・四は各上下二冊に分れ、「古史成文」(別項)の各段(百六十五段)につき、古傳を比較し、成文の典據を明示してゐる。【批評】本書は「古史成文」「古史傳」(各別項)と相俟つて謂はゆる三部の書を成すものであつて、共に國學者としての篤胤の業績を代表する著である。而して本書は「古史成文」及び「古史傳」の資料たる古典に關する考察であり、又そこに記載せられた古傳についての比較研究であつて、「古史傳」が宣長の「古史記傳」に倣つた著であるとすれば、これはその總論に當る部分を獨立の形に於て試みたものと見ることが出来る(篤胤自身開題記の開題とは總論の意であることをその卷末に述べてゐる)。而して宣長が「古史記」を本典として他を傍證する方法をとつたのと異つて、彼は祝詞を重んじつゝ、しかも各古傳の比較研究によつて、その還元統一を試みようとしてゐる所に特色がある。

【参考】古事談攷證岡本保孝 ○古事談攷證岸本由豆流 ○鎌倉室町時代文學史藤岡作太郎 ○鎌倉時代文學新論野村八良

古史徴 四卷十一冊 【著者】平田篤胤 【成立】文化八年(三十六歲)十二月駿河國柴崎直古の家の奥の間に籠つて稿したものの一つで、初めは「古史或問」と題した。【刊行】文政元年六月、神代部三卷並に附

を訓釋し、末に隋唐以來の二詩についての評論を附載したものである。【著者】源頼兼「成立」建曆二年以後、建保三年以前【諸本】寫本は、帝國圖書館・内閣文庫・東京帝國大學附屬圖書館等に藏本がある。史籍集覽、

【梗概】角書の如く、當時坊間に行はれた手摺唄を主題とし、その古い事實を温ね、新たに敷衍したもので、第一は、

むかふ通るは長兵衛じやないか、鐘砲かついで小脇差さして、何處へ通ると聞たれば、雉子のお山へ雉子打ちに、まじはけん／＼ほろ／＼つ、よつてお茶まいれ、新茶をまいれ、お茶も新茶も呑とふないが、愛な小娘にちよとほれた。といふ唄を前提として、この唄の由来は云々と説話する。松前長兵衛といふ義氣ある武士が、主命を受けて、領内の禁野に雉子を打ちに行き、雉子と思つて打つと、折節禁を犯して、苟かに藥草を探りに來てゐた信敷意安といふ附近の醫者であつた。長兵衛は驚いて直ぐ名乗つて出ようと思つたが、老母のあるために決意が鈍り、秘して語らず、その代り意安の遺族を慰め、その後何くれと物資を送り、深切に世話をした。その恩義に感じ、寡婦は夫の敵とは知らず長兵衛に打込んで、娘お松を女房に貰つてくれと頼む。長兵衛は非常に煩悶するが、已むを得ずお松を妻に迎へ、寡婦をも引取つて養つて置く。併し敵であるから、いつかは名乗つてお松に討たれる覺悟で、夫婦とは名ばかり、お松とは情交を斷つてゐた。お松は不審に思ひ、いろ／＼と尋ねる。初めは兎や角言ひ紛らしてゐたが、遂に口實がなくなつて、自分は不具者であると告げて妻を宥め、一方親友民五郎を説得して、自分の代りにお松と婚させた。その内老母も世を去つたから、長兵衛は民五郎に後事を託し、お松親子の手にかゝつて討たれようと、苦肉の策を運らしたが、計畫が齟齬して、母の手に民五郎が殺されることとなつた。長兵衛はその前に大蛇を撃ちて、武勇を現はした功に

【参考】古事談攷證岡本保孝 ○古事談攷證岸本由豆流 ○鎌倉室町時代文學史藤岡作太郎 ○鎌倉時代文學新論野村八良

古史徴 四卷十一冊 【著者】平田篤胤 【成立】文化八年(三十六歲)十二月駿河國柴崎直古の家の奥の間に籠つて稿したものの一つで、初めは「古史或問」と題した。【刊行】文政元年六月、神代部三卷並に附

より、主君から罪を赦され、却つて立身した。第二も流行唄、

おらが姉様三人ござる、ひとり姉様鼓が上手、ひとり姉様たいこが上手、ひとり姉様下谷にござる、下谷一番伊達者でござる。

に據つたものである。本郷の絹屋彦兵衛に四人の子があり、おきぬ・おたみ・おとみと上三人は女であるが、末子は男子で彦太郎と云ふ。この彦太郎が父の歿後に商用で上州に赴いた途中、熊谷在の辻堂で、浪人の手にかゝつて殺された。後にこの浪人が出世して、その頃下谷一番の伊達者と評判になつた同藩士某の妻となつてゐるおとみに、道ならぬ戀を仕掛け、いろ／＼奸策を運らして、おとみを離縁させ、我が手に入れんと企て、おとみ姉妹と酒宴の場で、不用意にも熊谷在の人殺しを口走り、悪事が顯はれて、三人の女に討たれた。第三は、

おせんや／＼おせん女郎、そなたの指たる笄は、實たか買たからつくしや、もらひもせぬが買もせぬ、市右衛門殿の一むすこ、女房が泣いてりんきする。

この唄に關する話で、元弘二年、北條高時の一族大佛出羽守の息女おせんの方が、鎌倉没落の際、許嫁の夫、長崎勘解由左衛門を尋ねて出羽に赴き、勘解由左衛門の隠棲に於て、先婦との間に纏れる一條の哀話である。

【批評】以上三種の物語は、何れも手毬唄に關する事實談の如く作者は取扱つてゐるが、いづれも根拠のある事だ、おらが姉様の話の如き、作者は七昔以前の事と言つてゐる。その時より七十年を溯れば、元祿五六年に當り、その頃既に、本町二丁目糸屋の娘の巷談が行はれ、これを扱つたものに立羽不角の「好色

染したぢ」があり、これが元祿四年の刊行であるから、七昔以前に相當し、本郷絹屋の話は、本町糸屋の話から脱化したものであることが分る。併しその巷談は兩説行はれ、作者はこれを巧みに扱ひ、事實らしく見せかけたのが作意である。この作者は、趣向立が上手で、餘り巧み過ぎて長兵衛の苦肉策の如き、歌舞伎淨瑠璃に見るトリックに類してゐる。

【影響】安永十年(天明元)、この作の一と二の話を接ぎ合せて淨瑠璃に作り、「むかし唄今物語」と外題を据ゑ、同正月二日から、堺町肥前座の操にかけた。又この作が評判が好かつたので、明和二年「古實今物語」後編五巻を著した。

【ゴシック 藝術論】【解説】歐洲の十二世紀末から十五世紀末までの寺院建築様式を主に名指し、建築史上ロマネスク様式に續くものである。北佛蘭西を中心として、南獨逸、英國、伊太利にまで派及した。ランス、アミアン、シャルトル、ケルン等の寺院に、代表的形式を見得る。傾斜の急な穹窿に特色がある。なほ美術史家ヴォリゲル、シェフラー等ではクラシック(古典的参照)に對してゴシック様式を極端な主觀的表現藝術の代表的なものとし、ゴシックを藝術學的概念として使用してゐる。【村田】

【参考】Worringer: Formproblem d. Gotik. 1. 1. Scheller: Der Geist d. Gotik. 1. 1. 故實叢書 三輯百六十八冊十二帖【編者】今泉定介【刊行】明治三十二年から同三十九年まで【解説】有職故實の研究に重要な資料を蒐輯したもので、項目を擧ぐれば次の如くである。

同附圖・冠帽圖會・安齋隨筆・安齋雜考・御代始抄(以上別項)・有職袖中鈔・軍用記(別項)・同附圖・鏡着用法(別項)・本朝軍器考(別項)・同附圖・建武年中行事略解(谷村光義)を收め、第二輯は三十一冊

圖八帖で、大内裡圖(内藤廣前)・大内裏圖考(別項)・貞丈雜記(別項)・裝束職文圖會(別項)・織文圖會(別項)・服色圖解(別項)・尙古銀色一覽(別項)・中古京師内外地圖・中昔京師地圖(森幸安)を收め、第三輯は六十四冊圖七帖で、武家名目抄(別項)・歴世服飾考(別項)・尊卑分脈(別項)・裝束着用圖(別項)・禮服用圖(別項)・女官裝束着用次第(別項)・近代女房裝束抄(別項)・舞樂圖(高島千春)・同圖說(大槻如電)・拾芥抄(別項)・禁秘抄考註(牟田榮安)を收めてゐる。

増訂本は昭和三年來刊行中であるが、在來の體裁が和裝であつたのを洋裝に改め、次の如く二十四種百七十七巻を増加してゐる。

内裏儀式・儀式・西宮記(別項)・北山抄(別項)・江家次第(別項)・江家次第秘鈔(尾崎積興)・公事根源(考)・速水房常・嘉永年中行事・同考證(勢多章甫)・禁中名目抄校註(速水房常)・光靈一覽(伊達某)・故實拾要(篠崎維章)・官職知要(里見安直)・服色管見(別項)・續有職問答(安藤爲賢)・筆の靈・同附圖田沼圖考(同上)・室町殿屋形私考(伊勢貞春)・鳳關見圖圖說(別項)・宮殿并調度沿革(勢多章甫)・調度圖會(青木久邦)・家屋雜考(澤田名垂等)【石村】

【古史傳】國學書 三十七卷【著者】平田篤胤【成立刊行】本書は文化八年十二月、「古史成文」(別項)及び「古史徵」(別項)を草した際に得た腹稿を、翌九年起稿、同十一月・十二月・十四年及び文政元年に、順次、第二・三・四・五巻の稿成り、文政八年に神代傳を完結した。第七巻二十八巻までは篤胤撰、鐵胤(男)延胤(孫)續攷として安政から元治にかけて上木せ

られ、第八巻第二十九巻以下は、篤胤撰、鐵胤(男)・延胤(孫)・矢野玄道(門人)續攷、胤男孫・井上頼因(門人)校訂として明治十三年から同二十年の間に、八巻三十一巻まで上木せられたが、その後、明治四十四年以降刊行の平田篤胤全集には、第三十七巻まで載せられてゐる。本書はかく大部であつたために、篤胤思想の根柢をなすものでありながら刊行の困難を伴ひ、歿後文久二年、長野縣伊那郡に於ける門下數氏の首唱により、同地方その他各地に助成者を募つて、漸く刊行の運びに至つたものである。平田篤胤全集第七・八・九・十所收。

【内容】著者が古傳の還元統一を目的として編成した「古史成文」の各段を詳註し、古代を明かにし、古道を究めようとした主著であつたが、三十二巻を以て神代の巻を終る豫定であつたが、自ら撰したのは第二十九巻の中段までで、以下は門下の手で續攷されたものであるから、勢ひ考證に精粗があり、文脈に異同があるを免れない。本書の組織は、神代上八巻に第一段から三十九段までを、神代中十二巻に第四十段から百五段までを、神代下十七巻に第六十六段から百六十五段までを註してゐる。而してその考證に於ても語釋に於ても、宣長の「古事記傳」に負ふ所が甚だ多く、所々にその説を引用し、又往々補説もしくは改訂してゐる。なほ同時代の宣長門下の中では服部中庸の「三大考」及び伴信友の研究を引用した箇所が少くない。その他「西の極なる國々の學」、即ち西洋の天文学・物理学・哲學及びキリスト教に至るまで博搜し、地動説やギリシヤ古代の四元素説などにも觸れてゐるのは注目に價する。併しながら、所々に引用書名・著者名等が伏字又は缺字のまゝになつてゐる所

なく思ひ、隆信の女の才藻豊かなのを認め、安元年間、出家して釋阿と稱してからは、その孫を養女とした。文治三四年の交、「千載集」の編纂にあたり、その女の助力があつたと傳へられてゐる。その後、東宮大夫であつた俊成の推挙を以て、璋子内親王(鳥羽上皇の第三女、八條院と稱す)に仕へて、八條院三條と號した。その間、縁あつて源通親の子、歌人通具に嫁し、具定を生んだ。彼女の歌才が殊のほか發揚されたのは、その後からであつたらしい。建仁元年の「千五百番歌合」に加へ

ふ名は、その由緒によつてゐるものである。貞永年中、かの定家の撰した新勅撰集には、侍從具定母と云ふ名でその詠草が採られてゐる。寶治時代は、吉野にも隱栖してゐたらしい。建長三年藤原爲家の撰によつて、「續後撰集」が編された際に書かれた「越部禪尼消息」は、彼女の晩年を知るべき唯一の文獻である(東野州聞書・井蛙抄等)。

【作品】その詠歌の勅撰集に出づるもの、新勅撰集に侍從具定母として出づる外は、すべて皇太后宮大夫俊成女の名目になつてゐる。

を見ると、彼自身の撰述になつた部分と雖も、未だ彼の著として完成されたものではなかつたらしい。その刊行が彼の生前に企てられなかつた主なる理由は、寧ろこゝに存したのではなからうかと思はれる。【批評】篤胤の古道學は本書にその基礎を置くものである。本書は宣長の「古事記傳」に做つた著であるが、しかしその成績は宣長に於ける「古事記傳」の如くではなかつた。即ち「古事記傳」にあつては、國家的精神及び國民文化原理の自覺を根本要請として把持しつゝも、古典古語の理解

交の噂が立つたので、遂に伊勢に行く事もとり止めとなり、それより公役も廢止になつたといふ話が「十訓抄」に載つてゐる。「小柴垣草紙」は、この話を土臺として、秋夜小柴垣のほとりの祕戲の圖を畫いたもので、また灌頂巻とも呼ばれてゐる。住吉慶恩筆と傳へられてゐるが、その據るところを知らない。この一卷はもと古筆了伴所持であつたが、徳川幕府に獻じ、後、安政の火災で燒失したといふ。いま博物館所藏の摸本によつて推察すれば、その製作年代は、南北朝より上りがたいもの

第一輯は二十六冊圖四帖で、裝束集・輿車圖考・

する事實談の如く作者は取扱つてゐるが、い
くらか根據のある事で、おらが姉妹の話の如
き、作者は七昔以前の事と言つてゐる。その
時より七十年を溯れば、元祿五六年に當り、
その頃既に、本町二丁目糸屋の娘の巷談が行
はれ、これを扱つたものに立羽不角の「好色

故實叢書 今泉定介 三輯百六十八冊十二
帖【編者】今泉定介【刊行】明治三十二年
から同三十九年まで【解説】有職故實の研究
に重要な資料を蒐輯したもので、項目を舉
ぐれば次の如くである。
第一編は二十六冊四帖で、裝束集、輿車圖考、

月、「古史成文」(別項)及び「古史徵」(別項)を草
した際に得た腹稿を、翌九年起稿、同十一・十
二・十四年及び文政元年に、順次、第二・三・四
五帙の稿成り、文政八年に神代傳を完結した。
第七帙二十八巻までは篤胤撰、鐵胤(男)延胤
(孫)續胤として安政から元治にかけて上木せ

た個所が少くない。その他「西の極なる國々
の學」、即ち西洋の天文学・物理学・哲學及びキ
リスト教に至るまで博搜し、地動説やギリシ
ヤ古代の四元素説などにも觸れてゐるのは注
目に價する。併しなから、所々に引用書名・著
者名等が伏字又は缺字のまゝになつてゐる所

を見ると、彼自身の撰述になつた部分と雖も、
未だ彼の著として完成されたものではなかつ
たらしい。その刊行が彼の生前に企てられな
かつた主なる理由は、寧ろこゝに存したので
はなからうかと思はれる。【批評】篤胤の古
道學は本書にその基礎を置くものである。本
書は宣長の「古事記傳」に做つた著であるが、
しかしその成績は宣長に於ける「古事記傳」の
如くではなかつた。即ち「古事記傳」にあつて
は、國家的精神及び國民文化原理の自覺を根
本要請として把持しつゝも、古典古語の理解
に於ては、飽くまで客觀的に、古意そのものを
認識しようとする方法的省察が一貫の基礎を
なしてゐたのに、「古史傳」にあつては、「古傳
のまゝに」を掲げつゝも、それはただ佛儒的
解釋排斥のためであつて、自己の立場的方法
的基礎ではあり得なかつた。かくて當時新渡
の思想・學術に觸れて、わが古傳との調和を圖
り、又は産靈二神を天地に先立つ存在として、
創造神の性質を一層徹底して説くなど、大に
包容的組織の性質を加へ、一見著しく宣長學
の發展を期したかの觀があるが、實績に於て
は、國學としては方法的基礎に嚴密さを缺き、
又歴史的乃至哲學的考察としては態度の確立
がないために、部分的には創見がないではな
いが、全體としては、彼が所期した如き宣長
學の繼承發展であり得なかつたのみならず、
何れの意味に於ても、學的業績としては不十
分たるを免れ得なかつた。蓋し現實的社會的
方面に關心の深かつた著者にとつて、本書の
如き註釋的研究は、その本領でなかつたので
あらう。〔西尾〕

交の噂が立つたので、遂に伊勢に行く事と
り止めとなり、それより公役も廢止になつた
といふ話が「干訓抄」に載つてゐる。「小柴垣草
紙」は、この話を土臺として、秋夜小柴垣のほ
とりの祕戲の圖を畫いたもので、また灌頂卷
とも呼ばれてゐる。住吉慶恩筆と傳へられて
ゐるが、その據るところを知らない。この一
卷はもと古筆了伴所持であつたが、徳川幕府
に獻じ、後、安政の火災で燒失したといふ。
いま博物館所藏の摸本によつて推察すれば、
その製作年代は、南北朝より上りがたいもの
と思はれる。なほこの種の類本別本は、舊大
名の家などに往々遺存してゐるが、蓋し祕戲
圖たる性質上、或は謂はゆる嫁入り道具とし
ても、近世に至るまで作られてゐたものかも
知れない。〔田中(二)〕

なく思ひ、隆信の女の才藻豊かなのを認め、
安元年間、出家して釋阿と稱してからは、そ
の孫を養女とした。文治三四年の交、「千載
集」の編纂にあたり、その女の助力があつた
と傳へられてゐる。その後、東宮大夫であつ
た俊成の推擧を以て、璋子内親王(鳥羽上皇の
第三女、八條院と稱す)に仕へて、八條院三條と
號した。その間、縁あつて源通親の子、歌人
通具に嫁し、具定を生んだ。彼女の歌才が殊
のほか發揚されたのは、その前後からであつ
たらしい。建仁元年の「千五百番歌合」に加
へられ、禁裏の御歌會にも召されること屢々で
あつたらしい(新後撰集の詞書。建仁二年の十
首歌合(後拾遺集の詞書。建仁三年歌合(玉葉集
の詞書など、何れにもその名は作者の一人と
して洩れてゐない。建仁三年俊成九十賀に於
て、屏風歌に「秋をへてやどりし水のこほれる
を光にみかく冬の夜の月」(新千載集多部の秀
逸を遺し得た時、彼女の得意は想ふべきであ
る。その翌年、俊成の歿後、彼女の運命は寧
ろ漸次不遇に際會した。「新古今集」の編纂に
より、その歌人的地位は確立されたが、實父
隆信、恩主八條院等相ついで世を去り、建保
三年五首歌合の中にある「行路秋」と題された
「蟲の音もわが身ひとつの秋風につゆわけわ
ぶるをのの篠原」と云ふ詠は、當時彼女の薄
命を表象したもの如く感ぜられる。安貞元
年には夫通具に死別した。承久の亂により、
知遇を辱うした上皇方の哀れな御宿命を痛む
心に加へて、愈々彼女は哀切な人生の相に面
接せしめられた。かくて寛喜年間、斷然出離
の志を遂げ、禪尼として都を後にした。暫く
母の墓所である嵯峨の中野附近に世を隠れて
ゐたものらしい。嵯峨禪尼とか中野禪尼と云

ふ名は、その由緒によつてゐるものである。
貞永年中、かの定家の撰した新勅撰集には、
侍從具定母と云ふ名でその詠草が採られてゐ
る。寶治時代は、吉野にも隱栖してゐたらし
い。建長三年藤原爲家の撰によつて、「續後撰
集」が編された際に書かれた「越部禪尼消息」
は、彼女の晩年を知るべき唯一の文獻である
(東野州圖書、井蛙抄等)。
【作品】その詠歌の勅撰集に出づるもの、新勅
撰集に侍從具定母として出づる外は、すべ
て皇太后宮大夫俊成女の名目になつてゐる。
新古今集二十九首、新勅撰集八首、續後撰集
十首、續古今集七首、續拾遺集九首、新後撰
集七首、玉葉集七首、續千載集六首、續後拾遺
集五首、風雅集五首、新千載集五首、新拾遺
集二首、新後拾遺集五首、新續古今集四首。
禪尼の家集と云ふべきもの群書類從卷二七一
に「俊成卿女集」(別項)がある。歌數二百數十
首にすぎない。その他、建仁元年の「仙洞五
十首」(類從本)、寶治二年の「寶治百首」等、何れ
も禪尼の作を知るべき參考資料である。「越
部禪尼消息」(類從本一四三)は、頼阿の「此文者、
續後撰之時、越部禪尼卿女消息云々」の奥書あ
る如く、禪尼がその生涯三度の勅撰選入の最
後、この續後撰集の成立を見、後拾遺集以後
の短評をかねて歌道に對する感想の一端を洩
らしたものである。名所百首を召された順徳
院に對する思慕の情その他より、武家方なる
定家の撰した新勅撰集を卑下する心理はいか
にも推察するに餘りがある。【歌風】東常縁
は、その開書に、禪尼が俊成の養女になつた
次第を叙して、「歌の器用たるによりて、女と
契約有也。彼道のたれん事外なる人也。只
女鏡の人にて有難」とまで、辭を極めて賞揚

こしばが こしばの

小柴垣草紙 繪卷 【解説】寛
和齋宮が野々宮に於て、公役瀧口平致光と醜

してゐる。彼女は決して謂はゆる新古今調的
幽玄本位の作歌者でもなければ、叙景本位の
歌人でもなかつた。

うらがれて下葉色づくあき萩の露ちる風に舞なく
なり(續古今集)
すまの浦や天とぶ雲の跡晴れて波より出づる秋の
月かけ(玉葉集)

かく新古今調的技巧の跡、鮮かなものも無い
ではないが、それは極めて稀である。即ちそ
の女性的の情熱を、自由に複雑に、しかも典
麗を保持し得て表はし盡したところ、小町な
どに比し、別天地を開拓したものと云ふこと
が出来る。

古史本辭經

【著者】平田篤胤(じしほん) 語學書 四卷四
冊【成立・刊行】天保十年稿成り、嘉永三年十一
月刊行。新田目道茂の序及び田中定秋の序が
ある。【諸本】平田篤胤全集卷十二所収。

【内容】五十音に依つて、國語の起原を述べた
もので、初に「古史本辭經」と題する所以を述
べてゐる。本文は十項に分れ、即ち(一)發題
序言には、我が古代の言語は萬國に優つて純
正である。その純正な言葉の姿を世に表はし
たのは契沖であり、春滿に次いで眞淵に至つ
て、活用を初・體・用・令・助と分つた。こゝに
始めて、國語の眞の姿が明かになつたのであ
る。而して五十音圖は應神天皇の御代に出来
たものである。——これは荷田家に傳はる古
説である。——近世まで阿行のオと和行のヲ
とが所屬を誤つてゐたが、これは後世に誤つ
たものであると云ひ、(二)五十音古圖には、
我が國には神字が五十音あつて、それを圖に
したものが五十音圖であつて、五十音圖が悉
曇の影響で出来たと云ふのは、外國崇拜の

考から出た事で誤である。五十音は天地自然
の正音である。而して外國の音は卑しいもの
であるから、外國から五十音が生れ出る筈は
ない。「和名抄」の巻頭の五十音圖は悉曇や韻
鏡とは組織が違ふと云ひ、(三)五十音圖訂正
には、羅行を最後の行に置くことにした。そ
れは羅行の音は聲音中最も卑しく、ためにこ
の行の音は言葉の初にあることがない。故に
最後の行に置くこと云つてゐる。(四)五十音活
用には「語意考」の説に従つて初・體・用・令・助
と活用する事を述べ、これは荷田家に傳はる
古説であると云つてゐる。(五)喉音三行辨は
「字音假字用格(別項)の喉音三行の説を訂正
してゐる。(六)及び(七)五十音義解は本書中
最も主要な部分で、先づ我が國では古惠と云
ふのに音と聲の二字を通用し、古登又は古登
婆と云ふのに、言・語・詞・辭等の字を通用して
ゐるが、これ等の文字は支那の方では明かに
區別のある事である。而して又言語の發生か
ら見ても、先づ物には象がある。象があれば
目に映る。目に映れば情に思ふ。情に思へば
聲に成つて表はれる。これを音象と云ふ。總
て言があつて後に語があり、語があつて後に
詞があり辭がある。即ち聲音・言・語・詞・辭と
云ふ順序で、それ等は同一ではないと云ひ、
次に五十音の各行に互つて一字づつ音義を説
いてゐる。(八)古言清濁説及び(九)古言延約
通略等説は、「語意考」の説を訂正したもので
ある。(十)古言學由來には、國語學史の概要
を述べてゐる。【價值】篤胤は熱狂的な學者
であつて、その生涯の目的は、日本が萬國に
勝れてゐる所以を明かにする事にあつた。こ
れは一方から云へば尊ぶべき事であるが、餘
りに理想に急であつたために、學問を理想の

奴隷にしてゐる事が多い。換言すれば、皇國
の尊嚴を云ふために牽強附會の説を立てる事
が多い。本書に於ても、喉音三行辨論、古言
學由來の條等には見るべき説も存するが、多
くは理想の熱烈なために、その材料や、材料
の取扱方に於て、正鵠を失する場合が多く、
國語研究の書としては、多くの價値を見出す
ことは出来ないものである。

小島烏水

【著者】小島烏水(こじま) 隨筆紀行文家【本名】
久太【閱歴】明治八年十二月香川縣高松市に
生る。横濱商業學校卒業後、直に正金銀行に
勤務、傍ら雜誌「文庫」(別項)記者として評論。
紀行、隨筆の筆を執つたが、紀行文はその最も
長ずる所であつた。明治三十二年、「扇頭小
景」を出し、次いで「木蘭舟」を初め、山水・風
景・歴史を中心とする文集を公にして、紀行文
學の上に新生面を開いた。彼の文藝評論は、
觀察の奇警と批評の老成を以て推され、熱情
の漲つた抒情文には、完成した散文詩人とし
ての風韻を示して、當時の若い讀者から食り
讀まれた。大正四年横濱正金銀行ロスアンゼ
ルス出張所主任として渡米、八年桑港支店支
配人に轉任、昭和二年三月歸朝、東京支店勤
務となつたが、後退職した。【業績】彼は長
く浮世繪及び風景畫の研究に従事し、大正三
年に「浮世繪と風景畫」を著し、斯界の注目を
集めた。一方彼は青年時代から登山に興味を
有し、東京近縣の山岳、殊に日本アルプスを
委しく紹介した。而して彼はただ日本アル
プス紹介の先驅者としての感謝さるべきで
なく、その奔放流麗な手法による山岳文學は、
今日の登山趣味を鼓吹するに與つて力が大き
い。渡米後は餘暇を利用して、かの地の山嶽
溪谷を跋渉し、大正七年の近著「氷河と萬年

雪の山」によつて、地理學界の懸案たる氷河
説に、極めて有力な文献を加へ、山岳研究の
一權威と見られてゐる。前記の外に「不二山」
(明治三十八年五月刊)、「日本山水論」(同年六月
刊)、「山水無盡藏」(同三十九年六月刊)、「雲表」
(同四十年七月刊)、「富士山大觀」(同年八月刊)、「
日本アルプス」四卷(同四十一年九月)——大正四
年七月)、「江戸末期の浮世繪」(昭和六年刊)等
の著がある。

小島彦十郎

【幼名】小島妻之丞【生歿】未詳【閱歴】天
和二年顔見世番附や「男色大鑑」等によるに、
寛文・延寶の頃、若衆方として名を賣り、やが
て立役になつて彦十郎と改められたらしい。元祿
年間には、既に作者生活に轉じてゐたと思は
れる。

著作

【著作】好色傳受三番續(別項)(元祿六年京東靈
長太夫芝居興行。狂言本現存)○大雜書伊勢白粉
三番續(元祿九年九、京古今新左衛門座興行。狂言本
現存。一冊、京山本九兵衛版、元祿歌舞伎傳集下
卷所収)後者の筋は世話味の豊かなお家騒動
物である。伊勢の國主の妾腹に出来たお吉姫
(芳澤あやめ)は、伯父が御臺と共にお家横領を
計り、且つ執拗に付き纏ふので、逃れて水茶
屋の女となる中、魚屋傳三郎と言ひ交したが、
吳服屋庄五郎や浪人平次右衛門(竹島幸左衛門)
等の骨折で、無事に屋敷に戻り、お家も治ま
るに終る。

五尺手拭

【解説】元祿の初年、上方に起つたもの。歌詞
は寶永六年刊「増補繪入松の落葉」の古來中興
當流はやり歌の部に「五尺手拭」と題して、
本園子、五尺いよこの手拭、五尺手拭、お家のん、

おれにいよこのくりより、おれにくりより宿
に置け。

へ宿がいよこのよければ、宿がよければ名も立た
ぬ。

へ佐渡といよこの越後は、佐渡と越後は筋向ひ、
へ橋をいよこのかきよやれ、橋をかきよやれ舟橋
を。

橋のいよこの下には、橋の下には鵜の鳥が。
小鯛いよこのくはへて、小鯛くはへてぶりしやり
と。

が載せてある。これが本歌である。元祿三年
大傳馬町の某書肆より「五尺手拭」と題して蛙

かやうに心がみだれ候 地本より此身はあぜの小
川たななしぶねの二丁たちまつの山にあらねど
もまつを時雨にかゝる露をうたはせと存候。ワキ
ちつとひたりへ寄候べし。又さいぜんの詞の末に
もてなしにいたんだとは。れいの小箱をこひし
給ひての御事成べし。シテ仰のごとく色里島原京
六條のなほぶしにも野べにかわづの唱聲きけは有
し其夜がおもはるゝおぼて立名が立名の内かあは
で立こそ立名なれシテ、今の御詞の嬉しく候程に
御禮に狂ひ見せ申さんと、次第草の葉笠を引かづ

流行歌として各地に擴がつた五尺手拭の歌は
き／＼田川の波にくるはん……

【由來・内容】春泥舎召波の遺子維駒が、父の
十三回忌追善のために、几童(別項)の助けを
藉りて編纂したもので、蕪村の序によると、
召波(別項)が筆まめに書き集めて置いた贈答
の詩稿、知友との唱和などを整理し、これに
今の世の人の句も交えて二冊としたものだ
といふ。召波の四季の句を立句とした脇起の
歌仙四巻と、蕪村一派を中心とした古人今人
の四季發句とを収めてある。この書成つて後
其月を出でずして蕪村は歿したのであるが、
彼を中心とした最後の撰集だといふばかりで

なく、一巻の風調が凡てよく統一されて、整

二冊、享保二十年刊

【参考】綾錦菊岡沾涼(俳書大系・系譜通話集)○は
いかい袋 大伴大江丸(俳諧文庫・俳書大系)○俳
家奇人談 竹内玄々(俳諧文庫・俳諧叢書)○俳
人百家選 水谷綠亭(俳諧文庫通話全集)○俳林
小傳 中村光久○俳諧人物便覽 三浦若海(萩原)
後拾遺和歌集(わかしよ) 勅撰集 二十
卷一冊又は二冊【撰者】藤原通俊。但し序中
には「仰承はれる吾等」とあるが、複数の意でな
く謙稱であらう。「袋草紙」には隆源、禮源、
禮源と佐國とが補助したとある。【名義】「拾
遺和歌集」に次ぐの意【本名】後拾遺和歌抄。

説である。近世まで阿行のオと和行のヲとが所屬を誤つてゐたが、これは後世に誤つたものであると云ひ、(一)五十音古圖には、我が國には神字が五十音あつて、それを圖にしたものが五十音圖であつて、五十音圖が悉曇の影響で出来たと云ふのは、外國崇拜の

へおれにいよこのくりより、おれにくりより宿に置け。
へ宿がいよこのよければ、宿がよければ名も立たぬ。
へ佐渡といよこの越後は、佐渡と越後は筋向ひ、へ橋をいよこのかきよやれ、橋をかきよやれ舟橋を。
橋のいよこの下には、橋の下には鵜の鳥が。
小鵜いよこのくはへて、小鵜くはへてぶりしやりと。

が載せてある。これが本歌である。元祿三年大傳馬町の某書肆より「五尺手拭」と題して蛙をシテにし、鵜をワキにした滑稽謡曲を刊行した。當代の流行歌や淨瑠璃の世に迎へられた句を挿入して、甚だ目先の變つたものである。よつてその起首を少し掲げる。

ワキ次第五尺手拭な染めて、おれにくりやより宿にをけ、詞抑是は橋の下の鵜の鳥にて候。扱も此比なみに魚も餘多おどりは候程に。小鵜くわへてぶりしやりせはやと存候、進行見わたせは佐渡と越後は筋向ひ、橋をかけふもの舟橋を泊り、のつ木や。みはあななみと思へども宿がよければ名もたぬ、詞急候程に。千里のからも一羽におこつて、ひやう、たる野に着て候。是成田川につはさを休、くちほしをもうるをさはやと思ひ候。シテ小鵜をしや物みしやうあぜの、田の。あぜの田の、あぜの田のあぜのあぜのはたを廻るとて、をむのかわづがないたん、おもてなしにないたんだ。ワキ我をちこちの山を眺め、あぜのながれにた、すめは、きしにことなる藤山吹の。咲みたれたる面白さよ。水りく草木の花あいしつべし何人ぞ獨きくをあいすと心をのぶる折からに是成あぜの下草うごきつはなまじりの土筆押分出給ふは小霜とやらんを懸死せし。正しく小田のかわづ殿ごさめ九荒痛はしや候。シテうれしくも仰候うの鳥かな其小霜の君ゆへにこそ

ある。(十)古言學由來には、國語學史の概要を述べてゐる。「價值」篤胤は熱狂的な學者であつて、その生涯の目的は、日本が萬國に勝れてゐる所以を明かにする事にあつた。これは一方から云へば尊ぶべき事であるが、餘りに理想に急であつたために、學問を理想の

かやうに心がみだれ候、地本より此身はあぜの小川たななしおの二丁たまつちの山にあらねどもまつを時雨にかゝる露をうたはやと存候。ワキちつとひとりへ寄候べし。又さいぜんの詞の末にもてなしにないたんだとは。れいの小霜をこひし給ひての御事成べし、シテ仰のごとく色里島原京六條のなほふしにも野べにかわづの唱聲きけは有し其夜がおもはる、おほて立名が立名の内かあはで立こそ立名なれ、シテ今の御詞の嬉しく候程に御禮に狂ひ見せ申さんと、次第草の葉笠を引かづき、田川の波にくるはん……

流行歌として各地に擴がつた五尺手拭の歌は、勞作用の歌として保存せられた。長崎縣の西彼杵郡あたりではこれを石搗歌に用ひて、同じく五尺手拭と呼んで、五尺手拭中染めての歌も謠ふが、これに一層の潤色を施したのもとなつた。一例を示す。

佐渡とナア、ヨイ、越後は筋向へ。コレモナアサツサヨイ、エンヨツサノ、サツサヨイ、橋をかけましょ、船橋を。潮が横潮で橋やかからぬ。大綱衆千人、千人よせ給ふ。紫羅黒檀唐木寄せ、杉を千枚二千枚、釘を千片二千片、大工を千人、橋を架けませう板橋を。橋の長さが十四五間、横のはが二十五間、橋の下には鵜の鳥が、あいをくはへて羽づくり、橋下の上には竹植えて、元は尺八、中は笛、これはそもじの筆の軸。
邊陲には、なほ未だ別な歌も保存されてゐる。
五車反古(高野) 俳諧集 首尾二册 半紙本【編者】黒柳維駒【名義】立句とした召波の句「冬籠五車の反古のあるじ哉」に據つたのである。【刊行】天明三年十一月の跋がある。【諸本】蕪村曉臺全集(俳諧文庫)・中興俳諧名家集(俳書大系)・蕪村新十一部集(河東碧梧桐編)所収本がある。

委しく紹介した。而して彼はただに日本フルプス紹介の先驅者としてのみ感謝されるべきでなく、その奔放流麗な手法による山岳文學は、今日の登山趣味を鼓吹するに與つて力が大きい。渡米後は餘暇を利用して、かの地の山嶽溪谷を跋渉し、大正七年の近著「米河と萬年

【由來・内容】春泥合召波の遺子維駒が、父の十三回忌追善のために、凡重(別項)の助けを藉りて編纂したもので、蕪村の序によると、召波(別項)が筆まめに書き集めて置いた贈答の詩稿、知友との唱和などを整理し、これに今の世の人の句も交へて二册としたものだといふ。召波の四季の句を立句とした脇起の歌仙四巻と、蕪村一派を中心とした古人今人の四季發句とを収めてある。この書成つて後、某月を出でずして蕪村は歿したのであるが、彼を中心とした最後の撰集だといふばかりでなく、一卷の風調が凡てよく統一されて、鏗然たる金石の聲を聴く思ひがある。【原】湖十(別項) 俳人【姓】曾氏、後深川氏【別號】木者庵・老鼠・鼠肝・永機・謙堂・露入道等【生歿】延寶四年に生れ、元文三年(三三九八)七月二十七日歿す。享年六十三(墓所)今戸宗林寺【閱歴】江戸の人、俳諧を業とした。師匠の其角歿後、その點印を同門秋色から附與され

た。元文 頃浮 世といふ一風を唱へ、東都俳壇に流行した。門人多く、師風は彼の手によつて盛んになつたのである。長子深川氏、湖十二世を繼ぎ、以下三世・四世・五世・六世・七世を経て、今日にまで及んでゐる。【人物】容貌が異體で、落髮して髭の長さ尺餘、法衣を着、頭陀袋を掛け、常に途上を徘徊してゐた。冷酒を好み、天目に一漉を以て限度とし、醒めれば又飲むので、いつも醒めた時を見た事がなかつたといふ。【著作】このむれ(其角七回忌追善)(正徳三年刊)○大新山家一册(享保十八年刊)○續花摘

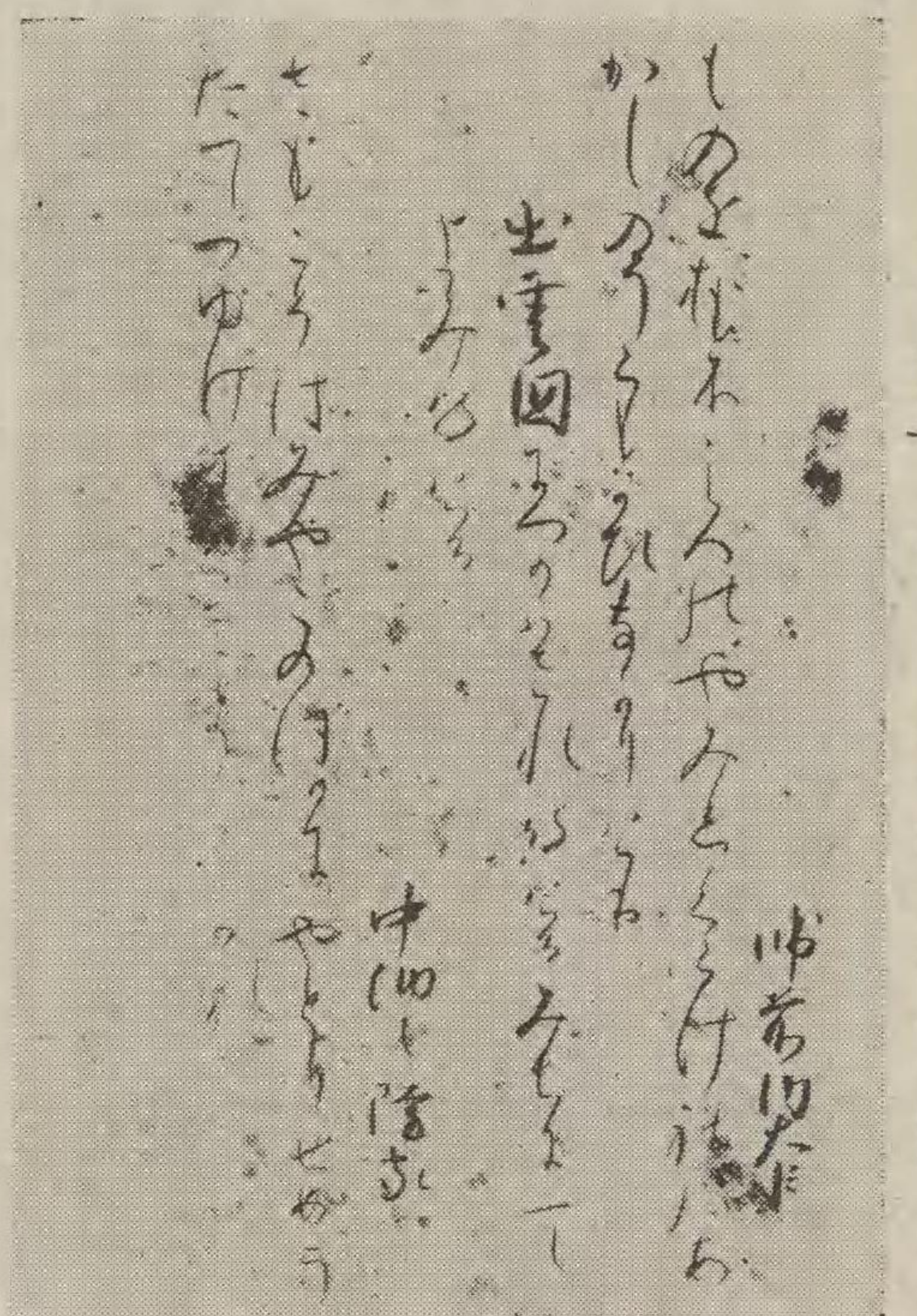
二册(享保二十年刊) 【參考】綾錦菊岡沾涼(俳書大系・系譜通話集)○はいかい袋(大伴大江丸)(俳諧文庫・俳書大系)○俳家奇人談(竹内玄々)(俳諧文庫・俳諧叢書)○俳人百家選(水谷綠亭)(俳諧文庫通話全集)○俳林小傳(中村光久)○俳諧人物便覽(三浦若海)(萩原)後拾遺和歌集(おかしふ) 勅撰集 二十卷一册又は二册【撰者】藤原通俊。但し序中には「仰承はれる吾等」とあるが複数の意でなく謙稱であらう。「袋草紙」には隆源イ禮源、禮源と佐國とが補助したとある。【名義】「拾遺和歌集」に次ぐの意【本名】後拾遺和歌抄。拾遺抄十卷に做つて二十卷ではあるが抄といふ(三代集之間事)。但し二十卷の拾遺集も抄といはれたから、必ずしも拾遺抄に做つたわけではあるまい。現存の寫本は卷ごとの内題も序中に見えるものも抄とある。【成立】通俊、白河天皇の承暦二年詔を奉じたが、公務多端であつたので九年の後、應徳三年九月十六日

(一説十月中旬、奏覽した。同年十一月二十九日天皇御讓位になつたので直ちに披露もなく、翌寛治元年二月始めて上皇が御覽になり、同八月目錄と序を奏した。同九月十五日世間に披露するために奏覽本を下し賜はつた。當時有經・經信・匡房など人材が多かつたのに詔が下らなかつたのは、或は通俊が私撰を奏上して御思召を得たのであらうとされてゐる。一説には奉詔を承保二年として、通俊が參議に任じた應徳元年から九年前に溯つてゐる(以上本集の序・袋草紙・八雲御抄・拾芥抄・本集一本の奥



書等による。【諸本】(一)通俊自筆本の系統。寛治元年世間に流布するために、重ねて御本を申し下して校合した云々といふ通俊の奥書と、長承三年その通俊自筆本を以て書寫した旨を記した從五位下藤某の奥書とがある。圖書寮藏本(一冊、寫)北村季吟が校合に用ひた本はこれに屬し、前者は爲家が爲相に相傳する旨を記し、後者は寛元四年・文應二年・寛正二年のそれぞれに、校合又は書寫した旨の奥書がつけ加へられてゐる。(二)伊房自筆本の系統。京都帝國大學藏本(一冊、寫、零本は、建長二年書寫の奥書があつて、伊房自筆本に依つて書寫したこの本は、伊房が勝手に自歌二首を加へたが、通俊が比較のときに鈎を懸けた勅物は、清輔が注付したものである等の意味を記してゐる。

(三)刊本には、八代集本(小二冊・同(大二冊)の外、阿佛尼眞蹟本に依つたといふ安政五年版(小二冊)がある。國歌大觀・國歌大系第三卷所收。【内容】天曆十年から當時に至る凡そ百三十一一年間の歌で、「拾遺集」に洩れたのを集めようとしたもの、「古今」後撰兩集の作者を除き、裂壺の五人を始め、公任撰する「三十六人撰」「十五番歌合」「和漢朗詠集」「九品和歌」「深窓秘抄」「金玉集」や能因の「玄々集」の歌は省き、「麗花集」「山伏集」「樹下集」等の歌は加へ、世人が耳に聞く古い歌を尊び、目に見る新しい歌を卑しむのを遺憾とし、當時の歌壇を後世に知らせるために新しい歌を入れ、勅命



(筆朝實傳)集歌和遺拾後

によつて自らの歌も加へたのである。部類を春(上)、夏(上)、冬・賀・別・驛旅・哀傷・戀(一四・雜(一六)に分つてゐる。歌の数は序に千二百十八首とあるが、流布本は二首多い。作者は和泉式部(七一首・相模(四〇首)・赤染衛門(三三首)・伊勢大輔(二七首)などの歌が多くて女流歌人集の觀がある。男性では能因(三三首)が多い。「後撰」「拾遺」の作者は二百人内外であるが、本集は三百人を越え、讀人不知の歌が減少してゐる。序は歴代勅撰の次第と、本集撰修の顛末とを記してゐる。

【批評】撰修方針にも部類方法にも現實的的、採録された歌にも、實際生活を詠んだものが多く、表現には多少散文的の傾向がある。「八雲御抄」に、「後拾遺金葉集の頃より後さまの歌多く平懷なる體なれど抜きてよき歌は又多し」とある。本集は古來種々非難を受けたが、今その例を擧ぐれば、(一)頼綱はさほどの歌人でもないのに多くの歌がとられてゐる。但し清輔はこの難を不當として、頼綱の歌は僅かに四首にて、而も傑作であるとしてゐる(發草紙)。(二)兼方は自信のある歌「去年見しに

色も變らず咲にけり花こそものは思はざりけり(金葉集)がとられないのに、津守國基の歌が多數採られてゐるので「小饒集」と異名して罵倒し、「井蛙抄」には國基が小饒を禮物として撰者の意を迎へたとしてゐる。(三)經信も不平で、「難後拾遺(別項)を書き、直接通俊と論争もし、通俊は後拾遺問答を書いてそれに抗辯したらしい。(四)伊房は清書を拒んだ。(五)序も非難された。【註釋書】奥義抄○和歌色葉集○八代集抄。【參考】袋草紙 藤原清輔 (西下) 五十音義訣(こしゅう)「古史本辭經」を見よ。五十音小説(こしゅう)「語學書」一卷 三年二月の跋がある。その頃の刊行であらう。

【著者】橋守部 刊行 著者の女濱の天保十三年二月の跋がある。その頃の刊行であらう。【諸本】橋守部全集卷十二所收。【内容】五十音圖を基として國語の組織を説いたもので、先づ五十音圖は誰の作などと云ふべきものでない。天地自然の音は皆五十音の中に含まれてゐて、その排列、即ち音圖は自然に出來たものである。五十音圖は語の延約、活用等の基本になるものであるから、歌學に志す者はこの圖を心得ねばならぬ。次に「いろは」は弘法大師の眞筆から考へると、字は漢字から出たものではあるが、その形は漢字とは異つて聲音と附合してゐる。即ち「ア」の如く圓體の音は、「あ・わ」と圓く書き、「シ」の如く細長き音は「し」と細長く書く。かく聲音の體を文字で現はしてゐるのは、世人は氣がつかぬが、頗る微妙なことである。次に五十音の縦横の行は、凡て圓く連つてゐる。あとおと對し、いとえと相對してゐる。あ行はわ行と相隣り、か行はあ行を助け、ら行はや行を助け、や行はわ行を助け、さたな

は、まも亦各々助けてゐる。次に反切の事、延言の事を記し、次に五十音圖の十行の大意及び通音について記し、十行を概括して、物にとへて言はば、あ行は君王也。か行以下は侍臣也。やわの二行は棟梁の輔佐也。かくて其わ行は君の前驅して先に進み、其や行は後殿して蹤を押へ、ら行は徒隸の如くにして最後に從へる也。次に活用について、かきたなはまらの七行について、行ごとに活用の段を五に分けて、「起・未定・既定・命令・休」とし、各段について説明してゐる。次に體用について記し、次に「詞活用格附助辭」の圖を記してゐる。圖は活用の段を五に分ち、未然詞・續詞・絶詞・續詞・已然詞とし、各段から受けるてにをはを圖示してゐる。【價值】本書の説くところ、五十音圖の成立、組織、伊呂波の字體等についての説は殆ど取るに足らぬものである。又活用に就いての説は、本書より三十餘年前に出た「詞八體(別項)等」に比して甚しく劣るものである。従つて本書は語學書として、本質的價値に於ては、殆ど見るに足るものが無い。ただ當時盛んであつた音義派の説を知るためには、少からず參考になるものである。【圖田】

五十音圖(こしゅう) 國語學「名稱」古くは五十音圖といつた。反音圖・假名反の圖(對馬以呂波・五十文字文・「いつらのこゑ」ともいふ。【解説】假名を左の如く五字づつ十行に列ねた圖をいふ。

Table with 10 rows and 10 columns of Japanese characters representing the 50 sounds of the Japanese language.

ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ
サ	シ	ス	セ	ソ	タ	チ	ツ	テ	ト
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ					

ハ ヒ フ ヘ ホ
マ ミ ム メ モ
ヤ イ ユ エ ヨ
ラ リ ル レ ロ
ワ キ ウ エ ヲ

縦の各行を「行」と云ひ、その最初の假名によつてそれら「ア行・カ行・サ行」などいふ。横の各列を「段」又は「列」と云ひ、その最初の「ア」の假名によつて、それら「ア段・イ段・ウ段」など又は「ア列・イ列・ウ列」などいふ。一々の假名は必ず一定の行の一定の段に位する。行及び

は、これ等を區別したものがあつた。この中、ア行の「エ」と「ヤ」の「エ」は、古く發音にも假名にも區別があつたが、後に同音となり假名も一つになつたのである。又、ワ行の「キ・エ・ヲ」は、今はア行の「イ・エ・オ」と同音であるが、これも古代には發音上區別があり、同音になつた後、假名としては、別々のものと考へられてゐる。又、サ行の「シ・タ」の「ツ」は、理論から云へば、si・ti・tu であるべきであるが、今は shi(ji)・chi(chi)・tsu となつて、例に合はな

十音圖に普通であるアカサタナハマヤラワの順序と多少の差があるものが非常に多く、今の順序のままのものは平安朝にはなく、鎌倉時代にもあまり多くない。しかし吉野時代頃からは次第に多くなり、室町時代に於ては大概これに一定したやうである。現存最古の五十音圖に屬する明覺の「反音作法」及び「梵字形音義」に見えるものは、萬葉假名を用ひ、ア行は阿伊烏衣於、ヤ行は夜以由江與、ワ行は和爲于惠遠とあつて、片假名で區別なき音まで區別してゐる。又、明覺の書にある片假名

は、まも亦各々助けてゐる。次に反切の事、延言の事を記し、次に五十音圖の十行の大意及び通音について記し、十行を概括して、物にとへて言はば、あ行は君王也。か行以下は侍臣也。やわの二行は棟梁の輔佐也。かくて其わ行は君の前驅して先に進み、其や行は後殿して蹤を押へ、ら行は徒隸の如くにして最後に從へる也。次に活用について、かきたなはまらの七行について、行ごとに活用の段を五に分けて、「起・未定・既定・命令・休」とし、各段について説明してゐる。次に體用について記し、次に「詞活用格附助辭」の圖を記してゐる。圖は活用の段を五に分ち、未然詞・續詞・絶詞・續詞・已然詞とし、各段から受けるてにをはを圖示してゐる。【價值】本書の説くところ、五十音圖の成立、組織、伊呂波の字體等についての説は殆ど取るに足らぬものである。又活用に就いての説は、本書より三十餘年前に出た「詞八體(別項)等」に比して甚しく劣るものである。従つて本書は語學書として、本質的價値に於ては、殆ど見るに足るものが無い。ただ當時盛んであつた音義派の説を知るためには、少からず參考になるものである。【圖田】

から道命に傳へたと稱する「五韻次第」の中にもあるが、この書は早くも平安朝の終り、多分は鎌倉時代のもと思はれる。【五十音圖成立の由來】五十音圖は國語の音聲表のやうに見えるけれども、元來國語のために作られたものでなく、外國語學、殊に漢字音の反切(別項)のために作られたものらしく思はれる。國語には區別なく、漢字音(及び梵語梵字)では區別があるア行の「イ」と「ヤ」の「イ」のウと「ワ」のウを區別したのも、漢字の音を反切で示した「孔雀經音義」の末尾に

は、まも亦各々助けてゐる。次に反切の事、延言の事を記し、次に五十音圖の十行の大意及び通音について記し、十行を概括して、物にとへて言はば、あ行は君王也。か行以下は侍臣也。やわの二行は棟梁の輔佐也。かくて其わ行は君の前驅して先に進み、其や行は後殿して蹤を押へ、ら行は徒隸の如くにして最後に從へる也。次に活用について、かきたなはまらの七行について、行ごとに活用の段を五に分けて、「起・未定・既定・命令・休」とし、各段について説明してゐる。次に體用について記し、次に「詞活用格附助辭」の圖を記してゐる。圖は活用の段を五に分ち、未然詞・續詞・絶詞・續詞・已然詞とし、各段から受けるてにをはを圖示してゐる。【價值】本書の説くところ、五十音圖の成立、組織、伊呂波の字體等についての説は殆ど取るに足らぬものである。又活用に就いての説は、本書より三十餘年前に出た「詞八體(別項)等」に比して甚しく劣るものである。従つて本書は語學書として、本質的價値に於ては、殆ど見るに足るものが無い。ただ當時盛んであつた音義派の説を知るためには、少からず參考になるものである。【圖田】

は、まも亦各々助けてゐる。次に反切の事、延言の事を記し、次に五十音圖の十行の大意及び通音について記し、十行を概括して、物にとへて言はば、あ行は君王也。か行以下は侍臣也。やわの二行は棟梁の輔佐也。かくて其わ行は君の前驅して先に進み、其や行は後殿して蹤を押へ、ら行は徒隸の如くにして最後に從へる也。次に活用について、かきたなはまらの七行について、行ごとに活用の段を五に分けて、「起・未定・既定・命令・休」とし、各段について説明してゐる。次に體用について記し、次に「詞活用格附助辭」の圖を記してゐる。圖は活用の段を五に分ち、未然詞・續詞・絶詞・續詞・已然詞とし、各段から受けるてにをはを圖示してゐる。【價值】本書の説くところ、五十音圖の成立、組織、伊呂波の字體等についての説は殆ど取るに足らぬものである。又活用に就いての説は、本書より三十餘年前に出た「詞八體(別項)等」に比して甚しく劣るものである。従つて本書は語學書として、本質的價値に於ては、殆ど見るに足るものが無い。ただ當時盛んであつた音義派の説を知るためには、少からず參考になるものである。【圖田】

人撰「十五番歌合」「和漢朗詠集」「九品和歌」
「深窓秘抄」「金玉集」や能因の「玄々集」の歌は
省き、「麗花集」「山伏集」「樹下集」等の歌は加
へ、世人が耳に聞く古い歌を尊び、目に見る新
しい歌を卑しむのを遺憾とし、當時の歌壇を
後世に知らせるために新しい歌を入れ、勅命

し」とある。本集は古來種々非難を受けたが、
今その例を擧ぐれば、(一)頼綱はさほどの歌
人でもないのに多くの歌がとられてゐる。但
し清輔はこの難を不當として、頼綱の歌は僅
かに四首にて、而も傑作であるとしてゐる(發
草紙)。(二)兼方は自信のある歌「去年見しに

かく聲音の體を文字で現はしてゐるのは世
人は氣がつかぬが、頗る微妙なことである。
次に五十音の縦横の行は、凡て圓く連つてゐ
る。あとおと對し、いとえと相對してゐる。
あ行はわ行と相隣り、か行はあ行を助け、ら
行はや行を助け、や行はわ行を助け、さ行は

た圖をいふ。
アイウエオ
カキクケコ
サシスセソ
タチツテト
ナニヌネノ

ハヒフヘホ
マミムメモ
ヤイユエヨ
ワリルレロ
ワキウエヲ

縦の各行を「行」と云ひ、その最初の假名によつてそれ／＼ア行・カ行・サ行などいふ。横の各列を「段」又は「列」と云ひ、その最初のア行の假名によつて、それ／＼ア段・イ段・ウ段など又はア列・イ列・ウ列などいふ。一々の假名は必ず一定の行の一定の段に位する。行及び段は一行又は一段づつ連ねて呼ぶのが常である。五十音圖は、古くは萬葉假名で書いたものもあるが、早くから片假名で書いたものがあり、後にはそれが例となつた。それ故、片假名と五十音圖とを混同する事もあつた(片假名参照)。しかし近來は平假名で書く事も多くなつた。又五十音圖には、あらゆる發音を異にする假名が含まれ、それが一定の順序に排列せられてゐるために、假名で書いた語を排列する時には五十音の順による事が多い。【五十音と假名の發音】五十音圖は、原則として、一々の假名の示す音節を二つに分解して、初めの子音の部分の同じものを同行に、終りの母音の部分の同じものを同段に置いたものである。それ故、五十の音は、悉く互に違つた音であるべきであるのに、ア行のイとヤ行のイ、ア行のエとヤ行のエ、ア行のウとワ行のウは全く同じ假名であつて、假名としては發音上區別がない。それ故、一方に別の字を置いて(例へばヤ行のイに「レ」を、ア行のエに「ン」又はヤ行のエに「イ」を、ワ行のウに「子」を置いて)音の相違を明かにしようとしたものもある(古く萬葉假名で書いた五十音圖に

は、これ等を區別したものがあつた)。この中、ア行のエとヤ行のエとは、古く發音にも假名にも區別があつたが、後に同音となり假名も一つになつたのである。又、ワ行のキ・エ・ヲは、今はア行のイ・エ・オと同音であるが、これも古代には發音上區別があり、同音になつた後も、假名としては、別々のものと考へられてゐる。又、サ行のシ、タ行のチ・ツは、理論から云へば、si・ti・tu であるべきであるが、今は shi(ji), chi(chi), tsu となつて、例に合はないが、古くはチ・ツは ti tu と發音した(シ)の古音は、si か shi かまだ明かでない)。かやうに古代の假名の發音によれば、五十音圖は、大抵規則正しいものとなり、當時の國語の音をその異同によつて組織的に排列した音聲表と見られるが、なほヤ行のイ、ワ行のウの如き、古代國語に無かつた音を加へてゐる。さうして後世、國語の音聲變化に伴ふ假名の發音の變化と共に、五十音圖は音聲表としては正しくない部分が生じたが(タ行が ta chi su te to となり、ワ行が wa i ue o となつたなど)、それにも拘はらず、國語の音相通又は音轉換等を示す圖としては、そのまゝ用ひる事が出来る。(例へば、「こゑ」——「こわい」に於ける「え」と「わ」の轉換は、「ゑ」の發音が we から e に變化した後も、やはりワ行のエ段とア段との轉換である)。

【五十音圖の異同】古代からの文獻に五十音圖の全部又は一部が見えてゐるものを集めて見ると、その行及び段の順序に異同あるものが少くない。段の順序に於ては今の五十音圖の如くアイウエオの順序であるものの外に、古くイオアエウ、アエオウイ又はアウイオエと次第するものがあり、行の順序は、今の五

十音圖に普通であるアカサタナハマヤラワの順序と多少の差あるものが非常に多く、今の順序のまゝのものは平安朝にはなく、鎌倉時代にもあまり多くない。しかし吉野時代頃からは次第に多くなり、室町時代に於ては大概これに一定したやうである。現存最古の五十音圖に屬する明覺の「反音作法」及び「梵字形音義」に見えるものは、萬葉假名を用ひ、ア行は阿伊烏衣於、ヤ行は夜以由江與、ワ行は和瓦于惠遠とあつて、片假名で區別なき音まで區別してゐる。又、明覺の書にある片假名の五十音圖でも、當時同音になつてゐたとおもはるゝイ・エ・オとキ・エ・ヲとの位置も正しくなつてゐる。然るに平安朝終りから鎌倉時代に入つては、ア行のオとワ行のヲとの位置を誤つて、ヲをア行にオをワ行に置いたもの、又はア行、ワ行共にヲとしたものが出来、それが次第に普通となり、更に、エとエ、イとキの屬する行を誤るものさへも出た。然るに江戸時代に入つて、契沖の擧げた五十音圖は、ア行のオとワ行のヲとの位置が入れかはり、その他は正しくなつてゐるが、本居宣長にいたつて、その誤を訂して、古代のまゝの正しい圖が行はれるに至つた。

【五十音圖に關する最古の文獻】現存最古の五十音圖として年代の明かなものは、悉曇學者僧明覺の著なる寛治七年の「反音作法」、承徳二年の「梵字形音義」及び康和三年以後の作なる「悉曇要訣」に見えるものである。なほ古いのは、大矢透氏が寛弘より萬壽年間迄のもので推定せられた醍醐三寶院所藏古寫本「孔雀經音義」の卷末に七行だけあるものと、承暦三年に出来た「金光明最勝王經音義」に濁音の行を擧げたものとがある。なほ天台座主良源

音を連呼して反切をなす事となつて、五十音圖の個々の行が出来、それが纏まつて五十音圖となつたのであらう。

【五十音圖と悉曇】同じ子音を有する音を連呼する事は、悉曇に於てあり、悉曇章の各行は皆同子音ではじまる音節である(悉曇參照)。その順序は a i u e ai o au am ah であつて、日本の假名に無いものを除けばアイウエオの順となる。又子音は悉曇字母に於けるものの中、日本語に無いものを除けば、カサタナハマヤラワの順序となる。これによれば、現今の五十音圖は悉曇に基づくものであることと疑ない。古代の五十音圖は、段の順序に於ては、明覺以後アイウエオの順のものも最も多く、悉曇の影響が明かであるが、しかし「孔雀經音義」の末尾や、教長の「古今集註」や、顯昭の「日本紀和歌註」、涼金の「管絃音義」の如き古い時代のものには、これとも違ひ、又相互にも同じくないものがある。これ等は、或は悉曇とは關係なく、漢學者、その他から出たものかも知れない。又行の順序は、悉曇に一致するものは、鎌倉時代以後のものであつて、それ以前には見えないやうである。これはその順序があまり大切でなかつたためでもあり、又學者が自分の考で、音の性質の類似したものを近くに置いたりしたためでもあるらしい。しかし、遂に今日の如き順序にきまらうになつたのは、悉曇の影響であることは疑ない。

【五十音圖の成立年代及び作者】現存文獻の示す所では、五十音圖は院政時代には既にあり、平安朝半頃にも多分あつたらうと考へられる。その作者については、藤原長親、藤原明親の「倭片假名反切義解」には、吉備真備を片

假名及び五十音圖の作者としてゐるが信じ難い。眞備は支那に留學して、當時の支那語に精通してゐたのであるから、漢字音のために作つたとすれば、五十音では、漢字音を寫すに不足であり、又國語のために作つたとしても、奈良朝に於ては、國語の音節の種類は少くも六十ほどあつて(別項「國語の虫、沿革」の條を見よ)、五十音ではやはり不足であるからである。又江戸時代の國學者には、既に神代からあつたと考へたものもあつたが(眞淵の「語意考」、篤胤の「古史本辭經」など)、これは一層成立し難い。大矢透氏は、萬葉假名で書いた最古の五十音圖及びその系統のものに於て、ア行のエとヤ行のエとを區別した事、及びこれに用ひた文字が、弘仁より天曆までの有様に一致し、且つその母音を寫した文字が「慈覺大師在唐記」中の悉曇字母の音註に類似した點がある事と、萬葉假名の五十音圖を有する「五韻次第」が良源の傳本といはれてゐる事からして、天台の慈覺大師圓仁の流派から出たものであることを主張された(音圖及手習詞歌考)。しかしながら、現存最古の五十音圖が、果して原始的の形を残してゐるものかどうかは疑問であり、假にさうであるとしても、これはア行、ヤ行、ワ行のあらゆる音をすべて區別してゐるのであるから、ア行のエとヤ行のエとの別ある事のみを標準として時代を論ずるのは、當を得たものとは思はれない。又大矢氏は、五十音圖が最初から悉曇と關係あるものとして説を立てたのであるが、その他の系統のものが無かつたとも断定出来ない(前出)。されば大矢氏の論は、まだ根據薄弱であると言はなければならぬ。今日の處では、五十音圖は平安朝の前半の中に出来たものの

やうであつて、悉曇學者即ち僧侶がこれと深い關係があつた事は否めないが、果してそれが最初の又唯一の作者であるかどうかは未だ決し難い。

【五十音圖と國語研究】五十音圖は主として反切のために作られたもののやうであつて、後までも反切に用ひられ、韻學に必要なものとせられたが、又國語の音聲表とも見られ、國語の音の性質を説明するに便宜であり、殊に假名のやうな、音節文字を用ひる國語に於て、音節中の單音の變化又は轉換を示すには必要であるところから、國語研究にも利用せられ、語源語源の説明からはじめて、假名遣にをば、活用の研究にいたるまで、間接直接に影響を與へたのであつて、國語研究には缺く事の出来ないものとして重んぜられた。(別項「國語學」中の「國語研究史」參照)

【參考】音圖及手習詞歌考大矢透○音圖及手習詞歌考佐藤謙實(國文論叢)○五十音圖に就いて金澤庄三郎(國語の研究)

【著者】春登【刊行】文政十二年。小山田與清の序。華月齋野洲良の跋がある。【内容】五十音圖を中心に、國語の音韻的方面を簡単に説いたもので、初めに五十音圖を掲げて大體の説明をし、次に五十音圖は悉曇を學んだ人の手に成つたものである事を記し、次に反切・延約・轉音・ムの音の事・手爾波の呼應を圖示してゐる。本書は初學者のために五十音圖の事、及び國語の音韻と五十音圖の關係を略説したもので、學説としては、さして注意する程のものでも無いが、著者は音韻文字に造詣の深い人で、その所説は、首肯すべきもの

ざられた。笠物狂が都一中の作曲で流行して後、正徳五年額見世江戸市村座で評判をあげ、これは淨瑠璃として現に傳はつてゐる。富士松薩摩の「卯花二世今賀籠」(延享四年春江戸市村座、玉齋齋會我三番目)は古く好評を得た。富本の「道行比翼の菊蝶」(天明元年四月江戸市村座)「劇場花代會我二番目」は、三日替りの大阪の部として上演された道行で、江戸歌舞伎では最も有名である。外に坪内逍遙の「お夏狂亂」(別項)がある。(三)小説も相當多いが、西澤一風の「亂經三本槍」(別項)、瀧澤馬琴の「常夏

が多い。

【五十三年の怪談】(獨道中五十三驛)を見よ。

【五十年忌歌念佛】(浄瑠璃)

【参考】世物語【作者】近松門左衛門【名稱】浄瑠璃と角書がある。本曲の興行は清十郎處刑からは五十年以上を経てゐるので、概算を以て五十年忌としたものか、或は先行作等にかゝる語を用ひた名題でもあつて、それを踏襲したのかも考へられる。歌念佛とは道行の條に出る清十郎の妹と嫁とがやつした姿であつて、年忌を申ふ義にもとれる。【興行】寶永六年正月二日初日、「今川制詞條目」の切として、竹本座上演【題材】姫路の旅籠屋但馬屋九左衛門の手代清十郎は、主家の娘お夏との密通が發覺し、連れ立つて駈落したが捕へられ、その上主家の紛失金の疑もかゝり終に處刑された。事實は本曲から逆算して萬治三年ともいはれるが、正しくは寛文二年と傳へる。巷説流行唄に喧傳されたが歌舞伎の脚本にも作られ、西鶴の浮世草子「好色五人女」にも綴られた。寶永二年十一月竹本座の浄瑠璃「お夏清十郎笠物狂」となつて興行されたといふ傳へもある。本曲は事實に基ついたとは思はれるが、これ等の作品の影響も尠くあるまい。【諸本】八行三十二丁本。近松世話浄瑠璃集(帝國文庫)。近松門左衛門全集第五。近松傑作全集第二。近松浄瑠璃集中(有朋堂文庫)。近松戲曲集中(國民文庫)。近松名作集上(名著全集)。近松全集第八卷等所收。

【梗概】(上卷)(渡船場)但馬屋の手代清十郎の父親、和泉國水間の百姓左治右衛門は、娘お後と嫁おさん連れ、清十郎を訪ねて姫路に下らうとする途中、こゝで計らふ清十郎

の傍觀者十郎に逢つた。勘十郎は祝言を控へた主家の娘お夏と清十郎との密通を告げ、清十郎の罪を覆ふには、この祝言に構ひがあるとして、道具を差押へる外あるまいと教へ、終にその文面に判を押させた。企みの係踏と氣付かぬ左治右衛門は、勘十郎を徳として一先づ郷里に戻る。道具屋に支拂ふ金は勘十郎の懐に入つた。「中巻」(但馬屋)お夏の祝言も近付いて今日は蚊帳の祝儀。主人九左衛門は祝言の道具が届かぬ所から、歸り着いた勘十郎を質さうと奥に連れ去る。その際にお夏は

され、これによつて、清十郎への同情ある解釋が齎されたことと思ふ。即ち勘十郎は悪人としても簡單な計畫しかなし得なかつた人物で、源十郎に至つては更に清十郎の薄命を強調するための傀儡にしか過ぎぬ。道行文は「薩摩歌」の夢分船と共に近松作中の双絶とされてゐるが、狂女お夏は、やがて何時か狂氣が癒えてゐるので、これ等もお夏清十郎兩人への同情と、それによる作の効果のみ目指した結果の一破綻かと思はれる。その他脚色上自身の先行作から利用を遂げた部分も

ざられた。笠物狂が都一中の作曲で流行して後、正徳五年額見世江戸市村座で評判をあげ、これは淨瑠璃として現に傳はつてゐる。富士松薩摩の「卯花二世今賀籠」(延享四年春江戸市村座、玉齋齋會我三番目)は古く好評を得た。富本の「道行比翼の菊蝶」(天明元年四月江戸市村座)「劇場花代會我二番目」は、三日替りの大阪の部として上演された道行で、江戸歌舞伎では最も有名である。外に坪内逍遙の「お夏狂亂」(別項)がある。(三)小説も相當多いが、西澤一風の「亂經三本槍」(別項)、瀧澤馬琴の「常夏

花を持たせ、自分が主となり十兵衛が副となり、協力してやらうぢやないかと言ひ出したが、十兵衛は聴き入れない。十兵衛の熱意と技術に感じてゐた和尙は、遂に十兵衛に一切の工事を任せる事とする。かうなつた以上、源太は一切の行きがかりを棄てて十兵衛に見事な成功をさせようと思ひ、力を出し、一生に一度の仕事に、他人の力に頼るのは氣持がよくなるときつぱり断つた。源太が重ね重ね面目を潰されたのを見た子分の清吉は

【五十音圖の成立年代及び作者】 現存文獻の示す所では、五十音圖は院政時代には既にあり、平安朝半頃にも多分あつたらうと考へられる。その作者については、藤原長親、辨雲明親の「倭片假名反切義解」には、吉備眞備を片

矢氏は、五十音圖が最初から悉曇と關係あるものとして説を立てたのであるが、その他の系統のものが無かつたとも断定出来ない。(前出。されば大矢氏の論は、まだ根據薄弱であると言はなければならぬ。今日の處では、五十音圖は平安朝の前半の中に出来たもの

切・延約・轉音・ムの音の事、手爾波の呼應を圖示してゐる。本書は初學者のために五十音圖の事、及び國語の音韻と五十音圖の關係を略説したもので、學説としては、さして注意する程のものでも無いが、著者は音韻文字に造詣の深い人で、その所説は、首肯すべきもの

近松戲曲集中(國民文庫)・近松名作集(名著全集)・近松全集第八卷等所收。
【梗概】(上卷)(渡船場) 但馬屋の手代清十郎の父親、和泉國水間の百姓左治右衛門は、娘お俊と嫁おさんとを連れ、清十郎を訪ねて姫路に下らうとする途中、こゝで計らふ清十郎

の傍輩勘十郎に逢つた。勘十郎は祝言を控へた主家の娘お夏と清十郎との密通を告げ、清十郎の罪を覆ふには、この祝言に構ひがあるとして、道具を差押へる外あるまいと教へ、終にその文面に判を押させた。企みの係路と氣付かぬ左治右衛門は、勘十郎を徳として一先づ郷里に戻る。道具屋に支拂ふ金は勘十郎の懐に入つた。(中卷)(但馬屋) お夏の祝言も近付いて今日は蚊帳の祝儀。主人九左衛門は祝言の道具が届かぬ所から、歸り着いた勘十郎を質さうと奥に連れ去る。その際にお夏は戀しい清十郎を蚊帳の中に引入れた。かくと知つた九左衛門は、娘の嫁入に邪魔を入れたのも頭と共謀した清十郎の業であるとなし、かの證文を突きつけ、その上、豫て勘十郎の頼みをきいて清十郎がお夏から借りた七十兩の現金が出て、更に疑の種となり、清十郎は終に布子一枚で放逐される。夜に入つてお夏の手引きで清十郎は臺所まで忍び込み、そこで萬事勘十郎の策謀と分つたので、憤りの餘り彼は勘十郎を寢所で刺した。が、殺した相手は別の傍輩源十郎であつた。清十郎は落ち延び、お夏は狂ひ出る。(下卷)「お夏笠物狂ひ」お俊とおさんは歌比丘尼にやつして清十郎の行方を探る中、お夏に出逢ひ、折しも耳にした清十郎獄門の刑場へと連立つ。(刑場)捕はれの清十郎は飽く迄身の潔白を主張したが、三人を目にとめ、お夏から最後の煙草を所望すると見せて、矢庭に煙管を以て自殺を謀つた。併し、驅けつけた役人によつて勘十郎の悪事が明白となり、清十郎は晴れて往生する。お夏は尼となつて男の菩提を弔ふ。

され、これによつて、清十郎への同情ある解釋が齎されたことと思ふ。即ち勘十郎は悪人としても簡單な計畫しかなし得なかつた人物で、源十郎に至つては更に清十郎の薄命を強調するための傀儡にしか過ぎぬ。道行文は「薩摩歌」の夢分船と共に近松作中の双絶とされてゐるが、狂女お夏は、やがて何時か狂氣が癒えてゐるので、これ等もお夏清十郎兩人への同情と、それによる作の効果をもみ指した結果の一破綻かとさへ思はれる。その他脚色正に自身の先行作から利用を遂げた部分も相應に發見せられ、作者の苦心の程が隨所に認められる。西鶴の「五人女」と比較すると、殊にこの感を深くする。河口の實事、蚊帳の濡れ場、刑場の秋敷場といふ三場面の配置の如きは、當に戯曲作家としての成功でなければならぬ。【影響】(一) 浮瑠璃の改作に二作ある。「和泉國浮名濁池」並木宗輔、安田蛙文作、享保十六年四月、豊竹屋上演は、清十郎が一度郷里に歸つて、養父が五十兩の金策に娘を賣つたので、これを救はうとしたのが却つて悪人等に謀られる所となるといふ筋である。道行「道行うかれ笠」は、上野少椽の語り物であつた。「夏浴衣清十郎染」(普助、豊春助作、安永七年十二月、北堀江芝居上演は、清十郎が但馬屋九郎のため小半との仲を纏めようとして苦心し、清十郎の許嫁お俊もその苦勞とお夏への義理のために剃髮するに終る。何れも改作といふに止まる。「極彩色娘扇」(別項)の中には兩侠客の達引の中心にこの事件が綴られたが、現在はこの方が舞臺生命がある。(二) 歌舞伎芝居への影響は甚だ多いが、その著しいものをあげる。「節間桐布衣」は正徳年中、京の神山四郎太郎座と民屋半之丞座とで二度演

ぜられた。笠物狂が都一中の作曲で流行して後、正徳五年顔見世江戸市村座で評判をあげ、これは淨瑠璃として現に傳はつてゐる。富士松薩摩の「卯花二世今駕籠」(延享四年春江戸市村座「玉櫛舞會我」三番目)は古く好評を得た。富本の「道行比翼の菊蝶」(天明元年四月江戸市村座「劇場花萬代會我」二番目)は、三日替りの大阪の部として上演された道行で、江戸歌舞伎では最も有名である。外に坪内逍遙の「お夏狂亂」(別項)がある。(三) 小説も相當多いが、西澤一風の「亂脛三本槍」(別項)、瀧澤馬琴の「常夏草紙」(別項)、柳亭種彦の「縁結月下の菊」(別項)などが著名である。
【参考】五十年忌歌念佛解題 藤井乙男(近松全集第八卷) ○五十年忌歌念佛解題 黒木勲(近松名作集上)
【守隨】
五重塔 ごぢゆう 小説 【作者】幸田露伴
【發表・刊行】明治二十四年十一月より國會新聞に連載、同二十五年十月、「血紅星」(別項)と共に「尾花集」として刊行。露伴全集第一卷、現代日本文學全集、幸田露伴集所收。

【梗概】のつそり十兵衛といふ名人肌の大工があつた。動作がのろく、世辭がなく、頑固一徹な男なので、非凡な腕を持ちながら久しく不遇な境涯にゐた。或る年、谷中感應寺の境内に五重塔を建てることになり、寺方が、彼の親方筋に當る川越の源太に見積書を出させた。それを聞いた十兵衛は、この時を遁しては自分の腕を現はす機會がないと考へ、源太には濟まぬと思ひながら、その工事を請負むたいと申込んだ。感應寺の朗圓和尚が二人を呼んで、譲り合つて事を決めるがよいと諭す。源太は十兵衛の遣り方にむつとしたが、元來、捌けた江戸ッ兒肌なので、快く十兵衛に花を持たせ、自分が主となり十兵衛が副となり、協力してやらうぢやないかと言ひ出したが、十兵衛は聴き入れない。十兵衛の熱意と技術に感じてゐた和尚は、遂に十兵衛に一切の工事を任せる事とする。かうなつた以上、源太は一切の行きがかりを棄てて十兵衛に見事な成功をさせようとして進んで助力を申込んだが、十兵衛はその好意は深く謝しながらも、一生に一度の仕事に、他人の力に頼るのは氣持がよくないときつぱり斷つた。源太が重ね重ね面目を潰されたのを見た子分の清吉は憤慨のあまり、十兵衛を鬧討して怪我をさせたが、十兵衛の一念は動かない。のつそりと嘲られ、恩知らずと罵られながらも、彼は多數の大工を監督指揮して日夜苦心を重ね、遂に立派な五重塔が出来上つた。いよいよ落成式を擧げる日が近くなつた或る夜、満都を脅かす魔物のやうな大風が吹き出して、出来上つたばかりの五重塔も、暴風雨の中に揉まれ揉まれ、今にも吹き倒されせぬかと思はれるばかりだが、信するところのある十兵衛は、泰然として家にゐた。塔を氣遣ふ寺からの再三の使に迎へられて仕方がなく寺に到り塔に上り、もし板へぎ一枚でも吹きめくられたら、見事に死んでのけようと、六分鑿を握つた五層に突立つてゐた。やがて恐ろしかつた雨がやんだ跡を見れば、巨人のやうに屹立してゐる塔はほんの僅かの損所さへもない。名匠十兵衛の名は満都に轟きわたつた。源太は江戸ッ兒の俠氣から、十兵衛との蟠まりも忘れ、その風雨の中で塔下に立つて人知れず護つてゐたが、かうなると十兵衛の天晴れな手腕に敬服し、自分が成功したやうに喜んだ。

【批評】久しく谷中に假り住ひした作者が、朝

夕に眺めた五重塔の莊嚴に印象され、この作
物に着手した事は、著者の「自作の由来」で言
つてゐる。「五重塔」は、「風流佛」と「一口劍」
(各別項)の前後を繋ぐ一聯の意志文學である
が、情熱と詩美の高潮に達した點からも、ま
た全體の構成ががちりと組立てられて、少
しのゆるみもなく緊張した點からも、この作
は、他の二作の達し得ない最高の境地に入つ
てゐる。それといふのも、「風流佛」は、失戀
のために、「一口劍」は、妻に捨て去られたた
めに、心機が急に一轉して美人像を彫み、もし
くは名劍を鍛へ上げる。主人公の燃えさかる
勇猛心は、申分なくユニークに表現されてゐ
るが、對象としての女性の性格や、戀愛の過程
を描く段になると、現實味に乏しい作者の筆
は鈍り勝ちである。「五重塔」は珍しくも女性
が一人も點出されてゐない。女性心理に、い
つも手こずる作者は、こゝではすつかりその
難關から解放されて、割合單純な筋を、完全
に男性的な統一された作物に拵へ上げ、それ
だけ奔放で雄大な主觀を一杯に展開する事
も出來た。それに藝術の神祕性に對する限り
なく高い法悅境も、浪漫詩人としての作者を
よく現はしてゐる。殊に當時の文壇を驚かし
たのは、三十一章から三十五章に亙る暴風雨
の情景を描寫した莊嚴な文章の迫力で、「五重
塔」の一篇だけでも、露伴の地位は不朽だとさ
へ推賞された。この作物の準備として、久し
い間、建築家に就いて五重塔の建築構成を熱
心に研究したといふ挿話も、作者の藝術に對
する良心を長敬せしめた。

【参考】 誹諧家譜文石(俳書大系系譜通話集)○俳
家奇人談竹内玄々(俳諧文庫、俳諧叢書)○俳
家大系圖 生川春明(俳書大系系譜通話集)○俳
人百家選 水谷維孝(俳諧文庫)○北村季吟傳石
倉重繼

【生殺】 生年未詳。石倉氏の「北村季吟傳」に、

慶安元年生とある。元祿十年(二三五)七月十
五日歿。享年未詳。五十三とする説あれど根
據を知らず。石倉氏説に五十にして卒すとあ
り、誹諧家譜及び誹諧家大系圖に五十有餘とあ
る。【法名】 花果院【墓所】 下谷七軒町正慶
寺【閑歴】 季吟の長子である。幼にして穎悟、
十三歳の時「我年も今日や松風初子日」の句が
ある。元祿二年、父季吟に従つて江戸に下り、
同年十二月二十一日、幕府の醫員に准ぜられ、
二十人扶持を受けた。後、法印に叙せらる。
俳諧は父に學び、ついで芭蕉に従つた。父季
吟に先立つて歿した。著作に「續山之井」(別
項)がある。

【参考】 誹諧家譜文石(俳書大系系譜通話集)○俳
家奇人談竹内玄々(俳諧文庫、俳諧叢書)○俳
家大系圖 生川春明(俳書大系系譜通話集)○俳
人百家選 水谷維孝(俳諧文庫)○北村季吟傳石
倉重繼

【生殺】 生年未詳。石倉氏の「北村季吟傳」に、

通寺の池の主は美男に化けて毎夜庄屋の家の
娘に通つたと云はれるが如きは(イ)の例であ
り、佐渡國佐渡郡のぜり池に於て本間將監
が夜毎に水中に入つて女龍と契つたと云ふが
如きは(ロ)の例であり、千葉縣夷隅郡の蛇ヶ
池、同郡田代池などの主の妖怪が湖畔の豪雄
を恐れて逃走したとか、佐渡國佐渡郡の鴨ヶ
池の主が馬子につかまへられて、詫證文を書
いて許してもらつたとかは(ハ)の例である。
第五に湖水については、(イ)性質について述
べるもの、例へば伊豆國田方郡淡水池の水は、

種に及んでゐる。そのうち、出版年代の明か
な八十九種の内譯をして見ると、寛延以前六
種、寶曆一享和十一種、文化一天保二十九種、
弘化一慶應四十一種、明治時代二種であつて、
幕末時代の流布が、いかに目覚ましいもので
あつたかを知ることが出来る。更にこの書の
内容たる書狀の一つ一つが、或は單行本とし
て或は他のものと組合せられて普及したこと
は、數へ上げることの出來ぬほどであつた。
【影響】 後來の往來物に與へた影響も亦偉大
なるものがあつた。寛文十年には既に早くこ
の書を摸した「武家往來」がある。「武家往來」
は元祿十四年に至つて「源平往來」(一名盛衰記
源平往來と改題して出版したが、その中には、
古狀揃の中から三篇を採つてゐる。文政以後
になつて、この「源平往來」を抄出し解釋した
ものが出たが、「源平古狀揃講釋」とか、「新古
狀揃」とかの名稱が附せられた。こゝにも古
狀揃の影響が見られる。安政六年に至つて出
版された「甲越古狀揃」も亦、範を古狀揃にと
つたものである。

【参考】 古狀型往來物の史的發達についての
叙述と説明 石川謙

【湖沼傳説】 我が國に於
ける湖沼傳説は、常識的に(一)湖沼の名に關
するもの、(二)湖沼の出現に關するもの、(三)
湖沼の主に關するもの、(四)湖底の世界に關
するもの、(五)湖沼の生物に關するもの等に
分類する事が出来る。第一に湖沼名の由来に
ついては、(イ)人名に起れりとなすもの、(ロ)
事件に因りりとなすもの二種がある。前者
に關して千葉縣千葉郡の綿打池では、湖畔の
村落に土地の争の起つた時、綿打屋太郎兵衛
の機智によつて解決したと云はれ、伊豆國田

方郡靜ヶ池では、伊藤祐親の女が頼朝と通じ、
幼兒靜を抱いて投身したと傳へられ、播磨國
加東郡藤田池では藤田三郎といふ豪傑によつ
て主の大蛇が退治されたといひ、同郡瀧衣澤
では平家の公達のゆかりのある瀧衣澤といふ
美女が入水したと稱せられてゐる。後者に關
して千葉縣津郡疊ヶ池では頼朝が池畔で疊
を敷いて飯を食つたといひ、讃岐國木田郡の
血の池では、源平の合戦に血刀を洗つたとい
ひ、その他、東京市荏原區洗足池、千葉縣君
津郡念佛ヶ池等一々枚舉にいとまない有様で
ある。第二に湖沼の出現を説明する説話は、
(イ)琵琶湖と富士山、諏訪湖と淺間山、中綱湖
と有明山等に於けるが如く、一方が陥落する
と他方が突出するといふ種類のものと、(ロ)
遠江に於ける大駄羅法師、上野に於ける百合
若大臣、尾張に於ける道場法師、出雲に於け
る高尾周太、筑紫に於ける味噌五郎等の如く、
巨人或は豪傑の足跡もしくは小便壺とするも
のと、(ハ)八郎湯・十和田湖・猪苗代湖等の如
く池水が俄に湧出したとなすもの、(ニ)陸
奥國上北郡の小川原沼に於ける配流の公卿の
姫君、信濃國更級郡の泣池に於ける姑に苛め
られた嫁の如く、人間が化成して湖となつた
とするもの、(ホ)鳥取縣氣高郡湖山池のや
うに、土地の長者が豪奢の餘り日輪を呼びか
へした天罰によるとするものや、岩手縣江刺
郡の城趾池の如く生理にされた姫君の涙がた
まつたとするもの等の如き特異の形のもの
がある。第三に湖沼の主に關するものは、湖
沼傳説の大半を占めてゐるが、これには(一)
主の種類に關するもの、(二)主の由来に關す
るもの、(三)主と主との交渉に關するもの、
(四)主と人との交渉に關するもの等の四種があ

ケ池等の如き片目魚を説明するものが最も多
く、(ロ)播磨國加東郡腹原沼のやうに臟腑のな
い鮎を説明するものもあるが、これ等は神意
怨靈の信仰に起因する。次に(ロ)植物を説明
するものでは、遠江國濱名湖の片葉の蘆、上總
國君津郡の疊ヶ池の葎など、いづれも人間界
の呪詛の信仰を示すものである。なほこの外
下總國印旛郡阿曾沼の鴛鴦、丹後國比沼山の
天の眞井の天女等の如き、湖沼を舞臺とする
事件を説明するものがあるが、これ等は湖沼
傳説そのものとはなし難い。

【池田】
常着色々・笏・劍・玉帶・魚袋・胡録・襪・靴・布
袴・衣冠等の目を擧げ、舊記を引き先例を述べ
且つ圖示してある。

【湖上の美人】 The Lady of The Lake
井雨江【原作】 Sir Walter Scott【刊行】 明治二十
七年三月、開新堂。【解説】 この譯詩は、明治年
代に於て大に行はれた流布の書として、尾上
柴舟の「ハイネの詩」と並稱せられるものであ
る。この流布の所因としては、スコット原詩

る。第一に主の種類に關しては、(イ)主が人、
鳥・龜・魚・蝦・蟹等の如き動物である場合
と、(ロ)主が鐘や鞍の如き非動物である場合
との二種がある。これ等のうち動物では龍蛇
が最も多く、非動物では鐘が最も多く、所謂沈
鐘傳説(別項)の型を作るに至つた。第二に主
の由来については、一般的な條件として主の
前身が處女であること、それが美人であるこ
と、多く城主又は長者の娘であること等が共
通してゐる。例へば佐渡國音羽池では美女の
音羽が月の障りのある腰巻を洗ひ清めたため

【湖春】 湖長、蘆髮して湖春と改む。
休太郎【別號】 湖長、蘆髮して湖春と改む。
【生殺】 生年未詳。石倉氏の「北村季吟傳」に、

【湖沼傳説】 我が國に於
ける湖沼傳説は、常識的に(一)湖沼の名に關
するもの、(二)湖沼の出現に關するもの、(三)
湖沼の主に關するもの、(四)湖底の世界に關
するもの、(五)湖沼の生物に關するもの等に
分類する事が出来る。第一に湖沼名の由来に
ついては、(イ)人名に起れりとなすもの、(ロ)
事件に因りりとなすもの二種がある。前者
に關して千葉縣千葉郡の綿打池では、湖畔の
村落に土地の争の起つた時、綿打屋太郎兵衛
の機智によつて解決したと云はれ、伊豆國田

【湖沼傳説】 我が國に於
ける湖沼傳説は、常識的に(一)湖沼の名に關
するもの、(二)湖沼の出現に關するもの、(三)
湖沼の主に關するもの、(四)湖底の世界に關
するもの、(五)湖沼の生物に關するもの等に
分類する事が出来る。第一に湖沼名の由来に
ついては、(イ)人名に起れりとなすもの、(ロ)
事件に因りりとなすもの二種がある。前者
に關して千葉縣千葉郡の綿打池では、湖畔の
村落に土地の争の起つた時、綿打屋太郎兵衛
の機智によつて解決したと云はれ、伊豆國田

い間、建築家に就いて五重塔の建築構成を熱心に研究したといふ挿話も、作者の藝術に對する良心を畏敬せしめた。
〔千葉〕

湖春 こしゅん 俳人【姓名】北村季重。通稱休太郎【別號】湖長、蓬髮して湖春と改む。【生歿】生年未詳。石倉氏の「北村季重傳」に、

る。第一に主の種類に關しては、(イ)主が人、鳥・龜・魚・蝦・蟹・蛇等の如き動物である場合と、(ロ)主が鐘や鞍の如き非動物である場合との二種がある。これ等のうち動物では龍蛇が最も多く、非動物では鐘が最も多く、所謂沈鐘傳説(別項)の型を作るに至つた。第二に主の由来については、一般的な條件として主の前身が處女であること、それが美人であること、多く城主又は長者の娘であること等が共通してゐる。例へば佐渡國音羽池では美女の音羽が月の障りのある腰巻を洗ひ清めたため主に見込まれて女龍となり、赤城山麓の小沼では長者赤城道玄の娘が龍の鱗に魅せられて主となり、その他群馬縣邑樂郡城沼、鳥取縣岩美郡種ヶ池、同縣日野郡鶴ヶ池、東京市杉並區井の頭池等、いづれも處女の入水を説いてゐる。又群馬縣群馬郡の榛名湖では武士の妻が野武士に辱しめられて憤死し、永く主となつて處女の操を保護すると云ひ、信濃國善光寺の阿闍梨池では皇圓が龍に化身し、七度び金堂を廻つて池の主となつたと云ふが如き特別な形もある。第三に主と主との關係については、十和田湖や信濃國上水内郡美奈湖などは、千葉縣印旛郡坂田池の雄蛇は、附近の長沼の雌蛇のもとに通つたと云はれるが如く、戰鬥的なものと、和合的なものとに區別することが出来る。第四に主と人間との關係については、(イ)男性の主が女性の人間に懸想するといふ形と、(ロ)女性的主が男性の人間と契るといふ形と、(ハ)主が人間に醜弄されたといふ形との三つがある。例へば信濃國の岩倉池の主は或る家の娘に戀して叶はず、その仇を報いんために水災をなすと云はれ、讃岐國善

從つて、或は排列の順序が變つたり、或は大坂進状を省いて曾我狀に代へたりしながら、古狀揃の名によつて幕末まで使用せられた。【解説】古狀揃は實語教・庭訓往來などと共に、最も普及した往來物の一種である。その異版の数は今まで分つたものだけでも、百五

通寺の池の主は美男に化けて毎夜庄屋の家の娘に通つたと云はれるが如きは(イ)の例であり、佐渡國佐渡郡のぜせり池に於て本間將監が夜毎に水中に入つて女龍と契つたと云ふが如きは(ロ)の例であり、千葉縣夷隅郡の蛇ヶ池、同郡田代池などの主の妖怪が湖畔の豪雄を恐れて逃走したとか、佐渡國佐渡郡の鴨ヶ池の主が馬子につかまへられて、訛證文を書いて許してもらつたとかは(ハ)の例である。第五に湖水については、(イ)性質について述べるもの、例へば伊豆國田方郡淡水池の水は、日蓮上人が大瀨明神に捧げるために駿河國尾無川の水を用ひたために淡水であるとなすが如きものと、(ロ)色について述べるもの、例へば千葉縣海上郡藍ヶ池に於て弘法大師が正直な老婆をあはれんで、法力によつて池水を藍にかへたため青いとすることが如きものとの二種がある。第六に湖底を説明するものには、大別して、(イ)湖の底がぬけてゐると云ふものと、(ロ)湖底に何物かがあると云ふものとの二つがある。前者即ち底なしの池には、伊豆國三島の菰ヶ池、群馬縣邑樂郡茂林寺沼、日光中禪寺湖等があるが、後者には、(a)鳥取縣西伯郡赤松池のやうに、龍宮に似た宮殿があるといふのが、大多数であり、(b)信濃國北安曇郡中網湖の底にある鐘樓堂と大釣鐘、肥後國阿蘇郡下野ノ堤や千葉縣山武郡雄蛇池などの底で機を織つてゐる乙女又は嫁、埼玉縣北葛飾郡摺鉢池の底に朱の衣をきた法師のやうな人がゐるとなすもの、(c)攝津國六甲山麓の魔ヶ池の如く湖底に花咲き鳥うたふ樂園があるとするものがある。第七に湖沼の生物を説明するものの中、(イ)動物を説明するものでは、(a)下野國河内郡城趾池、播磨國加古郡驛

分類する事が出来る。第一に湖沼名の由来については、(イ)人名に起れりとなすもの、(ロ)事件に因りりとなすもの二種がある。前者に關して千葉縣千葉郡の綿打池では、湖畔の村落に土地の争の起つた時、綿打屋太郎兵衛の機智によつて解決したと云はれ、伊豆國田

ヶ池等の如き片目魚を説明するものが最も多く、(ロ)播磨國加東郡腹辟沼のやうに臟腑のない鮎を説明するものもあるが、これ等は神意怨靈の信仰に起因する。次に(ロ)植物を説明するものでは、遠江國濱名湖の片葉の蘆、上總國君津郡の疊ヶ池の葎など、いづれも人間界の呪詛の信仰を示すものである。なほこの外下總國印旛郡阿曾沼の鴛鴦、丹後國比呂山の天の眞井の天女等の如き、湖沼を舞臺とする事件を説明するものがあるが、これ等は湖沼傳説そのものとはなし難い。
〔池田〕

後松日記 ごしょうにっき 隨筆 二十一卷【著者】松岡行義(有職家を以て聞ゆ)【刊行】本書の原寫本は圖書寮の所藏である。この本に據つて明治三十九年「百家説林續編中巻」に收められたのが刊行の初である。【解説】有職故實のあらゆる方面に涉つた記録で、殊に裝束・調度・武器・甲冑等について詳細を極め、まゝ古代の習俗・制法に及ぶ。日記と題するは安當を缺くが、書中巻五の首に、「凡日記といふは一日二日と日をものしてかくべきを、こは日並もかゝねば日記とはいひがたかるべけれど、文机のうへにおきて目ごとみにみしことききしことひやりし事など、わすれては名ごりなからんを書けるによりてかくはいふなり。されば部もわかつた筆のまに「なり」と斷つてある。中で八・九の兩卷は著者の旅行記で、前後諸卷に無關係である。諸卷中に稀に圖畫を挿む。序跋は無い。
〔和田〕

後照念院殿裝束抄 ごせうねんゐんどのしやうぞくせう 群書類從卷一五裝束部第四所收【解説】鎌倉時代の裝束に就いて書いたもので、冠・束帶・白裝束・白重・袍文・赤色袍・半臂・下襲・染裝束・當着色々・笏・劍・玉帶・魚袋・胡録・襪・靴・布袴・衣冠等の目を擧げ、舊記を引き先例を述べ且つ圖示してある。
〔石村〕

湖上の美人 うみのかみ 譯詩【譯者】鹽井南江【原作】The Lady of The Lake (1810) Sir Walter Scott【刊行】明治二十七年三月、開新堂。【解説】この譯詩は、明治年代に於て大に行はれた流布の書として、尾上柴舟の「ハイネの詩」と並稱せられるものである。この流布の所因としては、スコット原詩の譚歌的妙味を端的に抽出して流麗の七五調に巧みに收めたのが、七五調の優雅體の多く行はるゝ當時に在つて、異邦に對する興味がこれと一種不思議な一致點を見られたからであらう。譯詩としては缺陷夥しき詩語の列りであつた事はいふまでもない。その詩體の背後を支配するものは、落合直文の新國文提唱が在つたことを特記するを要する。
〔日夏〕

五常樂 ごしやうがく 雅樂曲【異稱】五聖樂・五性樂・禮義樂・天觀五常樂・天祝五常樂。【性質】唐樂。新樂の中曲。平調曲に屬する。序(拍子八)、詠(拍子三)、破(拍子十六、末五拍子加)、急(拍子八、末三拍子加)。舞があり、四人で舞ふ。舞人は常裝束袍を着ける。答舞には「登天樂」を用ひる。また「地久」を用ひることもある。
【沿革】「教訓抄」には、これを唐の太宗の作曲で、貞觀末、天觀の初に、帝五常樂曲圖を製すといつてゐる。「體源抄」、白石の「樂考」等皆これを掲げてゐるが、「大日本史」には異説を掲げ、五常は虞韶の誤であつて、舜の古樂たる韶であると述べてゐる。明治維新の頃の笠間藩士加藤櫻老も亦、これを大韶であると述べてゐる。兎に角この樂は樂家の最も重んずる

所であつて、本邦へいつ如何にして傳來したか不明であるが、古くから孔子廟を祭るに用ひてゐる。

古淨瑠璃

【名稱】古流の淨瑠璃或は古の淨瑠璃の義。古くは、この二種の解釋が行はれてゐたが、現在淨瑠璃史上では、前者の義に通用されてゐる。古流とは竹本義太夫(別項)の制定にかゝる義太夫節(別項)を當流と認められたに對し、その以前の宇治加賀掾・山本角太夫・井上播磨掾、各別項等の諸流を指した稱呼に起つたものである。【性質】著しい特質を挙げれば次の如き點が考へられる。詞章が特殊の場合を除き、一流派の所屬に拘束せられぬのを通例とする。よつて詞章とそれの表現に用ひられた曲節との關係も、義太夫の場合に比して極めて淡い。即ち特定の曲節による表現に應ずべき目的で綴られた詞章でないから、この詞章は他の流派にも應用される可能性がある。これは、更に太夫と作者との關係に就いても同様である。一作者が、一太夫に專屬する要を認めぬために、淨瑠璃文學として完全な發達を遂げしめぬ結果を産み、又淨瑠璃音楽としては、複雑な進歩を阻害することとなる。故に、各段の整理の如きも、不十分に傾きやすくなる。古淨瑠璃が末期に至るまで、大方、六段の形式を踏襲して、他の考案が出でなかつた事なども、その一の現れと見られる。【沿革】淨瑠璃は、その發生以後、地方色に順ひ、年代に應じて、種々の差別相を経たが、竹本義太夫が近松門左衛門(別項)と提携するに及んで、内容形態を完備し得て、こゝに古淨瑠璃は新淨瑠璃に更生するのである。但しこれ等を相對的なものとして區別するやうになつたのは、元祿時代以後である。古淨瑠璃の稱が、一般用語として通ずるやうになつたのは寶曆の頃であらう。

【文藝との關係】他の文學作品と同様に、近古文學から影響を被つた事は言ふ迄もなく、中でも、軍記物語・謡曲・舞曲、各別項等との交渉は最も密接である。これ等は新時代の作品の傾向としては當然であるが、その他、同時代の文藝との關係も密接なものである。第一には、小説との交渉が考へられる。特に假名草子(別項)は屢々題材を供給したり、仰いだりしてゐる。第二には歌舞伎との交渉で、同様な關係が発見せられる。古淨瑠璃がその幼稚な姿の儘に生命を維持した事の一面には、かゝる問題も考へられる。(淨瑠璃参照)

【参考】古淨瑠璃研究水谷不倒(日本文學講座)○繪入淨瑠璃史水谷不倒○今昔操年代記西澤一風○竹豊故事一樂子○外題年鑑 同上○淨瑠璃史 高野辰之○聲曲類纂 齋藤月岑 (守應)

御所櫻堀河夜討

【初演】元文二年正月二十八日、竹本座【諸本】淨瑠璃名作集(帝國文庫、有朋堂文庫)所收。【題材】「平家物語」の「土佐坊斬られの事」や「義經記」の「土佐坊義經の討手に上る事」が中心となり、それに伊勢三郎・辨慶・静などに關する傳説が織り込まれてゐる。【梗概】「初段」梶原景高は義經を陥れようと頼朝に讒し自ら討手として京に上るが、土佐坊昌俊はこれに義憤を發し、共に討手を願ひ、堀河御所に於て、屢々梶原等の奸策を妨害する。「二段」伊勢三郎は、以前人手に掛つた父の仇を半若丸と誤認し、今は主家を捨て骨つぎに落ぶれてゐる。偶々治療を求めに來た土佐坊昌俊の仇と知れるが、義經の身の潔白が

立つまで仇討を延ばして別れる。「三段」義經の正妻卿の君は、平家の一族平時忠の息女で、妊娠の身を乳人侍從太郎の館に静養してゐるが、義經に二心なきを證する手段としてその首を差出すべく、鎌倉の上使梶原等から度々の催促があるので、辨慶は首受取りの使者としてこの家に入り込んで來る。侍從太郎夫妻は侍女信夫を身代りに立てようと、その母お物師のおわさに意中を明かすが、おわさは唯一度契つたまゝ名も知らずに別れた夫に廻り逢ふ迄はと拒絶する。おわさの迷懷を立ち開いた辨慶は、侍女信夫が我が子である事を知り、卿の君の身代りとしてこれを刺し、父であり夫である事を明かす。太郎も亦梶原を欺く手段として自殺する。「四段」卿の君の母は娘の安産を祈つて伊勢參宮の旅をつづける(道行伊勢土意)。静の兄の藤彌太は卿の君の母の危難を救ひ、これを種に義經に取り入り、秘密を洩き出さうとするが、母磯の禪司のために刺され悔悟する。折から討手が堀河御所に攻め入り、土佐坊は義によつて伊勢三郎に討たれ、寄せ手は散々に敗北する。「五段」辨慶は贗土佐坊の番場忠太を生捕つてこれを殺す。静は、義經・頼朝の和解を諷して一曲を舞ふ(花扇部部)。こゝでは謡曲「邯鄲」をもぢつて靜が遊客となり、傾城買ひの所作を行ふ。

【脚色】土佐坊堀河攻めの件が、本曲の根幹として扱はれてゐるが、原典に現れた柔剛兩面を備へた土佐坊は、本曲では義經に對する非常な同情者、正義の士として描かれる一方、贗土佐坊を設けて「扱こそ贗と正眞の、土佐坊昌俊土佐坊正尊、二人の土佐が名の紛れ、義經公に敵たひしは、此正尊が事なりけり」と史

ひ、師に就き又自ら研鑽せられて、一流の大家となられたのは、御天分の豊かであることと、風流の道に勵まれたからで、政治的御手腕と共に、亂世に悠々自適せられた御高資を拜する事が出来る。十餘歳の頃より六十歳に至るまで四十餘年間、絶えず修練せられたことは、「梁塵秘抄口傳集」卷十に見えてゐる。それによると、多く遊女・傀儡子女を招いて歌はせ、學ばれたと見える。澤の阿古丸、神崎のかねなどがその師であつたが、保元三年正月十日頃に至り、かねくその名の高い乙前

樂に通ぜざるなき天才であつたが、郵曲は藤家の傳を受け、宗能の弟子で神樂・催馬樂・朗詠の類を學ぶと共に、後白河院の傳を受けて、源家の郵曲を學んだのである。但し妙音院の父知足院忠實は藤家の郵曲家であると共に、後白河院の御師資賢の弟子で、源家の傳をも受け、兩家に通じた達人であつたから、妙音院師長も亦兩家相通の傳授を父より得てゐたのである。かくて後白河院は、その御門下に有数の名人を輩出されて黄金時代を作られたかの感がある。「朗詠要抄」には、後白河院が

に至つて、文部大臣森有禮は事業の大なるを思ひ、編纂員を増して東京學士會院に監督させたが、更に同二十三年に至つて、文部大臣榎本武揚はこの事業を皇典研究所に委託し、編纂・檢閲に關する職制を設け、檢閱委員長川田剛の下に、小中村清純・木村正辭・黒川眞頼・本居豊頼・井上頼因の五名の檢閱委員を設け、外に十五名の編纂委員を置いたが、完成契約期限の明治二十八年に至つても辛うじて緒に就いた有様に過ぎないので、神宮々司鹿島則文は、神宮司職に於て編纂を繼續する事を約

見れば百科研究資料の大集成とも云ふべきもので、「類聚」の名を以てすれば、多數の學者を督しての國家事業であつただけに完全に近いのであるが、なほ或る部門に於ては資料とされた典籍の範圍の狭い憾も認められ、分類に至つては今日と相去る事の遠い點を發見せずにはゐられない。而もなほ現代に於て各種の學校・圖書館等に於ける本書の利用が甚だ頻繁である事實は、その學界に於ける價值を雄辯に語るもので、實に日本文化の研究に缺くべからざるものと云ふべきである。【土井】

後白河院が

【参考】榎敷から書齋へ伊原晋々園(舞臺觀察)手引草杉廣阿彌(歌舞伎細見飯塚友一郎)近世邦樂年表(義太夫節之部) 湖處子(宮崎湖處子)を見よ。 御所五郎藏(曾我絳俠御所染)を見よ。

後白河法皇(はしろかみ) 郵曲家【御諱】雅仁【法諱】行眞【生歿】大治二年九月十一日御降誕、建久三年(一八五二)三月十三日崩御。寶算六十六【閱歴・業績】鳥羽院第四の皇子、御母は大納言藤原公實の女、待賢門院璋子。久壽二年七月御踐祚(二十九歲)、同年十月御即位。保元三年八月御年三十二で御讓位、嘉應元年六月御出家あらせられた(四十二歲)。御一生の間に、保元の亂・平治の亂・源平の亂等、擾亂打續いて、御心の安き間もないに拘らず、郵曲(別項)の道に趣味を有し給

古人五百題(こじんごひゃくだいい) 俳句集 中本二

生以後、地方色に順ひ、年代に應じて、種々の差別相を経たが、竹本義太夫が近松門左衛門(別項)と提携するに及んで、内容形態を完備し得て、こゝに古浄瑠璃は新浄瑠璃に更生するのである。但しこれ等を相対的なものとして區別するやうになつたのは、元祿時代以後

して扱はれてゐるが、原典に現れた柔剛兩面を備へた土佐坊は、本曲では義經に對する非常な同情者、正義の士として描かれる一方、賈土佐坊を設けて「扱こそ賈と正眞の、土佐坊昌俊土佐坊正尊、二人の土佐が名の紛れ、義經公に敵たひしは、此正尊が事なりけり」と史

ひ、師に就き又自ら研鑽せられて、一流の大家となられたのは、御天分の豊かであることと、風流の道に勵まれたからで、政治的御手腕と共に、亂世に悠々自適せられた御高資を拜する事が出来る。十餘歳の頃より六十歳に至るまで四十餘年間、絶えず修練せられたことは、「梁塵秘抄口傳集」卷十に見えてゐる。それによると、多く遊女・傀儡子女を招いて歌はせ、學ばれたと見える。澤の阿古丸、神崎のかねなどがその師であつたが、保元三年正月十日頃に至り、かね／＼その名の高い乙前を召されてからは、雑藝の師として、十餘年間に多くの謠ひ物を傳授された。かくて乙前は八十四歳の二月十九日に歿するまで、法皇の恩顧を受けたのである。郵曲家では、源家の名手大納言資賢に學ばれた。季兼などにも聞かれたと云ふが、要するにその樂説は源家に屬する。法皇は屢々諸社へ詣でて、今様郵曲に夜を徹し給うた。永曆元年十月の熊野參詣、應保二年二月の第二回熊野參詣より仁安四年正月第十二度の熊野參詣に至り、同年二月賀茂參詣、承安四年三月嚴島行幸、治承二年九月八幡行幸等、諸社に詣でて神明の示現を蒙られたことも度々であつた。かくて法皇は若くして雜藝集を繙き、郵曲を學ばれ、遂に晩年「梁塵秘抄」(別項)二十卷を撰ばれた事は、その御業績中の偉大なるもので、今日の郵曲研究家に、多大の資料を供給されることである。又「郵曲抄」(別項)も、法皇の御著述と思はれ、門弟に至つては、資賢の子で後に源家の名手となつた左衛門佐資時を初め、源雅賢・平康頼・知康・高階業房、或は雅實・定能・兼雅の徒に至るまで数多く、特に一代の音楽の名手妙音院師長は、琵琶をはじめ、あらゆる器

樂に通ぜざるなき天才であつたが、郵曲は藤家の傳を受け、宗能の弟子で神樂・催馬樂・朗詠の類を學ぶと共に、後白河院の傳を受けて、源家の郵曲を學んだのである。但し妙音院の父知足院忠實は藤家の郵曲家であると共に、後白河院の御師資賢の弟子で、源家の傳をも受け、兩家に通じた達人であつたから、妙音院師長も亦兩家相通の傳授を父より得てゐたのである。かくて後白河院は、その御門下に有数の名人を輩出されて黄金時代を作られたかの感がある。「朗詠要抄」には、後白河院が御社に籠られた際、又熊野御幸の際、妙音院師長の「花亭ノ風ノウチニ」の朗詠を聞かれて感じ給うた由を記してゐる。「足柄」は特に名手であらせられたと思はれる。〔藤田〕

【古事類苑】 洋装五十冊 目錄總索引一冊 三百五十冊 編者 神宮司廳 刊行 明治二十九年より大正三年。昭和二年再版、同六年以降普及版(六十冊)が内外書籍株式會社から刊行中である。【成立・由來】明治維新の大業成つて、「文運漸く開け、外國の事物も亦存に輸入せらるる時に方り、彼我互に比較研究せんと欲すれば俄に數百部の書籍を涉獵してこれを求めざるべからず。而も屢々之を求めて遂に得る事能はざるの困難に遭遇し、人をして轉多岐亡羊の歎を發せしむ」る狀況を慨して、時の文部大書記官西村茂樹は、文部省に建議して類書を編纂すべきを進言した。明治十二年三月八日の事であつて、本書の淵源は實にこの建議に依るものである。文部大輔田中不二麿、少輔神田孝平はこれを採用し、文部省の小中村清矩・那珂通世・神原芳野を古事類苑編纂掛に命じて直に編輯に着手させた。同十九年末

に至つて、文部大臣森有禮は事業の大なるを思ひ、編纂員を増して東京學士會院に監督させたが、更に同二十三年に至つて、文部大臣榎本武揚はこの事業を皇典研究所に委託し、編纂檢閲に關する職制を設け、檢閲委員長川田剛の下に、小中村清矩・木村正辭・黒川眞頼・本居豐頼・井上頼因の五名の檢閲委員を設け、外に十五名の編纂委員を置いたが、完成契約期限の明治二十八年に至つても辛うじて緒に就いた有様に過ぎないので、神宮々司鹿島則文は、神宮司廳に於て編纂を繼續する事を約束し、新たに編纂事務所を設け、編纂總裁細川潤次郎以下多數の編修・助修の學者に囑して、事業の促進に力めた結果、同年十一月に帝王部二十七卷を刊行した。三十三年に及んで職制を改革し、佐藤誠實を編修長、松本愛重を編修副長、石井小太郎を編修副長心得に、熊谷直一郎以下七名を編修に任じたが、四十年漸く大部分の刊行を終了、大正二年に完結同三年に目錄索引を完成するに至つて、茲に三十五年の歲月を要した我が國空前の出版の大事業を全うする事が出来た。【内容】本書の編纂條令に「本書は古來の書籍を引きて、本邦歴代の制度文物、及び社會一般の事項を類聚す」とあるが、一切の事象を次の三十部門に分類し、慶應三年迄に行はれた書籍に引證を求めて收載したものである。即ち天・歳事・地・神祇・帝王・官位・封録・政治・法律・衆貨・稱量・外交・兵事・武伎・方伎・宗教・文學・禮式・樂舞・人・姓名・産業・服飾・飲食・居處・器用・遊戯・動物・植物・金石の三十部門、一千卷七萬餘頁に達する。別に總目錄、辭書式索引一卷があつて編讀の便を與へる。【價値】本書は我が國唯一の官撰百科大辭典であるが、現代の目から

置く。(俳諧新五百題(中本二冊、文政二年刊、鳥醉の例に倣つて四季發句を季題によつて分類輯録したものである)○俳諧千題集(中本三冊、文政十一年刊、四季の發句をその季題に依らず、山、谷、關、路、森、野などの二十一部門に分け、更に各部門各國の名所、所名をいり、順に排列したもので、索引的目錄を附した新機軸を出してゐる)○俳諧新々五百題(中本二冊、天保元年刊、内容は天象、地理、居所、器財などの十二部門に分ち、その各部門の中を風、雨などに小分したもので、前の千題集よりは更に一步を進めた編輯法である。正岡子規の俳句分類は以上の二書に示唆される所が多かつたらう。)

個人主義

【解説】廣狹二義に解釋されてゐる。廣義には個人が自覺し、在來の傳統や因襲や環境、又は既成宗教乃至道德等一切の束縛から脱出して、思想をも感情をも自由に解放し、そして己の權利を獲得すべきだと主張する近世思潮中最も重要な一面である。狹義には國家又は他の集團の利益よりは寧ろ個人の發展を眼ざす政治的及び經濟的組織に與へられた名稱である。それ故、これは集産主義若しくは社會主義と對立する思想である。

【文藝上の個人主義】思想上の個人主義は、ルソーに於て感情的に最初の芽生えが見られ、マックス・スチルナー、キョルケゴール、ニーチェに至つて思想的にも圓熟し、やがてヘンリック・イブセンに於て、文藝的に具象化されたのである。彼がその謂ゆる問題劇で取扱つた宗教問題も、婦人問題も、新舊思想の衝突も、要するに個人主義を徹底させるための命題に過ぎなかつた。例へば「人形の家」は、家庭組織に對する婦人の自覺的反抗と、新しい婦人解放運動の豫言であるが、而もその根柢にはキョルケゴールあたりから脈を引いた

自我發展主義が明かに横はつてゐる。併しイブセンが最も徹底した彼の個人主義的思想を展開したのは劇詩「ブランド」である。この作の主人公ブランドは、「一切が無か」と叫び、「妥協の精神は悪魔である」と豪語して、あらゆる人々に反抗し、あらゆる世上の因襲を破壊し、あらゆる權威を斥けて、ただ一念自我の強烈な要求に従つて人生の飛躍を試み、終に悲劇的最期を遂げはしたが、而もなほ自我建設のための惡戰苦闘を胸の奥底から讚美せずにはゐられなかつた。【批評】個人主義は十九世紀文明を背負つて立つたブルジョアジイの中心思想であつた。それだけに單に政治といはず、經濟といはず、道德や藝術の領土に於ても常に指導的精神であつた。併し二十世紀に入るや、この指導精神は次第に力を失ひかけて來て、今や社會主義的思想がこれに取つて代らうとしてゐる。

故人春夏秋冬

【編者】大須賀乙字【刊行】春之部明治四十二年四月、夏之部同年六月、秋之部同四十二年九月、冬之部同年十月。なほ大正七年に合本が出た。【内容】元祿時代の俳句を主として天明時代の句を加へたもので、天明の句は曉臺七部集までを限りとしてゐる。その材料は、帝國大學圖書館・上野圖書館にある句集全部、碧梧桐・觀魚の藏本及び編者の多年見るに從つて手録したものによつたといふ。排列の順序は、樗良・太祇・蕪村等の句を天明期の初めに置いて、元祿の句と區分してゐる。【價値】批判力の鋭い乙字が苦心撰輯したものに、比較的佳作に富む點に於て他に比すべきものがなからう。そこに又、一選句は評論の一部なり」といふ彼の態度が窺はれる。元祿・

天明の秀作がこれに盡きてゐる譯ではなく、又中には人々の觀る所によつて削り去るべきものと思はれる作もあらうし、正さるべき誤謬もないではない。けれども、それ等は自ら「今後佳句を得るに從ひて補充せんとす(中略)」尙異本を得ば校合を怠らざるべし(凡例)といつてゐる通り、この集の成立年代に於ては免れ難いところであつたらう。なほ集成に際し天明期に止めたことについては、「別に理由なし」と云つてゐるが、天明以後にも採るべき句がない譯ではないから、この點に不備があつたといへる。併し今日までに出た古人類題句集中の白眉であることは疑ない。俳書堂關係同人によつて本書の輪講會が續けられ、その筆記が次々刊行されてゐる。

小杉天外

【本名】小杉爲藏【閱歴】慶應元年九月、秋田縣六郷町に生れた。少年時代には熊谷松蔭、岩谷順太郎等の塾に入つて漢學を學んだ。明治十九年東京に出で、英語、漢文を修める傍ら英吉利法律學校へ通學したが、ついで専心英語を研究すべく國小民英學會に入學、次第に文學に親しんだ。二十四年、處女作「醉骨録」を發表し、翌年、齋藤綠雨と共に著の「反古袋」を上梓した。その中の「五つ紋」「哲學者」二篇が彼の作だ。同年十二月、國會新聞に「改良若旦那」を掲載し、爾後、二十七年、八年に亘つて、各々數篇の作を發表したが、漸く文壇の注目を惹き始めたのは、二十



小杉天外 次弟に文學に親しんだ。二十四年、處女作「醉骨録」を發表し、翌年、齋藤綠雨と共に著の「反古袋」を上梓した。その中の「五つ紋」「哲學者」二篇が彼の作だ。同年十二月、國會新聞に「改良若旦那」を掲載し、爾後、二十七年、八年に亘つて、各々數篇の作を發表したが、漸く文壇の注目を惹き始めたのは、二十

九年「文藝俱樂部」に、「改良若殿(別項)」を寄せた頃からである。翌三十年春、後藤宙外等と丁酉文社を設立し、雜誌「新著月刊(別項)」の編輯同人となつた。その後、三十二年、「蛇いちご」を上梓した頃から、次第に新境地を開拓し、同じ年に書いた「三枚かさね」なども好評だつた。次いで「初姿」を起稿し、三十三年に出版した。この頃の彼は、硯友社(別項)一派の單なる寫實に憚らず、佛蘭西のゾラの寫實主義に倣ひ、科學者の如き態度で人生を研究し、實驗し、その得たところをそのまま記録すべきものであると主張した。「初姿(別項)」は、その主張を具體化しようとしたもので、ゾラのやうな正しい認識がないと云ふ非難はあつたが、兎にかく、既成文藝に反抗して、思ひきつた新潮流をきり開かうとしたその主張と、善と美の觀念を排して、眞なるものにのみ縋らうとする大膽な描寫とは、當時の文壇に異常な衝動を與へずには措かなかつた。「初姿」の成功と共に、續篇として、「にせ紫」「戀と戀」等を公にし、三十四年「はやり唄(別項)」を出したが、これで彼の主張が愈々鮮かに、描寫も益々精細となつて、彼の名は一段の重さを加へた觀があつた。三十六年二月、讀賣新聞に長篇「魔風戀風(別項)」を、續いて約四百回の長篇「ゴブシ(別項)」を、四十一年、更に「長者屋」を同新聞に掲げて、何れも讀者から非常な歡迎を受け、文壇の寵兒となつた。四十一年、友人と協同して、月刊雜誌「無名通信」を發行した。全紙面を匿名の評論で満たした奇抜な體裁であつたが、永く續かなかつた。四十三年、報知新聞に入社、年々同紙のために創作の筆を續け、大正三年に及んだ。その間、同紙上に公にしたのは、「伊豆の頼朝」

九等戸(上々戸、上中戸、上下戸、中上戸、中中戸、中下戸、下上戸、下中戸、下下戸)、口數、老少六等(黃甲女三、少男女十六、中男女二十歳以下、天平勝實、歳以下、歳以下、九年十八歳以上を中男とす、丁男二十一歳、天平勝實九年、老男六十一歳、天平老丁とし、殘疾、者男六十六歳、天平實字一、疾三等(殘疾、癡疾、篤疾)、課口(正丁、次丁、中男、殘疾)、不課口(皇親、三位以上の父、祖、兄、弟、子、孫)、黃少、者、癡疾、篤疾、妻、妾、家人、奴婢等の數を記載し、次に各戸の戸主以下家族奴婢等の名前を列記して、各々老少、疾、課、不課等の別を注し、最後に國司が連署する。右の戸籍は令

「落花帖」「初舞臺」等であつた。爾來、専ら著作生活に入り、大正十二年頃まで、「銀笛」「靈鐘」「三代地獄」「片假名祭」等の長篇を「婦人世界」に發表し、十三年、「太陽」に一年に亘つて「狼煙」を、翌十四年、「講談俱樂部」に「眞空鈴」を連載した。その前後、漸く戯曲に興味を感じ、昭和二年三月、「中央公論」に「腰越狀」を發表し、同四年三月の同誌に「筑前守義興」、同じ年に出來た戯曲「ちんば念佛」は、「改造」七月號に發表した。

波瀾が益々華やかになつて行くにつれ、それが自然と興味中心に傾いて、意識せぬうちに通俗作家に墮ちて了つた。若し彼が自然主義宣言當時の冷徹な態度と、藝術的良心で進んだなら、たとひ後に傾向は變つても、彼の作品は、「魔風戀風」「ゴブシ」程度に固定して了はなかつたに違ひない。とはいへ、彼の自然主義運動は決して無意義ではなかつた。紅葉以來の寫實主義も、もう臺が立つて行き詰つて了ひ、家庭小説は通俗に妥協する以上の何ものでもなく、行き詰つた寫實主義が、何と

【御成敗式目】「音階」を見よ。
【戸籍】「現今に於ては、戸籍は

【御成敗式目】「音階」を見よ。
【戸籍】「現今に於ては、戸籍は

地、戸主・家族の生年月日、戸主又は家族とな
り、或はその地位を離れた原因及び年月日、
戸主・家族の父母の氏名及びその父母と戸主・
家族との続柄、戸主と前戸主との続柄及び家
族と戸主との続柄などを載せたものである。

各々その特色を發揮したのであ
つた。その間に在つて巨勢の畫風の如きも、
或は一特質を持つてゐたかも知れないが、微
證ある遺作がないのでこれを確認し難い。鎌
倉時代に入つては、有家・有房・有久等の名が
開いてをり、とにかく一派として存続してゐ

二人を遣つてつやを迎へさせ、倉の二階に吊
し針を刺して責める。この時茶屋の亭主はつ
やを同伴し來り、これを聞き、驚いて倉に入
りて見れば、つやはあらで伊勢白粉の箱で
あつた。(二) 近江水口の三河屋長兵衛、百
姓久兵衛に三十貫を與へて商賈をさせた所、

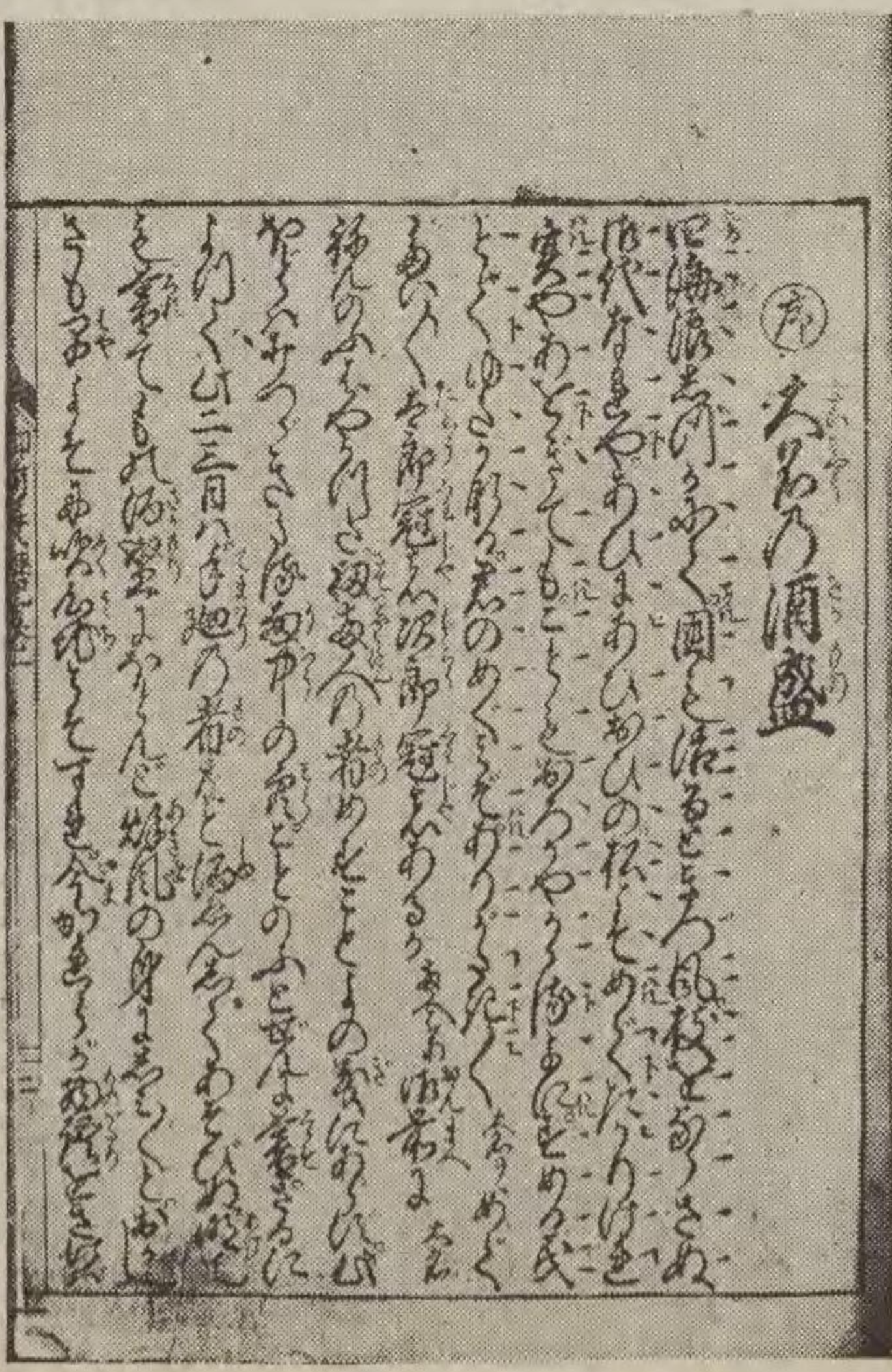
した。(卷三)(一) 平野を通る順禮の裾に脚
襪が食ひついたので、振り返つて見ると、脚
襪は地獄の苦しみ語り、順禮の胸札に我が
名を記して、三十三所の巡拜を頼んだ。(二)
筑紫の木綿屋庄兵衛、行商から歸ると、女房は
殺されてをり、而も首がなかつた。お上に訴

へると、庄兵衛に疑がかゝつた。一老人の注
意に、國中の日傭を聞き糺して、豆腐屋の下
女の葬式の時、その棺が意外に輕かつたとい
ふ事實によつて檢べると、棺の中には下女の
首のみあつて胴はなかつた。木綿屋の女房と
豆腐屋が豫て姦通してゐた所に、下女が死ん
だので、下女の胴に木綿屋の女房の衣裳を着
せて、女房が殺されたと見せたのであつた。
(三) 嚴島の神主の娘玉千代、高間左近と乳母
のために誘拐されて入水したが、救はれて尼
となつた。この女に、嫁入道具といふ女訓の
書がある。(四) 伊波惣兵衛、無用の古物を愛
し、仁徳天皇の古冠、素盞鳴尊の杖、伊邪那
岐命の梳を持つて乞食をした。(五) 國守の命
を受けて芝崎藤藏、大阪に竹田近江の操人形
を求めに行き、歸途二つの箱を開けると、一
は釣鐘の下にゐた僧が煙草を喫み、鐘を撞き
て後焼け失せ、一はお山人形の三十餘り乗つ
た船を水に泛べたところ、人形悉く活動し、や
がて消滅した。藤藏は乞食僧になつた。(六)
宮城野の小右衛門、女房に別れて江戸に出で、
成功して富を得、別に女房を娶つた。國の女
房、この事を知つて、夜中、火となつて女を
食ひ殺したと夢見て覺めると、口邊に血がつ
いてゐた。(七) 國守が駒田主水といふ倭臣を
寵して賞罰に私が多かつた。次郎助といふ重
臣が諫言をするが聽かれなないので、次郎助は
小姓脇坂吉之助と其會に託して主水を招いて
討つた。國守怒つて二人に切腹を命じた。藩
士は二人に同情して、密かに落してやつた。
國守の悪業募つて國遂に斷絶した。○板橋附
近の街道の樹に蟬が鳴いてゐると、蟬螂がそ
れを覘ふ。それを又雀が狙ふ。その雀を獵夫
が吹矢で捕へようとし、着物の露に濡るゝも

知らない。僧これを見て人事を觀する。○有
馬の湯女、京の松屋某と契る。松屋迎ふべ
き期を約して京に歸る。期が來ても松屋は約
を果さない。藤、恨んで入水した。その日か
ら松屋病みつき、夢に藤の姿が現れて怨する
ので、失神すること毎夜である。神主祓をす
れば病癒えた。○作者自身の獨棲の興。○太
平廣記中の話。或る人妻の頭の大瘤から猿が
出て、報恩のため靈藥を教へた。○十一歳の
童、入江九軒の玉手箱といふ書を書いた事。
それからこの玉手箱の中から、狐の蛇女に化
した事、人死して魚に化した事、栗栖野妖物
の事の三條を抜き、總論と題し、書肆との問
答體にして、柔い書物の流行したのも過去と
なつて、當世は賢賢の言などを入れねば喜ば
ぬ事を述べて、暗に西鶴を貶し、併せて一風
の「御前義經記」をも難じてゐる。
【批評】西鶴の端物に似て、形は蕪雜であり、
内容もまた雜駁である。寧ろ隨筆に似たもの
である。文學的價値は言ふにも足りないが、
都の錦を知るべき文學史料として興味あるも
のである。中に伊藤仁齋・宍戸鐵舟(作者自身)
を稱揚した所、京方の政事に對して不平の氣
を吐いた所、「余が武者修行の折から云々」の
一句、西鶴一風に對する評言など、この意味
に於て注意すべきである。【藤村】
御前義經記 浮世草子 八册
【作者】浮太郎冠者實名與志と署してあるが、
西澤一風である。【名稱】流と角書がある。
序と見るべき第一章に或る大名が徒然の餘
り、太郎次郎の冠者を召して讀ませた風流義
經を、大名の前に讀んだため「御前義經記」と
改めるといふ意が述べてある。【刊行】奥に
「元祿十三辰歲三月大吉祥日」とある。【諸本】

近世文藝叢書・浮世草子集(近代日本文學大
系・日本名著全集)所收。
【梗概】(卷一) 鞍馬山入、夢のみなしこ
(二) 面影うつる東光坊。幼少の頃父に別れて
母に育てられ、五歳の時鞍馬山中に棄てられ
た元九郎今義、今年十二歳になり、柴木を商
うて母を探してゐる。偶々若僧觀了と衆道の
契り深く、僧正ヶ谷で會つてゐる。(二) 面影
うつる伏見ときは、今義が或る夜の夢に乳母
の靈現れ、父は橋屋三津氏權之助義方といひ、
母は元鳥原の太夫常盤で、父は金山に失敗し、
名村八郎次との訴訟に負けて病死され、その
後、常盤は名村に挑まれたが、
應ぜずして尼となり、妹御の
みを連れて行方知れずになつ
た。三河國岡崎の越後屋善三
郎を頼つて、母君の行方を探
し給へといつて、家の巻物、
吳竹の横笛を遺して消え亡せ
た。元九郎はこれを聞いて、
母の行方を捜索しようと思ふ
が、觀了との誓ひを捨てかね
て惑ふ。(三) 面影うつる鬼一
が娘。元九郎は觀了を捨てて山を逃れ出で、
先づ三條で髪を改めて丸額となり、清水に詣
でて、十五ばかりの美女と戀仲となり、伴は
れてその邸に行く。これ名村八郎次の娘であ
る。(卷二) 鳥原の能、今様女郎辨慶 (一)
面影うつる辨慶。名村八郎次、鳥原の太夫若
紫を愛してゐる。一日能を催し、太夫操、辨
慶を勤め、義經役の太夫病氣となつて迷惑す
る。元九郎自ら進んで引受ける。これが縁と
なつて操、元九郎を戀する。(二) 面影うつる
あの法師。元九郎、操に會つて聞けば、操

はもと母常盤の禿であつて、母常盤は、いま再
び勤めに出てゐることを知る。(三) 面影うつ
るみさゝきが城。敵同然の者の家に奉公もな
らずと、今義は娘との誓ひを破つて名村の邸
を忍び出づる。途中、繫ぎ捨てた馬を盗み、
これに打乗つて東へ行く。(四) 面影うつる都
落。今義は山科で馬に狀を結び付けて返し、
十文字屋に休息して、熱病に罹つて苦しむ。
こゝに觀了慕ひ來りて介抱する。(卷三) 東
海道、當世十二段 (一) 面影うつる舟辨慶。
今義、觀了に別れて海を渡る時、船、難に遭
うて動かない。觀了、卜してこれ名村の娘の
生靈の所爲と知りて祈る。偶々生靈水上に現
れて怨をいふ。祈の力で消え亡せる。(二) 面
影うつる似せ山伏。觀了、今義追手を恐れ、
姿を比丘尼に變へて草津を出て行く。こゝは
義太夫節淨瑠璃道行に綴つてある。(三) 面影
うつる山中ときは、兩人宿屋に着くと、悪者
數人が酒を飲んでゐる。比丘尼姿の二人を見
て、無理に唄を歌はせた上、その夜二人の悪
者二人の室に忍んで來たが、二人は隠れてゐ
たので、更に次の室に忍び、西國の武士に討
たれる。二人の比丘尼はその夜の中に庄野ま



(頁初) 記經義前御

で行く。(四)面影うつる義朝の御事。桑名の渡船に女舞小勝が乗り合せ、小勝望まれて義朝最期の物語を舞ふ。陸に上る時乗合の一人岡崎の娘、小勝に金を與へて行く。二人はこの娘の後を追ふ。(五)面影うつる浄るり姫。岡崎の善三郎の家に着きて、二人、件の祭物を見せる。善三郎二人を歡待する。娘今義を口説いて戀仲となり、腰元また觀了を口説く。

【卷四】江戸吉原、傾城操。(一)面影うつる土佐房正存。二人は娘と腰元に惜しい袂を分ち善三郎に囁き、江戸を指して出發する。ここに鞍馬の僧、觀了を捕へに來りて善三郎の店に憩ふ。休齋といふ者謀を以て彼を京に追ひ歸す。二人は江戸三星屋勘七が使に迎へられて江戸に行く。(二)面影うつる平が館。勘七の宅に着いて、増上寺の父の墓に詣り、その歸途、小柴庵に立寄る。こゝに尼二人が身の上を語つてゐる。一人は京の妓、三津氏權之助の妾として江戸に伴はれ、主人の死後尼となつたもの。一人は江戸の妓小紫で、同じく三津氏の馴染で、その死後やはり尼となつたもの。この話を聞いて二人は三津氏の子であることを告げる。兩妓は明日吉原で三津氏の追善を行ひ、操・手品の法樂ある由を話して、共に行くやうに誘ふ。(三)面影うつる笈さがし。三津氏追善の傾城操の催があり、太夫ども人形を遣ふ。江戸の役者色修行のため山伏姿で京に上る。關所に留められ、笈を探されたが、言ひ抜けて通る筋である。この條は淨瑠璃詞章で綴つてある。(四)面影うつる義朝の幽霊。追善の夜、元九郎揚屋に於て夢に父の靈に會ふ。父は冥途の苦難を話し、西國にゐる妹、大阪新町大阪屋に勤むる母常盤を助けよと頼む。(卷五)難波津風呂屋、勤

進帳。(一)面影うつる佐藤が館。元九郎、勘七に夢の告げを語り、大阪に下らうとし、元服して名を九郎次郎といふ。觀了も還俗して伊勢之丞といつて、九郎の後見をなし、兩人出發する。(二)面影うつるあづませつたい。大磯虎が石で、夢に虎少將の靈が現はれ、戀のせつなさを歎する。(三)面影うつるれいせいぶし。岡崎なる善三郎の娘は今義を戀ひ病となつたところに今義訪ね來る。娘は腰元と今義の心中を試さうと、娘は戀に死んだと告げさせる。今義はこれを知つて、伊勢之丞に、今義は江戸で妓を身請けして、今は娘に心はないといはせる。後、互に真相を知る。今義は慕ふ娘に別れて大阪に下る。(四)面影うつるあたかくわんじん。今義は大阪に着き、大寄せとて風呂屋十二軒から、十二人の妓を招きて安宅の能を演じ、女達に懺悔をさせる。この條、能狂言の形で書いてある。(卷六)新町の女郎、八島の素讀。(一)面影うつるみをのやま清。千歳といふ妓小間物賣に負つた借金に困つてゐるのを、今義が救つてやる。こゝに景清の鑑引を見せてある。(二)面影うつるさかろのいこん。今義、菅原といふ妓の演ずる義經記八島の講談を聴く。この條は講談で書いてある。(三)面影うつる源氏の繪合。義經記講談の菅原に會つて、今義、母の繪姿を示し、この繪の妓に

下は佐々木弘綱の寫本に據る。信綱の序文がある。【解説】本書は、美石が仕へてゐた三河の吉田侯の内命によつて撰したもので、恐らくは「後撰集」を全部註解したものであらう。註は先づ本文を諸歌集に照らして考勘し、作者の傳を記し、詞書並びに歌を註し、頭に宣長の「詞のつかね緒」を書き加へたのである。参考に資したものは、後撰集正義・八代集抄、奥義抄・顯註密勘・僻案抄・八雲御抄、河海抄、花鳥餘情・弄花抄、孟津抄等を初め、契沖・餘材抄・改觀抄等、眞淵(古今集打聽萬葉考)、宣長(古事記傳・橋千蔭(萬葉集略解)・本居大平(師翁云と等諸家の研究を引き、石原正明・石塚龍

ここに觀音兩人を救うて海上に現れ、眞の妹は吉野であることを告げる。一同喜び、大阪に歸り、吉野を身請けして伊勢之丞の配とし、母と二夫婦同棲する。

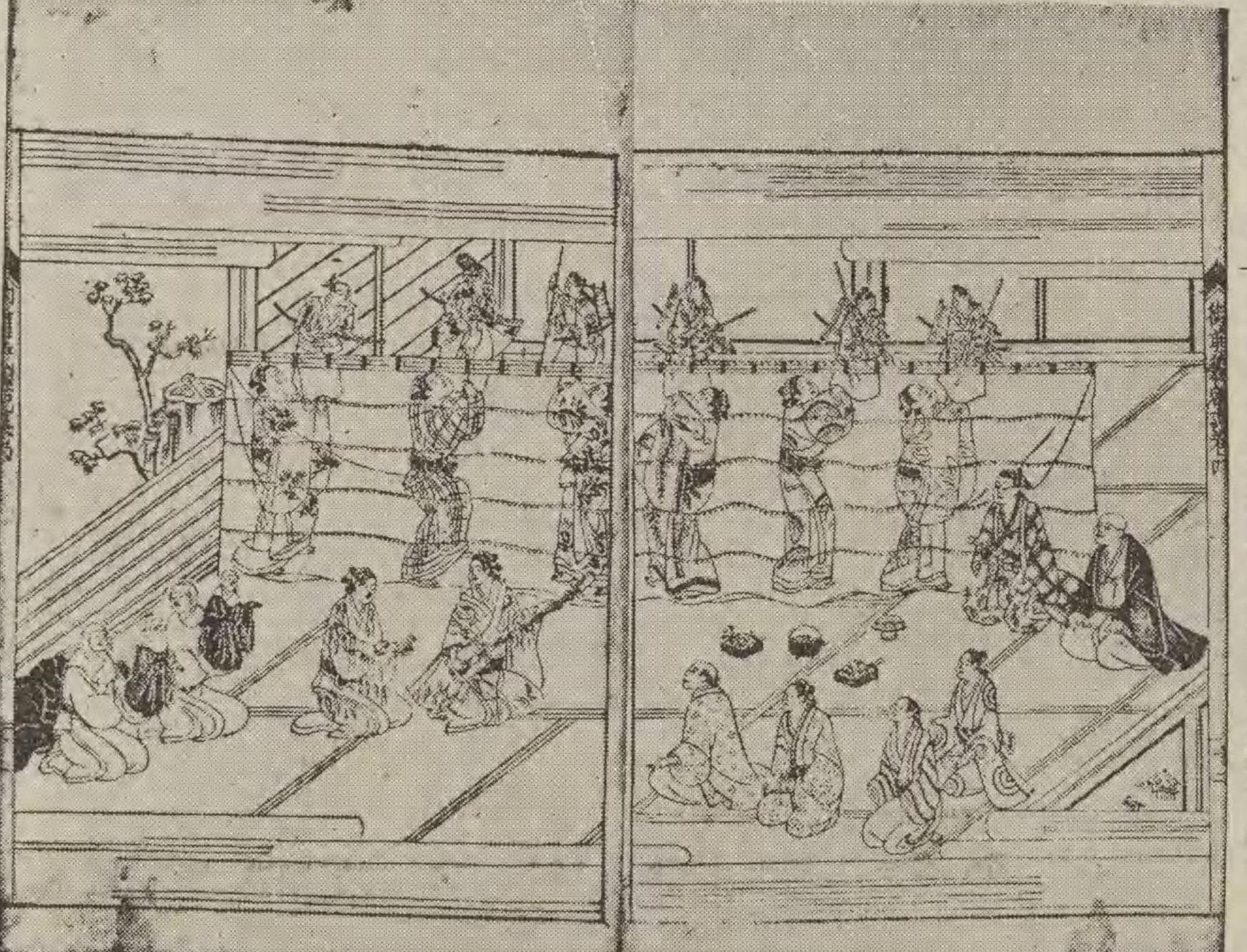
焦れて會ひに來たと告げる。菅原、それは自分が若い頃の姿であると告げたので、今義は菅原が母であることを知り、直ちに伊勢之丞をして身請けの交渉をさせると、菅原は、身請けの先約があるといつて斷る。(四)面影うつる鎌倉の御所。今義は訴狀を上り、くつわ

かに逃げる。法師は自殺する。これから千歳の全盛衰へて、室に鞍替へとなる。(二)面影うつるしづかが涙。千歳は今義に身の上を語りて室に行く。今義これを憐み、母に乞うて下關に同行しようとする。母もまた子に別れるを望まず、同道する。(三)面影うつる六條通。今義は室の小薩摩(元の千歳)に馴染みて下關に行かないので、伊勢之丞は、假りに大盡となり、小薩摩を揚げ詰めにしてせく。母、妓を身請けしてやる。(四)面影うつるよしの合戦。こゝに小薩摩が客千里屋源七、身請けのことを聞いて、己が仲間の不名譽とし、仲間を語らつて小薩摩を奪はうとする。伊勢之丞は一行を先に上船させ、自分一人踏み留まつてかれ等を欺いて一行に追ひつゝ。(卷八)下の關、うつゝの高館。(一)面影うつる西國の咄し。今義等は下關に下り、繪姿を立て、代官に訴へて妹を探し求める。(二)面影うつる港のうはさ。大商人下關に來り、遊女の大奇せをなして、「傾城佛の原」を演じさせる。今義等は見物に行く。(三)面影うつる當世の事。梅川文藏といふ者、妓奥州に親しむ。口説のために今川といふ妓を揚げる。これがために、兩妓の争となり、四五日遠ざかつてゐる中に奥州は身請けされる。文藏失望して出家するといふ筋の狂言をなす。(四)面影うつるよしつね最期。小薩摩、今義におん身の探し給ふ女は、若しや十一面觀音の像を所持するものではないかと聴く。今義、然りと答へると、それならば大阪住吉野の吉野に相違ないと教へる。今義直ちに大阪に歸る。その途で、小薩摩は、自分こそその妹である。知らずに兄妹夫婦となりしことの今更恥づかしと遺言して入水する。今義もその跡を追ふ。そ

和歌集聞書注一巻、奥に表紙裏書云として「此書中院入道大納言爲家所令撰作也」と記してゐる。圖書寮・内閣文庫(和學講談所藏)・外題は後撰和訓集註・阿波國文庫(外題は後撰注)等藏。群書一覽にいふ後撰抄一巻はこれか。【解説】集中難解の歌百七十六首、事項二十五に就いて註を加へたもので、終に「古今集」から「千載集」に至る七歌集の戀選を略説し、「後撰集」の成立、並びに證本に就いての記録を載せてゐる。註に引く所は、前説・古説・或説・清輔説等にて前説(僻案抄)が最も多く、古説又は清輔と併叙した場合もあり、「萬葉集」「大和物語」「源氏物語」「浦島子傳」「長明無名抄」等を

和歌集聞書注一巻、奥に表紙裏書云として「此書中院入道大納言爲家所令撰作也」と記してゐる。圖書寮・内閣文庫(和學講談所藏)・外題は後撰和訓集註・阿波國文庫(外題は後撰注)等藏。群書一覽にいふ後撰抄一巻はこれか。【解説】集中難解の歌百七十六首、事項二十五に就いて註を加へたもので、終に「古今集」から「千載集」に至る七歌集の戀選を略説し、「後撰集」の成立、並びに證本に就いての記録を載せてゐる。註に引く所は、前説・古説・或説・清輔説等にて前説(僻案抄)が最も多く、古説又は清輔と併叙した場合もあり、「萬葉集」「大和物語」「源氏物語」「浦島子傳」「長明無名抄」等を

和歌集聞書注一巻、奥に表紙裏書云として「此書中院入道大納言爲家所令撰作也」と記してゐる。圖書寮・内閣文庫(和學講談所藏)・外題は後撰和訓集註・阿波國文庫(外題は後撰注)等藏。群書一覽にいふ後撰抄一巻はこれか。【解説】集中難解の歌百七十六首、事項二十五に就いて註を加へたもので、終に「古今集」から「千載集」に至る七歌集の戀選を略説し、「後撰集」の成立、並びに證本に就いての記録を載せてゐる。註に引く所は、前説・古説・或説・清輔説等にて前説(僻案抄)が最も多く、古説又は清輔と併叙した場合もあり、「萬葉集」「大和物語」「源氏物語」「浦島子傳」「長明無名抄」等を



(畫挿四卷)記經義前御

て、その中に吉野といふ妓が身請され、殿の仰せを受けて、物語をなすために「曾我物語」を讀んでゐると、夢に男が現れて、「略曾我二代男」といふ書を授けた。見ると、當時京・江戸・大阪に有名な遊蕩人の事を綴つたもので、曾我兄弟そつくりであつた。これを殿に獻ずると、殿は六人の文筆の才ある家來に命じて六卷に綴りかへさせたのが、この書である。西澤朝義が、これを取次ぐといふ意になつてゐる。

【梗概】「伊藤の祐親調伏のうつしゑ」後藤經成、妓高間を愛する。所がこの女には市野屋十郎といふ間夫があるので他の客の意に従はな。經成、豊手小太(三命)て十郎を開大

【梗概】「伊藤の祐親調伏のうつしゑ」後藤經成、妓高間を愛する。所がこの女には市野屋十郎といふ間夫があるので他の客の意に従はな。經成、豊手小太(三命)て十郎を開大

【梗概】「伊藤の祐親調伏のうつしゑ」後藤經成、妓高間を愛する。所がこの女には市野屋十郎といふ間夫があるので他の客の意に従はな。經成、豊手小太(三命)て十郎を開大

【梗概】「伊藤の祐親調伏のうつしゑ」後藤經成、妓高間を愛する。所がこの女には市野屋十郎といふ間夫があるので他の客の意に従はな。經成、豊手小太(三命)て十郎を開大

は淨瑠璃詞章で綴つてある。(四)面影うつる義朝の幽霊。追善の夜、元九郎揚屋に於て夢に父の靈に會ふ。父は冥途の苦艱を話し、西國にゐる妹、大阪新町大阪屋に勤むる母常盤を助けよと頼む。(巻五) 難波津風呂屋、勤

ここに觀音兩人を救うて海上に現れ、眞の妹は吉野であることを告げる。一同喜び、大阪に歸り、吉野を身請けして伊勢之丞の配とし、母と二夫婦同棲する。

【構想】「御前義經記」と題してゐるが、「義經記」の雛案ではない。「平家物語」「義經記」等の義經傳説の主要なる部分を取つて、これを近世の町人生活、好色生活に雛案したものである。内容よりは、説話雛案の上に興味を求めたものである。各章に「面影うつる云々」の見出しを設けて原傳説を一々想起させて、その雛案の即離の間の一種の興味に重きを置いたものである。それと共に表現描寫の外觀上の意匠に少からざる用意を持つて書いたと見え、先づ第一に序の趣向を凝らし、卷三の二には淨瑠璃道行文を用ひ、卷四の三には操人形に淨瑠璃詞章を用ひ、卷五の四には能狂言、卷六の二には講談、卷八の三には歌舞伎を用ひてゐるなど、實に意匠に苦心慘澹の趣が看取される。かゝる意匠は彼の他の作、「風流今平家」「傾城武道櫻」(各別項)などにも見えてゐて、一風の得意とした所であつたと思はれる。作の價値は高くないが、一風の讀物の代表的なものであると共に、西鶴の讀物から八文字屋の續物への展開の中途に在つて、兩者を關係づけてゐるものとして、歴史的に看過されない作品である。

【藤村】
後撰集新抄 中山美石 註釋書 二十卷 別記一卷 〔著者〕中山美石 〔成立〕文化九年の序がある。〔諸本〕(一)舊刻本九册 文化十一年刊。卷一から卷十四迄と別記との十五卷。(二)歌書刊行會本八册、明治四十四年より大正元年に互つて刊行。二十卷の内卷十七・十八の二卷、及び別記を缺く。卷十五以

ある。(二)面影うつるさかののいこん。今義、菅原といふ妓の演ずる義經記八鳥の講談を聴く。この條は講談で書いてある。(三)面影うつる源氏の繪合。義經記講談の菅原に會つて、今義、母の繪姿を示し、この繪の妓に

下は佐々木弘綱の寫本に據る。信綱の序文がある。【解説】本書は、美石が仕へてゐた三河の吉田侯の内命によつて撰したもので、恐らくは「後撰集」を全部註解したものであらう。註は先づ本文を諸歌集に照らして考勘し、作者の傳を記し、詞書並びに歌を註し、頭に宣長の「詞のつかね緒」を書き加へたのである。参考に資したものは、後撰集正義、八代集抄、奥義抄、顯註密勘、僻案抄、八雲御抄、河海抄、花鳥餘情、弄花抄、孟津抄等を初め、契沖、餘材抄、改觀抄等。眞淵(古今集打聽、萬葉考)、宣長、古事記傳、橋千蔭(萬葉集略解)、本居大平(師翁云として)等諸家の研究を引き、石原正明、石塚龍磨、夏目魏磨、入江昌喜等先輩友人の意見を交へ、又自らあらゆる古文獻を涉獵し、綜合的に考察を進め精緻を極めてゐる。註釋の文は宣長の「古今集遠鏡」に倣ふことを以て理想とし、眞淵の「百人一首初學」に倣つたが、なほ俗言・諺言を用ひた。卷頭には大平の序文、著者の總論があるが、「後撰集」の性質を十分に明かにしたものと注意を要する。別記は「秋中卷、法皇と伊勢御との御贈答に一首落たりといふ論」以下八條を記してゐる。

【参考】國文學研究史 野村八良 (西下)
後撰集正義 中山美石 註釋書 一卷一册 〔著者〕昇蓮か。中山美石は爲家とする。【成立】嘉元二年か【諸本】續群書類卷四五四所收。校合に用ひられた南葵文庫本は和學講談所舊藏で東京帝國大學藏。奥書の内永祿三年の條を缺く。【類書】(一)後撰集開書一卷、卷頭に建長七年十二月十八日始之とあり、奥に文明十六年二月因州の旅館にて偶然に發見して書寫した旨、權中納言藤、實隆かの奥書がある。平松家舊藏。京都帝國大學藏。(二)後撰

の思はく違ひで、五百四十句で身請けの事が決る。(卷七) 播州室の港、吉野忠信 (一)面影うつる和泉が城。宗蓮といふ僧、千歳に馴染みて零落し、心中を迫る。千歳は今義に救はれた思に酬いなくて死するに忍びず、密

和歌集開書注一卷、奥に表紙裏書云として「此書者中院入道大納言爲家所令撰作也」と記してゐる。圖書寮、内閣文庫(和學講談所舊藏、外題は後撰和語集註)、阿波國文庫(外題は後撰注)等藏。群書一覽にいふ後撰抄一卷はこれか。【解説】集中難解の歌百七十六首、事項二十五に就いて註を加へたもので、終に「古今集」から「千載集」に至る七歌集の戀選を略説し、「後撰集」の成立並びに證本に就いての記録を載せてゐる。註に引く所は、前説・古説・或説・清輔説等にて前説(僻案抄)が最も多く、古説又は清輔と併叙した場合同あり、「萬葉集」「大和物語」「源氏物語」「浦島子傳」「長明無名抄」等を引用し、「古今集」に見える事項は註を省いてゐる。「開書」は當座の開書の形式を存し、行成自筆本に依つた朱の勘物がある。「開書注」は「開書」と内容は等しいが、形式が整頓されてゐる。「開書注」が爲家の撰作ならば「開書」も爲家が誰かに傳授したものであらう。然るに「正義」は二條家の説のみを嚴に守つたものではなくて、各派の説を集めて最も公平に取扱ひ、進んでは二條家の説を難じてゐる場合もある。而して「正義」の奥には、乾元元年「古今」「後撰」兩集の庭訓を受けてゐるにも拘らず、更に嘉元二年九月庭訓を受け、元應元年清言した旨、桑門昇蓮の奥書があるから、二條家の説のある理由が分り、これ等の年號は爲家歿後であるから、本書の撰者は爲家でないことも分る。然るに本書と「開書」及び「開書注」との混同から本書の撰者をも爲家としたのであらう。

【御前二代會我】西澤朝義(一風)【刊行】寶永六年春【名稱】冒頭に序文めいた一章があつ

で、その中に吉野といふ妓が身請され、假の仰せを受けて、物語をなすために「會我物語」を讀んでゐると、夢に男が現れて、「略會我二代男」といふ書を授けた。見ると、當時京・江戸・大阪に有名な遊蕩人の事を綴つたもので、會我兄弟そつくりであつた。これを假に獻ずると、假は六人の文筆の才ある家來に命じて六卷に綴りかへさせたのが、この書である。西澤朝義が、これを取次ぐといふ意になつてゐる。

【梗概】「伊藤の祐親調伏のうつしゑ」後藤經成、妓高間を愛する。所がこの女には市野屋十郎といふ間夫があるので他の客の意に従はない。經成、遣手小よしに命じて十郎を調伏させると、小よしは十郎に戀してゐるので、却つて高間を調伏する。「頼朝柏崎のうつしゑ」經成、土佐の左近之丞と共に、高間等を揚げて遊ぶところに、高間、小よしが呪ふので苦しむと惱み出す。小よし、色々辯解する。人々小よしを去らせ、館に歸る。「河津の三郎さいごのうつしゑ」高間の病狀が甚だ悪い。禿の峰の・白雲兩人、大に悲しむ。かゝるところに、十郎は身を讀賣に賣し、傾城伽羅三味線と題した歌を賣りに來て、高間に最期の覺悟を勧め、未來の契を約する。「一萬箱玉のうつしゑ」高間が死ぬ。峰の・白雲二人、高間の墓參をして經成に逢ひ、高間の敵は後藤・小よし兩人なることを知る。小よしの讒訴に由つて、二人の禿達は親方に監禁されたのを、重山といふ妓が親方に乞うて兩人を預る。「虎少將禿立のうつしゑ」十郎、峰の・白雲を訪うて故人を偲ぶところに、小よしが來て十郎に怨をいひ且つ挑む。こゝに又經成來り、十郎に向つて、我が妻小よしを奪ふ不義者と罵り、

ごせんし ごせんし

家來をして打擲させ、小よしを連れて去る。

〔祐經箱王對面のうつしゑ〕左近之丞、經成等遊興の席に峰の大夫となつて出る。經成が小よしと會つてゐる所を、白雲、まな箸で刺さうと思ひ峰の謀る。峰の、これを止めて次の機會を待たせる。〔天磯の虎戀慕のうつしゑ〕峰の十八歳、白雲十五歳となり、後援者を求める。十郎、峰の遺書を指示。

この遺書で、峰の白雲の兩人は高間の妹であることが分り、十郎の眞心を感じて、峰の十郎に妻にしてくれと頼む。十郎は故高間への義理で斷る。かゝる所に現れた高間の幽霊の勸めで、二人は始めて夫婦の契約をなす。峰のは二代高間となる。〔母時宗勸當のうつしゑ〕足馬十三郎といふ少年、十郎と兄弟分の仲であつたが、三浦といふ者、また十三郎に横戀慕をしたので、十三郎は危害の十郎に及ぶのを恐れ、元服して五郎四郎と名を改め、態と身を持ち崩し、白雲が妓山路となつた突出しより親しむ。十郎、五郎四郎に勸當状を送る。山路、五郎四郎と夫婦の約をなし、折を見て十郎との仲を直してやることを約する。

〔朝比奈時宗刀比のうつしゑ〕綿屋吉六といふ七十老人、山路を愛する。山路は五郎四郎の方に行つて、老人の方に出ない。淺野といふ者貫ひに行つて尺八を引き合ふ。五郎四郎を同道して、山路、吉六の室に行く。益を思ひざしにせよと命ぜられ、五郎四郎にさす。吉六その心意氣を感じて、二人を快く會はせる。〔助成時宗小袖乞のうつしゑ〕牡丹の花の盛りに、高間、十郎に向つて、山路、五郎四郎の心事を訴へて勸當の赦免を請ふも聞かない。十郎、山路等の誠心を見て始めてこれを許す。〔富士の御時勢のうつしゑ〕左近大

盡等住吉に呂白數十人を伴れて遊ぶ。十郎、五郎四郎、高間、山路等を携へて、經成、小よしを窺ふ。一度は多くの女郎に支へられ、一度は高間、躓いて失敗する。〔曾我兄弟形見送りのうつしゑ〕左近等、或る家に泊り、大酒宴をなし、明日なほ一日逗留しようとする。高間、山路、愈々この機に敵を討たうと思ひ、親方朋輩等に遺書と記念品を贈らうとして文を認め、十郎、五郎四郎の家來國六、團藏二人が來て、助勢しようといふのを無理にかへす。〔鬼玉團三郎道行のうつしゑ〕二人の道行のうつしゑ、二人の道行があり、山路、高間と神前に矢立ての杉を射て、一二の枝に當てる。〔和田の義盛情のうつしゑ〕綿屋吉六、二女に寶刀を引出物として與へる。〔曾我兄弟夜討のうつしゑ〕高間、山路、十郎、五郎四郎と共に經成、小よしを討つ。〔曾我十番切のうつしゑ〕敵を討つて、名を揚げて歸らうとするところに、盜賊ありと呼ばはりて人々が騒ぐので、詮方なく遊女等を相手に十番切をなす。〔五郎時宗最後のうつしゑ〕左近之丞、四人を搦め捕る。代官四人を取調べる。十郎、五郎四郎は死罪に、高間、山路は命を救される。二女は十郎、五郎四郎に別れては生きる望なしといふ。十郎、五郎四郎は、我等の死後を申ふために、生きてくれと頼む。〔虎少將とんせいのうつしゑ〕二人に後れて、高間、山路、病の床に臥す。親方、二女を他に賣らうとする。綿屋吉六、これを憐みて共に身請けする。二女尼の姿になる。

〔構想〕本書は「寛潤曾我物語」(別項)と同じく「曾我物語」の説話を近世の好色・遊女の物語に變換し、敵討の武士精神を好色的の人情に引直したものである。かく本の説話を全く違

つた時代、違つた階級、違つた生活に引直したものであるから、可なりに無理のあることは已むを得ない所であらう。凡そ浮世草子に於ける古文學の雛案は「好色一代男」の「源氏物語」に於ける、「好色伊勢物語」の「伊勢物語」に於けるなどもあるが、一風に至つて著しくなつた。「御前義經記」(別項)「寛潤曾我物語」及び本書の如きこれである。西鶴の「二代男」はただ或るヒントを得たに過ぎないので、その興味も價値も全然その獨自のものであるが、一風のこれらは、原作の説話、事件の聯想を俟つて始めてその興が湧く。故にその價値も雛案の上に懸つてゐるといへる。即ち如何に巧みに變化し得てゐるかといふに在るから、原作を知らないものには、その興の半ばは失はるべきである。併しこれは單獨に浮世草子の上に於てのみ考へらるべきでなく、歌舞伎・淨瑠璃界のことと共に考へらるべきである。即ち歌舞伎・淨瑠璃に於ける曾我物の變化と、その趨向を共にすることを考へ合はせらるべきである。(曾我參照)

〔藤村〕

御前獨狂言 浮世草子 六册

〔作者〕西鶴【刊行】奥附に「寶永第二歳西五月吉日、書林江戸日本橋川瀬石町須藤權兵衛、京島丸通六角下ル町西村市郎右衛門彫刻」とある。

〔梗概〕書翰體浮世草子の一である。〔卷一〕(第一書) 遊女より馴染の客へ贈つて、自身の素性を明かにしたるもの。〔第二書〕惣嫁より馴染客への手紙で、町の情死沙汰、自分の身の上のことなどが書いてある。〔卷二〕(第三書) 遊女和州より客三七へのもので、昨夜の夢の氣掛りなることを知らせてゐる。〔第四書〕前信に次いで、夢判斷のことから、相

性のことなどがある。これに添へた遊女屋より三七宛の文は、浦島太郎の玉手箱など世にあるまじき物どもを、買ひ求めくれとの依頼状である。(第五書) 三七から和州への書で、今夜行かうと思へども、酔の紛れに飯焚女に手をつけたために請人に強請される事件が起つて行かれぬ。併し事件は金で決着を見たから安心せよとある。〔卷三〕(第六書) 三七から和州への書で、家内に病人ありて行かれぬ。清七の事を物語に綴らせたれば見よとて、清七が京より上關に行き、遊女戀山に馴染んで末の約束し、その儘にして京に歸つたところが、五日續いて戀山の幽霊が冥途から會ひに來た夢を見て心配してゐると、案の如く上關から使が來て、戀山が死んだことを知らせた。夢を見たのは戀山の死んで七日目からであつたといふ話が記してある。(第七書) 野郎瀧井六三郎から三七への書、二日酔になつたこと、三七の白人買ひをたしなめること、芝居のかはること、踊歌を贈ることなどが書いてある。又これに附して、金剛からの書があり、昨日の龜忽の詫、花代の禮、陰間共の噂が書いてある。〔卷四〕(第八書) 和州より三七への書、京にあつたこととて、富豪の一人娘が旅役者と駈落し、大阪で暮してゐるのに出逢ひ、二千兩の資金を與へて材木屋を開店させたことを報じてゐる。(第九書) 和州から三七への書、この頃廓にあつたこととて、音羽といふ妓が、馴染客北といふ男から、江戸でみなとといふ妓との間に子を設けて、これを里子にやつた話を聞き、音羽は客がその父であることを知つて、即夜自殺した。その遺した書置を載せてある。哀れ深いものである。(第十書) 三七から和州への書、親父が病氣に

を以て校合したもの。圖書寮藏。(三)片假名本一册は(e)を底本とし(h)を以て校合したもの。關戸家藏。昭和二年古典全集本所收。

(四)八代集抄本は(c)を底本とし(e)を參酌したもの。(五)天福本は定家が行成筆本を以て校合し、別段の差違のなかつた旨を記し、爲家が爲相に傳へる旨を記したものである。版本には八代集本(小二册、刊年未詳、肖柏校本)、同(大二册、正保四年)、文化八年版(小二册、同(豆本一册、寛政十年版(豆本一册)等がある。國歌

を以て校合したもの。圖書寮藏。(三)片假名本一册は(e)を底本とし(h)を以て校合したもの。關戸家藏。昭和二年古典全集本所收。

(四)八代集抄本は(c)を底本とし(e)を參酌したもの。(五)天福本は定家が行成筆本を以て校合し、別段の差違のなかつた旨を記し、爲家が爲相に傳へる旨を記したものである。版本には八代集本(小二册、刊年未詳、肖柏校本)、同(大二册、正保四年)、文化八年版(小二册、同(豆本一册、寛政十年版(豆本一册)等がある。國歌

を以て校合したもの。圖書寮藏。(三)片假名本一册は(e)を底本とし(h)を以て校合したもの。關戸家藏。昭和二年古典全集本所收。

(四)八代集抄本は(c)を底本とし(e)を參酌したもの。(五)天福本は定家が行成筆本を以て校合し、別段の差違のなかつた旨を記し、爲家が爲相に傳へる旨を記したものである。版本には八代集本(小二册、刊年未詳、肖柏校本)、同(大二册、正保四年)、文化八年版(小二册、同(豆本一册、寛政十年版(豆本一册)等がある。國歌

を以て校合したもの。圖書寮藏。(三)片假名本一册は(e)を底本とし(h)を以て校合したもの。關戸家藏。昭和二年古典全集本所收。

(四)八代集抄本は(c)を底本とし(e)を參酌したもの。(五)天福本は定家が行成筆本を以て校合し、別段の差違のなかつた旨を記し、爲家が爲相に傳へる旨を記したものである。版本には八代集本(小二册、刊年未詳、肖柏校本)、同(大二册、正保四年)、文化八年版(小二册、同(豆本一册、寛政十年版(豆本一册)等がある。國歌

を以て校合したもの。圖書寮藏。(三)片假名本一册は(e)を底本とし(h)を以て校合したもの。關戸家藏。昭和二年古典全集本所收。

(四)八代集抄本は(c)を底本とし(e)を參酌したもの。(五)天福本は定家が行成筆本を以て校合し、別段の差違のなかつた旨を記し、爲家が爲相に傳へる旨を記したものである。版本には八代集本(小二册、刊年未詳、肖柏校本)、同(大二册、正保四年)、文化八年版(小二册、同(豆本一册、寛政十年版(豆本一册)等がある。國歌

を以て校合したもの。圖書寮藏。(三)片假名本一册は(e)を底本とし(h)を以て校合したもの。關戸家藏。昭和二年古典全集本所收。

(四)八代集抄本は(c)を底本とし(e)を參酌したもの。(五)天福本は定家が行成筆本を以て校合し、別段の差違のなかつた旨を記し、爲家が爲相に傳へる旨を記したものである。版本には八代集本(小二册、刊年未詳、肖柏校本)、同(大二册、正保四年)、文化八年版(小二册、同(豆本一册、寛政十年版(豆本一册)等がある。國歌

を以て校合したもの。圖書寮藏。(三)片假名本一册は(e)を底本とし(h)を以て校合したもの。關戸家藏。昭和二年古典全集本所收。

を以て校合したもの。圖書寮藏。(三)片假名本一册は(e)を底本とし(h)を以て校合したもの。關戸家藏。昭和二年古典全集本所收。

(四)八代集抄本は(c)を底本とし(e)を參酌したもの。(五)天福本は定家が行成筆本を以て校合し、別段の差違のなかつた旨を記し、爲家が爲相に傳へる旨を記したものである。版本には八代集本(小二册、刊年未詳、肖柏校本)、同(大二册、正保四年)、文化八年版(小二册、同(豆本一册、寛政十年版(豆本一册)等がある。國歌

を以て校合したもの。圖書寮藏。(三)片假名本一册は(e)を底本とし(h)を以て校合したもの。關戸家藏。昭和二年古典全集本所收。

(四)八代集抄本は(c)を底本とし(e)を參酌したもの。(五)天福本は定家が行成筆本を以て校合し、別段の差違のなかつた旨を記し、爲家が爲相に傳へる旨を記したものである。版本には八代集本(小二册、刊年未詳、肖柏校本)、同(大二册、正保四年)、文化八年版(小二册、同(豆本一册、寛政十年版(豆本一册)等がある。國歌

を以て校合したもの。圖書寮藏。(三)片假名本一册は(e)を底本とし(h)を以て校合したもの。關戸家藏。昭和二年古典全集本所收。

(四)八代集抄本は(c)を底本とし(e)を參酌したもの。(五)天福本は定家が行成筆本を以て校合し、別段の差違のなかつた旨を記し、爲家が爲相に傳へる旨を記したものである。版本には八代集本(小二册、刊年未詳、肖柏校本)、同(大二册、正保四年)、文化八年版(小二册、同(豆本一册、寛政十年版(豆本一册)等がある。國歌

を以て校合したもの。圖書寮藏。(三)片假名本一册は(e)を底本とし(h)を以て校合したもの。關戸家藏。昭和二年古典全集本所收。

(四)八代集抄本は(c)を底本とし(e)を參酌したもの。(五)天福本は定家が行成筆本を以て校合し、別段の差違のなかつた旨を記し、爲家が爲相に傳へる旨を記したものである。版本には八代集本(小二册、刊年未詳、肖柏校本)、同(大二册、正保四年)、文化八年版(小二册、同(豆本一册、寛政十年版(豆本一册)等がある。國歌

を以て校合したもの。圖書寮藏。(三)片假名本一册は(e)を底本とし(h)を以て校合したもの。關戸家藏。昭和二年古典全集本所收。

(四)八代集抄本は(c)を底本とし(e)を參酌したもの。(五)天福本は定家が行成筆本を以て校合し、別段の差違のなかつた旨を記し、爲家が爲相に傳へる旨を記したものである。版本には八代集本(小二册、刊年未詳、肖柏校本)、同(大二册、正保四年)、文化八年版(小二册、同(豆本一册、寛政十年版(豆本一册)等がある。國歌

を以て校合したもの。圖書寮藏。(三)片假名本一册は(e)を底本とし(h)を以て校合したもの。關戸家藏。昭和二年古典全集本所收。

(四)八代集抄本は(c)を底本とし(e)を參酌したもの。(五)天福本は定家が行成筆本を以て校合し、別段の差違のなかつた旨を記し、爲家が爲相に傳へる旨を記したものである。版本には八代集本(小二册、刊年未詳、肖柏校本)、同(大二册、正保四年)、文化八年版(小二册、同(豆本一册、寛政十年版(豆本一册)等がある。國歌

を以て校合したもの。圖書寮藏。(三)片假名本一册は(e)を底本とし(h)を以て校合したもの。關戸家藏。昭和二年古典全集本所收。

(四)八代集抄本は(c)を底本とし(e)を參酌したもの。(五)天福本は定家が行成筆本を以て校合し、別段の差違のなかつた旨を記し、爲家が爲相に傳へる旨を記したものである。版本には八代集本(小二册、刊年未詳、肖柏校本)、同(大二册、正保四年)、文化八年版(小二册、同(豆本一册、寛政十年版(豆本一册)等がある。國歌

を以て校合したもの。圖書寮藏。(三)片假名本一册は(e)を底本とし(h)を以て校合したもの。關戸家藏。昭和二年古典全集本所收。

(四)八代集抄本は(c)を底本とし(e)を參酌したもの。(五)天福本は定家が行成筆本を以て校合し、別段の差違のなかつた旨を記し、爲家が爲相に傳へる旨を記したものである。版本には八代集本(小二册、刊年未詳、肖柏校本)、同(大二册、正保四年)、文化八年版(小二册、同(豆本一册、寛政十年版(豆本一册)等がある。國歌

を以て校合したもの。圖書寮藏。(三)片假名本一册は(e)を底本とし(h)を以て校合したもの。關戸家藏。昭和二年古典全集本所收。

(四)八代集抄本は(c)を底本とし(e)を參酌したもの。(五)天福本は定家が行成筆本を以て校合し、別段の差違のなかつた旨を記し、爲家が爲相に傳へる旨を記したものである。版本には八代集本(小二册、刊年未詳、肖柏校本)、同(大二册、正保四年)、文化八年版(小二册、同(豆本一册、寛政十年版(豆本一册)等がある。國歌

を以て校合したもの。圖書寮藏。(三)片假名本一册は(e)を底本とし(h)を以て校合したもの。關戸家藏。昭和二年古典全集本所收。

(四)八代集抄本は(c)を底本とし(e)を參酌したもの。(五)天福本は定家が行成筆本を以て校合し、別段の差違のなかつた旨を記し、爲家が爲相に傳へる旨を記したものである。版本には八代集本(小二册、刊年未詳、肖柏校本)、同(大二册、正保四年)、文化八年版(小二册、同(豆本一册、寛政十年版(豆本一册)等がある。國歌

を以て校合したもの。圖書寮藏。(三)片假名本一册は(e)を底本とし(h)を以て校合したもの。關戸家藏。昭和二年古典全集本所收。

(四)八代集抄本は(c)を底本とし(e)を參酌したもの。(五)天福本は定家が行成筆本を以て校合し、別段の差違のなかつた旨を記し、爲家が爲相に傳へる旨を記したものである。版本には八代集本(小二册、刊年未詳、肖柏校本)、同(大二册、正保四年)、文化八年版(小二册、同(豆本一册、寛政十年版(豆本一册)等がある。國歌

を以て校合したもの。圖書寮藏。(三)片假名本一册は(e)を底本とし(h)を以て校合したもの。關戸家藏。昭和二年古典全集本所收。

(四)八代集抄本は(c)を底本とし(e)を參酌したもの。(五)天福本は定家が行成筆本を以て校合し、別段の差違のなかつた旨を記し、爲家が爲相に傳へる旨を記したものである。版本には八代集本(小二册、刊年未詳、肖柏校本)、同(大二册、正保四年)、文化八年版(小二册、同(豆本一册、寛政十年版(豆本一册)等がある。國歌

を以て校合したもの。圖書寮藏。(三)片假名本一册は(e)を底本とし(h)を以て校合したもの。關戸家藏。昭和二年古典全集本所收。

思ひさしにせよと命せられ、五郎四郎にさす。吉六その心意氣を感じて、二人を快く會はせる。「助成時宗小袖乞のうつしゑ」牡丹の花の盛りに、高間、十郎に向つて、山路・五郎四郎の心事を訴へて、勘當の赦免を請ふも聞かない。十郎、山路等の誠心を見て始めてこれを許す。「富士の御勢勢揃のうつしゑ」左近大

(第二書) 遊女より馴染の客へ贈つて、自身の素性を明かにしたるもの。(第二書) 惣嫁より馴染客への手紙で、町の情死沙汰、自分の身の上のことなどが書いてある。「卷二」(第三書) 遊女和州より客三七へのもので、昨夜の夢の氣掛りなることを知らせてゐる。(第四書) 前信に次いで、夢判斷のことから、相

羅つたので、人參を飲ませようとするれど、さやうな高價なものは飲まないと拒む親父の吝嗇を報じてゐる。その奥に扇流といふ作者の玉手箱を贈るから見よといふ旨を記してある。「卷五」玉手箱といふ小話四章が書いてある。何れも男女關係の話である。(第十一書) 三七から和州への書、撞木町に在つたこととて、三條の小説話を報告してある。

七への書、この頃廓にあつたこととて、音羽といふ妓が、馴染客北といふ男から、江戸でみなとといふ妓との間に子を設けて、これを里子にやつた話を聞き、音羽は客がその父であることを知つて、即夜自殺した。その遺した書置を載せてある。哀れ深いものである。(第十書) 三七から和州への書、親父が病氣に

【解説】書翰文體好色本の一つで、「好色文傳授」(別項)「新好色文枕」等と一類を成すものである。端物的好色本の新意匠として現れたものに相違ないが、それと共に書翰の體を知らしめる特殊な目的をも持つものである。書信の二々に就いていへば、その觀照の新しいさ、深さに特に目を惹くに足るものはない。「藤村」

【批評】本集には、編纂上並に内容上多くの非難と、これを否定する説とがある。先づ本集は重田歌があり、作者を誤り作者名の記し方に不統一があり、詞書は不備で歌によく續かない。「一巻の内に整頓がなく、全體として分類を誤つてゐる等によつて、或は未定稿ではなかつたかと疑はれてゐる。然るに本居大平は、編纂が不備で玉石混淆であるが故に、真心があらはれ、親しみがあつて却つて興味が多しといひてゐる(後撰集新抄序)。次に本集は、「古今集」後、僅かに四十六年の撰修であるから、優秀な歌は殆ど「古今集」に採り盡されてゐる(長明無名抄・後撰集正義)といはれてゐる。然るに阿佛尼は、「後撰集にはやさしき歌も多く」といつて(後の巻、

【後撰和歌集】勅撰集 二十卷 一冊又は二冊【名義】「古今集」の後に撰するの意【成立】天曆五年十月晦日、詔が下つて初めて大和歌を撰ぶ所を梨壺(昭陽舎)におき、「古萬葉集」をよみとき撰び、併せて本集を撰修させ給つた。召しおかれたものは、元輔・時文・能宣・順・茂樹の五人(寄人)にてこれを梨壺の五人(別項)といひ、伊尹を別當と定められた。「諸本」現存本はすべて定家本にて一本の奥書に「五度書之」とあるが、現存本からも五つの書寫年代を知り得る。(一)刊本二冊

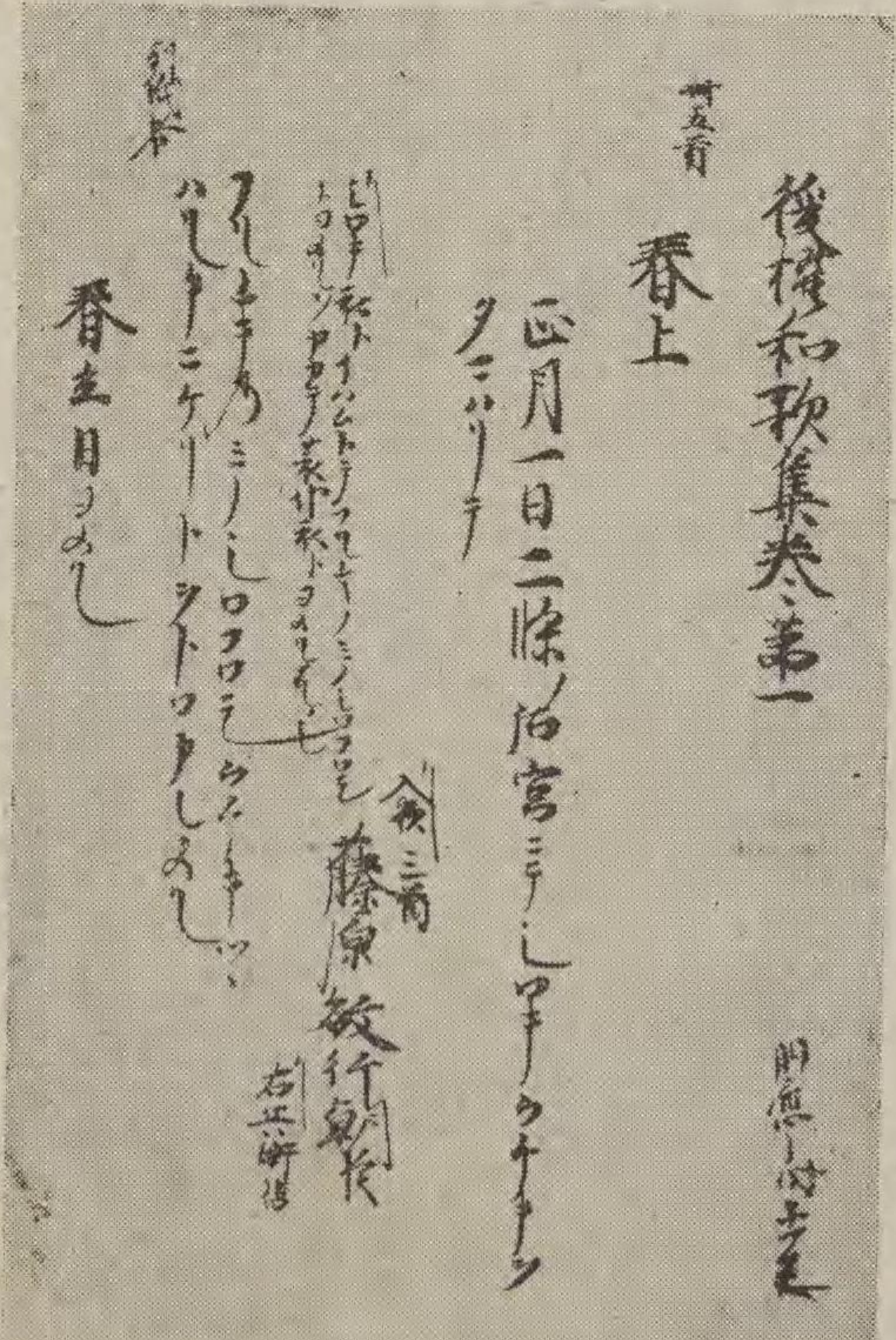
【註釋書】後撰集開書一卷 藤原爲家(後撰集正義参照)○後撰和歌集開書注一卷(同上)○後撰集正義(別項)一卷 藤原爲家(後撰集正義注四卷 岸本由豆流(文化十一年序。契沖の標注を増補し、眞淵の校合本を參照し、諸書を標記したもの。又藤原宗固の校本を以て異本の歌十二首を補ふ)○後撰集新抄(別項)二十卷別記一卷 中山美石○後撰集詞のつがねを一巻 本居宣長(享保二年刊、詞書の亂れを正したるもの)。

(a) 承久三年 (b) 貞應元年 (c) 同 二年 (d) 嘉祿二年 (e) 天福二年 天福本(五) 常縁本(一) 片假名本(三)

【参考】袋草紙 藤原清輔 ○國文學全史平安朝 篇 藤原作太郎 (西下) 【名稱】「南嶺遺稿」に、唐官儀に堯の時烏曹が衣を造つたとあるのに因み、胡曹抄と名づけて「うさうせう」といつたもので、烏の胡と音の通ずることは、胡亂と書いて「うるん」と訓むと同じだとの説を載せてある。【成立】奥書に「天文十三年六月吉日、左丞相房通判」

を以て校合したもの。圖書寮藏。(三)片假名本一冊は(e)を底本とし(b)を以て校合したもの。關戸家藏。昭和二年古典全集本所收。(四)八代集抄本は(c)を底本とし(e)を參照したもの。(五)天福本は定家が行成筆本を以て校合し、別段の差違のなかつた旨を記し、爲家が爲相に傳へる旨を記したものである。版本には八代集本(小二冊、刊年未詳、尙本校本)同(大二冊、正保四年)・文化八年版(小二冊、同(豆本一冊)・寛政十年版(豆本一冊)等がある。國歌大觀・國歌大系第三卷所收。

【組織】部類を春(上中下)・夏・秋(上中下)・冬・戀(一六)・雜(一四)・離別・羈旅・賀哀傷と分け、四季・戀・雜は卷數が多くて最初におかれ、季の明白な戀歌は四季に、然らざるものを戀に、それ以外を雜に入れ、大體に於てこの三部を中心とし、作歌の實際的な立場を重んじてゐるやうに見える。序のないのは、貫之ほどの作家がなかつたためとする説、撰修が完成しなかつたためとする説等がある。【内容】歌の數千四百首前後である。中山美石は流布本の内から集中に散在する「古今集」の歌六首を除くと「八雲御抄」の御説と一致するといつてゐる。歌の多い歌人は貫之(七七首)・伊勢(六九首)・躬恒(二三首)・兼輔(二二首)等であるが、何れも前時代からの歌人で、當時の歌人では師輔・實賴・敦忠等の權門が多い。新進の歌人を認めなかつた事、撰者の歌を一首も入れなかつた事、御製の見える事等は、八代集抄本(四)「古今集」と趣を異にしてゐる。而して貫之・伊勢は、境地を詠んだ歌が多く、兼輔・師輔・實賴は、情趣を詠んだ歌が多くて、二つの異なる傾向を形成し、全體としては後者の色彩が強い。



(藏家戸關)集撰後本名假片

ごせんわ ごそうし

とある。【解説】天皇袍、太上皇、皇太子、親王、夏冬下襲、半臂、表袴、三四位袍無差、別二事、衣色、女房夏冬裝束、女房以下裝束、打出、宮御裝束、女房御裝束、濃張袴、細長、押出、几帳、衣色異説、八朔等の事を古記を引いて記したもので、多くは桃花葉の後に附けてある。【石村】

【梧窓詩話】漢文 二卷一册【著者】林瑜(加賀藩の儒官、蘭坡又は櫻坡と號す)【解説】ひろく唐・宋・元・明・清の詩を論じ、特に宋詩を學ぶ者の、多くは温雅麗密を好まず、奇字僻典を用ひることを好むは下劣の詩魔であるとなし、偽宋詩を排撃してゐる。その他、詩語の考證など精緻を極めてゐる。【佐久】

【梧窓漫筆】隨筆 三編六卷【著者】大田元貞(錦城)【刊行】初編文政五年、後編同六年、第三編天保十一年。【解説】初、後編は、門人荒井堯民の所校、第三編は同塘公愷の所輯である。考據學派儒家の見地からした道學的隨筆で、畏天録、知命録、畏聖録及び啓迪録と内題してゐる。四書、九經等の本文によつて實踐倫理の道を説き、和漢史上の人物の性行を批判し、經史子集の書に就いて自家の見解を述べ、その他漢詩文作習上の注意を與へ、又異聞瑣事の傳を弘める等、凡て著者の博洽を見るに足るものがある。【和田】

【梧窓漫筆拾遺】隨筆 一卷【著者】大田元貞(錦城)【諸本】明治三十九年「百家説林」上巻に編入刊行された。【解説】「梧窓漫筆」の後を承けたもので、孫修文翼武の筆録にかゝる。清和天皇の御子孫、信玄の歌、帝王御相傳の觀音經の二句、南龍公の新郎造營、同公の行狀等百餘條を収めてある。徳川光昭、徳川吉宗、池田光政等を讚美し、殊に

家康の爲人を激稱するところが多い。まゝ忠孝節義に關する諺言がある。【和田】

【五臟眼】洒落本 一册【作者】山旭亭主人(山旭亭眞婆行)【書工】無署名【名稱】内題には「手管と角書があり、巻頭には「秦方鏡一名五臟眼」とある。人間の肺肝を見透す眼鏡の義。【刊行】未詳、他の作品より推して享和文化年間と思はれる。【題材】本文の前に、店者の癖、船頭の癖、女中の癖、隊婦の癖、呼出の癖の六項があり、各々挿繪と態度と口吻とが寫してある。これは明かに京傳の「客衆肝照子」(別項)を摸したのである。本文中の人物に、お初徳兵衛、小いな半兵衛が點出してある。

【梗概】世界は深川、お初の許へ徳兵衛と云ふ馴染客が来る。折悪しく其風と云ふ氣障客も來合せ、お初の待遇が悪いと怒り出して罵倒する。お初も腹を立てる。その物音に女中若者が來て漸く宥める。船頭が來て、尤ごかしに騙しすかし、客を舟に乗せて返す。その隣座敷は小さいと半兵衛。半兵衛が今の騒ぎを聞きつけて、「今の女郎買は已惚ばかりで、みんなあの位なもの云々」と悪口を云ふ。以下遊女が女中と共謀して、外に客が來て貰ひがかつたやうに見せて客を己惚れさせる計略。ためになる客と見て馴染みにする計略。最後には遊蕩に耽り、一家親類近所にも迷惑をかける客の戒めが書いてある。

【構想】從來の洒落本から、一步も出でぬ描寫觀察である。文化・文政度に著しくなつた教訓的傾向が多量に見える。末期の洒落本の一代表作品である。【山崎】

【語族】言語學【名稱】【英】a family of languages【獨】eine Sprachfamilie【佛】une famille de langues【解説】フランスの言語學者マイエ(A. Meillet)の言に従へば「過去に於て同一國語であつたものが、異なる發達をなしたる結果生じた二つの國語は、互に親近なりといふ。親近なる諸國語を集めた全體が謂はゆる語族を形造る」(Introduction a l'etude comparative des langues indo-européennes, 5 me éd. 1922, p. 4)例へばインド・ヨーロッパ語族、セミティック語族、ウラル・アルタイ語族(各別項)等は其の數例である。世界に嘗て存在したる、又今日存在する無數の國語は、今日までの研究により、若干の語族に纏められたものもあり、なほ未だ何れの語族に屬するか不明のものもある。又世界の全人類の言語が、すべて太古一つの源より分れたものであるかどうかに至つては、なほ一層不明である。假に人類の源であることが分つたとしても、直ちに言語が「源なり」といふ結論を下すことは出来ない。言語は言語そのものに就いて別に研究しなければならぬ。【参考】「世界の言語及語族に關するもの」H. N. Finck: Die Sprachstämme des Erdbereichs, 2. auf. Leipzig (Teubner) 1915. P. W. Schmidt: Die Sprachfamilien und Sprachentstehung der Erde. (地圖別冊附) Heidelberg(Winter) 1926. Les langues du monde. [Collection linguistique publiée par la Société de Linguistique de Paris—XVII] Paris (Champion) 1924. 【神保】

【小袖曾我】幸若舞曲 二卷(三十六番の一)【成立】室町期【諸本】古板本は寛永十二年板(十行本)。新群書類第八舞曲部所収。【内容】曾我物。曾我兄弟富士の

狩場に赴かうとして母に暇を乞ひ、勘當を受けてゐた時宗(政)も哀訴して赦され、共に小袖を餞される事を作る。「曾我物語」(卷七)諸曲「小袖曾我」と同材。【鳥津】

【御存商賣物】黄表紙 三册 十五丁十八圖【作者】山東京傳【書工】紅翠齋門人北尾政演(山東京傳)【名稱】本名は、手前御存商賣物。草雙紙類を題材にした作品の意。【刊行】天明二年【諸本】黄表紙百種(續帝國文庫)・黄表紙集(近代日本文學大系)いづれも本文のみ。【體裁】「男持毛氈帽」(天明二年鶴屋版風物作)、「飯婢女者同斷何」(同二年鶴屋版、古風作)、「風雷神天狗落種」(同二年鶴屋版、芝全交作)、「金浦物王歳」(同上)の四部と「御存商賣物」は、視機關の題簽で細工人某の如く記してあり、同體裁である。同一書肆の同年版の黄表紙は、大抵同一體裁の題簽を持つてゐる。【梗概】作者は机に凭り睡つてゐる。八文字屋本が行成表紙の下り繪本と謀つて、青本その他の地本にけちを附けようと、赤本・黒本をだき込む。青本の妹柱隠は一枚繪と戀に落ちる。黒本方は塵劫記・年代記とつけ百人一首などを仲間に入れて柱隠を盗み出し、一枚繪には青本が君を突出す腹だと告げる。一枚繪は怒つて青本と決闘しに出かけた處、吉原土手で逢つた唐詩選・源氏物語がなだめ、柱隠を一枚繪の妻にし、赤本・黒本の悪い根性は定規を當てて裁ち直し、陰謀の張本人、八文字屋本・行成表紙の下り繪本等は、腰張や無駄書にされる。唐詩選・源氏物語の命令で、徒然草が地本ともになり下し、雙葉問屋の商賣物は仲睦

多いのは朝光と實方との二人で、朝光とは戀愛關係があつたものの如く、實方は宣耀殿女御の父濟時の養子である關係からであらう。實方が陸奥から形見に弓を送つた時の歌(風雅集)があり、「小大君集」には實方・公任の連歌が見えるが、實方集には小大君らしい名が見えない。

【作目】家集「小大君集」。群書類從卷二七四所載本と歌仙歌集本とは大略等しく、歌の數は共に百四十五首(内長歌一)、共通な歌は百四十三首である。終りの四首は「小町集」から

兼を初め、朝光・濟時の薨じた當時を記したものがあつた。「磨きおきしさやの刀も錆びにけりさして久しく程やへぬらん」の歌も女性の作として興味がある。よみ口は慎ましやかで樂觀的である。「後拾遺集開卷の歌は彼女のであり、家集にも「此れは皆人の扇にあなり」として、彼女の歌が珍重されたことを記してゐる。

【参考】歌仙傳○河社契沖○玉勝間本居宣長○小野小町論墨岩溪香○歌道人物志【西下】

【参考】歌仙傳○河社契沖○玉勝間本居宣長○小野小町論墨岩溪香○歌道人物志【西下】

【参考】歌仙傳○河社契沖○玉勝間本居宣長○小野小町論墨岩溪香○歌道人物志【西下】

【参考】歌仙傳○河社契沖○玉勝間本居宣長○小野小町論墨岩溪香○歌道人物志【西下】

【参考】歌仙傳○河社契沖○玉勝間本居宣長○小野小町論墨岩溪香○歌道人物志【西下】

【参考】歌仙傳○河社契沖○玉勝間本居宣長○小野小町論墨岩溪香○歌道人物志【西下】

【参考】歌仙傳○河社契沖○玉勝間本居宣長○小野小町論墨岩溪香○歌道人物志【西下】

【参考】歌仙傳○河社契沖○玉勝間本居宣長○小野小町論墨岩溪香○歌道人物志【西下】

【参考】歌仙傳○河社契沖○玉勝間本居宣長○小野小町論墨岩溪香○歌道人物志【西下】

【著者】大田元貞錦城【諸本】明治三十九年「百家説林」上巻に編入刊行された。【解説】「栢窗漫筆」の後を承けたもので、孫修文翼武の筆録にかゝる。清和天皇の御子孫、信玄の歌、帝王御相傳の觀音經の二句、南龍公の新邸造營、同公の行狀等百餘條を収めてある。徳川光圀・徳川吉宗・池田光政等を讚美し、殊に

をかける客の戒めが書いてある。【構想】従来の洒落本から、一步も出でぬ描寫觀察である。文化・文政度に著しくなつた教訓的傾向が多量に見える。末期の洒落本の一代表作品である。【山崎】

linguistique publiée par la Société de Linguistique de Paris—XVII) Paris (Champion) 1924. 【神保】

は怒つて青本と決闘しに出かけた處、吉原土手で逢つた唐詩選・源氏物語がなため、柱隠を一枚繪の妻にし、赤本・黒本の悪い根性は定規を當てて裁ち直し、陰謀の張本人、八文字屋本・行成表紙の下り繪本等は、腰張や無駄書にされる。唐詩選・源氏物語の命令で、徒然草が地本ともに下知し、雙葉問屋の商賣物は仲庭

しく繁昌すると思はれた夢。

【構想】「辭闘戰新根」後世は、黒本の世界に題材を取つたが、これを幼稚視した京傳は、更に物語風の内容と、やゝ複雑な筋と、統一した形態に江戸子氣分を綯交ぜた所を趣向にした。【史的地位】草雙紙に題材を得た作品として、先蹤は「辭闘戰新根」にあるが、これを完成の域に到達せしめ、更に展開すべき因子を自己の内に培つた點に本書の史的地位がある。即ち草雙紙の歴史的考察を濃厚にすれば、「草雙紙年代記」や「神史億説年代記」(各別項)等に展開し、黄表紙の著作、出版方面には、「作者胎内十月圖」(別項)、「是氣儘作種」(天明七年版、物業堂禮改石山人作)、「十返舎戯作種本」(寛政十年版、十返舎一九作)、「的中地本問屋」(享和二年版、十返舎一九作)等が連なる。【價值】「岡目八目」(別項)の總卷軸にあげられてゐる作。京傳の意匠の才は、既に本書に現れてゐる。

【菊書草】(別項)の刊年を天明元年とすべき根據が本書に見出される。繪組の細かさは蜀山人も稱揚してゐる。僅かの紙面を利用して凝つた畫面とする。一枚繪と柱隠のいちやつきの圖を初め、優れた物が多い。模倣化して作者が袴に附けた十二書肆の商標は、三馬が眞面目くさつて、「神史億説年代記」に羅列するものである。

【備考】「男持毛氈帽」尼下屋茂九郎、俳名花陵は、勘當されて落魄し、田舎廻りの役者となり、時折俳句を作る。甲府の富豪の娘が澤村宗十郎の繪を見て戀の病となる。茂九郎は宗十郎と稱して婿となり、露顯して逃出し、男妾となる。みなうたゝ寝の夢。「飯嫌女者同斷何」孫右衛門の一子、麵類好の宇之介は、蕎麥を食ひたさに金を盗み勘當される。孫右

衛門の養子文吉は、淺草廣小路で米の蕎麥粉の施行をして宇之介を捜し出し、家督を譲らうとする。宇之介は風鈴の玉を嘗めて飯を食はず、大金を溜める。「風雷神天狗落種」好色の下女お豆は天狗の行水を見て戀慕し、風神と雷神とを産む。二兒は下界に墜落して香具師の手に渡つたが、風神は鍛冶屋に雇はれ、雷神は封間となる。後、失業して淺草觀音の門番となる。お豆は天人となり、華の代りに豆を降らせる。今、鳩がこれを喰ふ。「辭闘戰新根」大木の切口等は、雙紙屋、版木屋、畫工等が彼等を尊敬しないので、立腹して化す。雙紙屋達は怪異に恐れて、江戸草雙紙の始りの正本と云ふ種類が入れてある藏に逃げ込む。金平、鉢冠姫等が現れて化物を退治する。金平が叱ると化物は消えて、跡にはこの本が残つてゐる。【小池】

【別稱】春宮左近・東宮女藏人左近・三條院女藏人左近【稱呼】本居宣長は「榮華物語」見えてぬ夢に見える「あるはなく無きは數そふ」の作者東宮女藏人小大進君は、東宮が三條院であるから同人とし、小大進君を略して小大君としたのであるから、「こだいの君」と讀むべきであつて「こほほきみ」と讀むのは誤であるとしてゐる。但し「榮華物語」も本によつては小大君とある。別に大臣・大殿の如く「こほほきのきみ」と讀む説もあり、「拾芥抄」には「サオ」と假名を振つてゐる。【閱歴】「歌仙傳」和歌色葉集「拾芥抄」等には、三條院が東宮の御時の女藏人であつたとある。然らば寛和二年の頃から宮仕へした事になり、若し宣耀殿女御に仕へたならば、正暦二年の頃から宮仕へしたことになる。家集中最も交渉の

多いのは朝光と實方との二人で、朝光とは戀愛關係があつたものの如く、實方は宣耀殿女御の父濟時の養子である關係からであらう。實方が陸奥から形見に弓を送つた時の歌(風雅集)があり、「小大君集」には實方・公任の連歌が見えるが、實方集には小大君らしい名が見えない。【作中】家集「小大君集」。群書類從卷二七四所載本と「歌仙歌集」本とは大略等しく、歌の數は共に百四十五首(内長歌一)、共通な歌は百四十三首である。終りの四首は「小町集」から錯入したのであらう。宣長は、兩集の頭文字が「小」であるための混同としてゐる。本集は作者自ら編纂した形式を存し、歌の左に註を加へたものが約十箇所あり、その内「いとあまたあれどかゝればとゞめつ」の如きものもある。贈答歌に於て本名を示さず、ただ男・女としたものもある。○勅撰集に入る歌は拾遺三(拾遺抄も同じ)、後拾遺五、その他凡そ九首、合計凡そ十七首○私撰集に入る歌は玄々集三首、後葉集二首、續詞花集三首。

【批評】家集は、日常生活を細々と記して平凡な事柄を歌の題材としてゐる所があり、歌には遊びや笑を含んだものが多い。例へば、「あやしきくれの枕をおとして出でたるに垢つきたるを彼の殿上にやりたり」「入り道に塵ありと女いへば」「昨日つかひし木賊の落ちて露のかゝりたりけるを」「いかにいはんなどいひけるに寢言に」「元結よりてまゐり給ふ」「髪に繩を結びつけてゆるさざりしかば、ものよりのぞかせ給うて」「春宮にて茄子のゆゝしげなるに齒がたのつきたるを見て」「の如き詞書や、」「正暦五年のほどはいみじう人死ぬ」とした數首があつて、長徳元年疫病が流行して道隆・道

兼を初め朝光・濟時の薨じた當時を記したものがあつた。磨きおきしさやの刀も錆びにけりさして久しく程やへぬらん」の歌も女性の作としては興味がある。よみ口は慎まじやかで樂觀的である。「後拾遺集」開卷の歌は彼女のであり、家集にも「此れは皆人の扇にあなり」として、彼女の歌が珍重されたことを記してゐる。【參考】歌仙傳○河社契沖○玉勝間 本居宣長○小野小町論 巖谷源香○歌道人物志 (西下) 瑠璃 十一段 時代物 【作者】紀上太郎・容楊 黛・烏亭焉馬【名稱】角書に「姉は宮城野 碁は白石に照應すると共に八段目に常悅が圍碁に事寄せて心中を述べる條があり、且つ「後太平記」を利かせ作の世界をあらはす。【初演】安永九年正月二日、江戸外記座。【諸本】淨瑠璃名作集(有朋堂文庫)所收(なほ歌舞伎臺本は演劇叢書第二編・日本戲曲全集第二十九輯・世話狂言傑作集第六卷等に所收)。

【題材】傳へるところが區々であるが、享保三年奥州足立村の百姓四郎左衛門が、白石在で劍道師範田邊志摩のために討たれたのを、當時八歳と十一歳の二女が艱難の末、享保八年仙臺白鳥大明神社頭に於て目出度く仇を討つたと言ふのが、「月堂見聞集」等に傳へられるものである。この一件を「太平記菊水の巻」(別項)の世界に點したのである。【梗概】「初段」(吉野内裏)君側の奸臣に妨げられた楠正成は、討死を覺悟して湊川に赴く。正成方の敗將佐々目兼房は主人のゆるしを得べく忍んで来るが、侯臣共に捕へられる。「二段」(夢の場)妊娠中の兼房の妹が行を修めてゐると、正成の靈が現れて「胎中の一子に

我魂を合體し南朝を助けむ」と告げる。(明神森) 夢の告げによつて身の素性を知つた山城の浪人宇治兵部之助は、偶々河内の浪人金江谷五郎と出會つて共に南朝のために盡きうと神文を交す。〔三段〕(岩手石堂家の館) 今日若殿家督の祝儀が行はれたが、家臣の七草殘黨楠原普傳や志賀臺七等の奸計で繪旨は奪はれ、息女千束姫はその愛人奴伊達助と共に詮議に出立、普傳は悪心露はれて斬られ、その妖術と天眼鏡とは臺七に傳はる。〔四段〕(田植の場) 代官志賀臺七は天眼鏡を畦に隠蔽するが、百姓與茂作に見られたので、これを斬り捨てる。

〔五段〕(與茂作住居) 昨日から逗留の旅の浪人は、金江谷五郎で、江戸の吉原へ身を沈めてゐる與茂作の娘の許婚の夫であることが判明する。屍が運び込まれ、一旦は谷五郎に嫌疑がかゝるが、臺七が敵である事が明かとなる。宇治兵部が來合せ力を合せて臺七に傳はる普傳の秘法を奪つた上、與茂作の二女に仇を討たせ、且つ難波鎌倉で兵を擧げようとする。



(附番本繪演初) 嘶石白記平太甚

〔六段〕(淺草奥山) 吉原に勤める姉をたづねて江戸に來た妹のお信は、危く女術の觀九郎に拐かされようとするのを、大福屋惣六に救はれ、その家に伴はれる。詰問や豆蔵が種々觀九郎をなぶる。〔七段〕(大福屋) 宇治の一味彌ヶ瀬秋夜と大講實は臺七とが鉢合せをする。

肉の策で、姉妹は小蔭より現れてこれを追ひ、扇ヶ谷で臺七を討ち取る。〔九段〕「道行いはぬいろぎぬ」山城國井出の里の紺屋に奉公してゐる千束姫と伊達助との色模様。〔十段〕(紺屋彌左衛門の店) この家の娘お染は吉六と名告る伊達助に慕ひ寄るので、お竹の千束姫は嫉妬する。以前出奔したこの家の總領息子が歸つて來る。即ち宇治常悅である。吉六實は新田義興と心を合せ足利を亡ぼさんと勇む所へ、鎌倉から注進あつて秋夜捕縛を報じ

る。宮城野とお信は姉妹の再會を喜ぶ。秋夜や廊に入り込んでゐた同志達は勢揃ひし、大福屋惣六は宮城野の年季證文と大門の切手を與へて立たせる。〔八段〕(宇治常悅邸) 妹お信は信夫と名乗つて剣道を修めてゐる。秋夜は宮城野を伴つて來る。心焦だつ姉妹は臺七を討ち奥州へ歸つて行くが、それは常悅の秘法による幻像で、生身の臺七は常悅の取なしで新しく仕官する事になり、その代り楠原普傳より傳はる秘術を常悅に授ける。これ亦苦

る。攻め寄せた足利勢を常悅は地雷で撃破する。〔十一段〕義興は常悅の援けを得て北朝方を退ける。石堂家の後室、千束姫、お染、谷五郎等も來合せ、南北朝の和睦調ひ、秋夜も助かり、新田、楠、石堂家の契りも固まる事を祝する。

れ以外にも、例へば新大橋の仇討との組合せ(女文字筆、寛政十一年市村座)、鏡山との綯ひ交せ(岩、藤、浪、白石、天保十三年河原崎座)等極めて多くの改作物が出たが、今日行はれるものは無い。なほ純歌舞伎畑から出て「白石嘯」と双壁をなす「姉妹達大徳」(別項)がある。

【参考】傳奇作書殘編下の卷 ○同後集中の卷 ○演劇叢書第二編解説 ○棧敷から書齋へ伊原青々園 ○歌舞伎細見 飯塚友一 郎 [近藤] 五大力量 初代並木五瓶 [名稱] 書狀の封じ目に五力量、或は五力量善陸と記す事は、西鶴等にも見え、他見を思ひ善陸と記す事は、老松町貸座敷の場に於て、上方唄の「五力量」を下座の獨吟に用ひつゝ、菊野が妓の命たる三絃の裏皮に五力量と認めて心の誓ひを示す見せ場があつての題名である。〔興行〕寛政六年二月十四日初日、大阪中の芝居中山與三郎座の鳥津の琉球攻めに菊野殺しを配した「鳥廻聞書」が原型であるが、同年五月九日初日京西の芝居(名代座元、早雲長太夫、龜谷榮之丞)に於て、前作の三目第四幕以下を獨立せしめ、初めて「源五兵衛(五力量)と名題を立てて上演された。この兩度の上演に於ける主なる配役は次の如くである。

【脚色】四段から七段までで、新しく姉妹の仇討事件を中心として取扱ひ、他は殆ど凡て素材を「太平記菊水の巻」に求めてゐる。馬馬が書いた七段の大福屋が第一の出來である。物の六のモデルは馬馬の狂歌仲間吉原大黒屋の亭主だと言はれてゐる。「奥山」から「揚屋」へかけて如何にも吉原通の馬馬らしい筆致が見える。詰問五町の踊る「通人舞」の歌詞は、當時全盛の文魚、鯉、祇園などいふ所謂十八大通の名寄せである。淺草街頭の光景や吉原の娼家の描寫にも、淨瑠璃に珍らしい寫實的な、而も通人振つた洒落本的筆觸が見られ、これ等は當時の江戸の觀客を喜ばせたであらう。

【史的地位】慶安事件の劇化の早いものは、享保十四年竹本座の「尼御臺由比濱出」らしく、次いで歌舞伎に「三代男けいせい由來記」(寛曆七年角座)、「廓習書夜正説」(上演時未詳)があり、やがて採の「太平記菊水の巻」(別項)となり、慶安事件は「菊水の巻」と決定するに至つて、歌舞伎にも盛んに演ぜられた。而して俗説に傳へる正雪の女敵討への助太刀等に暗示され、宮城野・信夫一件が點ぜられて本作となつたのであらう。而も由井・丸橋の筋は、今日では「白石嘯」からは忘れられて、黙阿彌作の、左團次の「丸橋忠彌」(本名題色々あり)となつて生き、「白石嘯」は揚屋の段のみが重要な中幕物として生命を保つてゐる。「白石嘯」が歌舞伎に移されて(安永九年四月森田座)以後、そ

【諸本】「上方系統のもの」鳥廻聞書初演變版、大徳本、脚本集(帝國文庫)、脚本集(有朋堂文庫)、脚本集(近代日本文學大系)所収。(以上の活版本各々小異あり)「江戸系統のもの」江戸砂子慶會我、初演變版、春花五大力(名著文庫)、並木五瓶世話狂言集(日本戯曲全集)所収。その他、繪本壁生草(繪入根本)、世話狂言傑作集、後の江戸系改作物等所収。【題材】元文二年七月、大阪長堀薩藩藏屋敷の勤番早田八右衛門が歸國に當り、慣例の如く銀方の振舞をうけて北の新地に遊興した際、曾根崎櫻風呂の髪洗女菊野を見染め、爾來足繁く通つたが、合遊された上、公金さへ消費したので、三五兵衛も口を添へる。義里で自つした

【解説】この事件最初の脚色は、寶曆七年九月の採(おまん源五兵衛薩摩歌妓鑑)「竹大座である」と言はれる。近松の「薩摩歌」にこの件を點じたものである。次は、やはり採の「置土産今織上布」(安永六年五月北堀江座)で、近松の「天網島」と組合せたものであつた。更に「國言調音頭」(天明八年五月北新地芝居竹本染太夫座)が行はれ、主人公八柴初右衛門の木偶を遣つた吉田文三郎の演出が、後に二代柴崎林左衛門の演技に暗示を與へた。即ち辰岡萬作「初嵐元

ある。菊野は廻し男の彌助を連れて今宵も訪れる。源五兵衛は寶刀の盗人を三五兵衛と察知し、貞操を捨てての探索を菊野にたのむので、菊野は三味線の裏皮に五力量と書いて決意を語る。彌助は厭がる菊野をつれて曾根崎へ急ぐ。【三幕】(曾根崎出來鳥屋) 三五兵衛の奸策に乗せられた勝間の忠僕八右衛門は、主人の身の危きを救ふ一心から、自ら源五兵衛の兄と詐稱し、許嫁の女まで仕立て、菊野に逢つて源五兵衛との縁を切るやうに哀願す

【諸本】「上方系統のもの」鳥廻聞書初演變版、大徳本、脚本集(帝國文庫)、脚本集(有朋堂文庫)、脚本集(近代日本文學大系)所収。(以上の活版本各々小異あり)「江戸系統のもの」江戸砂子慶會我、初演變版、春花五大力(名著文庫)、並木五瓶世話狂言集(日本戯曲全集)所収。その他、繪本壁生草(繪入根本)、世話狂言傑作集、後の江戸系改作物等所収。【題材】元文二年七月、大阪長堀薩藩藏屋敷の勤番早田八右衛門が歸國に當り、慣例の如く銀方の振舞をうけて北の新地に遊興した際、曾根崎櫻風呂の髪洗女菊野を見染め、爾來足繁く通つたが、合遊された上、公金さへ消費したので、三五兵衛も口を添へる。義里で自つした

【諸本】「上方系統のもの」鳥廻聞書初演變版、大徳本、脚本集(帝國文庫)、脚本集(有朋堂文庫)、脚本集(近代日本文學大系)所収。(以上の活版本各々小異あり)「江戸系統のもの」江戸砂子慶會我、初演變版、春花五大力(名著文庫)、並木五瓶世話狂言集(日本戯曲全集)所収。その他、繪本壁生草(繪入根本)、世話狂言傑作集、後の江戸系改作物等所収。【題材】元文二年七月、大阪長堀薩藩藏屋敷の勤番早田八右衛門が歸國に當り、慣例の如く銀方の振舞をうけて北の新地に遊興した際、曾根崎櫻風呂の髪洗女菊野を見染め、爾來足繁く通つたが、合遊された上、公金さへ消費したので、三五兵衛も口を添へる。義里で自つした

〔六段〕(淺草奥山) 吉原に勤める姉をたづねて江戸に來た妹のお信は、危く女術の觀九郎に拐かされようとするのを、大福屋惣六に救はれ、その家に伴はれる。幫間や豆藏が種々觀九郎をなぶる。〔七段〕(大福屋) 宇治の一味頼ヶ瀬秋夜と大盡實は臺七とが鉢合せをす

〔八段〕(船屋彌左衛門の店) この家の娘お染は吉六と名告る伊達助に慕ひ寄るので、お竹の千束姫は嫉妬する。以前出奔したこの家の總領息子が歸つて來る。即ち宇治常悦である。吉六實は新田義興と心を合せ足利を亡ぼさんと勇む所へ、鎌倉から注進あつて秋夜捕縛を報じ

され、宮城野・信夫一件が點ぜられて本作となつたのであらう。而も由井・丸橋の筋は、今日では「白石齋」からは忘れられて、默阿彌作の左團次の「丸橋忠彌」(本名題色々あり)となつて生き、「白石齋」は揚屋の段のみが重要な中幕物として生命を保つてゐる。「白石齋」が歌舞伎に移されて(安永九年四月森田進)以後、そ

〔中山文五郎・鶴谷仲藏〕、富田屋おみち(又はお市) (三辨徳次郎・吾妻藤藏)、藝子菊野(芳澤いろは、山下八百藏)、若黨八右衛門(又は與五平)、嵐三五郎、中山新七、笹野三五兵衛(片岡仁左衛門、嵐小六)、勝間源五兵衛(尾上新七、同人)。

朋堂文庫) 脚本集(近代日本文學大系)所收。

(以上の活版本各々小異あり) 〔江戸系統のもの〕

江戸砂子慶會我(初演臺本)・春花五大力(名著文庫)・並木五瓶世話狂言集(日本戯曲全集)所收。その他、繪本壁生草(繪入根本)・世話狂言傑作集(後の江戸系改作物)等所收。〔題材〕元文二年七月、大阪長堀薩藩藏屋敷の勤番早田八右衛門が歸國に當り、慣例の如く銀方の振舞をうけて北の新天地に遊興した際、曾根崎櫻風呂の髪洗女菊野を見染め、爾來足繁く通つたが、冷遇された上、公金さへ消費したので、一夜女が泊つてゐる同地大和屋重兵衛方に闖入し、菊野をはじめ重兵衛夫妻下女二名を斬殺して、密かに歸國の途についたが捕へられ、翌三年千日前に於て獄門にかゝつた事件、所謂北の新天地五人斬りを主材とする。

〔梗概〕(一幕) (道頓堀富田屋(露路口・臺所中)九州千鳥家の重寶龍虎の劍が紛失してゐるので、勝間源五兵衛は若殿萬太郎に從ひ、同僚笹野三五兵衛等と大阪に滞在中、遊里に入込みつゝ密かに詮議に努めてゐる。北の新天地の名妓櫻屋の菊野は、好色の三五兵衛に迫られ、源五兵衛とは夙くからの戀仲であると偽つて三五兵衛を退け、女將共々懇願すると、物堅い源五兵衛も已むなく表面上承知する。これを怨んで三五兵衛は密かに菊野附きの廻し男彌助を買収して若殿を教唆し、満座の中で源五兵衛を侮辱し目通りを遠ざける。これが因で菊野は小指まで切つて心中を示し、女將の計らひで源五兵衛と契りを結ぶ。偶々國許から勝間の若黨八右衛門が上つて來るが、三五兵衛はこれを欺いて源五兵衛を陥れようと企てる。〔二幕〕(老松町貸座敷) 祿を奪はれた源五兵衛は家主の義侠心で怪しい浪宅を營んで

ゐる。菊野は廻し男の彌助を連れて今宵も訪れる。源五兵衛は寶刀の盜人を三五兵衛と察知し、貞操を捨てての探索を菊野にたのむので、菊野は三味線の裏皮に五大力と書いて決意を語る。彌助は厭がる菊野をつれて曾根崎へ急ぐ。〔三幕〕(曾根崎出來鳥屋) 三五兵衛の奸策に乗せられた勝間の忠僕八右衛門は、主人の身の危きを救ふ一心から、自ら源五兵衛の兄と詐稱し、許嫁の女まで仕立て、菊野に逢つて源五兵衛との縁を切るやうに哀願する。三五兵衛も口を添へる。義理に迫られた女は死ぬ思ひで源五兵衛への去り状を認め、三五兵衛に身を任せる事を約するので、三五兵衛は三味線に書いた五大力を三五大切と書き改めさせる。切れ文を届けられた源五兵衛は、半ば不安に驅られて訪れて來る。菊野は苦痛を忍んで愛想づかしを言ひ、誤つて三味線の皮を破るので、源五兵衛は憤然と立ち去る。悶え抜いた菊野が一切の事情を源五兵衛に知らせようと文を認めてゐる所へ、引返して來た源五兵衛は一刀にこれを斬り捨てる。文を握りしめた腕と首とが男の體にしつかりとしがみ附く。(元の貸座敷) 駈けつけた八右衛門の供述と菊野の文とで、源五兵衛は女の實意を知り、且つ刀の盜賊が三五兵衛なる確證を掴む。八右衛門は殺人の罪を身に負うて縛に就く。(堂島松坂屋) 忍び込んだ源五兵衛は廻し男彌助を斬り、なほも三五兵衛を搜索する。(塀外) 源五兵衛は遂に三五兵衛を討ち、龍虎の劍を奪ひ返し、その首級を菊野の首に手向けて切腹しようとするが、女の首がじつと手首に取りついてこれを遮る。女の深い愛情に源五兵衛は感動する。(この梗概は大體本に據る)

【解説】この事件最初の脚色は、寶曆七年九月の操(おまん)源五兵衛薩摩歌(妓鑑)(竹大座)であると言はれる。近松の「薩摩歌」にこの件を點じたものである。次は、やはり操の「置土産今織上布」(安永六年五月北堀江座)で、近松の「天網鳥」と組合せたものであつた。更に「國言詢音頭」(天明八年五月北新地芝居竹本染太夫座)が行はれ、主人公八柴初右衛門の木偶を遣つた吉田文三郎の演出が、後に二代柴崎林左衛門の演技に暗示を與へた。即ち辰岡萬作(初嵐元文) (初演年月未詳、濱芝居。一説に寛政元年中座とも)で、實惡の名人林左衛門が佐久間源五兵衛に扮し、文三郎の演出に倣ひ、誤つて死骸の腹の傷口に踏み入れ、臍腑を爪先に引懸ける凄慘な場面を見せたと傳へられる(傳奇作書。操でも寛政元年五月豊竹座に於て演ぜられた(外題年懸)。なほ「國言詢音頭」以前に、歌舞伎にこの事件が仕組まれたであらう事は、「眠獅選」天明八年の條に「前略」京にてせし五人切かんばんは出たれども狂言は出す」とあるので知られ、天明八年二月以前に五人斬の狂言が存在した事が推察される。次に「五人切五十年廻」(寛政四年四月中座、五瓶作)があり、雛助に源五兵衛、宗十郎に三五兵衛を振つてある配役は注意に値する。又、同年「薩摩節五人切子」(月不詳・京東の芝居)では、

雖助は佐わだ八右衛門の役名で敵役としての演出を探り、その他の役名も大十・女房とめ、下女くら・同きよ・戎長抱えみなと等實説通り名前を使用して、事實上近い脚色振りを想像し得る點は注意を要する。五人斬狂言に縁故の深い片岡仁左衛門は、この時奴だん介(後の若黨八右衛門)もしくは與五平に當る。に扮し、山下八百藏は菊野を演じてゐる(役割番附及び繪番附に依る)。次は前述の「鳥廻」であるがこれは三幕目まで(發端・大序・二ツ目)は鳥津の琉球

攻めを扱ひ、二ツ目で筋は一應結末を告げてをり、ただ龍虎の劍の紛失のみが未解決の問題として残され、これが五人斬の筋即ち二番目世話物に當る領域での狂言廻しとして、僅かに前半との繋りを握るのである。これが同じく寛政六年五月京に於て「戀絨」として獨立した事は前述したが、なほこれ以前に雛助(小六)が大阪堀江芝居に源五兵衛を演じてゐるが、名題その他は未詳である(役者人相鏡、秋葉氏「五大力戀絨の名題の最初所引」。さて江戸に

一六九



(附番繪演初戸江) 誠戀力大五

移されたのは、周知の如く「江戸砂子慶會我」(寛政七年正月都座)の第二番目としてであり、脚色は殆ど全く上方出来の儘で、地名・人名の變更、用語・洒落、その他、氣分情趣の可及的江戸化、上方的に濃厚なエロチシズムの整理等、局部的な改訂を行つてゐる。主な配役は宗十郎の薩摩源五兵衛、仁左衛門の笹野三五兵衛、菊之丞の藝者小萬、龍藏の廻し男彌助、三津五郎の八右衛門、廣次の出石宅右衛門等で、就中宗十郎は好評を得て源五兵衛がその家の藝となるに至り、寛政十年九月大阪上りの名残狂言として桐座に再演(友右衛門の三五兵衛)、翌十一年大阪中座及び北の新天地芝居並びに京北側芝居に續演し、上方系の新七を凌ぐ評價を得て、源五兵衛役者としての確固たる基礎を据ゑた(役者年中行事)。「五大力」の源五兵衛は、かくの如くして上方系の新七型・雛助型と江戸系の宗十郎型を生じたが、脚色としては前述の如く上方と江戸とは本質的な差異はなく、五瓶のこの作が五人斬狂言の基準的なスタイルを形成した。【史的地位】書替狂言も多く出たが、最も有名なものに、同一作者の手に成る「略三五大切」(文化三年)、南北の「盟三五大切」(文政八等)があり、綯交ぜや實録種も多いが、五瓶の原作を凌ぐものは皆無である。かくして「五大力戀絨」は、五瓶の作品の全系列の中でも最も高い水準を示すものであると共に、歌舞伎全般に於ける世話狂言中の傑作の一つでもあり、「世話物」殊に「愛想つかし」並びにそれに附随しての「殺し」といふ世話場中の重要な要素の代表的なタイプを、歌舞伎史の後半期に提示する事に依つて、歴史的な意義を獲得すると共に、五瓶独自の合理主義、寫實的手法を端的にこ

の作に發露せしめ、彼のこれ以後の諸世話物と並んで、やがて黙阿彌の出現を約束する史的地位を保有するものである。【参考】傳奇作書拾遺上の卷○攝陽落穂集卷八○攝陽奇觀卷之二十六○南水漫遊初編五の卷○虎魚劇談三田村秀魚○狂言作者大熊手(下)關根默庵(早稻田文學)○「並木五瓶の事を記す」及「觀劇偶評」三木竹二(つききさ)○「五大力戀絨の研究」小山内吉井・長田(世話狂言の研究)○歌舞伎細見飯塚友一郎○歌謡音曲集解説黒木勘藏○紙屑籠三枝屋三治○歌舞伎圖説守隨・秋葉共編○五大力戀絨の名題の最初秋葉芳美(上方)刊(近藤)【刊行】貞享二年八月、北御堂前安土町森田庄太郎開版「諸本」原本は京都帝國大學以外に所蔵者あることを聞かぬが、昭和五年七月京都の貴重圖書影本刊行會から寫眞出版で複製されたものがある。【解説】本書は嘉太夫節(宇治加賀孫)の淨瑠璃六種の節事・景事・道行を集めたもので、西鶴の序文に、加賀孫の編集した「三竹集」(別項)は大本で、懷中用に不便だから、取捨を加へ節付に注意して、「小竹集」といふ小形本にかへた由が記されてある。この序文を一見すると、ほぼ同内容のものを小本にしたやうに聞えるが、實は「三竹集」と共通のものは「平安城」の一章のみで、他は悉く別物である。本書の目次は左の通りである。

凱陣八島

よしつね道行	同	藍染川	梅の名よせ
くわんじん帳	同	よつぎそが	べんの君道行
花子	同	むかしがたり	
しやれ物たり	同	虎少將道行	
あさがほ姫道行	同	風流の舞	
ふじの十二月	同	伊呂波	大師踏朝

同 いろはのまへ道行 三社託宣
平安城 みるほのまへ道行 てる日のまへ道行

右の丸本は大抵世に傳存するもので、さまで珍重すべきものではないが、ただ西鶴作と傳ふる「曆」(別項)の丸本のみは、越路太夫の遺書中に在るもの外、傳本あることを聞かない。随つて本書も「曆」を載するが故に珍重すべきである。【藤井】

兒玉花外 こたけい 詩人 【本名】傳八 【閱歴】明治七年七月七日、山口縣三隅村に生る。同志社・札幌農學校・東京專門學校等に學んだ。詩は明治三十一年頃より「東京獨立雜誌」(内村鑑三主筆)に發表し始めた。又「新聲」(中學世界)などの選詩を長くつづけてゐた。三十六年に「社會主義詩集」を出版して、發賣を禁止された。社會主義といふ文字が當局の神經を刺戟して彈壓を加へられたので、強ち内容を治安に害あると認められるほどの詩ではなかつた。翌年發賣禁止された詩集を記念する意味で、自作三十篇と「同情錄」五十九人の寄稿とを一冊に纏めて、「花外詩集」(三十七年金尾文淵堂刊行)と題し出版した。「同情錄」の中には堺枯川・幸徳秋水・片山潜・西川光二郎などの名も加はつてゐた。四十年には「天風魔帆」と「バイロン詩集」との著がある。爾來市に隠れて酒に浸り、はかばかしい作がない。【作品・特色】「風月萬象」は、露葉・枯柳との合著。「わか草」は露葉・醉者との合著。何れも明治三十二年の版で詩も僅かに發展期に入つたばかりの時代だから、優秀なる作品集でもなかつた。「花外詩集」には三十篇あるが、その内十六篇はゆく雲の方に収められている。無論その方は作が好い。「ゆく雲」(別項)は花外の

ことを聞かされ、生きて御奉公をしようと小舟で追ふが、主上の一行を見失ふのみか、漕手の雑兵に迫られて誤つて海に落ちる。磯邊に打上げられて生命だけは助かつたものの、行末のことを打案じてみると、端なくそこへ蝴蝶の日頃慕つてゐた二郎春風といふ若武者(實は源氏の忍び者が來かゝり、手を携へて主上の後を尋ねて山地に分け入る。三年経つて漸く主上の御在所のわかつた時、二郎は源氏にこれを密告しようとする。蝴蝶は始めてわ

に紙又は布帛(これは紙で裏打をするのが常である)の表紙を附けることがある。この場合には、表紙を、綴目の方を少し長くしておき、最初の折の最初の丁の上のせて、その折の折目のところを第一丁と同じやうに折り返し、第一折と共に綴目に孔をあけて綴ち込み、後の表紙も同様にして最後の折と共に綴ちるのである。表紙の裏(見返し)には別の紙をつけられたものもある。【異説】胡蝶装を右の如く解するのに對しては異説がある。即ち胡蝶装を以て結葉(別項)と同一とするものである。し

この小説に於て、作者は地の文を「です」調の言文一致體にし、會話の文だけ「武藏野」と同様、いかにもその時代らしい古雅な言葉を使つてゐる。

【附記】作者立案、渡邊省亭筆の蝴蝶の裸體の圖がこの作についてゐる。海から上つた裸の蝴蝶が、ふと戀人の若武者と顔を合せて驚く所である。當時としては極めて大膽なる試みであつたので、喧しい問題が生じ、延いて裸體畫是非の論となつた。これがためこの作を益々有名なものとした事は争はれない。併し

を擧げて、俗思想を排却しようとしてゐる。無年紀澤華不關子及び天明六年著者の兩序がある。【和田】

孤蝶園若菜 こたけのわかな 戯作者 【本名】若菜貞爾 【別號】柳橋新史・夢想樓 【生歿】安政元年に生れ、大正七年五月二十五日歿す。享年六十五 【閱歴】千葉縣長生那佐坪村の人と、野崎左文氏の「私の見た明治文壇」にあるが、著作の奥附には福岡縣人とある。魯文の門下生で、明治十一年、假名讀新聞雜報記者となり、同十三年大阪新聞に移り、同紙發

【胡蝶】「鳥獸物の謠曲」を見よ。【田邊】

胡蝶 こたけ 御伽草子「胡蝶物語」を見よ。

蝴蝶 こたけ 小説 【作者】山田美妙齋 【成立・發表】明治二十一年十月稿成り、翌二十二年一月、「國民之友」第三十七號新年附録發表。【刊行】同二十二年「新年小説」(民友社)。同二十三年十月「第一國民小説」(民友社)。同二十三年十月「第一國民小説」(民友社)に再録。明治大正文學全集・現代日本文學全集所收。

【梗概】十七で京生れの宮女蝴蝶は、壇の浦役落の日、二位の尼から主上の落ち延びられた

益々有名なものとした事は争はれない。併し

話狂言中の傑作の一つでもあり、「世話物」
殊に「愛想づかし」並びにそれに附随しての
「殺し」といふ世話場中の重要な要素の代表的
なタイプを、歌舞伎史の後半期に提示する事
に依つて、歴史的な意義を獲得すると共に、
五瓶獨自の合理主義、寫實的手法を端的にこ

凱陣八島	よしつね道行	藍染川	梅の名よせ
同	くわんじん帳	同	べんの君道行
同	花子	よつぎそが	
同	しやれ物たり	むかしがたり	
同	あさがは姫道行	虎少將道行	
同	ふじの十二月	風流の舞	
		伊呂波	大師降参

ことを聞かされ、生きて御奉公しようといふ小舟で追ふが、主上の一行を見失ふのみか、漕手の雑兵に迫られて誤つて海に落ちる。磯邊に打上げられて生命だけは助かつたものの、行末のことを打察してゐると、端なくそこへ蝴蝶の目頭慕つてゐた二郎春風といふ若武者(實は源氏の忍び者が来かゝり、手を携へて主上の後を尋ねて山地に分け入る。三年経つて漸く主上の御在所のわかつた時、二郎は源氏にこれを密告しようとする。蝴蝶は始めてわが戀人の素性を知つて、いろ／＼かき口説いて二郎の決心を離へさせようとしたが出来ぬので、思ひ餘つて二郎をわが手で刺し殺す。その明るる朝、里人の噂で主上崩御のことを聞いた。



【蝶】挿畫(亭筆)

【批評】作者は自身で、これは精一杯の作だといひ、批評家も概して傑作と賞めた。筋に不自然な作爲の痕が露骨なこと、文章に餘韻がなく、調子の浮ついてゐることなど、難は種々あるが、想像の豊富(それも叙景に限るが)、文字の典麗(迫力はないが)といふ長所は認めてよい。殊に戀人を義のために刺した朝、帝の崩御を聞くといふ構想は、當時として稀に見る好着想である。併しやはり讀後残るものは、構想といひ、文字といひ、凡てこれ詩だといふ印象である。「武藏野」(別項)より細工が多く、あれ程の素直さや清新さはないが、美しい中に哀れがある。「武藏野」とこの作とは作者をして春の舍に次いで、明治小説壇のエポックメイカーたらしめたといへば、誇大な言葉と受けとられるが、當時の幼稚な新文壇に於ては、正にそれだけの作と見たのである。な

ほこの小説に於て、作者は地の文を「です」調の言文一致體にし、會話の文だけ「武藏野」と同様、いかにもその時代らしい古雅な言葉を使つてゐる。

【附記】作者立案、渡邊省亭筆の蝴蝶の裸體の圖がこの作についてゐる。海から上つた裸の蝴蝶が、ふと戀人の若武者と顔を合せて驚く所である。當時としては極めて大膽なる試みであつたので、喧しい問題が生じ、延いて裸體畫是非の論となつた。これがためこの作を益々有名なものにした事は争はれない。併しこの作の成功をこの裸體畫のためだと

見るのは酷論に失する。(柳田泉)

【胡蝶庵隨筆】(こてふあん 隨筆 一卷)【著者】釋聖應(大阪生玉社の僧。神佛二道に通ず)。

【刊行】天明七年【解説】太宰春臺の著「辨道論」の所説を駁して神佛二道の區別を明かにし、當時の僧侶の放肆にして修行を怠るを難じ、敷島の道は和歌の道にあらずして世を治むる道なることを論じ、和歌の六義について俳諧者流の私意を斥け、我が國が吳の太伯の後なりと云ふ説を挫き、源義仲・平敦盛の碑について、俳人の名利を貪るを慨き、多田義俊が神道學に精しいこと等、すべて三十九條

を擧げて、俗思想を排却しようとしてゐる。無年紀澤華不關子及び天明六年著者の兩序がある。(和田)

【孤蝶園若菜】(別號)柳橋新史・夢想樓【生没】若菜貞爾(別號)柳橋新史・夢想樓【生没】安政元年に生れ、大正七年五月二十五日歿す。享年六十五【閑歴】千葉縣長生郡佐坪村の人と、野崎左文氏の「私の見た明治文壇」にあるが、著作の奥附には福岡縣人とする。魯文の門下生で、明治十一年、假名讀新聞雜報記者となり、同十三年大阪新聞に移り、同紙廢刊後、大阪朝日新聞に入り、又福井の越陽新聞、更に東京めざまし新聞から東京朝日新聞と轉々したが、或る事件で失脚後放浪生活に入り、後には半狂人となつて根岸病院に加養中病歿した。【著作】特に取立てて擧げる程のものもないが、岩崎彌太郎を平清盛に擬して、三菱一家の豪奢ぶりを描いた「今淨海六波羅譚」はこの人の作で、當時評判がよかつたと野崎左文氏は言つてゐるが、多少疑問がある。今日傳へられてゐる同作(大阪駁々堂刊)には署名はない。

【参考】早稲田文學(大正一五ノ四)〇寫實主義以前の小説 石川巖(日本文學講座)【石川巖】

【胡蝶装】(こてふ 書誌學)【解説】裝幀から見た圖書の種類の一。冊子本(別項)の一種であつて、數枚の紙を重ねて中央から縦に折つたものを一折とし、これを幾折か重ねて、各折の折目の同じ高さのところに、二個又は四個の孔を穿ち、糸をその孔に通して各折を綴ぢ合せて一冊としたもの(今の洋裝本の綴ぢ方と殆ど同じである)。表裏両面に文字をしるす。表紙は第一折の最初の丁と最後の折の最後の丁とをそのまゝ代用することがあるが、又別に紙又は布帛(これは紙で裏打をするのが常である)の表紙を附けることがある。この場合には、表紙を、綴目の方を少し長くしておき、最初の折の最初の丁の上のせて、その折の折目のところを第一丁と同じやうに折り返し、第一折と共に綴目に孔をあけて綴ぢ込み、後の表紙も同様にして最後の折と共に綴ぢるのである。表紙の裏(見返し)には別の紙をつけたいものもある。【異説】胡蝶装を右の如く解するのに対しては異説がある。即ち胡蝶装を以て精葉(別項)と同一とするものである。しかしながら、冊子本中に、これを綴るに糊を用ひるものと糸を用ひるものとがあつて、これを區別する必要がある以上、前者を精葉、後者を胡蝶装と名づけてこれを區別する事が近來行はれて來たのであるから、支那に於ける原義、用例等は、しばらくこれを別にして、右の如く定義してこれを用ひるのが實際上便利である。【沿革】別項「圖書」中の「圖書の歴史」の條を参照せよ。

【胡蝶物語】(こてふ 御伽草子 一卷)【作者】後水尾天皇と傳へる【名稱】一名「胡蝶」又「花づくし」。「胡蝶」の名は本書中の主人公の綽名から、又「花づくし」の名は多くの花の精の現れて歌を詠む事から來てゐる。【成立】室町末【諸本】「胡蝶物語」と題する古寫本が傳はつてゐる。「花づくし」と題して正保三年の刊本があり、寛文年間の再版もある。古寫本で「花づくし」と題したのもあつたことは、「延齡涉獵書目」によつて知られる。明治以後の刊行としては、御伽草紙(有朋堂文庫・御撰集第一卷(列聖全集)に收めてある。【題材】異類物・法談物。謠曲の思想並びに構想の小説化。即ち草木國土蒸骨成佛の教を説いたも

し、夕顔・萩・女郎花以下三十の花の精、何れも歌を記して姿を消した。上人は一切非情草木成佛の有難き誓に深く感じ、裾野の原に出て黙禱回向すると、様々に咲き亂れた木草の花が目の前に現じたので、愈々驚喜して庵室に歸ると、夜はほのぼのと明けた。

主義や、國際主義と衝突する事を辭さない。一國の繁榮も、個人の幸福も、一に國家權力の發展によつて期待され得ると見る。日本に於ては、以上の意味での客觀的自覺は、過去に於ては稀薄であつたが、維新後、プロシヤの國家主義を輸入するに至つて、その意識が明

る。而してその原因を、思想の淺薄、氣局の狭少、辭藻の浮華に在りとしてこれを説明し、「古今集」に次ぐ歴代の集も皆大同小異、恰も河原に出て小石の異同を調べるに均しと評し、下つて近世の歌學論者の説を擧げて、その理論にのみ赴いて實際の作の稱するに足

あつて、索引によつて書名と番號を知り、これによつて歌集部に求めればよいのである。【價値】山本春正の「古今類句」(別項)の如きは比較的有名なものであるが、第四句引で、しかも收めてゐる歌集が、この書より遙かに少ない。「古今類句」の歌を、五句何れでも引き得るやうにした「新和歌類句集」があるが、

これは一般に普及されたものではない。この書の如きは、洵に學者に多大の便益を與へてゐるものといふべく、「續國歌大觀」(別項)と共に、學者の座右缺くべからざる書といふべきである。 [藤川]

國歌大系

【編者】尾上・和田・上田・藤井・藤村・笹川・三上・新村・關根の諸博士及び内田貢を贊助とし、少壯學者等の分擔校註に成る。【刊行】昭和二年十二月より、同六年三月に互る。

【内容】「萬葉集」を初め諸勅撰集、中世・近世及び明治初期の諸家集、その他、歌合等謂はゆる和歌を可及的に廣く集成し、主なる歌詠をも加へ、諸種の本によつて校合し、頭註を附してある。各巻の初めには親切な解題がある。各巻の收載書目を左に擧げる。

第一巻は古歌謡集と題し、紀記歌集、歌垣歌、琴歌、神樂歌、催馬樂、東遊歌、風俗歌、夜須禮歌、田歌、梁塵秘抄、今様、雜藝、讀嘆、和讀、教化、順次往生講式歌詠、朗詠要集、宴曲、興福寺延年無唱歌、山王七社權現船歌、閑吟集、小歌等を收む。第二巻は萬葉集。第三巻は八代集上、古今より後拾遺までの四部。第四巻は同集下、金葉より新古今までの四部。吉田令世の歴代和歌勅撰考を附録として收む。第五巻は十三代集一、新勅撰より續拾遺までの四部。第六巻は同集二、新勅撰より續千載までの四部。第七巻は同集三、續後拾遺より新千載までの三部を收む。第八巻は同集四、新拾遺より新續古今までの三部。第九巻は撰集、歌合と題し、新葉和歌集、古今和歌六帖、續詞花和歌集の三歌集、在民部卿家歌合、寬平御時歌合、亭子院歌合、天徳内裏歌合、高陽院歌合の五歌合及び契沖の和歌拾遺六帖を附録として收む。第十巻は御集、六歌集上、後鳥羽院御集、土御門院御集、順徳院御集附拾遺、後醍醐天皇御製及び長秋詠藻と拾玉

こつかた こつかは

集を收む。第十一巻は六歌集下、秋篠月清集、山家集、拾遺愚草と同員外、壬二集。第十二巻は三十六人集と六女集。三十六人集は補遺として、主として萬葉集、勅撰集から拾つたものがあり、六女集は清少納言集、紫式部集、俊成卿女集、小馬命婦集、經信卿母集、賀茂保憲女集、前三者には主に勅撰集からの補遺が載つてゐる。第十三巻は中古諸家集と題し、大江千里集、會丹集附補遺、前大納言公任集、惠慶法師集、和泉式部集附續集、赤染衛門集、大納言經信卿集、散木奇歌集、左京大夫顯輔集、清輔朝臣集、左京大夫家集を收む。第十四巻は近古諸家集、源三位顯政集、平忠度集、鴨長明集、金槐和歌集、式子内親王集、李花集、嘉喜門院集、兼好法師集、草庵集、續草庵和歌集、嘉景集、衆妙集、騷白集、草山和歌集を收む。第十五巻は近代諸家集一、常山詠草、既花集、漫吟集、戸田茂睡歌集、春葉集、あづま歌、賀茂翁歌集、天降言、しづのや歌集、杉のしづ枝、楳取魚彦集、佐保川、歌のこり、筑波子家集、松山集を收む。第十六巻は同集二、宣長の自撰歌、うけらが花、阿屋歌集、琴後集、稻葉集、後鈴屋集を收む。第十七巻は同集三、六帖詠草、藤雲冊子、岡田詠草、獅子巖和歌集、雲錦翁歌集、柳園詠草、良寛歌集を收む。第十八巻は同集四、桂園一枝、同拾遺、浦の汐貝、亮々遺稿、泊泊舍集、橘守部家集、柳園家集を收む。第十九巻は同集五、山齋歌集、柿園詠草、櫻園歌集、空谷傳聲集、千々廻舍集、草徑集、平賀元義集、野雁集、和田嚴足家集を收む。第二十巻は明治初期諸家集と題し、志濃夫酒舍歌集、海人の刈藻、しのぶぐさ、調鶴集、於知葉集、瑠々室集、向陵集、眞爾園翁歌集を收む。第二十一巻は夫木和歌抄上。第二十二巻は同和歌抄下。第二十三巻は風葉和歌集その他として、同歌集の外に、新修作者部類(字畫順)、和歌史年表を收む。

【價値】これだけ多數の歌を収録したことは、非常に便利である。大抵は流布されてゐて、學者の渴を醫すといふ如きものではないが、

多くの人に歌を讀ませるといふ點、及び容易に見得るといふ點で意義がある。特に和歌索引、撰集作者部類總目錄があるのは甚だ便利である。 [藤川]

國歌の胎生及び發達

【著者】五十嵐力【刊行】大正十三年八月、早稻田大學出版部。【内容】前後兩編に分ち、前編は「短歌の重疊味」と題し、三十一音の短歌が廣く行はれ、長く續き多く詠まれ深く尊ばれて來た理由は、主としてその形式美五七七五七七にありとし、短歌形式の成立について簡単に論じて、後編の豫備的知識を與へ、五七・五七と鎖りつゝ、つたひ、最後に七言の支柱句を据ゑて詠んだのが短歌の古い形式で、次に五七五・七七と詠み續けられるに至つたと論じ、この新古兩形式に於ける長所短所を論じてゐる。後編は「國歌の胎生及び發達」と題し、感情語、理想語の整へられ磨かれた所に、詩歌の最初の面影を見せた上代人は、長い暗中摸索の結果、五言句・七言句の耳に最も調子よく響くことを知り、句の連ね方では、短長、五七と連ねるのが最も口づき耳ざはり的好いことを知つたのである。詩形の構成上から大別すると、(一)句を對させて偶數に纏める對待偶數式、(二)對待の偶數式に、調子を落ちつかせるための支柱句を、もう一句加へる對待添句奇數式、(三)偶數句と奇數句と長句と短句と混合して、あやをつける奇偶長短亂取式の三種が初めに試みられたが、第二の形式が最も榮え、標準形式と認められるやうになり、中でも「短長・長」と續くものの中の五七・七と續くのが最も榮えて優存することになつた。この形式は片歌が單位で、片歌を併せたのが旋頭歌、五七の對待句を二度繰

返し七言を加へたのが短歌、同じく三度以上繰返して七言を添へたのが長歌であるが、片歌は早く滅び、萬葉時代は短歌・長歌について旋頭歌が榮えたが、以後短歌のみ榮え、他は感み半分にならざるやうになつて來たと論じ、又、單式開展の一解物と複式開展の分解式とに分けて長歌の變遷を論じ、反歌は「一解物の單調を救つて、長歌に變化を加へ、趣味を添へ、その生命を長くした」とものと説明し、平安朝以後の長歌に反歌の伴はぬやうになつたのは、主として七五調の長歌に七五調の反歌を添へる平板さからであらうといひ、平安朝の長歌は、短歌に倣つて七五調に變つたが、主としてそれが原因して衰へたと述べてゐる。附録に「證歌略解及び新譯」があるが、これは本論に引用した古歌詠の中、難解と思はれるもの八十餘篇に簡単な解釋を施し、且つ律語的な現代語譯を試みたものである。【價値】江戸末期に和歌の形式的研究には尊重すべき業績が遺されてゐるが、それ等を綜合整理し、著者の新見解を下したもので、片歌・旋頭歌・短歌・混本歌・長歌・反歌・和讀・今様等の受胎・發生・變遷・興亡の消息を如實に描き出し、短歌が前代の諸體に對しては、最後に生き残つた衆美綜攝のゴールとなり、後代の諸體に對しては、種を播き、緒を與へる事業を引き受け諸體分岐の出發點になつた、その奇しき形式美を闡明してゐるのである。これ等の研究は、なほ補正され且つ深く細かく進んで行くであらうが、この書は研究途上に於ける大きな目標の一つとなるであらう。 [藤川]

國歌八論

【著者】荷田在滿【諸本】明治二十六年、平悳氏が「歌論類纂」と題し、主として國歌八論關係

は、詞花言葉を歌ぶやうになつたからである。「萬葉集」は「記紀」の歌よりは文に、「古今集」よりは質である。萬葉でも卷一・二と十九・二十とでは風情漸く變じて華に移つたことが分る。而して「新古今集」に至つて華美の極に達し、それから又いさゝか質にかへつたのである。

言の選擇を論じ、且つ制詞等も或る點まで必要なることを認めると共に、無意義固陋なる從來の制詞の不可なるもののある事を論じてゐる。「五、正過論」詞の選擇について上述した點を繰返し、また漢語俗語はもとより用ふべからずと斷じ、一首中の過失を正すは誰を宗とし誰を祖とするには及ばず、ただ當然の

するところといへば、國史・萬葉よりもこれを尊み證とするが如きは、實に歌學の明かならざる根源であるとし、次に「古今傳授」の誤れることを論じ、宗祇の「古今集」を釋したもので、幽齋の「伊勢物語」二百人一首「詠歌大概」を解した書等は淺見寡聞、無稽の言、一の探るべきものなしと極論し、清輔と顯輔はこの間

た論述も少くはないが、近世歌壇に革新の曉鐘を鳴らした功績は没すべからざるものがある。この書が如何に歌壇に影響し大きな波紋を生じたかは、この書について意見を書いた類書の夥しく出た一事によつても分る。
【未書】國歌八論餘言田安宗武○國歌八論餘言拾遺 賀茂眞淵○國歌論臆說 同上○金吾再奉

答書同上○臆說利言 田安宗武○國歌八論斥非大書非○國歌八論評及び八論斥非評本居宣長○國歌八論評伴蒿巖○國歌八論斥非再評藤原維濟○國歌八論斥非通駁稿子○國事八論荷田松圃○國歌論評釋 石戸谷昌進

國歌八論餘言

こくかはち 歌論書 一巻 【著者】田安宗武【成立】在滿の「國歌八論(別項)を奉つて間もなく書いたものと眞淵の奥書によつて知られる。【諸本】歌論類纂・續歌學全書第一編等に所收。【内容】「國歌八論」の謂はゆる八論以外「あたらしき物の名を歌によむ論」「歌をたしなむの論」の二篇が附加されてゐて、前者に於ては、後世は人の詞も悪く、自ら物の名もいやしいのが多く、それ等は歌に詠むべくもないが、美しく聞ゆる詞は、古の詞にとりあふ故詠んで差支ないと論じ、後者に於ては、人にまさらむとし又は詞を巧にするは不可で、あながちよくせむと求めず、おのが心のまゝに詠むべきであると論じ、歌合の悪い事や例の能因法師の坐ながらにして白河の關を詠じた故事を擧げて戒めてゐる。八論に對しては避詞・正過・官家の三論及び歌源論に於て、歌はうたふべきもので、八雲立つの歌を歌の源と論じた點等には賛成し、その他の點では在滿に反對の論を述べてゐる。即ち在滿が歌は、詞花言葉を歌ぶもので、天下の政務日用常行に助くる所のないものであるなどといふに反對し、歌は人の心を和らげるもので、美はしき歌は勿論、あしき歌でも、これをあしと思ひて見る時は戒ともなると云ひ、その道徳的價值を認め、詩には及ばないが、そのあるがまゝに用ひて助けとする事は、いゝことであるといひ、擇詞論に於て在滿が上古の詞の迂遠・急迫等の詞を避くべ

きを論じたのに反對して、それ等の缺點は詞そのものにはなく、歌のさまにこそあるべく、すら〜と詞優に、そのさまのびらかによみいづればよいので、「古の言葉の中にておのづから優なりと思へる詞を用ふべきのみ」と斷じてゐる。「歌を學ぶの論」に於ては、歌の理に協ふを學ぶのが歌學であつて、ただそのわざを學ぶを歌學といふは誤りである。古き詞を學ぶのはよいが盡く知るといふ事は到底出來ないことで、自分の理解した範圍に於て應用して詠めばよいとして、在滿の作歌と遊離した歌學研究の態度を難じ、「歌の道盛なる世とすたれたる世とを辨ふるの論」に於て、在滿が「新古今」時代を理想としたに反し、上古の歌を理想とし、政正しい代は歌の理が盛んで、政衰ふる代は歌の理も違ふべきではあるが、その技はさして變らないとし、後世歌の道の衰へたのは歌合が盛んになつたため、古人の作を改作するが如きさかしら不可とし、「田子の浦ゆ」の例をあげて論じてゐる。

【参考】萬葉主義の歌論に就いて久松潜一(心の花第七萬葉集)

國歌八論餘言拾遺

こくかはちろん 歌論書 一巻 【著者】賀茂眞淵【別名】略して「八論餘言拾遺」とも云ふ。【成立】「國歌論臆說(別項)の草稿であらう。清水濱臣の文化元年の奥書があつて、眞淵の反古より見出したもので、缺けた部分があると思はれるが、知人の間にも知れてゐない由を記してゐる。【諸本】歌論類纂・續歌學全書第一編等に所收。【内容】「歌のみなものと論」「歌をもてあそぶの論」「詞をえらぶの論」「詞をさくるの論」「歌をまなぶの論」「歌の道盛なる世とすたれたる世とをわきまふるの論」の六篇で、「過を正す論」は題目のみで説明がなく終つてゐる。即ち八論中、正過論・官家論が缺けてゐるのであるが大體の意見としては纏まつてをり、文章の叙述等は「國歌論臆說」とかなり相違する部分もあるが、大意は同様である。擇詞論中、實朝の歌をほめて、例歌として「臆說」では「武士の「箱根路を」の二首をあげ、この書には「武士の「だけ」を擧げてゐる代りに、實朝實揚の言葉をやゝ多く費してゐる、同じく「秋の野の」の歌の結句を「臆說」では「かりほしおもほゆ」とも詠むのだらうと説き、この書には、「かりほしどもふ」と詠む事を主張してゐる程度の部分的な差異は認められる。【價值】「國歌論

臆說」と大體主張は同一であるが、部分的には多少の異が見られるから、「臆說」と併せ讀むべきものである。

【著者】賀茂眞淵【別名】略して「國歌論臆說」とも云ふ。【成立】「國歌八論餘言(別項)に對して意見を奉つたもの、多少の補正はあるだらうが、「國歌八論(別項)」と同年に成つたもので、延享甲子季夏の眞淵の奥書がついてゐる。【諸本】歌論類纂・續歌學全書第一編・賀茂眞淵全集等に收む。【内容】「八論餘言」と同じく十篇より成り、制詞論・正過論・官家論等は、「八論餘言」の宗武の説と共に「八論」に賛成し、堂上歌人を玉碎してをり、「餘言」と共に上代歌風を唱道して「八論」の新古今歌風の提唱に反對してゐる。大體に於て「餘言」の方に賛成してゐる部分が多いが、宗武が道徳的功利的見解を把持する事の堅いのに反し、眞淵が自然眞情を重んじたこと等の相違がある。先づ「歌源論」に於ては、「八論」及び「餘言」が「八雲立つ」の歌を歌の初めとしたのに對し、二神の唱和を以て歌の初めとしてゐる點が特に注意される。「歌論」に於ては「餘言」と共に、その功利的價值を認めてゐるが、歌は慾心を去るものである、漢詩はあらはに教戒の意を寓することが歌よりも多く、短歌に於ては、人を諭すことなどは特に困難で、意識的にさうした事を考へずすら〜と自然によみ歌を歌ふことにこそ治道に利益をもたらすと論じてゐる點等に、宗武が漢詩の教戒の具となる事を大に推賞したのとやゝ異なるのを見得るのである。「擇詞論」に於ても、大體「餘言」に賛成し、かの「み草かりふきやどれりし」の歌を「やどりつる」と改作するを可とし

きを論じたのに反對して、それ等の缺點は詞そのものにはなく、歌のさまにこそあるべく、すら〜と詞優に、そのさまのびらかによみいづればよいので、「古の言葉の中にておのづから優なりと思へる詞を用ふべきのみ」と斷じてゐる。「歌を學ぶの論」に於ては、歌の理に協ふを學ぶのが歌學であつて、ただそのわざを學ぶを歌學といふは誤りである。古き詞を學ぶのはよいが盡く知るといふ事は到底出來ないことで、自分の理解した範圍に於て應用して詠めばよいとして、在滿の作歌と遊離した歌學研究の態度を難じ、「歌の道盛なる世とすたれたる世とを辨ふるの論」に於て、在滿が「新古今」時代を理想としたに反し、上古の歌を理想とし、政正しい代は歌の理が盛んで、政衰ふる代は歌の理も違ふべきではあるが、その技はさして變らないとし、後世歌の道の衰へたのは歌合が盛んになつたため、古人の作を改作するが如きさかしら不可とし、「田子の浦ゆ」の例をあげて論じてゐる。

これを要するに歌壇革新の意圖に於ては在滿に賛成してゐるが、歌を詞花言葉を歌ぶを以て足れりとして「新古今」の華麗を理想とし、歌の功利的見解を排したる在滿の態度に反對して、人の心を和らぐる道と信じて歌の道徳的價值を認め、やすらかに自然に詠み出でた上古の歌風を理想とした點に、兩者の根本的差異が認められる。【價值】道徳的價值とより離して歌道を考へようとした在滿の態度には寧ろ服すべきものがあると思ふが、ただ單に詞花言葉を歌ひ、わざをのみ重大視したのは訂正されるべきものと考へられる。この意味に於て、宗武の論は十分價值づけらるべきである。なほ在滿の古學論はその作歌との關係が

【未書】國歌八論餘言田安宗武○國歌八論餘言拾遺 賀茂眞淵○國歌論臆說 同上○金吾再奉

た「八論」の説には、「餘言」と共に反對して原歌をよしとしてゐるが、「かりいほしぞ思ふ」は「かりほしおもほゆ」とも詠むのであらうと説いてゐる。「避詞論」に於ては、「雪の夕暮」「雨の夕暮」等の制詞のいはれなき點は「餘言」と共に「八論」に賛成し、「正過論」では、同じく大體在滿に賛成してゐるが、「秋の田のかりほ」の歌の「つつ」の意味は「明けけし」と言つてゐるが、古歌を改作するのあしきことを言つてゐるのは同様で、且つ古歌の體を重んじ歌の體を古にかへしたく思ふ意を述べた點は、在滿に一步を進めてゐる。「官家論」も「餘言」と共に在滿に賛成してゐるが、やはり歌道の昔に還ることを願つてゐるのは、眞淵の崇古思想をあらはして「八論」と異なる點である。「歌を學ぶの論」では、古意を知るために先づ古語の學ぶべきを言ひ、「歌は幼かれ」といふは眞理で、古歌の自らなるをこそ學ぶべしとして、大體「餘言」に同意し、「歌の道盛なる世と衰へたる世とをわきまふるの論」では「餘言」に歌合の出來て歌が衰へたことを説いた事を卓見なりとして大に賞讃し、やすらかに詠み出でた上代の歌風をよしとし、人磨・赤人を賞揚し、「古今集はなほ慕はしくぞはべるなり」と云ひ、大體に於て「餘言」に賛成し、「八論」の原説に反對してゐる。「新しき物の名を歌によむの論」(歌をたしなむの論)等もほぼ「餘言」と同意見である。「價値」眞淵の歌論は他の諸書に見られるが、この書は特に「八論」及び「八論餘言」に關する彼の見解を述べ、それ等を批評し補正した點が少なくなく、「八論」關係の諸書中、逸することの出來ないもの一つである。

滑稽好 藤本 一册 【作者】櫻

によれば、滑稽とは小さいものが大きいものと對立して、兩者の關係が幻覺的に、反對の關係として見えるやうにする時生ずるもので、それが主觀的反省によつて生ずると機智となり、又大きいやうに見えたものが實際は小さかつたといふやうに實際と一致しないのみならず、その反對を起すやうな假象を生ずる時は皮肉(Ironie)となる。又大きいものと小さいものとを二つとも否定して、大きいものを低め、小さいものを上げるのが有情滑稽である。リップス(Lips)によれば、偉大

川慈悲成【名稱】支那の「虎溪三笑」の虎溪に因んで滑稽の二字でこじつけ、それと共に刊行年代が百年であつたから、雞の鳴聲に擬したのである。【刊行】享和元年。文化七年に再版し、又文化十年には笑話の數を十則として再版。【解説】二十話より成つてゐる。西年の新年に因んで刊行したものであるから、特に西に關する嘲が多い。初鶏・藥喰・大三日・酒・按摩などは、多少なりとも百年といふことに觸れてゐる。従つて際物といふ感じが濃厚であり、又新鮮な感じも持つてゐるが、そこに無理があることも見出される。鶴と龜とが寝る寝ないの論争に、鶴は所詮寝んといひ、龜が先づ寝んと言つたり、萬歳と才藏とがくつついて歩くので、にかは萬歳といふが如き隨分苦しい駄洒落に禍されてゐる。この頃の嘲本は、漸く内容に形式に墮落の域に入つたやうである。

滑稽千社參 八册

【作者】梅亭金鷲【名稱】「六阿彌陀詣」や「江の島土産」(各別項)などの如く、當時流行した千社參りに材を採つてゐるので、この名があると思はれる。併し余の見たと六册本は、漸く六册目の第十二回から王子稻荷參詣になつてゐるから、殆ど名稱に副はないものである。

【刊行】未詳。但し、文中に蒸氣船の語もあるから嘉永・安政頃に刊行されたものであらう。【解説】江戸の有閑市民の、太平樂の生活を描寫したものである。鯉丈の「花曆八笑人」や、「和合人」や、或は「七偏人」(各別項)などに見えるやうな滑稽を千社參りの途中に寫さうとしたのである。江戸の根岸の町外れに樂貧亭の標札を掲げてゐる主人公の笑次郎が廻狀を出して仲間を呼びよせると、鯉藏に左志松、

感は美的快感ではない。單なる喜劇の快感は知的快感と同様であるに過ぎぬ。それが深さの價値感情をもつやうになると有情滑稽となる。例へば子供が矛盾を示す事によつて、反つてその子供の無邪氣な價値を示すやうな場合に有情滑稽が生ずる。即ち否定が反つて意味をもつのであるが、悲劇に於ける場合と異なり、その意味が喜劇的性質をもつのである。併しこの有情滑稽には三つの場合がある。第一は吾々が崇高であることによつて事物を滑稽的に見る場合であり、第二はやはり事物を

札七、繪馬助の四人が集まり、各々無駄話の末、笑次郎が各自の所存を述べよと言ふと、鯉藏は自分の希望は大力になり、權八のやうに鈴ヶ森で武藏坊辨慶や四天王や朝比奈のやうな雲助を投げ飛ばすことだと言ふ。繪馬助の心願は、いろ／＼に人を化すことだといふ。左志松は、女にべた惚れになりたいといひ、札七は大金持になつて大盡遊びをしたいといふ。最後に笑次郎の心願は、皆の希望を聞き肩けてやりたいと言ふ。かくて五人は共に千社參りをする事になる。翌日各々珍趣向を凝らし、繪馬助は背に帆を負ひ、下駄に車を付けて來り、札七は反釣瓶應用で、背中に二本の棹をかつぎ、紐で足を結び、竹の撓ふのを利用して歩くのである。左志松は引窓の戸に乗り、綱を犬に曳かせ、犬の鼻の先に蒸し芋をぶら下げ、犬がそれを食はうとして走るのを利用してのだと得意になる。やがて小手調べになつて失敗し、それから一同王子稻荷へと出向くことになる。全八册としても千社參りを中心として、道々の滑稽を書くことすれば、前書が長過ぎる。併し、單なる太平の逸民の遊戯的な生活の描寫としては、相應の出來である。

滑稽太平記 八卷

【作者】北藤浮生。浮生は江戸の人、銀町に住し、銀塘居・迦樓羅園と號した。季吟門と傳へるが疑ひがある。享保二年正月二十三日歿す。享年四十八。【名義】滑稽は俳諧の義で、俳諧の太平記の意である。【成立】元祿・享保の間【諸本】俳諧逸話全集(俳諧文庫)・俳人逸話紀行集(俳諧叢書)所収【解説】主として貞門俳諧師に關する逸事逸聞を叙したものである。中には確實な事實

も各價値が虚無となる時に生ずる。例へば街學者偽善者・自稱天才などの場合がそれであり、又田舎娘の場合のやうに多様の要素を含む場合もある。第二に滑稽が崇高を以て現れるか否かによつても分れる。ドン・キホーテの滑稽は崇高をもつ滑稽である。第三にその虚無への融解が急激で哄笑を生ずるか、それが徐々と流れて微笑を生ずるかによつて、粗野の滑稽と美妙の滑稽とに分れる。又粗野の滑稽の一種として茶番(Burlesque)がある。

と認められるものもあるが、作爲の加へられてゐるものもあると思はれる。先づ俳諧の由來に就いて説き、山崎宗鑑・荒木田守武に關する記述を前置きとして、松永貞徳・山本西武以下貞門諸家の略歴を紹介し、その性行の特色あるものを詳かに述べた。中には俳諧史上重要な參考となるべき記事も少くない。特に松江重頼と野々口立圃・池田正式・安原貞室等との間の確執、鷄冠井令徳の「崑山集」(別項)、貞室の「玉海集」(別項)、その他撰集に關する辯難等の記事は、當時の俳人氣質乃至俳諧側面史を簡單に窺ふに便がある。かくて本書に扱はれた問題を目錄に就いて見れば、總て六十五項、これを八卷に分載したのであるが、各巻毎に初めにその巻の目錄を掲げてゐる。「各務」

滑稽美 一册

【定義】理論的規範意識が美的對象の内容を成す美的様態、笑を生ぜしむる美的内包。【學說】ハルトマン(Hartmann)によれば、葛藤の論理的自識によつて生ずる美的内包を滑稽美といふ。即ちそれは背理によつて生ずるもので、この背理が無意識に生ずるのが機智(Witz)であり、これを自ら意識して起すものが自諷(Komische Selbstdarstellung)である。但しこの場合には、背理の對象を自身とするので、その背理によつて自己の人格が失はれぬ程の人にして始めて意味がある。又悲哀美の如き葛藤の内在的解決と異なり超越界を知り、而も悲壯美の如き葛藤の超越的解決と異なり現象界を知り、この兩者を綜合せるものが有情滑稽(Humor)である。フッシュャー(Th. Vischer)によれば、弱い馬鹿らしいものから來る不快感によつて生ずる快感が滑稽美の快感である。ジーベック(Gierbeck)

刺的(Das Satirische)となる。更に又主觀的滑稽で、その主觀的表象結合が勝手に虚無への融解を生ずる時に機智となる。機智は暴露の目的をもつが、かゝる目的をもたずに、その精神的自由な主觀が表象と遊戯する時に冗談(Scherz)となる。又この精神的自由の主觀がその表象に對して觀察の態度をとると有情滑稽になる。これは人間の有意義の内容をもつもので、その點悲壯美に對應する。又機智が輕蔑を生ずると諷刺(Satire)となる。この機智に屬するものに皮肉がある。これは虚無

と認められるものもあるが、作爲の加へられてゐるものもあると思はれる。先づ俳諧の由來に就いて説き、山崎宗鑑・荒木田守武に關する記述を前置きとして、松永貞徳・山本西武以下貞門諸家の略歴を紹介し、その性行の特色あるものを詳かに述べた。中には俳諧史上重要な參考となるべき記事も少くない。特に松江重頼と野々口立圃・池田正式・安原貞室等との間の確執、鷄冠井令徳の「崑山集」(別項)、貞室の「玉海集」(別項)、その他撰集に關する辯難等の記事は、當時の俳人氣質乃至俳諧側面史を簡單に窺ふに便がある。かくて本書に扱はれた問題を目錄に就いて見れば、總て六十五項、これを八卷に分載したのであるが、各巻毎に初めにその巻の目錄を掲げてゐる。「各務」

「八論」及び「八論餘言」に關する彼の見解を述べ、それ等を批評し補正した點が少なくなく、「八論」關係の諸書中、逸することの出来ないもの一つである。

【解説】江戸の有閑市民の、太平樂の生活を描寫したものである。鯉丈の「花曆八笑人」や、「和合人」や、或は「七偏人」(各別項)などに見えるやうな滑稽を千社參りの途中に寫さうとしたのである。江戸の根岸の町外れに樂貧亭の標札を掲げてゐる主人公の笑次郎が廻狀を出して仲間を呼びよせると、龜藏に左志松、

た。季吟門と傳へるが疑ひがある。享保二年正月二十三日歿す。享年四十八。【名義】滑稽は俳諧の義で、俳諧の太平記の意である。【成立】元祿・享保の間【諸本】俳諧逸話全集(俳諧文庫)、俳人逸話紀行集(俳諧叢書)所収【解説】主として貞門俳諧師に關する逸事逸聞を叙したものである。中には確實な事實

哀美の如き葛藤の内在的解決と異なり超越界を知り、而も悲壯美の如き葛藤の超越的解決と異なり現象界を知り、この兩者を綜合せるものが有情滑稽(Humor)である。フィッシュャー(Th. Vischer)によれば、弱い馬鹿らしいものから来る不快感によつて生ずる快感が滑稽美の快感である。シーバック(Seiback)

によれば、滑稽とは小さいものが大きいものと對立して、兩者の關係が幻覺的に、反對の關係として見えるやうにする時生ずるもので、それが主觀的反省によつて生ずると機智となし、又大きいやうに見えるものが實際は小さかつたといふやうに實際と一致しないのみならず、その反對を起すやうな假象を生ずる時は皮肉(Ironie)となる。又大きいものと小さいものとを二つとも否定して、大きいものを低め、小さいものを上げるのが有情滑稽である。リップス(Lipps)によれば、偉大なやうな形と動作とをしてゐるものが、突然に偉大でなく小さいものになる時に滑稽が生ずる。即ち「突然の小さいもの」(Das überraschende Kleine)が滑稽の對象となる。それは用意した期待を失はせる時に生ずる快感を與へる。それが論理的失望を生じさせると機智的滑稽(Witzige Komik)となる。例へば一般の喜劇はビール樽のやうな人間の姿から生ずる客觀的喜劇であるが、これに反して機智は、かゝる客觀的形相をもたぬ主觀的喜劇である。また子供を大人に比較する場合のやうに、子供としては正當なものを大人と比較することによつて、不正當なものとして變ずる時に喜劇が生ずる。これを素朴的喜劇(Naive Komik)といふ。凡てこれ等の喜劇が包括されるものとして道化喜劇(Possenhafte Komik)、茶番喜劇(Burleske Komik)、怪奇喜劇(Groteske Komik)がある。道化は極端の喜劇で、嘲笑・哄笑を特質とする。茶番は一定の喜劇の名稱でなく、喜劇的内容を與へたり喜劇的に見えさせたりする表現法の名稱である。怪奇喜劇は怪奇なものを喜劇的效果の手段とするものである。併し喜劇そのものの快

感は美的快感ではない。單なる喜劇の快感は知的快感と同様であるに過ぎぬ。それが深さの價值感情をもつやうになると有情滑稽となる。例へば子供が矛盾を示す事によつて、反つてその子供の無邪氣な價值を示すやうな場合に有情滑稽が生ずる。即ち否定が反つて意味をもつのであるが、悲劇に於ける場合と異なり、その意味が喜劇的性質をもつのである。併しこの有情滑稽には三つの場合がある。第一は吾々が崇高であることによつて事物を滑稽的に見る場合であり、第二はやはり事物そのものでなく、事物の表現自身が滑稽な場合であり、第三は事物のうちに滑稽が客觀的に現れる場合であり、この第三の場合が美的に意味をもつ有情滑稽である。更にこの有情滑稽美に於ても、第一に小を見てこれを超越する和解せる滑稽と、第二に小に對して反對する不和の滑稽と、第三に小を認め同時にそのもの自らの矛盾に陥るといふ再和解の滑稽とがある。第一を諧謔的有情滑稽(Humoristischer Humor)といひ、第二を諷刺的有情滑稽(Satirischer Humor)と稱し、第三を皮肉の有情滑稽(Ironischer Humor)といふ。フォルケルト(Volkelt)によれば、美的印象によつて生命感情が高めらるゝ場合に滑稽美が生ずる。併しそれは悲壯美や崇高美に對立するのでない。滑稽は悲壯と同じく葛藤をもつが、滑稽の場合にはこの葛藤が笑の上にある。それで多くの場合にはその繼續過程が短く、又形の滑稽のやうに時間のないものもある。この滑稽の笑は、價值要求が虚無に融解する時に成立する。それで滑稽を第一にこの價值領域から區別すると、理智的・道德的・宗教的・藝術的の四つに分けられる。そして何れ

も各價值が虚無となる時に生ずる。例へば街學者・偽善者・自稱天才などの場合がそれであり、又田舎娘の場合のやうに多様の要素を含む場合もある。第二に滑稽が崇高を以て現れるか否かによつても分れる。ドン・キホーテの滑稽は崇高をもつ滑稽である。第三にその虚無への融解が急激で哄笑を生ずるか、それが徐々と流れて微笑を生ずるかによつて、粗野の滑稽と美妙の滑稽とに分れる。又粗野の滑稽の一種として茶番(Burleske)がある。これは人間の動物的自然性のうちに成立するか、動物の自然的のものをもつ時に生ずる。又同じく粗野の滑稽の一種に怪奇(Groteske)がある。これは常に想像的で強い破綻の形式をとる。又粗野の滑稽で可憐なものを覆へるのが洒落(Das Drollige)や、又ワレンシュタインの陣屋の番人の如く、その可憐なものが品位をもつと道化的(Das Posseltliche)となる。第四に滑稽は又客觀的・主觀的、又は自由・自由によつて分けられる。客觀的滑稽とは滑稽の對象の意識が對象の滑稽を生ずる場合で、例へば愚な百姓の滑稽がそれである。又この客觀的滑稽は不自由と自由とに分けられる。不自由とは滑稽の對象の目的が滑稽の過程を生ずることに關與しないやうな印象を與へる場合で、例へばその滑稽を生ずる對象の意見が度外視される場合である。自由な場合はその反對である。又主觀的滑稽とは滑稽の意識が滑稽の表象過程によつて生ずる滑稽であるが、この主觀的滑稽でも純粹なものとは不純粹なものもある。不純粹なものは材料の刺戟と結合するもので、感官的刺戟が關與すると、無恥(Nüchtern)の滑稽が生ずる。又不正の價值要求が反つて道義的情緒を生ずると諷

刺的(Das Satirische)となる。更に又主觀的滑稽で、その主觀的表象結合が勝手に虚無への融解を生ずる時に機智となる。機智は暴露の目的をもつが、かゝる目的をもたずに、その精神的自由な主觀が表象と遊戯する時に冗談(Solenz)となる。又この精神的自由の主觀がその表象に對して觀察の態度をとると有情滑稽になる。これは人間の有意義の内容をもつもので、その點悲壯美に對應する。又機智が輕蔑を生ずると諷刺(Satire)となる。この機智に屬するものに皮肉がある。これは匿された表象内容を褒めるか貶すかして、最も明かに發くものである。又氣まぐれ(Laune)といふのは、その結果が冗談となるもので、對象と遊ぶことを目的とする。

【參考】「美的様態」中に掲げたもの外に、Ueberhorst, K.: *Das Komische*, Bd. I, 1896. || Miller, J.: *Das Wesen des Humor*, 1896. || Lipps, Th.: *Komik und Humor*, 1898. || Bergson, H.: *Le Rire*, 1910. 【譯邊】

滑稽二日酔 ちやうちやうち「串戲二日酔」を見よ。

滑稽發句類題集 ちやうちやうち川柳集六冊【編者】素行堂松崎(大阪の川柳の點者として聞ゆ)。【刊行】天保二年。大阪心齋橋通河内屋外二軒の合同版。【諸本】川柳狂歌集(近代日本文學大系)所収。【内容】川柳狂句中から選抜した繪入句集である。中には随分多くの破禮句も編入されてゐる。【西原】

滑稽本 ちやうちやうち近世文學【別名】中本【名義】滑稽を對象とした文學作品の義。併し江戸時代の作品で笑や滑稽を對象に置かないものは殆ど無いから、滑稽本の名は、所謂滑稽本なる一群の近世文學の性質範圍を示して

ゐるとは言ひ難い。中本といふ名は製本上の名であつて、半紙本と小本(半紙半割判)との中間にある大きさの本の意である。即ち糊入のみよし紙を二つ切りにした大きさで、寸法からいふと、大體、横四寸、縦六寸であつて、今日の四六版に當るものである。併し、この大きさも滑稽本のこととなく、内容、製版を異にしてゐる草雙紙類も同大の中本形である。ただ當時中本といふ名は所謂滑稽本にのみ適用されてゐたといふだけである。但し中本形でなくて、同性質の文學が同時代に在つたことをも知らねばならない。【體裁】中本形各冊に二三枚の粗畫を挿入して居り、文字の大きさ或は組方は、黄表紙や草雙紙と違つてゐる。【系統】題材、内容、構想などの點から、滑稽本の由來系統を考へると、浮世草子の「氣質物」(別項)に溯源することが出来る。その意味での八文字屋の氣質物は滑稽本の父であるといへよう。即ち氣質の僻する所を寫し、何事によらず、常識を逸するまでに凝り固まつたものを書いて、滑稽を表はしてゐるのであるが、これは滑稽本の持つ一特質である。少なくとも著しい一傾向である。殊にこの點で、三馬(別項)の受けた影響は濃厚なものである。滑稽と教訓との取合せも亦滑稽本の一特徴に近いが、これは靜觀房好阿の「當世下手談義」(別項)、伊藤單朴の「教訓雜長持」(別項)などを繼承したと見られる。なほ風來山人(別項)の輕快な戲文も滑稽本の出現に相當の力を添へたと考へられる。併し本格的な滑稽本と見るべき道中膝栗毛(別項)以後の滑稽本には以上の諸流よりは、洒落本の流の方が遙かに大きな影響を與へてゐる。而して十返舎一九(別項)は滑稽本興隆のために殊勲者である。彼に

よつて滑稽本は全盛の時代に入り、江戸の戯作界は中本の世界となつた。三馬も亦彼と共に光つた人である。瀧亭鯉丈(別項)もその功勞者の一人に數へられよう。爾來摸倣追隨相次ぎ、假名垣魯文(別項)を最後として、明治維新の大渦中にその影を没するに至つた。

【題材】題材の種類範圍は、確實には言ひ難いが、江戸人の日常生活、遊戯生活を出でないだけは言へる。家庭や錢湯や床屋などに見ゆる日常生活、旅行、物詣、祭禮、社交、茶番、惡戲等に現れる遊戯生活を主たる題材として、これに洒落、地口、無駄口等の言語に關する遊戯を加へて、色彩を添へてゐる。なほこじつけた文字、圖案、紋形、模様などの特殊な材を用ひたものもある。【人物】一口にいへば、滑稽本の人物は愚劣な小人物、低級な都市人である。稀には武士、地方人等もあるが、それ等とても愚劣低級を出づるものではない。又性別・年齢別・職業別等よりすれば、色々に分たれるが、それ等とても概して類型的なものを

出でない。【構想】人物の配置、出入にあまり工夫を費すでもなく、場面の構成に劇作家などの如き細心の用意があるでもなく、また事件の展開にも投げやりな所が少なくない。概して格別の展開もない斷片的な事件の中に雜多な人物を描いてゐる。一九の「膝栗毛」にしても、三馬の「浮世風呂」(浮世床)にしても、さうした性質を持つてゐる。畢竟、多く構想をなさない所、如實的な寫實を見せた所に滑稽本の一興味があるのである。【態度】作の態度は概して寫實的である。緻細な寫實ではあるが、同時に又誇張性を含むことも免れない。皮肉的、諷刺的態度も交つてゐるが、それは遊戯的態度に緩和されて、甚だ輕いものと

なつてゐる。具體的にいへば、江戸氣質、江戸生活を醜弄しながら、骨を刺すやうな皮肉、背に汗を流させられるやうな諷刺を感ずることなく、皮肉諷刺の對象となつてゐる江戸人も作者と共に哄笑を禁じ得ないのである。そこに滑稽本の特徴な態度が看取される。

【時代區分】一九の「東海道中膝栗毛」の出現は、滑稽本の歴史中の最大事件で、本書に依つて滑稽本の主たる特性は具備されるに至つたのであるから、「膝栗毛」第一編を目標として、その以前寶曆以後を滑稽本初期とし、それ以後明治までを滑稽本中期とすべきである。本期中、文化・文政期はその最盛期で、一九・三馬・鯉丈の活動期であるから、この期を本期中の前期とし、以後を本期中の後期とするのが適當である。この後期は一筆庵や金鷲や魯文等が代表する。初期は畢竟搖籃時代であつて、諸特質の萌芽があつても、未だ成熟するに至つてゐない。本前期こそ、その成熟して極盛に達した期で、あらゆる傑作はこの期に出來てゐる。本後期は衰頹期であつて、作家に偉才なく、先輩の摸倣踏襲を事として、徒に末端の巧を競うてゐるに過ぎない。【作者】滑稽本初期の代表的作家には、靜觀房好阿・伊藤單朴・風來山人があり、本前期には一九・三馬・鯉丈があり、本後期には鬼武・一筆庵・金鷲・魯文がある。【時代との關係】滑稽本を生み出した時代精神は、他の黄表紙や川柳や狂歌などを生み出した精神と同じもので、享樂的、遊戯的な精神である。固定し切つた思想、變化の乏しい生活に厭き果て、退屈し切つた精神を、官能的刺激に由つて慰めようとして、生活を遊戯化したその一面が、この種の遊戯文學となつて現れたのである。

故に滑稽本は、當時の遊戯生活の反映であると共に、又當時の人々の遊戯精神を満足させる道具ともなつてゐた。

【參考】滑稽本の本質 藤生磯次(國語と國文學三六) ○笑の文學の起原 柳田國男(中央公論四三ノ九) ○滑稽文學の研究 青木與山(滑稽文學四ノ五・六) ○社會の進歩と滑稽文學 高橋義雄(滑稽文學一ノ一) ○滑稽本集解説 山口剛(日本名著全集) 【藤村・小柴】

滑稽遊治郎 起承轉合一を見よ。
滑稽和合人 起承轉合一を見よ。
浮世の四時 酒落本 一冊 【作者】南陀伽紫蘭(鹽田俊滿) 【畫工】自畫 【名稱】浮世は、隔離された吉原以外の地を意味し、その旁訓のこつちは吉原をあつちといふに對す。すべて假宅の意義である。角書に「鐘は並木か兩國賦」とある。並木兩國の假宅を題材とするためである。四時は廓のひげ時であるが、それをいふのは鐘の縁からであらう。【刊行】天明四年【諸本】江戸文藝資料第一卷・洒落本大系第六卷所收。【解説】天明四年四月吉原が全焼した時、許可された淺草並木及び兩國附近の假宅營業の光景を描寫したものである。自序に五月とあれば、實際として著作されたものと思はれる。初めに兩國の茶屋の參會のあとの賭博を覗き見する隣の假宅の遊女達、茶屋の一座からその隣にちよんの間遊びに抜けて來る遊客、日頃の吉原の位を餘所にしたすべて輕い遊びぶり、ふざけぶりを描き、次に並木の店前をそより歩く遊客のむだの数々を寫し、やゝ案内書めくほど各々の店の配置を示してゐる。假宅の情況を描寫して相應の効果を擧げてゐる。【山口】

【骨董集】たじろ 滑稽本 四卷 【著者】伊藤單朴

【骨董集】たじろ 滑稽本 四卷 【著者】伊藤單朴

【骨董集】たじろ 滑稽本 四卷 【著者】伊藤單朴

【骨董集】たじろ 滑稽本 四卷 【著者】伊藤單朴

【骨董集】たじろ 滑稽本 四卷 【著者】伊藤單朴

【骨董集】たじろ 滑稽本 四卷 【著者】伊藤單朴

(一) 本 稽 滑

唯時 十返舎一九

道中膝栗毛 (十返舎一九)

教訓雜長持 (伊藤單朴)

武列多摩殿 (伊藤單朴)

教訓雜長持 (伊藤單朴)

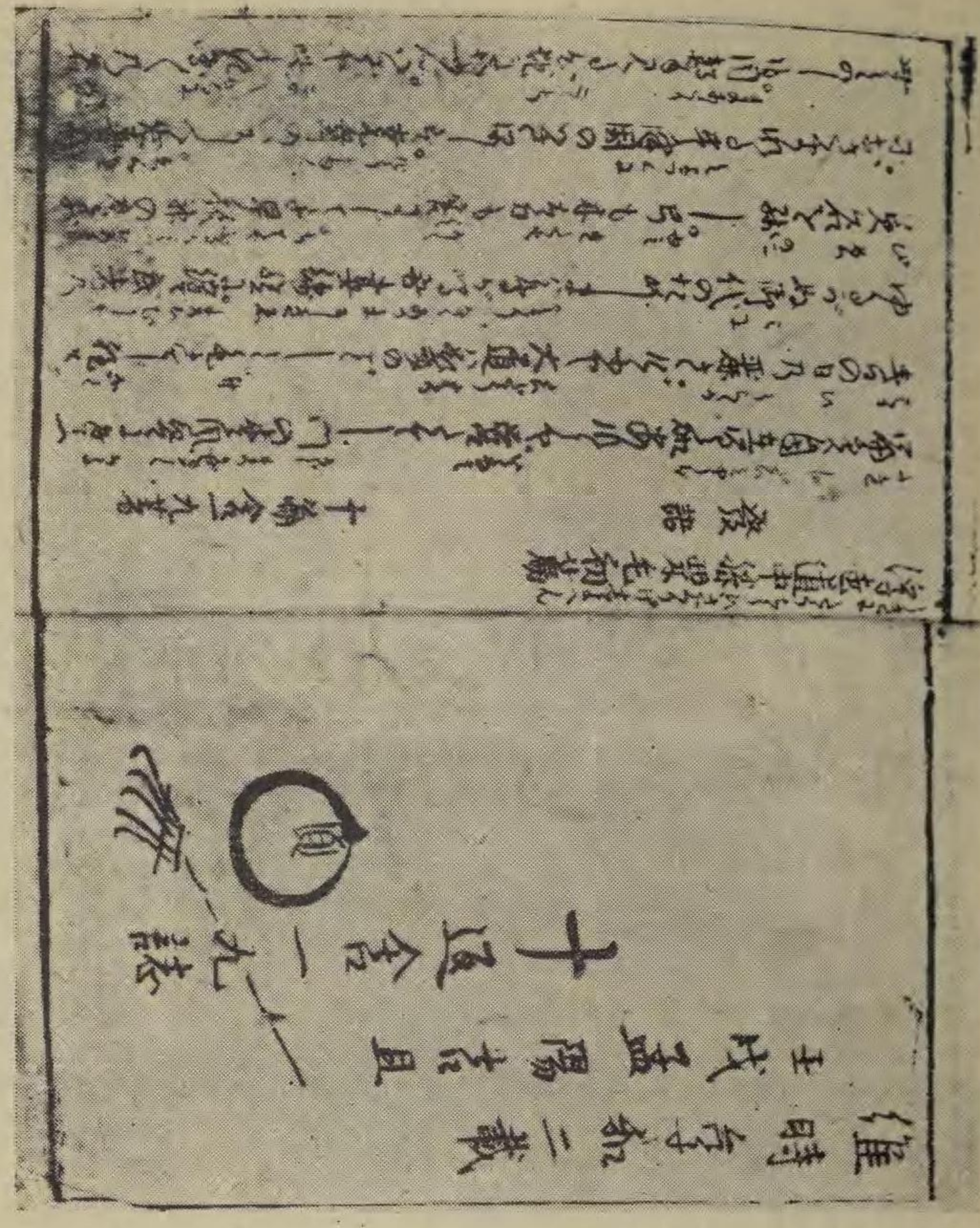
承したと見られる。なほ風來山人(別項)の輕快な戯文も滑稽本の出現に相當の力を添へたと考へられる。併し本格的な滑稽本と見るべき「道中膝栗毛」(別項)以後の滑稽本には以上の諸流よりは、洒落本の流の方が遙かに大きな影響を與へてゐる。而して十返舎一九(別項)は滑稽本興隆のために殊勳者である。故に

うした性質を持つてゐる。畢竟、多く構想をなさない所、如實的な寫實を見せた所に滑稽本の一興味があるのである。【態度】作の態度は概して寫實的である。繊細な寫實ではあるが、同時に又誇張性を含むことも免れない。皮肉的・諷刺的態度も交つてゐるが、それも遊戯的態度に緩和されて、甚だ輕いものと

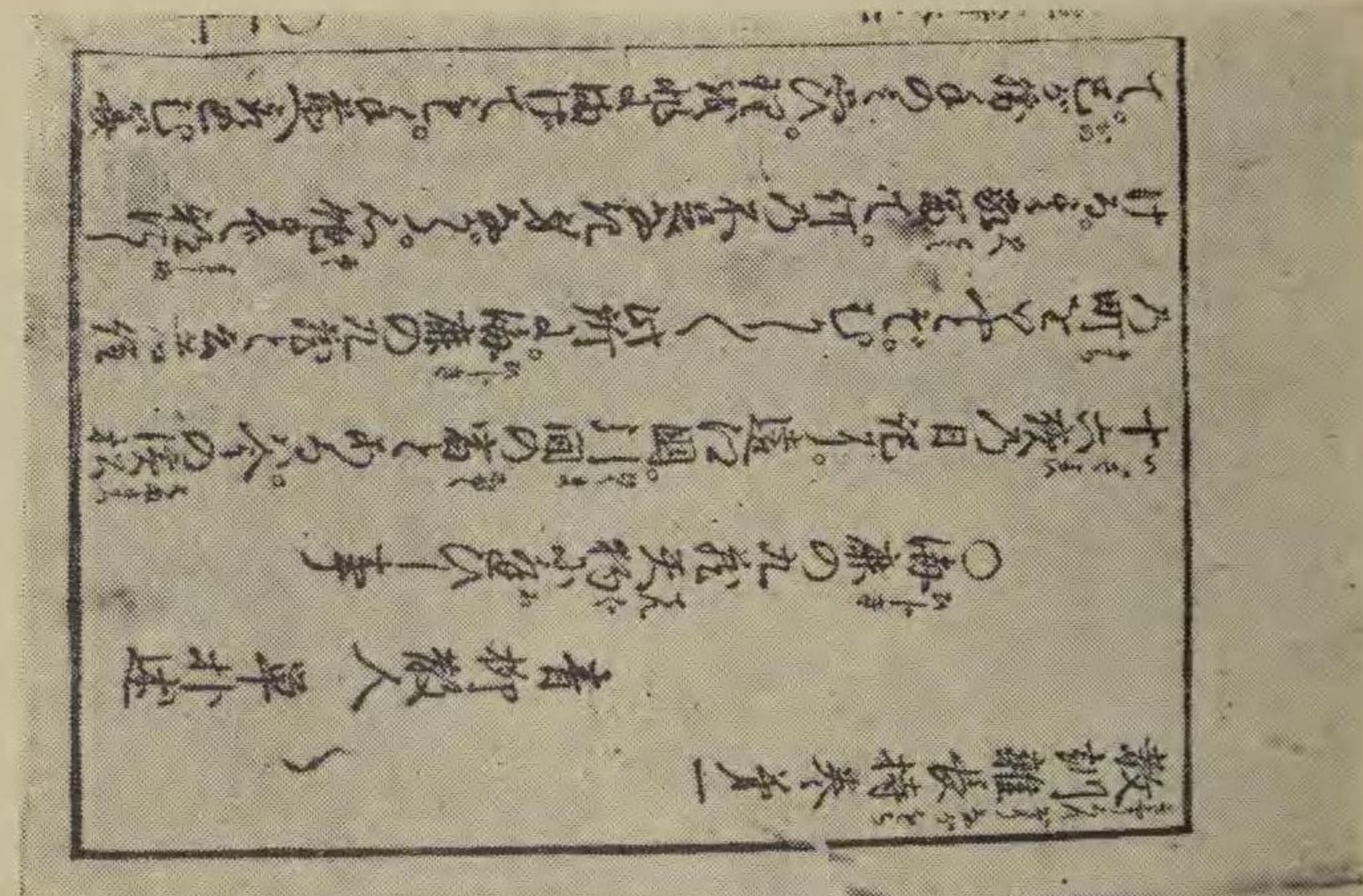
滑稽本を生み出した時代精神は、他の黄表紙や川柳や狂歌などを生み出した精神と同じもので、享樂的・遊戯的な精神である。固定し切つた思想、變化の乏しい生活に厭き果て、退屈し切つた精神を、官能的刺戟に由つて慰めようとして、生活を遊戯化したその一面が、この種の遊戯文學となつて現れたのである。

間遊びに抜けて來る遊客、日頃の吉原の位を餘所にしたすべて輕い遊びぶり、ふざけぶりを描き、次に並木の店前をそより歩く遊客のむだの數々を寫し、やゝ案内書めくほど各々の店の配置を示してゐる。假宅の情況を描寫して相應の効果を擧げてゐる。
【山口】
骨董集 たいは 隨筆 四卷 【著者】岩崎

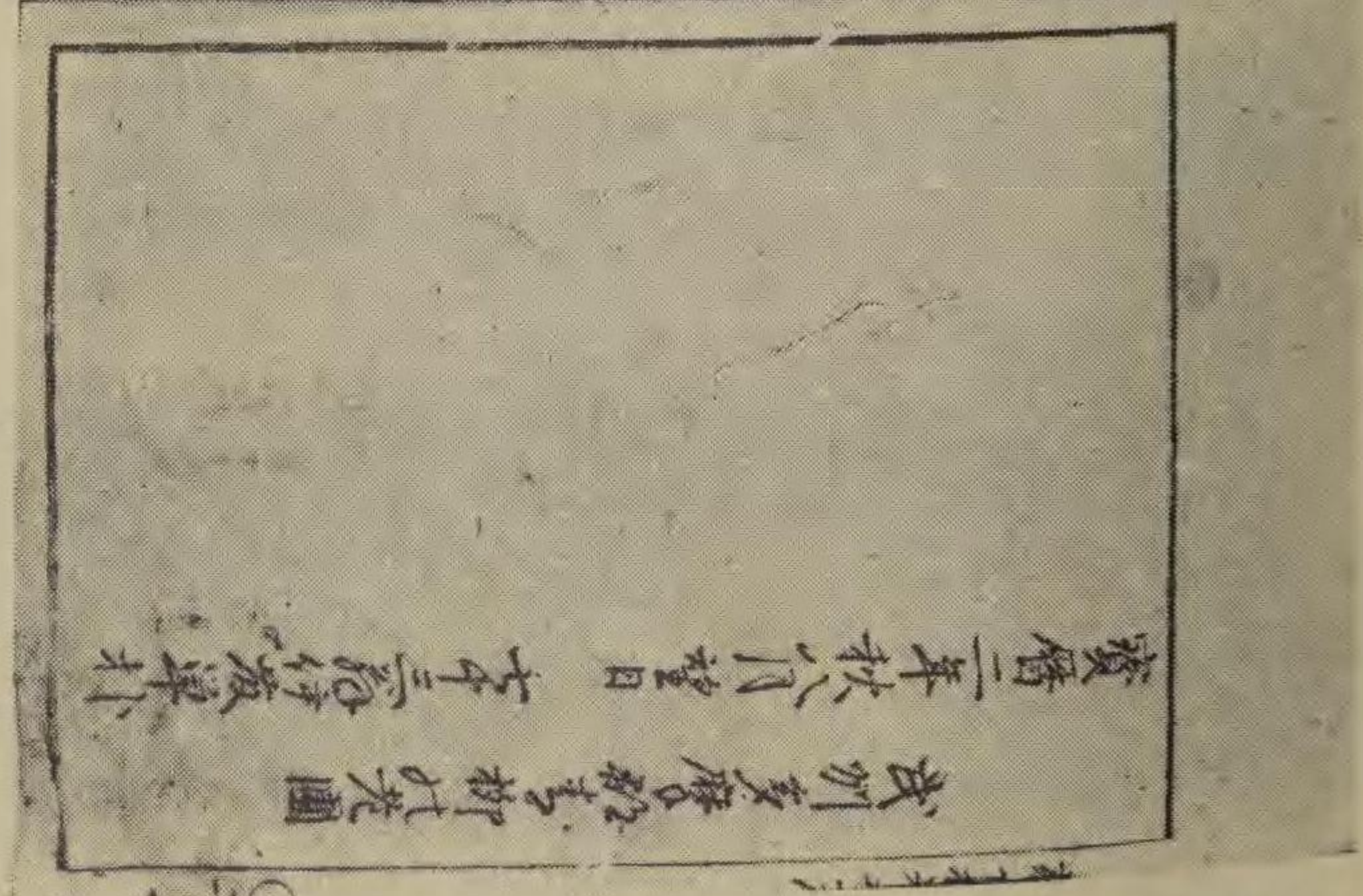
(一) 本 稽 滑



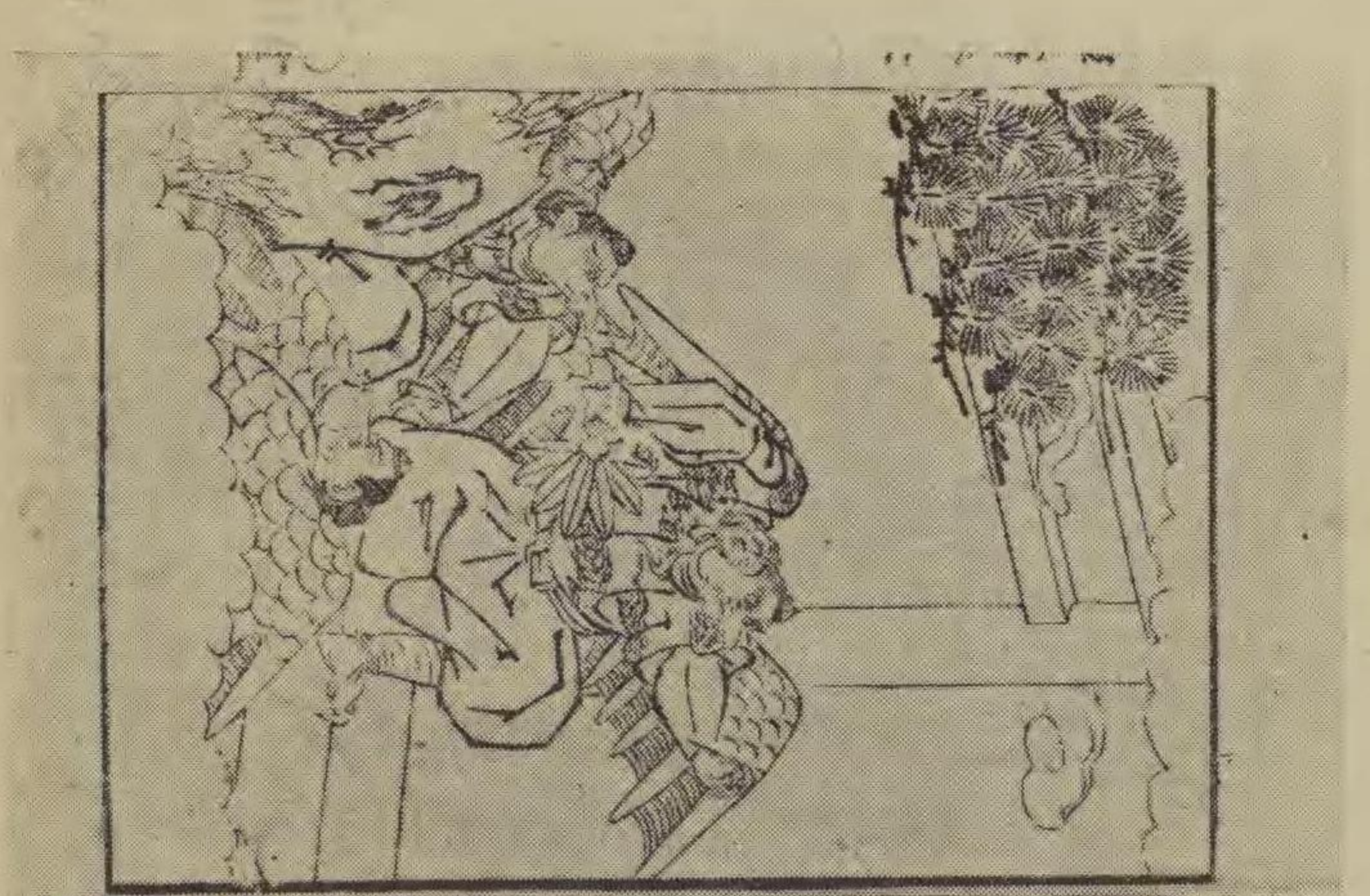
道中膝栗毛 (十返舎一九)



教訓雜長持 (伊藤單朴)



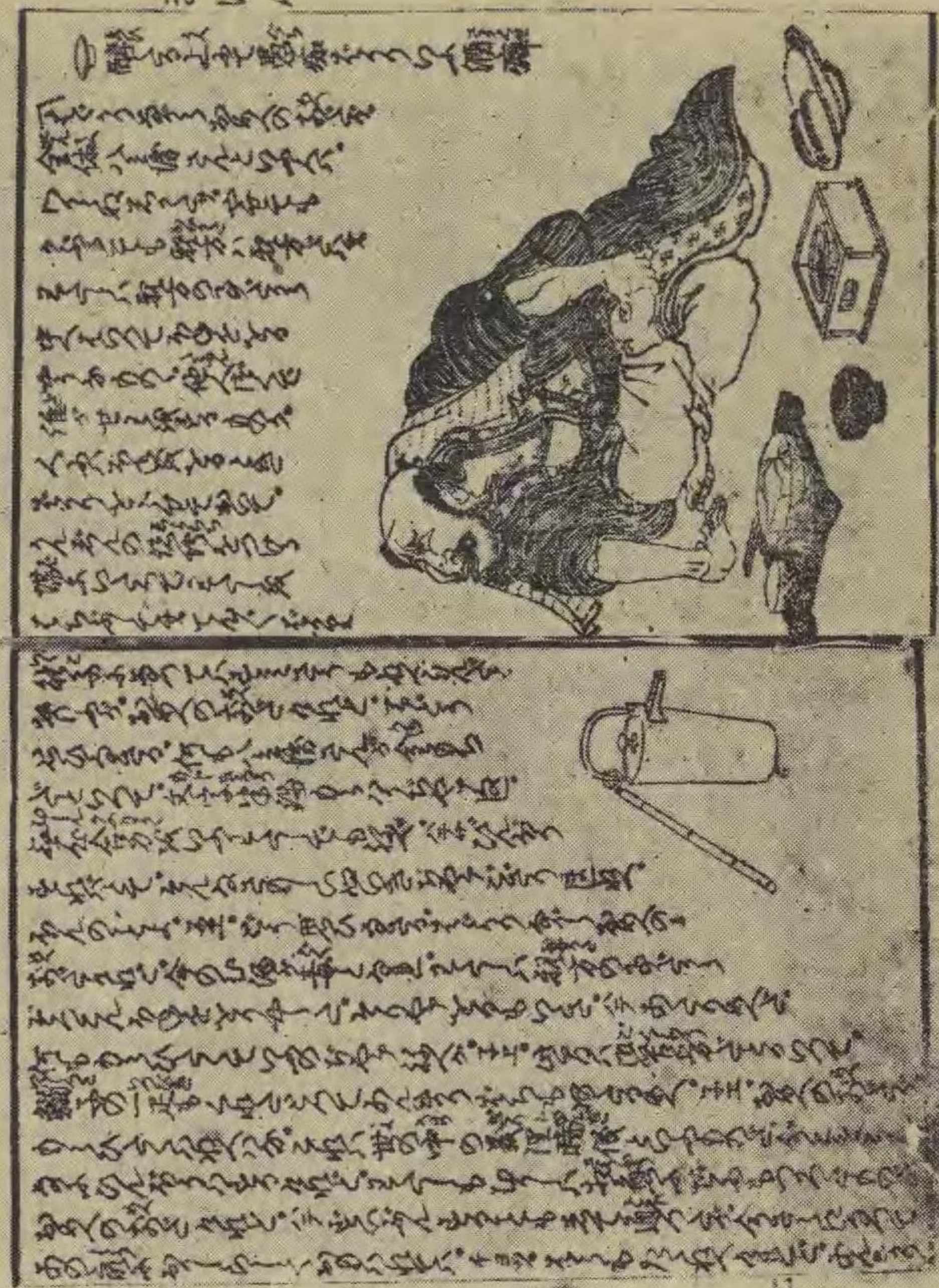
同上 挿繪



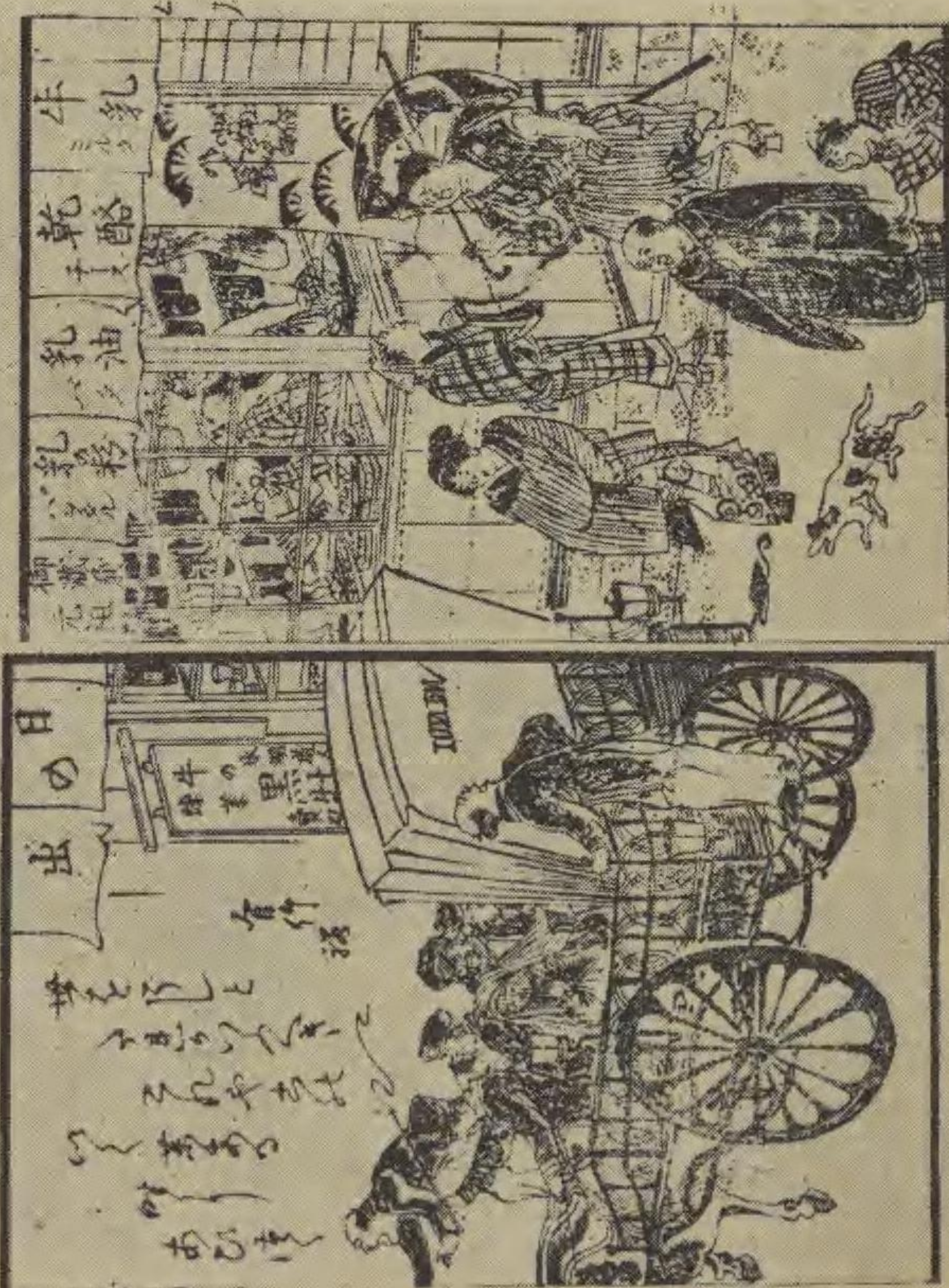
同上 挿繪



一 盃綺言 (式亭三馬)



安愚樂鍋口繪 (假名垣魯文)



管世風呂挿繪 (式亭三馬)



花曆八笑人口繪 (瀧亭鯉丈)

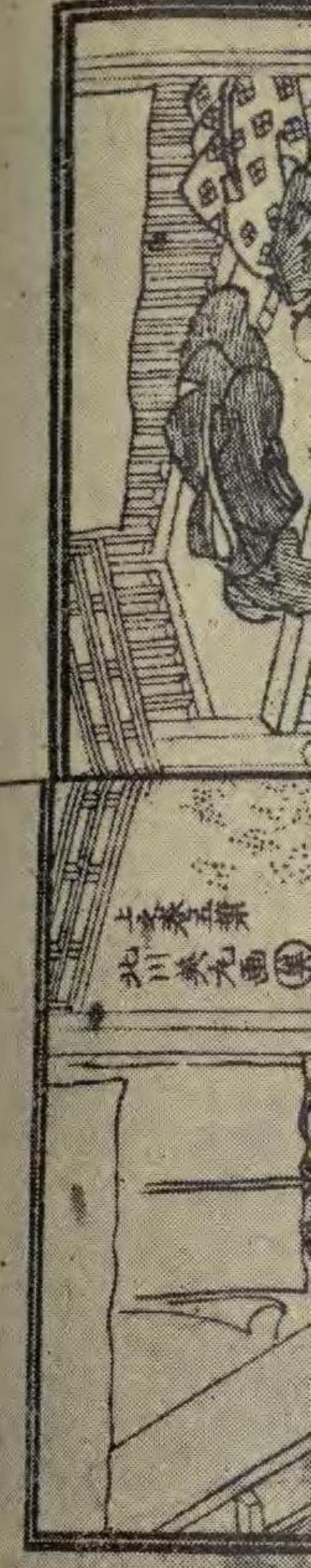


醒(山東京傳)【畫工】喜多武清・歌川豊廣・岩瀬京山等。【刊行】文化十一年刊(後刷本に天保七年の刊記がある)。但し所刊は上編のみで、分つて上・中・下本・下末の四巻としてある。奥附の廣告に三編の上木近きにあらんとあるが、刊行に至らなかつた。本編に文化十年大田草(南畝)の序があり、上巻の終りに文化十一年甲戌冬十二月發行とある。蓋し成稿は十年であらう。【解説】主として江戸時代の風俗・服飾・器具・言辭・飲食物等に互つて、古書・古圖を引き、起原及び沿革を敘したもので、多く圖解を施してある。上巻に「好事之心得」以下二十七條、中巻に「名古屋帯」以下二十

醒(山東京傳)【畫工】喜多武清・歌川豊廣・岩瀬京山等。【刊行】文化十一年刊(後刷本に天保七年の刊記がある)。但し所刊は上編のみで、分つて上・中・下本・下末の四巻としてある。奥附の廣告に三編の上木近きにあらんとあるが、刊行に至らなかつた。本編に文化十年大田草(南畝)の序があり、上巻の終りに文化十一年甲戌冬十二月發行とある。蓋し成稿は十年であらう。【解説】主として江戸時代の風俗・服飾・器具・言辭・飲食物等に互つて、古書・古圖を引き、起原及び沿革を敘したもので、多く圖解を施してある。上巻に「好事之心得」以下二十七條、中巻に「名古屋帯」以下二十

醒(山東京傳)【畫工】喜多武清・歌川豊廣・岩瀬京山等。【刊行】文化十一年刊(後刷本に天保七年の刊記がある)。但し所刊は上編のみで、分つて上・中・下本・下末の四巻としてある。奥附の廣告に三編の上木近きにあらんとあるが、刊行に至らなかつた。本編に文化十年大田草(南畝)の序があり、上巻の終りに文化十一年甲戌冬十二月發行とある。蓋し成稿は十年であらう。【解説】主として江戸時代の風俗・服飾・器具・言辭・飲食物等に互つて、古書・古圖を引き、起原及び沿革を敘したもので、多く圖解を施してある。上巻に「好事之心得」以下二十七條、中巻に「名古屋帯」以下二十

醒(山東京傳)【畫工】喜多武清・歌川豊廣・岩瀬京山等。【刊行】文化十一年刊(後刷本に天保七年の刊記がある)。但し所刊は上編のみで、分つて上・中・下本・下末の四巻としてある。奥附の廣告に三編の上木近きにあらんとあるが、刊行に至らなかつた。本編に文化十年大田草(南畝)の序があり、上巻の終りに文化十一年甲戌冬十二月發行とある。蓋し成稿は十年であらう。【解説】主として江戸時代の風俗・服飾・器具・言辭・飲食物等に互つて、古書・古圖を引き、起原及び沿革を敘したもので、多く圖解を施してある。上巻に「好事之心得」以下二十七條、中巻に「名古屋帯」以下二十



醒(山東京傳)【畫工】喜多武清・歌川豊廣・岩瀬京山等。【刊行】文化十一年刊(後刷本に天保七年の刊記がある)。但し所刊は上編のみで、分つて上・中・下本・下末の四巻としてある。奥附の廣告に三編の上木近きにあらんとあるが、刊行に至らなかつた。本編に文化十年大田草(南歌)の序があり、上巻の終りに文化十一年甲戌冬十二月發行とある。蓋し成稿は十年であらう。【解説】主として江戸時代の風俗・服飾・器具・言辭・飲食物等に互つて、古書・古圖を引き、起原及び沿革を叙したもので、多く圖解を施してある。上巻に「好事之心得」以下二十七條、中巻に「名古屋帯」以下二十六條、下巻(前)に「毬杖」以下二十五條、下巻末(後)に「勸進比丘尼繪解」以下三十四條を収めてある。風俗史研究資料として柳亭種彦の「用捨箱」(別項)、喜多村節信の「瓦礫雜考」(別項)等と名を齊しうし、興味は寧ろ二者の上にある。【和田】

湖亭涉筆 こてんせいひつ 漢文隨筆 四卷 【著者】安積覺(滄泊)と號し、水戸藩の儒臣。彰考館總裁となつて大日本史の編修に貢獻した。【刊行】享保十二年【解説】支那史上の人物數百名の評論を主として、學藝・言辭・風俗、その他雜事を考述したもので、邦人漢文隨筆の白眉である。著者の支那史籍に精通せることが想見される。卷一は春華秋の項に始まりて李存審の項に終り、卷二は司馬溫公の項に始まりて余忠宣の項に終り、卷三は内道場より監國魯王に至り、卷四は支那の俗語で、日本で雅語となつたもの一群より、老圃詩牒に至つてある。享保十二年室直清(鳩巢)、同年著者の序がある。【和田】

古典主義 こてんしゆぎ 藝術論 【英】 Classicism

cism 【佛】 Classicisme 【獨】 Klassizismus

【解説】ギリシヤ及びローマの美術文藝を範として端正明瞭な藝術表現を藝術の第一義とする主義傾向全體を云ふ。歴史的に見れば伊太利文藝復興を通して十七世紀に佛蘭西に興隆した文藝は、その代表的なもので、コルネーユ(1606-1684)、ラシーヌ(1639-1690)、モリエール(1622-1673)等がある。又十八世紀に入つて英國ではボープ(1688-1744)、獨逸ではウィンケルマン(1717-1780)のギリシヤ美術研究から刺戟されて、レッシング、シラー、ゲーテ等がこれに續いた。これ等の藝術の特色は、ギリシヤ美術に見られるやうな典雅莊重な形式的方面の美の表現にある。従つて主知的合理的な直觀を原理とするもので、浪漫主義(別項)に對するものである。藝術様式上の類別概念としての古典的(Das Klassische)の特色を有するものは、一般に皆古典主義藝術である。(古典的參照) 【村田】

古傳説物の謡曲 こてんせつもの 謡曲

【曲目】神話以後の我が上代傳説を主材とした曲には、神事物(別項)の「難波」「吳服」、勝修羅物(別項)の「田村」、頼光物(別項)等の外に「國栖」「雷電」「融」がある。【諸本】謡曲叢書(芳賀・佐佐木)・國民文庫・日本文學大系・謡曲三百五十番集(日本名著全集)等所収。

【國栖】五番目 【作者】世阿彌(二百十番謡目錄)。(内容)天武天皇(子方)が叛亂を避けて吉野に還幸遊ばされた時、老人夫婦(前シテ・前ッ)が根芹・國栖魚を供御に奉り、やがて追手の敵が襲つて來ると、天皇を船にお隠しして、御危難をお救ひ申し上げた。そして御慰みに音楽を奏し奉らうといつて消え失せる。やがて天女(後ッ)が現れて五節舞を奏し、藏王權

現(後ッ)が現れて、天皇の御味方を申し上げ、かくて世は泰平となる。【題材】「源平盛衰記卷一「五節始」、同卷十四「淨見原天皇の事」及び「宇治拾遺物語」卷十五、「清見原天皇與大友皇子合戰の事」に據つたものであらう。夢幻的劇能。五流現行。

【雷電】五番目 【作者】未詳【名稱】金剛流では「善戸」と題す。(内容)比叡山延曆寺の座主法性坊(ワキ)が仁王會を執行してゐると、夜更けて菅公の靈(前シテ)が訪れ、在當時の師恩を謝し、自分はこれから雷となつて内裏に飛び入り、公卿殿上人を蹴殺さうと思ふが、その時僧正を召されても參内せられるなといふ。僧正が勅使三度にも及べば參らなければならぬと答へると、菅公は怒つて本尊に供へられた栴檀を噛み碎いて妻戸に吐きかけ、火焰を起したが、僧正は酒水の印を結んでこれを消し止め、菅公の靈は煙に紛れて消え失せる。やがて僧正が召されて紫宸殿に參内すると、菅公の怨靈は雷神(後シテ)となつて現れ、僧正を避けながら、内裏の彼方此方に物凄く鳴り轟いたが、千手陀羅尼の功力によつて、その威力が衰へた上、帝から天滿大自在天神と贈官を賜はつたので、怨靈も死後の恩寵を拜謝して、虚空に飛び去る。【題材】「太平記」卷十二、「大内裏造營事附聖廟御事」に據つた。寶生流では後段を雷神とせず、ただ死後の恩寵を拜謝する祝言に作り替へてゐる。複式劇能。觀世・寶生・金剛・喜多現行。

【融】五番目 【作者】觀阿彌の原作(申樂談儀、二百十番謡目錄)、世阿彌の改作(音曲聲出口傳能本作者註文)。(名稱)古名「融」。【内容】東國僧(ワキ)が都に上り、六條河原院に休んでゐると、汐波の翁(前シテ)が來て、この所は昔融

の大臣が陸奥の千賀の廳館に摸して造られたものであると教へ、折からの月を賞しつゝ融の故事を語り、附近の名所を教へて消え失せる。僧がこゝで一夜を明かすと、夢に融の大匠(後シテ)が現れて月前の舞を奏す。【題材】「古今集」紀貫之の歌を主材とした。複式夢幻能。五流現行。

【構想】こゝに纏めた三曲は、同じく古傳説を主材としたといふだけで、内容は各々別であり、従つて脚色も各々別である。「國栖」は作者の新に構想した所が多く、前段には田舎人の質朴な忠誠を描き、後段には優雅と剛健とを併せた祝言を表はした。「雷電」の後段は寧ろ悽慘の氣に満ちてゐるが、前段には師弟の情が厚く描かれてゐる。「融」の原作は、融が幽鬼となつて現れる曲であつたらしいが、改作の現行曲では、極めて閑寂典雅な趣を表はしてゐる。

古典的 こてんてき 藝術論 【獨】 Das Klassische

【佛】 Le Classique 【解説】古典的といふ概念は藝術史の上ではギリシヤ時代の典雅明瞭な様式を指して云ふのであるが、藝術學・美學上では、様式の類別を云ひ現はす場合の外に、なほ藝術上の價值概念として使用することもある。蓋し歐洲の藝術觀の主流をなすものは、ギリシヤに源を持つ主知的傾向の思想で、美に關しても直觀的に完成された美に價値の標準を置く傾きがある結果、古典的といへば、第一義的な藝術であることを意味することになる。而して近世に於ては、別に情意的表現に美を認める藝術觀が發生し、「浪漫的」といふ概念を以て「古典的」に對立せしめ

た。ニイチエはその著「悲劇の誕生」に於て藝術美のこの二方面を論じ、アポロ的とディオニッスを對立せしめた。要するに、史的様式概念乃至は價值概念としての「古典的對浪漫的」に關しては、英國のペーターその他多くの議論がある。(古典主義・浪漫主義參照)

【參考】感傷と反省 谷川徹三 【村田】

【古典文學】ぶんがく 〔英〕 Classics 【解説】自國の傳統或は歴史を尊重し、而して最も整調諧美の形態に於て、その時代の代表的表現をなす文學を指すのである。従つてそれを作り出す機能としては、情緒の奔放の動きよりは、理智性の統一・共通性が主であり、いかなる激情を取扱ふにしても、必ずその上へ理智の統制が加へられ、個人情緒の自由なる解放を重んずるのではなく、一般的共通の興味

が重んぜられ、人生の特殊性に重きを置かず、普通性統一性を尊重し、従つてその形態も均整統一の美を表現してゐる文藝である。故に一國としてはかゝる文藝の生るゝためには、政治上、經濟上に相當の統治が行き互り、隆盛の勢を示す時代に作り出さるゝのが普通である。例へば希臘ならペリクレス (Pericles) の時代、羅馬ならオグユスト (Augustus) の時代、英國なら後期エリザベス (Elizabeth) の時代、佛蘭西ならルイ十四世 (Louis XIV) の時代、獨逸ならゲーテ (Goethe)、シレル (Schiller) の時代、日本なら元祿時代の如き時代こそ、それを生み出すに

適した時代である。かゝる時代の文藝表現は主として綜合藝術たる劇の形式をとるのが普通である。 【吉江】

【古典保存會】こてんぼんかい 【解説】學術上典據とすべき古代の書籍を、寫眞版によつて複製し、萬一の佚亡に備へると共に、學者の研究に資せんとする目的を以て、大正十二年創立されたもので、山田孝雄・橋本進吉・植松安正・宗敦夫・猪熊信男・七條愷の諸氏が幹事として會務に當り、創立以來、昭和六年二月迄に三期を重ね、三十一種の複製書を刊行した。

【刊行書】刊行書は殆ど全部寫眞版で、和紙に印刷されてゐるが、虚飾を省き、學問上實用的な點が、この會の刊行本の特色と云へる。刊行されたものは、すべて室町時代以前の書寫にかゝる古鈔本で、中に御物、國寶に屬するものも少くない。その内容は、國史・國文・國語・漢籍等種々の方面に互つてゐるが、

眞福寺本古事記・上宮聖德法王帝説(法隆寺藏本)・播磨風土記(三條西家所藏本)・將門記(京徳三年書寫本)・時類本伊勢物語(傳書者自筆本)・打聞集(長承三年本)・方丈記(大福光寺藏本)・歌譜(近衛家所藏本)・天治本備馬樂譜(松浦の能)・觀世宗家所藏本(連理秘抄)・猪熊氏所藏本(倭名類聚鈔)・實生院所藏本(三卷本色葉字類抄)・黒川家所藏本(節用文字)・徳富氏所藏本(日本國見在書目録)・生寺藏本(法曹類林)・金澤文庫藏本(白氏文集卷三及卷四)・天永四年加點本(遊仙館)・康永三年書寫本(秘府略卷第八百六十四)・徳富氏所藏本(建治三年書寫本)・古文孝經(春秋經傳集解卷十)・保延五年清原類業自筆點本。

復製し、萬一の佚亡に備へると共に、學者の研究に資せんとする目的を以て、大正十二年創立されたもので、山田孝雄・橋本進吉・植松安正・宗敦夫・猪熊信男・七條愷の諸氏が幹事として會務に當り、創立以來、昭和六年二月迄に三期を重ね、三十一種の複製書を刊行した。

【刊行書】刊行書は殆ど全部寫眞版で、和紙に印刷されてゐるが、虚飾を省き、學問上實用的な點が、この會の刊行本の特色と云へる。刊行されたものは、すべて室町時代以前の書寫にかゝる古鈔本で、中に御物、國寶に屬するものも少くない。その内容は、國史・國文・國語・漢籍等種々の方面に互つてゐるが、

眞福寺本古事記・上宮聖德法王帝説(法隆寺藏本)・播磨風土記(三條西家所藏本)・將門記(京徳三年書寫本)・時類本伊勢物語(傳書者自筆本)・打聞集(長承三年本)・方丈記(大福光寺藏本)・歌譜(近衛家所藏本)・天治本備馬樂譜(松浦の能)・觀世宗家所藏本(連理秘抄)・猪熊氏所藏本(倭名類聚鈔)・實生院所藏本(三卷本色葉字類抄)・黒川家所藏本(節用文字)・徳富氏所藏本(日本國見在書目録)・生寺藏本(法曹類林)・金澤文庫藏本(白氏文集卷三及卷四)・天永四年加點本(遊仙館)・康永三年書寫本(秘府略卷第八百六十四)・徳富氏所藏本(建治三年書寫本)・古文孝經(春秋經傳集解卷十)・保延五年清原類業自筆點本。

等がその主なるもので、この會によつて初めて世間に紹介されたもの、又は初めてその全文が發表されたものも多く、その學界に寄與した功績は甚だ大きい。 【岩淵】

【こと(琴)】こと(琴) 樂器 【解説】細長き胴の上に一本又は多くの絃を張り、これを弾じて鳴らす絃樂器の總稱。 【種類】今日及び昔我が國に於て用ひられるものに多くの種類がある。その中の主なるものは我が國古代に於て

り、新曲は八橋檢校の歿後、元祿より安永にかけて諸檢校の作曲したもので、歌の作者は當時の雅人であつたらしい。「箏曲大意抄」によつて組歌の作曲者及び作成期を示せば、凡そ次の如くなる。曲だけで歌の無いものは省略する(箏曲參照)。

古 曲
(表目錄) 榮路・梅枝・心盡・天下泰平・薄雪・雪晨。
(裏目錄) 雲上・薄衣・桐壺・須磨・四季曲・扇曲。
雲井弄琴(以上、八橋檢校作)

古 新 曲
橋姫(原作者不明・三橋檢校補)。明石。

用ひられた天鳥琴・天詔琴・鷓尾琴、その制を上代に發し、今日神樂に用ひられる倭琴(別項)・上古に三韓から傳へられた新羅琴(別項)及び百濟琴(參照)・上古に支那から傳へられた琴及び瑟。中世に支那から傳へられてその後大に我が國で行はれ、今日も日本音樂中の一大勢力をなせる箏。その他今日或る一部に愛用される一絃琴(須磨琴)及び二絃琴(八雲琴)等(各別項)等である。(琴・箏參照) 【田邊】

【別天神】わかみづ 「天神」を見よ。

【小道具】せうたぐい 演劇【名義】舞臺上に於ける各種の家具・什器、その他、登場俳優の手によつて移動する或る物體の總稱で、この製作者・取扱人を、一般には小道具師・小道具方などといふが、當業者間には單に「小道具」とのみいふ(大道具參照)。 【種類】小道具に屬する物を大別すれば、一切の家具・調度・武器・馬具・裝身具・額軸物の書畫・骨董・飲食物・火氣の類及び動植物の一部、また雷鳴・雨音・鳥蟲の鳴き聲等、その取扱ふ所の範圍はなかく、廣い。 【解説】明治初年までは、所謂芝居の品物として、世話狂言の日用品類の外、高價希品のもの、大抵外見ばかりの摸造であつたが、九代目市川團十郎好みの寫實的史劇大に行はれるに至つて、烏帽子・沓・鎧・兜・太刀・槍・薙刀の類、輿・車の乗物より几帳・唐櫃・茶器・遊樂器具の調度まで、歴史的考證にかゝる實物製作が盛んになり、明治末期には、現代劇・外國劇の什器一切にも、大抵實物を用ひる事となつた。世人の多くは、甲冑馬具など、今の世に多くあるべき物でない事を思ひ、大概摸造、所謂「こしらへ物」と早合點するが、我が國唯一の小道具の大家藤浪方では、逐年亡滅しつゝある鎧など各技師を、特に

に永く迎へられて今日に及んでゐるだけに、所用の曲も多い。即ち組歌に於ても上記の外に、若菜・橘・七夕・神・千代の友・四季の曲、何れも作成時代不明のものだが、この六曲を加へて組四十八曲と稱する。又別に名古屋の人吉澤檢校の作つた古今組五曲、新古今組の六曲があつて、これ等は専ら箏に合せて詠ふ。外曲には長歌・端歌・手事物の三種あつて、三味線と合奏して詠ふ。中には胡弓をも加へて三曲と稱するものを用ひ供し、明治以降は、時に胡弓に代へて尺八を用ひる。而してこれ等を用ひる歌曲の数は三百を超えといふ。

【時代と世話】歴史的狂言の時代物には、大將より雜兵に至るまでの、武器馬具一切數十百番、前記の如く皆實物を用ふるを一流劇場の常とはするが、義太夫狂言を古風に演ずる際の如きは、わざと昔のままの摸造品の鎧など、新たに作りても用ひること勿論である。又刀劍の類は、危険を思ひ、一般に實物を用ひないが、或る場合「本身」と稱する刃引きの眞の刀を使用する事は、昔から珍しくない。敵役が舞臺に突き刺す刀の如き、それである。次に世話物、即ち二番目物と稱する狂言には、箆・火鉢・膳・傘・履物・小銭の類や、腐つたやうな乞食の持物や、舞臺で眞に飲食する物など、皆實物を用ひる事で、現代劇にあつては尙更である。ただ翻譯劇には、頻繁に入用のない古代風俗の家具武器の一部など、摸造品で間に合はす事もあるが、一流劇場のもの、これとても先づ大抵は本物である。なほ京阪と東京とで差のある事などは注意を要する。

【小道具師】小道具製作取扱の隨一、前記の藤浪といふは、現今の主人與兵衛まで三代。初代與兵衛は、最初猿若町市村座の仕切場今いふ事務所の定番(小使)であつたが、興行の都度、傘の下駄のと、その時々舞臺用の小買物に出入りされてから思ひ付き、後にはそれ等の品の用済みとなつたのを蓄へて置き、或は多く入用の物を前以て買ひ込み置き、新

の。文化八年講本として成る。小澤三折俊秀の「はしがき」及び文政七年平田鐵胤の「由縁」を添へて刊行。 【諸本】平田篤胤全集第一所収。 【内容】篤胤の講本類は、通俗を旨とした彼の哲學體系の講述であるが、本書はその序説ともいふべく、彼の中心思想たる古道説を述べたものである。まづ彼の古道觀を知るのに重要な彼の學的體系を見るに、彼はその謂はゆる「御國學」を分つて、神道・歌學・律令學・物語學・歴史學・故實諸禮學としたが、更に漢學も佛學も、その外天文・地理・蘭學・醫學も、苟くも御國人が御國の用にせんために學

適した時代である。かゝる時代の文藝表現は主として綜合藝術たる劇の形式をとるのが普通である。

【吉江】
古典保存會 〔解説〕 學術上
典據とすべき古代の書籍を、寫眞版によつて

古共に大抵の日用品類は、早急に間に合ふやうに心掛けたのを、幕の内外に調法がられ、以來段々準備品を殖して終に專業となり、維新の際には、諸家持て餘しの拂物なる公武の什器・武具・骨董など、手の届く限り買ひ入れて、やがて無類の芝居小道具業となつたのである。現在の與兵衛また家業に多大の趣味を有し、父祖の遺産を益々増大しつゝある。尤も藤浪以外にも、三四流の劇場相手の同業者は各所にあるが、その用意物品、到底比較にならない。少し手張る物は皆藤浪より借入れ間に合はす有様である。

【取引方】小道具師對劇場の關係は、一興行毎に入用の品々を損料で貸借し、定取引の各座に派遣の用人即ち小道具方の二三乃至四五人が、毎幕の閉前後、舞臺備へ附けの分（出道具といふ）の出し入れをなし、又俳優自身の手道具なみに扱ふ品で、各自の部屋に預けてあるものの中にも、狂言の都合で、舞臺に置き去りとなる分は、その都度部屋へ持ち行くなどの用もある。なほ取引上臨時物として後日再び使用されぬやうな特殊の製品は、その時限り、劇場側に取りを要求する事もあるが、今の藤浪は、牛渡馬勃も亦用ありとして、かゝる特別註文の製作品をも、割合に多き損料を受くるに止め、殆ど賣渡しなどしない有様である。

【箏歌】 歌謡 【名義】 十三絃の箏の琴に合せて諸ふ歌の總稱。【區分】 組歌（別項）と外曲とある。外曲は組歌以外の歌曲の意で上方歌（別項）を轉用したものが多く、組歌には古曲・新曲の別があつて、古曲は近代箏曲の大成者八橋檢校が、三味線の組歌に倣つて編成したもので、表組・裏組及び雲井弄齋より成

こと（琴・箏）樂器 【解説】 細長き胴の上に一本又は多くの絃を張り、これを弾じて鳴らす絃樂器の總稱。【種類】 今日及び昔我が國に於て用ひられるものに多くの種類がある。その中の主なものは我が國古代に於て

り、新曲は八橋檢校の歿後、元祿より安永にかけて諸檢校の作曲したもので、歌の作者は當時の雅人であつたらしい。【箏曲大意抄】によつて組歌の作曲者及び作時期を示せば、凡そ次の如くなる。曲だけで歌の無いものは省略する（箏曲参照）。

古 曲

（表目錄） 菜路・梅枝・心蠶・天下泰平・薄雪・雪晨。
（裏目錄） 雲上・薄衣・桐壺・須磨・四季曲・扇曲。

雲井弄齋（以上、八橋檢校作）

古新曲 橋姫（原作者不明・三橋檢校補）。明石・末松・空蟬（以上三曲、北島檢校作）。新

雲井弄齋（倉橋檢校作）。羽衣・若葉・思川（以上三曲、作者不明）

中古新曲 飛燕（安村檢校作）。宮鶯・二長・雪月花・六玉川・浮舟・四季富士・玉響・四季戀（以上八曲、三橋檢校作）

新 曲 四季友・友千鳥（以上二曲、久村檢校作）
花宴・春宮曲、一名三の調（以上二曲、石塚檢校作）

こゝに古曲と稱するは貞享年中までに出来たもの、古新曲は元祿・寶永・正徳・享保の頃、中古新曲は寛延・寶曆の頃、新曲は明和・安永の頃に出来たものの如くである。

【流派】 箏曲には諸流派があるが、大別して八橋・生田・山田の三流とする。最も古いのが八橋流（別項）、これに次ぐのが生田流（別項）で、これ等は多く關西方面に行はれた。最も新しいのは山田流（別項）で、江戸を中心にして關東地方に行はれる。これ等諸流の使用する歌は、組歌に於ては大差がなく、外曲に於て大に異なる。但し八橋流は早く勢を失つて、九州の一部に遺るだけで、この流に於ける外曲のことは委しく知られない。生田流は京阪地方

る事となつた。世人の多くは、甲冑馬具など今の世に多くあるべき物でない事を思ひ、大概摸造、所謂「こしらへ物」と早合點するが、我が國唯一の小道具の大家藤浪方では、逐年亡滅しつゝある體面などの各技術者を、特に

に永く迎へられて今日に及んであるだけに、所用の曲も多い。即ち組歌に於ても上記の外に、若菜・橋・七夕・神・千代の友・四季の曲、何れも作時代不明のものだが、この六曲を加へて組四十八曲と稱する。又別に名古屋の人吉澤檢校の作つた古今組五曲、新古今組の六曲があつて、これ等は専ら箏に合せて諳ぶ。外曲には長歌・端歌・手事物の三種あつて、三味線と合奏して諳ぶ。中には胡弓をも加へて三曲と稱するもの用に供し、明治以降は、時に胡弓に代へて尺八を用ひる。而してこれ等に用ひる歌曲の数は三百を超えるといふ。

山田流にあつては、外曲は生田流よりも少いが、明治以後の新作を加へたなら、總数は相當あるであらう。この流にあつては、上方歌即ち京阪地方で地唄と呼ぶものから採つたものは、總て生田物と呼び、特に新作したもののは、作歌といふ。作歌の集では「吾孀箏譜」（別項）が古く且つ代表的のものである。

【傳授上の區分】 箏曲傳授上の都合によつて、正許・中許・奥許等の目を立てて、區別を立てることも行はれてゐる。（箏曲参照）

【参考】 秦箏語調考者不明 ○琴曲抄甘節（八橋流）
檢校（生田流） ○箏曲大意抄山田松黒 ○箏曲考立本信意（日本歌謡集成卷八） ○撫箏雅譜大成抄高井蘭山 ○琴曲唱歌歌曲時習考南郊翁校 ○俗曲評釋（箏唄）佐々醒雪 ○ことゝた全集（山田流） ○箏曲歌集（生田流） ○日本歌謡史高野辰之 ○箏曲と地唄の味ひ方藤田斗南 【高野】

古道大意 文化六年、著者が當時平田篤胤【成立・刊行】文化六年、著者が當時神職界に吉田家と並んで勢力のあつた白川家の囑託として行つた講義を門人の筆記したも

いふ事務所）の定番（小使）であつたが、興行の都度、傘の下駄のと、その時々舞臺用の小買物に出歩かされてから思ひ付き、後にはそれ等の品の用済みとなつたのを蓄へて置き、或は多く入用の物を前以て買ひ込み置き、新

の。文化八年講本として成る。小澤三折俊秀の「はしがき」及び文政七年平田篤胤の「由緒」を添へて刊行。【諸本】 平田篤胤全集第一所収。【内容】 篤胤の講本類は、通俗を旨とした彼の哲學體系の講述であるが、本書はその序説ともいふべく、彼の中心思想たる古道説を述べたものである。まづ彼の古道観を知るのに重要な彼の學的體系を見るに、彼はその謂はゆる「御國學」を分つて、神道・歌學・律令學・物語學・歴史學・故實諸禮學としたが、更に漢學も佛學も、その外天文・地理・蘭學・醫學も、苟くも御國人が御國の用にせんために學ぶ以上は、總て「御國學」であるとした。併し彼の學問的意識の中軸をなしたものは、神道即ち古道學であつて、その他の諸學は、例へば「儒者」をさすには「儒書」を以てし、「僧侶」をさすには「佛書」を以てするといふ如く、畢竟眞の道たる純粹古道學の手段としてであつた。而して彼がこの道を古道といひ、その學を古學と呼んだのは、「儒佛の道未だ御國へ渡り來らざる以前の純粹なる古の意と古の言とを以て、天地の初よりの事實をすなほに説き考へ、その事實の上に眞の道の具はつてある事を明むる學問である」からであつた。

次に、その傳統については、古道學は東照公・敬公・義公に由來し、契沖・東磨・眞淵・宣長によつて成立したものであるとして、それらの略傳・業績を述べ、なほ古道の内容は教訓ではなくて、事實の上に具存する眞の道であるとなし、この立場から主として「古事記」によつて我が國が「神の御國」であり、わが國民が「神の御末」である所以を明かにし、産靈神の徳、「神」の意義を説いて上巻としてゐる。下巻に於ては、我が古傳こそ宇宙開闢の、従つ

ことゝた ことゝた

【西尾】 してゐる。

後藤宙外 小説家 【本名】寅之助 【出生】慶應二年十二月、秋田縣仙北郡拂田村字田の尻に生る。【閏歴】青年時代に、郷里で政治運動に携はつたりしたが、志を立てて上京。東京専門学校文學科に入り、二十七年卒業。島村抱月等と共に早稲田文學の記者となつた。その卒業論文たる紅葉露伴・美妙三家を精評した美學的評論を同誌上に發表して名を知られた。後、逍遙の指導の下に處女作「ありのすさび」(別項)を執筆、二十八年五月以降の「早稲田文學」に載すること六回、その完結を待つて、翌年「文藝俱樂部」の「青年小説」號に再掲して、批評家の認むるところとなり、心理描寫の上に長所があるとせられた。それと前後して、「新小説」に「闇のうづ」(別項)を發表、これ又「ありのすさび」同様の長所を具へた作品として、小説家たるべき地歩を確保するに至つた。三十年四月、郷里の知人の出版業を開始するにあたり、抱月等と共に「新著月刊」(別項)を創刊して、同志の創作を發表すると共に、後進の作品を紹介すべき舞臺を作つた。同誌は一年より續かなかつたが、その誌上の創作・評論は、可なり文壇の注目を惹いた。それに伴ひ彼の名聲も亦次第に揚り、硯友社の紅葉に接近するに及んで、推されて「新小説」(別項)を主宰することとなつた。三十三年、文士の生活問題から田園生活の必要を強調して



後藤宙外 小説「ありのすさび」の著者

【批評】古道論であるといつても、古道そのものについては極めて簡単に言及してゐるだけ、大部分は國體・國土・國民性等に於ける皇國の優越論である。「一體に彼の國學は宣長に於けるやうに、古典によつて古道の本質を闡明するといふよりも、その古道觀を中心としてあらゆる學問を解釋し批判する所に特色があるが、本講に於ても、天文地理に關しては西川求林齋の「日本水土考」、山村才助昌永の「增譯采覽異言」を引き、その他ケムペルの「日本志」等を引用し、地動説をとつて古傳の價值を論じてゐる等、時代の新學問に關心を置き、時代思潮との關係を考察の中心問題と

て又眞の道の根本眞傳であつて、諸外國の古傳はその派生であり、訛傳であるとし、しかも我が國は、この開關の上から見て「天地の根幹」であるのみならず、また天文地理の上から考へても神意に成る優秀な國であつて、この點に於て諸外國も夙に我が國の神國たるを信じてゐたことを例證し、更にわが國が現に萬世一系の皇統連綿たる國體であること、國民には生れながらにして産靈神に賦與された眞情があつて、人たる道の根本が確立してゐること等を擧げ、それらの問題に關して、儒者・佛者の所説を批判してゐる。就中、その倫理觀としては、「神と君と親は尊く、妻子はかはい」といふのが人間の至情であり、これが所謂「性」である。人の人たる道は多端であるが、すべてはこの「性」から出づるものであるとし、而もこれは産靈神によつて生れながらに賦與されてゐる所であるとして、儒道が教訓的理論的であり(西籍論參照)、佛道の所説がかくの如き人間の至情に背き、「性」に従つてゐないこと(出定笑語參照)を非難してゐる。

【批評】古道論であるといつても、古道そのものについては極めて簡単に言及してゐるだけ、大部分は國體・國土・國民性等に於ける皇國の優越論である。「一體に彼の國學は宣長に於けるやうに、古典によつて古道の本質を闡明するといふよりも、その古道觀を中心としてあらゆる學問を解釋し批判する所に特色があるが、本講に於ても、天文地理に關しては西川求林齋の「日本水土考」、山村才助昌永の「增譯采覽異言」を引き、その他ケムペルの「日本志」等を引用し、地動説をとつて古傳の價值を論じてゐる等、時代の新學問に關心を置き、時代思潮との關係を考察の中心問題と

【批評】古道論であるといつても、古道そのものについては極めて簡単に言及してゐるだけ、大部分は國體・國土・國民性等に於ける皇國の優越論である。「一體に彼の國學は宣長に於けるやうに、古典によつて古道の本質を闡明するといふよりも、その古道觀を中心としてあらゆる學問を解釋し批判する所に特色があるが、本講に於ても、天文地理に關しては西川求林齋の「日本水土考」、山村才助昌永の「增譯采覽異言」を引き、その他ケムペルの「日本志」等を引用し、地動説をとつて古傳の價值を論じてゐる等、時代の新學問に關心を置き、時代思潮との關係を考察の中心問題と

【批評】古道論であるといつても、古道そのものについては極めて簡単に言及してゐるだけ、大部分は國體・國土・國民性等に於ける皇國の優越論である。「一體に彼の國學は宣長に於けるやうに、古典によつて古道の本質を闡明するといふよりも、その古道觀を中心としてあらゆる學問を解釋し批判する所に特色があるが、本講に於ても、天文地理に關しては西川求林齋の「日本水土考」、山村才助昌永の「增譯采覽異言」を引き、その他ケムペルの「日本志」等を引用し、地動説をとつて古傳の價值を論じてゐる等、時代の新學問に關心を置き、時代思潮との關係を考察の中心問題と

【批評】古道論であるといつても、古道そのものについては極めて簡単に言及してゐるだけ、大部分は國體・國土・國民性等に於ける皇國の優越論である。「一體に彼の國學は宣長に於けるやうに、古典によつて古道の本質を闡明するといふよりも、その古道觀を中心としてあらゆる學問を解釋し批判する所に特色があるが、本講に於ても、天文地理に關しては西川求林齋の「日本水土考」、山村才助昌永の「增譯采覽異言」を引き、その他ケムペルの「日本志」等を引用し、地動説をとつて古傳の價值を論じてゐる等、時代の新學問に關心を置き、時代思潮との關係を考察の中心問題と

【批評】古道論であるといつても、古道そのものについては極めて簡単に言及してゐるだけ、大部分は國體・國土・國民性等に於ける皇國の優越論である。「一體に彼の國學は宣長に於けるやうに、古典によつて古道の本質を闡明するといふよりも、その古道觀を中心としてあらゆる學問を解釋し批判する所に特色があるが、本講に於ても、天文地理に關しては西川求林齋の「日本水土考」、山村才助昌永の「增譯采覽異言」を引き、その他ケムペルの「日本志」等を引用し、地動説をとつて古傳の價值を論じてゐる等、時代の新學問に關心を置き、時代思潮との關係を考察の中心問題と

は西川求林齋の「日本水士考」、山村才助昌永の「増譯朱實異言」を引き、その他ケムベルの「日本志」等を引用し、地動説をとつて古傳の價值を論じてゐる等、時代の新學問に關心を置き、時代思潮との關係を考察の中心問題と

創作・評論は、可なり文壇の注目を惹いた。それに伴ひ彼の名聲も亦次第に揚り、硯友社の紅葉に接近するに及んで、推されて「新小説」(別項)を主宰することとなつた。三十三年、文士の生活問題から田園生活の必要を強調して

禪宗を非難してゐる。彼は先づ佛教諸宗の安心乃至悟りの根本は、「氣海丹田に氣を充しめ、安心してなるべくは長壽を得んとする」にありとし、宣長の歌に、「悟るべきこともなき世を悟らんと思ふ心ぞ迷ひなりける」とある

純の如きは、實に頑愚・文盲・奸曲・大賊儒であると罵つてゐる。下巻なる「尻口物語」は、江戸三十間堀で悟道を説いた本郷式部の講演を、第一日から七日に亘つて聴聞し、その所説の根據を佛道・儒道・神道・歌道・醫道等の一々

について指摘しつつ、而もそれが誤謬・矛盾に充ちた妄説たる所以を説いてゐる。一篇の結構は夢中に青黒面翁が現はれ、左手に利劍を捧げ、右手に三味索を持し、能の謠に似た唄を誦ひつゝ、式部を難詰したのを、醒めて後思ひ返して書き送り、答辯を求めるといふ筋であつて、「尻口物語」の稱は、所説矛盾して尻と口とが合はぬ意を寓したものである。

又は「旅談論」ともいふ。「成立」元祿十二年三月「刊行」寶曆十一年「由來」自序によると元祿十一年から翌十二年へかけて著者が肥前長崎に歸省中、京の蕉門書林井筒屋から新刊の俳書三部を送つて來た。その中の一部、加へたのが本書である。而してこれを世に公にしたのは松村桃鏡である。桃鏡の序によれば、芭蕉の舊友服部利水が著者と親交があり、利水が江戸下向の時、本書の稿を携へて桃鏡の祖父一道に與へた。桃鏡の父重羽は、これを梓に上さうと思ひながらその機がなかつた。それを桃鏡が大島蓼太の跋を附けて、父の素志を繼いで刊行し、その時、原本には「湖東問答」とあつたのに、去來の二字を附したのである。なほ本書梓行の後、著者の外戚で著者の通家なる井上重厚が、筑前植木の湖桂亭の客となつた時、本書と同一内容のものゝ寫本を見た。が、重厚も湖桂も本書の既に世に行はれてゐる事知らなかつたらしく、寫本としては善本なので、重厚は勧められるまゝ、安永七年九月これを板行した。これが「旅談論」と題されてゐる。これには、重厚及び湖桂の跋が附されてゐて、それに依つてこの書の由來が知られるのであるが、重厚の跋によると、この寫本には「旅談論」と題されてゐたらしく、又別に「辨篇突」と題した寫本が世に行はれてゐるとある。かくして本書には以上二種の刊本があるのである。【諸本】俳諧論集(俳諧文庫)・蕉門俳諧文集(俳書大系)所收。

て、著者が觀る所を答へる事になつてゐる。その答は、必ずしも「篇突」の非難ではなく、これを肯定した所もある。而も筆致は多くの難陳書に見る如き主觀に偏した激越なものでなく、却つて冷靜に批評的に多くのゆとりを見せてゐる。本文に取扱はれた問題は、連歌と俳諧の差別論を初め、句評・句案の論、季の論の如き方面にも亘つてゐるが、就中、不易流行論の難陳は、著者の最も力を注いだものゝ如くである。なほ本文の末尾に「篇突」の難陳ではなしに、蕉門の附句に十七體の教があるといつて傳授する路通の宣傳を芭蕉の眞意に違ふものであるとして、これを排した一條を「餘評」と題して添へ、同じく問答の體を用ひてある。さて本文は以上の如くであるが、巻頭には著者が元祿十二年三月に記した序があつて、この序の半ばを占めて、蕉門の高弟支草・其角・野坡・土芳・許六・支考・正秀・曲水・半殘・野水・越人・酒堂の輩を拉して、その俳風の特徴を寸評してある。蓼太の跋には其角・嵐雪・支考・支草・野坡・去來に對する芭蕉翁門人の六感(俗に蕉翁六感と云はれるもの)を掲げてゐる。なほ本書と「旅談論」とを比較すると、本文は文字に多少の出入があるが根本的の相異はない。【價值】一般の難陳書と類を異にして批評的に書かれてゐるために、本書は許六・李由の輩と、著者との蕉風俳諧に對する解釋の相異を明瞭に示してゐる。この點から見るに、本書は許六等と著者との俳論の比較研究に便宜な資料を供するものであるが、それよりも本書の價値は、著者の俳論書として見ることのできる點にあつて、この點からいへば、著者の俳論を窺ふに最も便宜多きものであるといへる。著者の俳論の集成されてゐるばかりでなく、「極音問答」(去來抄)各別項の如く師説を解釋したものと違つて、師説の影は極めて薄く、概ね師説を離れて自己の見解を披瀝したものであるからである。【各務】

胡德樂(とく) 雅樂舞曲【異稱】遍鼻胡德・遍鼻胡童子・胡章樂・胡龍樂・胡童樂【性質】高麗樂。新樂。小曲。高麗臺越調曲に屬す。舞があり六人で舞ふ。即ち舞人四人、外に勸盃一人、瓶子取一人。舞人は常裝束、帽子に赤面鼻大の假面(三人は鼻が動き、一人は鼻が動かない)を用ひる。瓶子取は常裝束、帽子に二ノ舞の咲面をかぶり、瓶子・土器盃(二銀で作る)を持つて出る。勸盃は常裝束、袍に唐冠をかぶり、藏面(即ち四角な紙の表に白絹を張り、これに模様を描いたもの)をつけ、笏を持つて出る。初め舞人四人舞臺に出で、次に勸盃と瓶子取と出て、勸盃が盃を舞者(これは客人)に勸め、瓶子取は一々酌をするが、初めの三人に多く酒をつぎ、後の一人に少し注ぐ。初めの三人は酔つて鼻動き、後の一人は酔ふこと少なくて鼻が動かない。舞人一同が酔つて踊る間に、瓶子取は隠れて餘りの酒を自ら飲み、遂に大に酔つて頗る滑稽な動作をする。これは「河南浦」(別項)の如く、散樂又は伎樂の一種であらう。番舞には「傾杯樂」などを用ひる。【沿革】「教訓抄」には「此曲本是横笛の樂なりしを、承和御時依勅定爲高麗曲、當世改作之ことあり、これに依つて見れば、もと百濟あたりの伎樂として傳へられ、笛のみの伴奏を用ひてゐたのを、仁明天皇の頃、樂制改革に際し、當世乙魚に命じて、これを高麗樂に改作せしめられたものらしい。新井白石の「樂考」には、「按ずるに百濟の官十六品あり。其七品を將徳と云、九品を固徳と云。十品を

【批評】講本として刊行された大意物系統のもので、この頃に至つて著者は俗言・俚語を用ひること益々多く、談論風發の趣は一層著しくなつて來た。かくて一面に論述が有效にならんと共に、一面には又論調が卑俗になるのを免れなかつた。この點に就ては當時既に非難があつたものと見え、「尻口物語」の序に、門人の一人が、これも國のため道のために邪説排撃に急なるの致す所であると辯解してゐる。又、青黒面翁をして謠はしめた中に、「雖現忿怒・内心慈悲」といふ一節があるが、これ亦講者の本意を告白した一種の辯明と見る事が出来るであらう。併しその所論に至つては篤胤一流の獨斷的なものであつて、悟道論にしても、「天藏經」を三度通讀したといはれる人の言とは思はれぬ程、悟道そのものを知らない議論であり、兼好の思想・人物の批評にしても、根柢には殆ど故意にしたかと思はれる程の曲解が多く、その所説は當時の反動的な社會に對しては有効であつたであらうが、今日から見れば可なり粗笨なものであると言はねばならぬ。【西尾】

湖東問答(ことうた) 俳論 一册【著者】向井去來【名稱】本名「去來湖東問答」。原本には、「湖東問答」とあつたのを、出版の時「去來湖東問答」としたのである。別に「辨篇突」

【内容】本文は「篇突」に述べられた蕉風俳諧の解釋に不審を抱いた條々に難陳を加へたもので、叙述の體裁は總て問答體を用ひ、「篇突」の所述を引いて意見を求める問者の問に對し

【沿革】「教訓抄」には「此曲本是横笛の樂なりしを、承和御時依勅定爲高麗曲、當世改作之ことあり、これに依つて見れば、もと百濟あたりの伎樂として傳へられ、笛のみの伴奏を用ひてゐたのを、仁明天皇の頃、樂制改革に際し、當世乙魚に命じて、これを高麗樂に改作せしめられたものらしい。新井白石の「樂考」には、「按ずるに百濟の官十六品あり。其七品を將徳と云、九品を固徳と云。十品を

李徳と云。是によりて見る時は、今曲名宿徳、歸徳、胡徳等、皆々其樂を作りし人の官名によりしなるべし」とあるは、一説として考ふべきである。なほ「樂家録」には「此舞斷絶、因今所用舞用、飲酒樂也」とある。〔田邊〕

事解之男神

「一言主神」を見よ。

琴後集

歌文集 十五卷七册

【村田春海】刊行 文化七年。同十年に再刊。【諸本】歌集の部分のみは、賀茂眞淵翁全集下巻(續日本歌學全書)・近代諸家集第二(國歌大系)・有朋堂文庫第四十九編等に所収。

【内容】初めに文化七年九月の葛西質の漢文序、清水濱臣の序文、同年十月朔日の自序がある。又卷十の文集の初めには、村田たせ子(春海の養女)の同年十一月の序文、同六年九月の片岡芳香の序文、同十年十月の平務廉の序文等がある。初めの九卷四册は歌集で、後の六卷三册は文集となつてゐる。歌集は四季戀、雜の外、題書歌と云ふ項目を設け、終りに百二十首歌、五十首歌(文化二年六月二日作)を附し、次に長歌の部がある。文集は記二十一編、序十八編、跋十二編、書牘二十三編、雜文三編、墓碑祭文の六部に分れてゐる。【歌風】典雅の調、優美の想は、縣門江戸派の歌風をよく現はし、王朝時代を寫した中世趣味の作がある。長歌にも秀でて、詞句や調子は萬葉調を移したものであるが、流麗の趣は中世趣味の作となり、就中、詠王昭君歌の如きは、當時の歌壇を騒がした作である。その他、歡琉球來聘使作歌、賀茂眞淵の三十三回忌に少林院に詣でて詠んだ歌等が注意せられる。左に作例を擧げる。

よる波もにほふ入江の梅柳いづれのかげに舟はつ

とまり舟苦の翠の音絶えて夜半の時雨ぞ雪になりゆく

【附記】「琴後集拾遺」二卷は一に別集と云ひ、本集の體裁に倣つて編し、寫本で傳はつてゐる。又「琴後集」の葛西質の序文の説を駁せる齋藤彦磨の「竹筴」がある。春海の歌文を漢籍に比して賞めたのを詰つてゐる。〔佐佐木〕

事代主神

ぬしのかみ 神話「名義」こと

しるは事の信の義、この神が國讓交渉の濟んだ後、そのしるしに船を踏み傾け、「天の逆手を青柴垣に打ちなして隠れ」たことに因んだ名とする説(平田篤胤・木居宣長)があるが信じ難い。名は這般の事件に先行する筈であるからである。「こと」は「もの」に對し、「しるぬし」は知主で、八百萬神の棟梁となつてこれを統率する意となす説(鈴木重胤・飯田武郷)もしくは「ことしるぬし」は、事知の大人の義で、「祭事(政)その他、大小の事を關知するといふ意味である」とする説(松岡輝雄氏)もあるが、一層眞に近い解釋は、現人的にことを知る義とするのであると思ふ。この神の本來の現人的職能とよく照應するからである。【系統】事代主といふ神は頗る多い。八重事代主神(古事記、鎮座次第)・天之八重事代主神(姓氏録)・都味(又は都味渡・精羽)八重事代主神(舊事紀)・命(出雲國造神寶詞)・古事記傳・嚴之事代主神(日本書紀)等がこれである。而してこれ等の事代主神の全部が同一神であるとは云へない。古文獻は、少くとも三四の相異なる事代主神の存在したことを示す。その中で、出雲の八重事代主神は、大國主命の子であり、嚴之事代主神は、三島氏の祖神で、玉篋入彦と稱し、都味八重事代主神は、賀茂氏の祖神である。

つてゐる點は、眞淵の説よりも勝れたものである。後に本居宣長は、土清を語學界の猿田彦と賞めたが、必ずしも溢美の言ではない。次に「和訓栞」は未定稿かとも考へられるが、本書以前の國語辭書は單に言葉を集集したもので、或は極めて通俗的な不完全なもの、或は漢字の音訓を記したのみのもので、或は語源の解釋を主としたものであつて、未だ國語辭書として十分な組織を有するものはなかつた。しかも本書は、その組織が大きく語彙の豊富であること、その解釋が詳しく且つ信頼する

【職能】事代主の名を帯びた神が幾柱もあるといふ事實は、それが本原的には靈示託宣を司る存在であつたことを示唆する。嚴之事代主神に於て天事代、於て空事代といふ冠稱が附いて居り(日本書紀)、「姓氏録」に天降代命、國降代命といふ名が出てゐるのに注目するが、殊に顯宗天皇の朝に任那に使した阿閉臣事代が、日神及び月神の託宣を受けて二神を祭る事を奏請したこと(日本書紀)、神祇官に坐す御巫祭神八座の一人が事代主神であること、景行天皇・神功皇后・天武天皇等に託宣したものが、やはり事代主神であつたこと(日本書紀)などに徴すると、事代主の名によつて呼ばれる神が、靈示託宣をその職とする現人の高貴化神格化であることは、自ら明かであると思ふ。

【神話梗概】建御雷神が高天原から出雲に降つて、大國主命に國讓りの交渉を持ちかける

と、命はこれに答へて、「自分には返答は出来ぬ。わが子八重事代主神がお答へ申すべきであるが、いま御天之前(三種之尊)に漁獵に出かけて、まだ還り申さぬ」と云つた。そこで建御雷神が同行の天鳥船神を遣つて、これを呼びよせた。八重事代主神は父なる大國主命に、「かしこし。この國は天神の御子に奉り給へ」と云つて、その船を踏み傾けて、天逆手を青柴垣に打ちなして隠れた(記紀)。また事代主神が八重熊罴に化して、三島溝織姫(或は玉櫛媛)の許に通つたといふ神話が「日本書紀」一書に出てゐるが、「鎮座次第」では、八重事代主命と三島溝織姫の女王櫛媛との物語となつて居り、「舊事紀」では、都味八重事代主神と三島溝織の女活玉依姫とを主人公として語られてゐる。

【解説】第一の神話に於て、出雲國家の元首たる大國主命は、何故國讓りの交渉に自ら答へないで、わが子八重事代主神の言を俟つたであらうか。これには從來種々の解釋がある。

(1)大國主命自らは天神の勅教に遵ふまいと決心したが、長子なる故に一應事代主神の言を徴したのである。(木居宣長)

(2)大國主命は年老いて、事代主神の勢威が盛んであつたから。(平田篤胤)

(3)大國主命自らは勅教に順ふ心であつたが、他の神々の反對を慮り、事代主神の諸否によつてこれを鎮めるため。(飯田武郷)

等がこれであるが、事代主神の言を徴したことは、かうした方便的な理由からでなく、それは一の必然であつたらう。國讓は國家の一大事であるが故に、靈示託宣の力を持つ事代主神の言によつて諸否を決定したのであると解したい。この神を目して、言靈を崇拜した上代人が言語の靈に神格を與へたものであるとなす學徒がある。平田篤胤がこの神の名を興靈產靈神の別名となし、鈴木重胤がこの神と「一言主神」とを同一視しようとしてゐるのを見ると、這般の解釋にも相當の理があるやうに思はれるが、言靈の信仰と巫覡の力の信仰とは、自ら發生の心理を異にしてゐることを忘れてはならぬ。第二の神話は一種の神婚説話である。或る學徒は、大物主神が蛇體を示したといふ説話などの紛れ込んだものであらう、丹塗矢が原形であらうと説いてゐるが、容易に首肯し難い。(神婚説話參照)〔松村〕

士清

國學者「姓名」谷川昇。士清は字。【號】淡齋【生没】寶永六年二月二十六日、伊勢安濃郡洞津に生れ、安永五年(二四三六)十月十日歿す。享年六十八。【法名】文

界の大勢は、古語の學から音義の學に進んだ。音義學の鼻祖は「雅言音學考」(「雅言音學考」)の誤りの著者鈴木服(別項)である。第二代は富樫廣隆、第三代は自分である。自分の時に至つて、父母の音には一音五義、子音三十六には各々三義ある事を明かにし得た。而してこの學問は今後益々研究せねばならぬものである(以上上巻)。次に人は母の胎内にある時、産靈(以上上巻)。次に人は母の胎内にある時、産靈から聲音の種を賜はるものである。人は生れて後、見るもの聞くものにつけて心に感じ、それに従つて即ち音義の原則に依つて言語は生ずる。次に從來河の音を諸音の源と云つて

藝大英居士【墓所】伊勢國津市の近郊刑部村

福藏寺【閑歴】代々醫を業とし、土清も青年時代京都に遊學して福井丹波守の教を受け、

その傍ら、垂加流(山崎開齋派)の神道家玉木葦齋に神道を學んだ。和歌は近衛家について學び、後、有栖川家に學んだ。後年學者として名聲が揚がるに及んで、諸侯の中で召し抱へようとしたが、自由を束縛せらるゝことを慮れて肯じなかつた。但し津の藤堂侯からは客分のやうにして十五人扶持を受けてゐた。土清の後には子士逸、孫士行がその神道説を繼いだ

讀表彰會編

言靈指南 ことさか 語學書 二編三册

【著者】黒澤翁編【刊行】上編一册、嘉永五年刊、中編二册、安政三年刊、下編未成。【解説】上編は、活用及び手爾波の呼應を簡單に記したものである。中編の上巻は活用、係結及び假名遣に就いて記してゐるが、活用に於て春庭以來、中二段活と呼んでゐたものを上二段活と改稱した。これは今日も用ひられてゐる名稱である。また加行變格及び佐行變格を三段活と云ひ、奈、良二行の變格を四段活用に收